

---

lves 『I'm just me!』 ~ Bluebays apathetic編

祿 左右

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Personas Ifes 『I'm just me!』  
Bluebays apathetic 編

### 【Nコード】

N7296Q

### 【作者名】

裱 左右

### 【あらすじ】

「さて君は自分の名を名乗ることが出来るかね？」  
「さあ？ そんなものどうだっていいだろ、俺は俺だ」

そんな彼が宿した力は、無貌のもの『バイアグーナ』。 邪悪な神  
『這い寄る混沌』とも同一視される存在の仮面<sup>ペルソナ</sup>だった。

ペルソナ3の二次創作です。オリジナル主人公の夜由良優と言う

男が出ます。基本的に駄目野郎です。英雄でもないし勇敢でもない、ピンチになれば死ぬことをすぐ受け入れる、そんな駄目野郎です。更新速度には期待せぬよう願います。

## 俺と『仮面の』（前書き）

原作を知っていてもそこそこ読めるように。知らなくてもそこそこ読めるように……なればいいなあ。

## 俺と『仮面の』

どこか現実感のない世界。

それでも、俺はここに自分がいることに違和感を覚えない。

それは奇妙なことかもしれない、だが、それを疑問に思う必要性は存在しないだろう。なぜなら、現実感と言うものは常に錯覚に過ぎないからだ。

今自分が目覚めていて、今意識のある場所が現実で……今自分が生きている。そんなものはどこにも明確な証拠のないことだ。

だとするなら、現実感と言うものはいったいなにを根拠にあるものなのだろう。

正解はただ一つ、何一つ根拠のないなかで芽生えた狂信的な確信。盲目的になにも考えずに、ただそう思っているだけ。

それが現実感の正体なのだろう。

目の前にいるのは、礼服を着こなす仮面をつけた男。

仮面には蝶が描かれ、今にもそれが羽ばたきだしそう……そんな錯覚に襲われる。

「ようこそ、お初に御目にかかる……私はフィレモン、意識と無意識の狭間に住まうモノ」

男は礼儀正しく、丁寧に一礼してみせた。

それを沈黙したまま見ている自分に違和感を覚える……いや、違和感はそれだけではない。

仮面の向こう側には視線を感じることはあっても、光を見つけることが出来ないのだ。

人と対面していると言うよりは、よく出来た彫像と向き合っている方が感覚として近い。俺に今話しかけているこの男は人間なのだろうか、いや、そもそも……男なのだろうか？

フィレモンと名乗ったモノは俺に問いかける。

「さて君は自分の名を名乗ることが出来るかね？」

その問いかけに、俺は考え込む。

名前……なんともピンとこない響き。

こいつは何を言っているんだろう？

「さあ？」

俺は首を傾げてみせる。

「名前つて、そんな重要なものなのか？」

「……自らの名は言わば、自己の帰結する原点だ。単なる記号などではなく、人が人であることの象徴だ。他者から呼ばれることで自己を認識し、名乗ることで他者に認識させる。ある意味で自らの存在そのものだといえる」

「ふうん……」

俺は周囲を見回す、果てがないどこまでも暗い闇。

自分が今立っているのは地面ではなく、白と黒のタイルが敷き詰められた床。そこから伸びる真っ白い陶器のような柱。

支えるべき天井は存在せず、天はどこまでも暗く光など存在しない。

まるで、穴倉の中にいるみたいだ。

「そんなものどうだっていいだろ、仮面の」

俺は素直に思ったことを口にする。

「それは……どういうことかね」  
「俺は今、アンタを『仮面の』と呼んだ。『アンタ』……ともな。人間はさまざまな呼び方をする、それは必ずしも名前じゃない。いや、違うか？ 人間の……個人の名前、名称は一つじゃないってことか？」

俺は自らに問いかけながら、自分の思考を口に出して整理する。

「それは時に誹謗や中傷じみた呼び方だったりするわけだ、逆にそれは得た称号だったりもする。でもそれはなにて決定されるか、って言うとき。呼ぶほうの都合とか見方や立場だろ？」

名前は名乗るもんじゃなくて、呼ぶもんだ。誰がどう呼ぶかってことだ。ひいては呼ぶ人間、つまり自分以外の他の奴がどう思ってるか、ってことだ」

「ふむ、確かに呼び名は他者からの評価そのものでもある」

「だろ？ 『チャンプ』とか『天才』とか『クズ』とかな。んで、俺はいまいち自分の名前が出てこない。だけど、それが重要とは思わない。

だって、他の奴が俺をどう呼ぼうが関係ないからな、そりゃ俺の評価じゃなく他人の勝手な評価だ。好きに呼べばいい。だから名乗れなくとも、特に困らない。

ちなみに俺はアンタが仮面を被った男としか知らない、だから『仮面の』と呼ぶ。フィレモンと呼ぶほど親しくもない」

「……では、君自身はどうなる？」  
「なにが？」

俺自身がどうなるか、その質問の意図が俺には掴めない。

と言うより、こいつがどんな奴なのか未だによくわからない。向き合えば向き合うほど、話せば話すほど掴みどころがないのだ。

「呼び名が評価ならば、君は君自身をどう評価する？ 君は何を持って自己を認識する？」

「そんなもん決まってるだろ」

なんだ、そんなことか。くだらない。

そんなことは考えるまでも、思い出すまでもないのだ。

「俺は俺だ、俺は俺をそう呼ぶ。それ以上でもそれ以下でもない」

「では君は自分自身をどう認識し評価する」

「それは俺の仕事じゃないな、評価は俺以外の奴の担当だ。そうだろ？ 俺は自分のしたいことをすればいい、そしたら勝手に認識されて評価してくれるさ。嫌でもな」

「……ふむ」

それを聞いて『仮面の』はゆっくりと頷く。

納得したと言うより、判断しかねてとりあえず頷いてみせた。そんな鈍い反応だった。

「もう結構だ。……おそらく十分だろう、ここに来て自分が何者であるか語れる者はそう多くない。だがしかし、君は自己の名になんら重きを置いていないようだ」

俺は『仮面の』の語りに耳を傾ける。

「ならば、自らの名を思い出せない、あるいは思い出さないのも道理なのだろう。名乗ることが出来ぬ者は今までにいた。だが代わりに自らが何者であるかを語り、名を語らぬ者は今までにいない」

「はあ、そりゃ褒められてるのか？」

「君の言うところの、自分が行ったことに対する評価と言うものだ。君はそのままを受け止めればいい」



「……なるほど、ではそうしよう」

「どうやら、『仮面の』は物事の飲み込みが早いようだ。俺の論理を的確に理解し、純粹にそのままを受け入れた。

「どこか、珍しく感じている自分がある。おそらく、あまりこういう経験が自分にはないのだろう。」

「ところで君は、自分の中に複数の自分の存在を自覚したことは無いかね？」

「……複数の、自分？」

「神のように慈愛に満ちた自分、悪魔のように残酷な自分。人は様々な仮面をつけて生きるものだ」

「仮面ね、確かに人間は時と場合に合せて動く生き物だ」

「然り。ならば今の君の姿も、無数の仮面の中の一つでしかないかもしれない」

「そういう言い方も出来るかもな、だがそれは俺からの他者や状況への評価ってだけだ。俺が被ってるんじゃない、俺の意思の結果周りがそう見せてるだけだ。」

「嫌いな人間に嫌な顔をして、好きな人間に好意を示してるだけだ、俺という人間に変化はない」

「……本来はそうあるべきなのだろう、だが多くの人は他者と向き合う時それに見合った仮面を被らざるをえない。君とて自分の思うがままに生きている訳ではないだろう？」

「……まあな。確かに自由ではないよ、どっちかと言えば拘束だらけだ」

「俺は俺だ、と試してみせたところで、人によって俺への評価は変わるだろう。俺の理屈でも他者からの評価は一つじゃない、その一つが他人が俺に被せた仮面だ。」

「俺はそれを被せられて、常に生きている部分があるわけだ。他人

に影響を受けて。となれば……。

「他人の数の分だけ、仮面が存在することになるのか？」

「……君の論理は興味深い、強靱で歪いびつ。だが同時に危うく脆い。

それは君自身どころか周囲の人間をも傷つけうる諸刃の剣だ。その刃はたやすく折れるが、体内に入ったまま取り出せず抜けないことすらあり得る」

はつきり言う奴だ、俺はそう『仮面の』を『評価』する。

「そういうがね、アンタだってそうだけ『仮面の』。その理屈で行けば、アンタだって見る人間の数の分だけ、その姿を変えるはずだ」  
「その通り、私とて例外にはなりえない。だが憶えておきたまえ、君はどこか他者を軽んじている、その影響を余計な異物であり自分には関係がないと思っている。しかし、人にとって自己とは他者と言う鏡があって初めて認識できるものなのだ」

なにを偉そうに、俺はそう思う。

ならば、アンタは俺の鏡である、とでも言うつもりかと。俺のことなんてなんでも知っているような物言いをするな、と。

「君は確かに危うく脆い。しかし、君は自分がどんな人間であるかをことうして話し、その上で自分は自分自身以外の何者でもない、そういつて見せた。その強い意志に対して敬意とこの力を贈ろう」

そう『仮面の』が手を掲げ、振るうようにして示す。そこにあるのは光。

暖かで優しい、なのに存在感のないあやふやかな光。

それに包まれている存在するのは小さな人型だった、白い仮面を付けた全身が黒い人型。その仮面に凹凸おぼつこつは存在せず、目もなければ

ば口もなく、もちろん表情なんてものも一切ない。

「これは『仮面<sup>ベルソナ</sup>』。心の奥底に潜む、神や悪魔のごとき、もう1人の自分。つまりこのベルソナもまた、数多くある君の姿の一つなのだ」

「それが俺だと?」

「そう、バイアグーナ。無貌のモノ、時に『這い寄る混沌<sup>ベルソナ</sup>』と同一だともされ、全く別の魔人ともされる存在。これが君の仮面<sup>ベルソナ</sup>だ」

そう『仮面の』が言つと、それは光とともに俺の中へと入って行く。

感じるのは安心できるような暖かさ、なにか矛盾するように存在するねとつくような気持ち悪さが身体の中にある。

「へえ……これが俺なのか。気に入らないな」

「自分自身とは必ずしも、望むべき姿をしているとは限らない。しかし、この力を君に与えるのは誤りなのかもしれない」

「おいおい、無責任だな『仮面の』。じゃアンタはどうしてこの力を俺に? いったい、俺になにをしろと?」

「……君の好きなようにするがいい、自らの運命は自ら切り開き、自分達が生きるべき明日は自ら選び掴み取るべきだ。私はそのため的手段を一つ与えたに過ぎない」

「んで、そういう力を与えた責任は?」

「仮面<sup>これ</sup>は君自身だ。ならば、そこから発生する事象は……」

「俺自身に責任があると? なるほどな、まあいいさ。好きにさせてもらう、どうせなにかをしろと言われたところで、俺は俺以上のことは出来ないからな」

「結構だ。君は君のすべきことをなす、それだけでいい。それに本来君の時間軸ではこれすらも、もはや私の為すべきことではないのだから」

俺は『仮面の』に背を向ける。

……コイツの用はもう終わっただろうから。

俺は歩き出しながら、しかし決して振り返ることなく『仮面の』に言う。

「くだらない理屈はいいからさ、アンタもしたいことをしろよ。人に口出す前に自分のことをやれ」

「……行くのかね？」

「ああ、ずいぶんと長居しちまったしな。俺は帰るさ、どこには知らんけど」

「……どうやら私が手を貸す必要はないようだな」

「当たり前だ、なんのための足だったの。適当でもなんでも歩きやどっかには着くだろうが」

「では、戻りたまえ。君があるべき時間と、空の下へ……」

言われなくとも。

俺は背中を向けたまま軽く手を振り、なぜか途中から存在しない床から、光の存在しない無限の深みへと飛び降りる。

深淵に身を沈めていく中で、どこまでも落ち続けていく中で、なんとなく上を見上げれば、一匹の金色に輝く蝶が闇色の空を舞っていた。

ああ、そっぴや俺。

あいつに礼も言っただけだったな。

意識はそのまま薄れていく。意識が完全に闇に飲み込まれるまで、俺はその一匹の蝶を見つめ続けた。

……そこに恐怖はない。



俺と『仮面の』（後書き）

結末ももうある程度決まっています。でも、彼らがそこにいたるまでどんな物語を紡ぐのかは私にもわかりません。

4月6日 月曜日 く 『物語のはじまり』 (前書き)

意見感想お待ちしております。

うちの主人公はかなり口が悪いです、少なくとも心のうちでは。しかもそれを出せない小心者です。

4月6日 月曜日 く 『物語のはじまり』

時は、待たない。

すべてを等しく、終わりへと運んでゆく。

限りある未来の輝きを、守らんとする者よ。

一年間 。

その与えられた時を往くがいい。

己が心の信ずるまま。

緩やかなる日々にも、揺るぎなく進むのだ。

これより、物語ははじまる。

常に世界は終焉へと向けて、走り続けている。

物語の登場人物は、その宿めから決して逃れられることはない。

「……だとしても、立ち止まる俺らじゃねえけどな」

4月6日 月曜日

時は夕暮れ。

どこかで呟き続ける少女の声。

彼女は自室で床に座り込み、今日こそあることを実行しようとしていた。

以前からしなければならなかった、あることを。



「額にあてて……」

呼吸を荒くし、手が震える。それでも彼女はつぶやき続ける。

「引き金を引くだけ……」

その声にあるのはやらねばならないと言う、決意と義務。だが、それを揺るがすほどにあるのは恐怖と拒絶。それでも彼女は呟き続ける。

「やらなきゃ……」

彼女は両手で銃器のようなものを握り締め、銃口を額に向けた。手は震え、汗がにじむ。

金属性の物体が額にぶつかり、震えのせいでカタカタカタ、と鳴る。

それでも叱咤するように最後にもう一度呟き。そして……。

ガタツ。

「ダメ……できない……！」

彼女は銃器のようなそれを手放した。

そのまま脱力し、うつむく。

そして、自らの弱さに涙をにじませた。

「これじゃ……わたし……」

恐怖ではなく、自らの無力さと不甲斐なさに震える少女。

「わたしは……どうしたらいいの?」

その声に答えられるものは誰もいない。

\*

俺はなんとなく、上へと目を向ける。

あるのは天井、一階のロビーから上の階にいる人間など見えはしない。

あまり根詰めなきゃ、……いいんだけどな。

「なにをしている、行くぞ夜由良<sup>やゆら</sup>」

「いや、ちょっとくらい待って下さいよ。どんだけ張り切ってるんですか!」

俺は今すぐ玄関から寮を出て行くこととする真田先輩を止める。

どう考えても、まだ早すぎるだろう。つか、もう準備万端かよ。

なんだそのトレーニングウェア、昨日見たのと違うじゃねえか。

……まさか、わざわざ新品買ってきたのか?

「なにを言っているんだ、夜由良。影時間は待つてはくれないぞ?」

「そうですね。でも、早く行ったからって早く時間が進むわけではないですよ」

「だから早めに行つて、事前に身体を温めるんだろう。時間は限られてるんだからな」

なんでこの人こんなにやる気なんだろう。

そんなの後輩がトレーニングについてきてくれるのが嬉しいのか?

「先輩はいいかもしれませんが、俺のほうが体力持ちませんよ」  
「だったらなおさらだ。自分にあつたペースでいいから、体力を付けていかないと実戦でもものにならないぞ。戦闘中は長時間をフルペースで動き続けなければならぬんだからな」  
「……さいですか」

駄目だ、この人。俺がなにを言っても聞く気なし。  
「ただだけトレーニング好きなんだよ、この筋肉馬鹿<sup>キントレマニア</sup>。」

「ほら、早くしろ」

そう言っただけにか袋を差し出してくる。  
「これはなんだ？」

「お前の分のトレーニングウェアに決まっているだろうが」  
「わざわざ買って来たんですか！」  
「ああ、必要だろうと思ってな」

いや、ありがたいんだけどさ。いやいや、ありがたいんだけどさ。  
いやいやいや、ありがたいんだけど……さ。  
……くっそ！

覚悟を決めて俺は頭を下げる。

「……ありがとうございます」

……断れなくなつたがな。  
もう、二度と断れなくなつたがな！？

「ああ、気にするな。後輩の面倒を見るのは先輩の務めだからな」

さわやかに言うんじゃねえよ、こんちきしょうめ！  
顔がよければなんでも許されると思うなよ！ 先輩だからって調子に乗ったらぶっ飛ばすかな！

「これでボクシングの試合に向けたトレーニングにも張りが出るな。一人じゃ出来ない筋トレメニューが組める」

……やっぱ無理です、俺にはこの人ぶっ飛ばせません。

だってこの人、チャンプなんですもん。真田<sup>さなだ</sup> 明彦<sup>あきひこ</sup>、言うたらそのあなた、超有名人ですよ、そりゃそうだ、高校ボクシングチャンプなんですもん。

その癖、顔はいいし勉強できるし、女の子のファンはめっちゃいるし、ってなんでこんなにも人生に落差が！？

っていうか、どこまでトレーニングに付き合わせる気だよ。俺、ボクシング部には入ってねえから、付き合うのは入れられた特別課外活動部関連限定だから！ 期間限定でも付き合ったりしないから！ 訓練は影時間が最適とか言うから、付き合ってたんだぜマジで。いや、実は申し出たの俺からんだけどね？

いや、だつてやる以上は真剣にやらないとき、命かかかってるし、俺はこれで金もらってたんだから。

ここから生活費が出る以上、真剣に料金分はやっとなかないと……  
なあ？

くそ、どつちにしたつて逆らえねえ。

「……明彦」

「美鶴か、どうした？」

今まさに俺たちが寮を出て行くとしたその時、赤毛の美女桐条<sup>らぎじょう</sup> 美鶴<sup>みづる</sup>先輩が真田先輩を呼び止めた。

先輩が寮のロビーに備え付けてるソファ一立ち上がると、その輝

くような美しい長い髪が揺れた。

「前にも言ったと思うが、今夜、転入生が来る予定だ。お前にもいってもらいたい」

「こんな時間になっても来ないんだぞ、もう待てるか。それにお前がいれば十分だろう」

桐条先輩は、かの桐条グループの総帥、その一人娘。ようするに半端じゃなくいいとこのお嬢様だ。それも次期当主。

一流の教育を受けているだけあって、成績はうちの高校でも最優秀、スポーツは万能、総合的に見ても真田先輩の上を行っているだろうと思う。

戦闘となれば、かなり実践的な剣術を使いこなせる上に、その回転の速い頭脳と併せて、堅実でいて確実に相手の隙をつく戦い方をする。

その上、その美貌スタイルも半端じゃなくとも高校生とは思えないほどの視覚的破壊力を秘めている。たぶん、彼女を連れて街中を歩けば、30人中29人の男は振り返ること間違いなしだ。

ちなみに振り返らない男はホモだと思う。

文武両道、才色兼備。そして、天才的。この言葉はこの人のような人間のためにあるんだろう。

その上、真田先輩と二人は幼馴染？……だそうでかなり親しい間柄だ。

ってどこの漫画だよ？ は？ じゃ、あれか。あんたら主人公か、で、俺は脇役か！？

ふざけんなつ。特にその筋肉馬鹿さなだ！ こんな美人呼び捨てに出る関係ってなに？ 貴様、生まれながらの勝ち組かっての！

オマエ絶対ぶっ飛ばす！ まあ、その……いつか、ね。

「……しかしだな、明彦」

「重要な人材になるかも知れんのはわかるさ、だが、俺が少しでも強くなることは今後に必要なことでもあるだろ。……それにコイツの面倒も見なきゃならんしな」

「……夜由良か」

二人の視線が俺に向かう。

いや、二人とも、別に俺、なにも考えてないよ？　ほんとだよ？

「君は本当に真面目だな、夜由良。たまには休んでもいいんだぞ？」

出てきたのは思いもよらない言葉。

いやいや、真面目って。

「真田先輩のトレーニングに付き合っつのは初ですよ、俺」

「以前から影時間での訓練自体はしているだろう。明彦からトレーニングの合間に指導を受けているのは知っている」

「……ええ、まあ」

「あまり無理をするな、体を壊しては元も子もないからな」

「大丈夫ですよ、桐条先輩」

俺は先輩に笑いかける。

あまり心配をかけないように、なるべく元気そうに。

「俺も強くなりたいんです。そしたら体調管理もトレーニングのうちですよね、その辺も真田先輩に習いますから」

「そうだぞ、美鶴。心配は要らない」

自信満々に胸を張る、真田先輩。

桐条先輩はそれを見て、なおさら不安そうにため息をついた。

「明彦、お前基準で夜由良を動かすなよ？ お前とは違うんだからな」

「おいおい。それじゃ、まるで俺が普通じゃないみたいだろ」

普通じゃねえよ、絶対。

普通は牛丼にプロテイントッピングしねえよ。なんだそのトッピング、新しすぎるわ。しかもバニラ味とかぜってえ合わねえよ。

つかよ、新しいプロテイン出るたびに嬉々としてんじゃねえよ、プロテイン中毒ジャンキーかお前は。つーか減量しろよ、ボクサーならよ。普通に牛丼食ってんじゃねえよ。

「ん、どうした。夜由良、なんかあったか？」

真田先輩が俺の視線に気付いて、声を掛ける。

「なんでもないですよ、筋肉馬鹿」

「……そうか？」

くそー、今すぐ強くなつてぶつ飛ばしたい！

……そんな、俺たち二人を見つめる桐条先輩。

「……仲がいい、のか？」

いいわけあるかつ！、とは叫べない俺でした。

……そもそもこんな奇妙なことになつちまったのは、俺の夢遊病みたいなのが原因だ。

俺は夜由良 優ゆう。月光館学園の高等部、二年生。

所属はビバ帰宅部、……だったんだが諸事情で生徒会なんぞに入られ、その上得体の知れない特別課外活動部なんかに入ってしまった

っている。

つかなに？ 特別課外活動って……ボランティアかなんかか？  
そう思ったあなた、間違ってる。俺は事情を配慮してもらった  
上で、金を貰っているわけだけど、この部かなり壮大なボランティア  
ア部なのだ。

目的はそう、人知れず夜な夜な人々の命を守り、ひいては世界の  
平和を守るために全力をつくす正義の味方的なアレだ。

……嘘だ。

と言いたいところだが、嘘じゃない。非常に残念ながら。

この世界の一日がもし、24時間じゃないと言ったらどう思うだ  
ろうか。

あ、あれだぞ。日没までの時間にはズレがあるから閏年が出る  
とか、そういう話じゃないぞ？

……そんなことは思わない？

あ、なんだ。俺だけか。

まあ、それはいいや。説明は面倒なんで色々と省かせてもらう。  
どうせ新入りが来るときに説明するんだ、二度も同じ話を聞いた  
くはないだろう。少なくとも、俺はそうだ。

今はとりあえず、俺達は化け物と日夜戦っている、ということだ  
け覚えてくれていればいい。

と言っても、俺は正義の味方なんかじゃない。

生活費を出してくれると言うから、なし崩し的に参加しているの  
だ。

本音を言えば、権力に押し負けてと言おうか。

うちの学校、月光館学園は桐条グループの傘下にある。俺はその



理事長とグループの跡取りである桐条美鶴にスカウトされたのだ。いったい誰が断れるって言うんだ？

月光館学園に俺が入ったのは、高校からだ。

これも詳細は省くが俺は父親の反対を押し切って、この学園へと入学した。

父親は入学は認めたものの、一切の資金を出してくれることはなかった。貸すのは判子だけである。

それでも、桐条の学生支援制度を受けて、なんとか授業料などは卒業後払うと言うことでなんとかなった。が問題は生活のほうである。

男子寮に入ると言う手もあったのだが、その場合かなりバイトが制約される。寮で生きていくぶんの手食費やらはどうしたらいい。それに、金は色々と入用だ。これからのことを考えるにも、少しでもいいからほしい。

卒業後、俺は父親の援助を受ける気はまるきりないのだから。

そんな理由で常に万年金欠の俺は深夜近くまで、アルバイトを行う生活を続けていた。

でもいつからだるか、俺は零時近くになると記憶を失う妙な持病を持っていた。

気がつくとき翌朝自宅の布団の中にいたり、得体の知れないアクセサリーや金を手に持っていたり、着替えていたり服がなくなっていたりするのである。

なぜか身に覚えのない傷があったことも、一度や二度じゃない。

はっきり言って気味が悪かったが、気にしないように生きていくしかなかった。

へたに深く考えると逆に危険そうだったし、今上手く言っているものをなんとかする必要性もない。

これは零時になる前に家に帰っていた場合も同様である。早めに就寝出来たとしてもなんらかの変化が回りにあったりするのだ。

どうしたもんかね、いや、今ではそれも『影時間』に覚醒したが故に起きたものだとは判断しているのだが、こうして完全に目覚めた後でも時折発生するのが問題なのだ。

いまだに、自分の記憶が飛ぶのはすつきりしない。

……影時間がなにかって？

ああ、結局説明する羽目になっちまったな。

影時間ってのは……あれだ。

一日と一日の間に存在する狭間の世界。

言っちまえばそう、悪夢だ。化け物が謳歌する、悪夢の世界。

それが影時間だ。

\*

新都市交通モノレール『あねはづる』車内……。夜も遅く、ひとけ人氣がない中流れるアナウンス。

「本日は、ポイント故障のため。ダイヤが大幅に乱れ……」

ゆるる車内。

しゃべる人間は誰一人としておらず、よくそのアナウンスは響いた。

「お急ぎのお客様には、大変ご迷惑をおかけ致しました」

そこにいる一人の少年。

彼はそのアナウンスに耳を傾けることなく、その両耳につけたヘッドホンから流れる音楽に聞き入る。

聞き入る、と言うよりは外部からの音を遮断しているが精確だろう。音楽の内容はどうでもいい、出来るなら耳に残らない日本語でないものがない。

彼にとって、外の音は邪魔な騒音でしかない。

「次は、巖戸台……」

彼はただ意味もなく、ひたすら外を眺め続ける。そこに彼の心を動かすものは存在しない。

モノレールが目的地、巖戸台に到着した。

数もまばらな乗客に混じり、降りていく少年。

やはり到着時間はかなり予定よりも遅れていた、時間はもうすぐ零時を指す。

それでも少年の心には特に焦りもない、遅れたのは自分の責任ではないし、そんなことはそもそも自分にとってどうでもいいことだからなのだから。

「この電車、辰巳ポートアイランド行き、本日の最終電車となっております」

そんな構内アナウンスを背景に、しかしそれに耳を傾けることはなく。

両耳のヘッド音から流れる音に意識を置く。

なにもなるべく考えないように、それはもう自然と出来てしまう癖、習慣だった。

なにひとつ瞳に映しても、それは印象には全く残らない。記憶にも。

いつものように……そんな状態で彼は駅を出ようとした。出ようとした、のだ。

それは前触れのなく訪れた、ように少年には感じられた。

その時、ちょうど零時になっていたことは少年には知りようがないことであり……気付いていたとして、そのことは今の彼にとっては取るに足りないことだったろう。

故にその異変はなんら少年にとって、前触れないもの以上ではなかった。

まず、目の前が暗くなり、プレイヤーから流れる音楽が止まる。

目が暗闇に順応するまでの僅かな時間の混乱。

それが収まって、思うのは「停電なのか」と言うこと。

そう、周囲の一切の電気で動くもの全てがその活動を停止していたのだ。

しかし、とすぐにその考えは否定される。

照明が消える、それはいいでしょう。

では、なぜ、プレイヤーからの音楽が止まったのか。

その疑問には答えようがない。

異変はそれだけでない、どこか周囲の気配がおかしい。

余計な物音、自分以外の動くものがまったく存在しないのだ。

少年は周囲を見渡しながら、歩き出す。

とりあえずは目的地へと急ぐために。

周囲の風景、物事がどうでもよかった少年は、そこで初めて意識を周囲に向けたのだった。

少年が駅から出て、それでもなお、自分以外人を見かけることはなかった。

異様なほど静かな街。

その人気のない街に、棺のようなオブジェが乱立している。大きさは……そう、ちょうど人が納まる程度だろうか。

馬鹿馬鹿しい、少年はそう首を振る。

その自分の考えを振り切り、ひたすらに歩き続けた。なぜか地面に染み出している、どこか血の様な色の水溜りを踏みつけて。

深夜零時の空は緑色に染まり、光る月は異様なほどに巨大で明るかった。

\*

少年は見上げる。

自分が目指していた目的地、『月光館学園巖戸台分寮』。入学案内通りの住所で間違いない。

そう、彼は新たに転入したがために、その住居を寮に移したのだった。

どこか古く、しかし特徴的なそのデザインの建物は十分にある種のセンスを感じられるものだった。照明がついていないのは深夜だからだろうか、それともこの異変のせいか。

少年は扉を開け、中へと踏み込む。

やはり、外から見たとおり中に明かりはない。

「ようこそ」

それは幼い子供の声だった。

その声の主を探す。

いたのは寮の入り口のカウンター、声の主は、白と黒の横縞で上  
下をそろえた囚人服のような服装の、小さな男の子だった。

「遅かったね。長い間、君を待ってたよ」

この寮の人間だろうか。

いや、ここにいる以上はそうなのだろう。しかし、なぜ子供がこ  
こにいる？

子供は一枚のカードを手にしていた。

それを見せるように言う。

「この先に進むなら、ここに署名をして。……一応、『契約』だか  
らね」

「手続きは済ましているはずだけど？」

寮にはもう入るだけのはずだ。

……どこか、この子供に得体の知れないものを感じる。

「ああ、怖がらないで。たいしたものじゃないんだ、ここからは自  
分の決めたことに責任を取ってもらってただけだから」

そのカードにはメッセージが書かれている。

それはこんなものだった。

『我、自ら選び取りし、いかなる結末も受け入れん』

その下にあるのは署名の欄。

なにかの冗談だろうか、これは。

そう思っても彼は。

間違いなく、手を伸ばし署名した。

一之瀬 佐為と。

それは間違いなく、彼の意思だった。

「確かに」

子供は署名されたカードを見て、満足そうに呟く。

「時は、誰にでも結末を運んでくるよ。たとえ、耳と目を塞いだとしてもね」

少年は……一之瀬 佐為はどこか自分を見透かされたような気分になりながらも言う。

「これで満足なのか？」

「ああ、これでいいよ」

子供は薄っすらと笑みを浮かべる。

「……さあ、始まるよ」

そう言うと、その子供は闇に溶けるかのように消えてしまった。

佐為は一瞬唖然とするも、この異常な雰囲気の中ではそれほどの違和感を感じなかった。

どこか夢の中にいるような感覚、今自分が目覚めているのか。確信が持てない。

「……誰!？」

その時寮の奥から少女の声がした。現れたのは自分と年が変わらないだろう、白いチョーカーを身に着けた少女。

ピンクのカーディガンを着ており、アレンジが施されているものの、それは間違いなく自分がこれから転入する学校のものだった。

「この時間に……どうして……」

ようやくまともな人間らしい人間に会えた。

そんな認識を佐為はした。今日の異様な出来事から抜け出せたよ  
うな、だが様子がどこかおかしい。

確かに自分はこんな深夜に遅れて来てしまっている、しかし必要  
以上に驚いている、極度の緊張状態にあるように見える。

これはまだ、自分は異常から抜け出していない？

「まさか……」

少女は佐為を睨み付ける。

そこで佐為はようやく気付く。

その少女が何かを手に行っていることを。それは銃のような物、い  
や、それはどうみても銃に見えた。

これはいったいどういう状況だ？

佐為には目の前でなにが起きているのか理解できない。

こんなおかしい状況で、これからなにが起きるのか予測も出来な  
い。

だが、感じている。まちがいに恐怖を。



少女はその銃のようなものを両手で持ち上げ……。

まさか、ぼくを撃つ気か？

佐為がそう考え、身を堅くした時。

またもや、予想外の出来事が起きた。

なんとその少女は……。

その銃口を佐為ではなく、自身の額に当てたのだ。

「え……な、にを？」

そして、少女は覚悟を決めるとともに、必死の形相で目を堅くつむり、その震える両手で引き金を……。

引き絞ろうと……。

「待て！」

少女の背後から、もう一人の少女が現れる。

制服からして、おそらくは同じ学園の生徒だろう。

ただし、同じ制服にもかかわらず、かなり上等そうなものだが。

ふっと、周囲が明るくなる。

「あかりが……」

白いチヨーカーの少女が安心したようにそう小さな声で言った。同時に再び佐為の両耳に、ヘッドホンから音楽が聴こえ始めた。

「……到着が遅れたようだね」

一同がやや落ち着いてから、後から現れた少女がそう言った。そのまま自らを指し、自己紹介を始める。

「私は、桐条 美鶴。3年だ。この寮に住んでいる者だ」

それに対し、白いチョーカーの少女が訝しげに問いかける。

「……誰ですか？」

「彼は『転入生』だ。ここへの入寮が急に決まってね……」

佐為は思い出したかのようにヘッドホンを外し、その言葉に頷いた。

「ええ、一之瀬 佐為です。ええと、学年は2年です。モノレールが遅れたので到着がこの時間になりました」

「ああ、聞いているよ。君はいずれ、男子寮への割り当てが正式にされるだろう」

「男子寮？ ……ここは女子寮なんですか？」

「いや……ここは共用だね。階数で男女をわけている、と言っても君がここに住むのは一時的な処置な訳だが」

「……へえ、変わってますね」

しかも、大人が見当たらない。

普通こういう場合は、寮長か誰かがいるはずだが、とそう佐為は疑問に思う。

その時、桐条ともう一人の少女が小声で話した会話が耳に入った。

「……いいんですか」

「……さあな」

どういう意味だ？

佐為が首を傾げたのを見て、桐条が何かに気付いたようなそぶりを見せた。

「ああ、……彼女は岳羽ゆかり。この春から二年生だから、君と同じだな」

「……岳羽です」

その紹介に軽く会釈をしてみせる、ゆかり。

色々と気になることはあるものの、佐為はとりあえず合わせる。いや、気になったものの関わりたくないがために、場に合わせる。

「……よろしく」

「あ、はい……」

それに対してどこか居心地悪そうに、ゆかりは返したものの。

……気を取り直したのか笑顔を見せる。

「こちらこそ、よろしく……」

なんだ、普通に可愛い顔も出来るんじゃないか。

彼女がずっと張り詰めた表情をみせていたために、そう本来彼らしくない感想を佐為は抱いた。その自覚は彼にない。

桐条は二人の挨拶が終えたのを見計らって、声を掛ける。

「今日はもう遅い。部屋は2階の一番奥に用意してある。荷物も届いているはずだ、すぐに休むといい」

「あ、じゃ、案内するんで、ついて来て下さい」

ゆかりがそう言って案内を買って出る。  
佐為はそれに頷いて、ゆかりと共に歩き出した。  
その背中を、桐条が見つめ続ける。

\*

ゆかり共に二階へと上がり、部屋への扉が並ぶ廊下を歩いていく。  
立ち止まったのは一番奥の扉。

「この部屋だね。一番奥だから、覚えやすいでしょ?」

佐為は頷く。

「えっと、何か訊きたいことある?」

訊きたいこと……それは色々あるが、佐為が一番訊きたいのはこれだった。

「……あの子供も寮生なの?」

「子供?」

「ああ、さっき会った。男の子だ……見なかったか?」

ゆかりは顔を引きつらせる。

「い、いや。いないよ、そんなの。気味の悪いこと言わないでよ」  
「……そう」

どうやら、本気で見ていないらしい。

佐為はため息をつく。

なんだか、面倒そうなことだ、と。

残りの質問は本人が目の前にいるから、あえて訊かないことにした。出来れば、これ以上深くかわりたくない。

その様子を見て、なにを思ったのか複雑そうな表情をしている、ゆかり。

「あの……ちょっと訊きたいんだけど」

「なに？」

「……駅からここに来る間、ずっと平気だったの？」

子供のことは見ていなくとも、あの異常事態は認識しているらしい。

そう、佐為は判断した。

「まあ、この通り平気だったけど」

「……そう」

ゆかりは、表情を和らげる。

「……ならいいんだ。ごめん、気にしないで」

気にするな、と言われても忘れることは出来ないのだが。

無茶を言う人だ、……まあどうでもいいか。どうせ、もう関わりはしないだろうし

「あー、じゃあ、私は行くね……」

ゆかりはそう言って歩き去ろうとすつが、すぐに立ち止まる。

「あー、あのさ」

「なに？」

「色々、わからないことあると思うけど、それはまた、今度ね…  
…おやすみなさい」

そう一方的にゆかりは告げると、階段を降りていった。

「……おやすみなさい、って下の階はロビーだけだと思っけど」

人にそう言っておいて寝ない気なのだろうか、彼女は。  
だけど、まあ、それもどうでもいいことだ。

別に興味などない。

一之瀬 佐為はさっさと眠ってしまっことにした。今日と言っ日  
をさっさと、昨日にしてしまったために。

そうは言っても、もう日付は変わっているのだが。

4月6日 月曜日 く 『物語のはじまり』 (後書き)

二人の主人公は全く似ていないようで、ある意味近い存在です。  
佐為くんの方はどれくらい描写し、原作に則って書いていくか悩  
みどころです。そのまま書いても、原作を見ればいいだけになって  
しまっておもしろくないですから。

4月7日 火曜日 〽 『仮面を被る者達』

『魔術師』

タロットカードにおける22の大アルカナに属する一枚、ナンバ  
ーは1。

奇術師などとも呼ばれ、絵柄はタロットの制作者の解釈によって  
四元素を司る魔術師であったり、胡散臭い衣装の賭博師であったり  
もする。小アルカナを示す、剣、杖、杯、金貨が小道具として並べ  
られる事が多い。

一見、デタラメで奇抜な格好をしているだけに見えるが、それは  
計算された構成であり、この人物が計算尽くで自らをそう見せてい  
ると解釈される。故に、身体を右（未来の象徴）に向けつつも、左  
（過去）を振り返ることを忘れない、本来の彼は道化を演じる知恵  
者なのだ。

彼はそのデタラメに見える外見や、その職業からトリックスター  
の『愚者』と比較されるが、彼の振る舞いや技は無計画さを伴わな  
い計算された芸術であり、それは決して失敗が許されないものであ  
る。なぜなら、彼は往来での詐欺師であり、壇上での奇術師であり、  
……魔法を扱う魔術師なのだから。

正位置……可能性と才覚、そして物事の始まり

逆位置リバース……無気力とスランプ、そして空回り

「考えれば考えるほど空回り、誰もが一度は経験することだな。俺  
なんか常に、だ」

「それでも、もしぼくらが考えることをやめたら、それで終演おしまいだよ」



4月7日 火曜日

俺は味噌汁をすすりながら、真田先輩に話しかける。

「結局、どんな奴なんですかね。『転入生』」

「……朝も今のところ、起きてこないしな」

先輩は朝のロードワークを終え、今から朝食を摂るところだ。食べるでなく、摂るところだ。

あんなもん食事とは言わねえよ。

あれは飯を食ってるんじゃない、プロテインを食ってるんだ。っ  
て言うか、あんだだけ深夜に動き回っておいて、朝になってもトレーニングってなんなんだこの人。

「……先輩、納豆ならありますよ。飯も炊けてますし」

「そうか？ ……なら頂こうかな」

ここの寮には食事を作ってくれる人間がいない。

と言うより、外部の業者をろくに入れていないのだ。

それはおそらく俺達の……ひいては桐条グループの秘密を守るための処置なのだろうが、おかげでここの寮生達は俺が来るまで食事を外食ばかりで済ましてきていた。

掃除は定期的に桐条グループと関係する業者が日中にしてくれているようだが、あまり寮生はきちんとした生活は送っていないと言える。寮則で夜間の外出をしていないだけ、マシと言うべきか。

いや、してるんだけどね。主に真田先輩が。

ま、とにかくキツチンはそこそこいいものがあるのに勿体無いことだ、と俺は入寮した当初から思っていた。

そこで食費に余計な金など掛けていられない俺は、さっそくここ

のキッチンで自炊を始めた。

面倒だったので、最初は三食まとめて食べるように、丼もののおかずを大量に作るなどしていたのだが、間もなくして興味を持った真田先輩がまるで犬がしっぽを振るかのようにして寄ってきたのがことの始まり。

その時は豚丼を作ったんだっただけかな、まあ、妙に輝いている目がうざかったんで与えてやったところお喜びで食いやがった。……バニラ味のプロテインまぶして。

ああ、もうムカついたね。それでも、まあ、その、なんだ？ チャンプに……文句なんぞまったく持って言えなかつたんだが。

その後、「牛肉のほろがぁあり難いんだが」なんぞほざかれた時には危うくしばく所だったかな！

アンタ、絶対味わかつてないから！ アンタは豚と牛の差なんてわかんないから！ って言うか、食いたいんなら金出しやがれっ！

そしたら、アレだ。なし崩し的に、岳羽や桐条先輩も味見に来てだな、こんな状況になっちまった訳だ。

周囲を見ると、ほら、どこの一家団欒だよ。みたいな？

「あ、岳羽。おかわりまだあるぞ？」

「あー、……いいよ。もう」

「……ダイエット中なのか？ 弓道部だつて体力勝負だと思っぞ、まがりなりにも動いてるんだから問題ないんじゃないか」

「……いいの、お腹いっぱいだから。ごちそうさま」

はい、お茶碗は漬けておいて下さい。

そう、俺は返し、さっとホウレン草のおひたしを口に入れ、自分の食事を片付ける。

なるべく早く早めに動かないと時間がなくなる。

「にしても、まさか夜由良がこんな技術を持っていたなんてな」

桐条先輩が食後の紅茶を飲みながら、俺に言う。

ちなみに紅茶は先輩が自分で淹れたものだ、結構本人にこだわりがあるらしい。

「……技術ですか？」

それって料理のことですかね。

「ああ、人は見かけによらないとは、まさにこのことだな。まったくつくづく感心させられるよ」

「……別に料理ってレベルのものでもないですよ、激うまって訳じゃないですし」

控えめに見ても、その辺のスーパーのお総菜どっこいどっこいだと思う。

「謙遜することはないさ、私は十分すごいと思っている。きっと、家庭の味って言うのはこういうものを言うんだろうな」

そんな褒められても、感じるのは嬉しさより申し訳なさだ。

俺は別に料理が得意って訳じゃない。もともと自炊はしてたけど、適当に肉やら卵やら焼いて食ってただけだ。

こつという形式のまともな食事だって日常的に作ってたわけじゃないし、今日作ったのだって誰にだって出来るような簡単なものばかりだ。褒められるようなことでは決してないんだ。

……って言うか、あんまり評価されるのも、正直プレッシャーだ

からやめて欲しい。

そのせいで最近料理本見て、特訓するようになった。なんか、評価され過ぎてつらい。特にたいしたことしてないのに。

「私も君を見習いたいとそう思っているよ……生徒会の方でも助けられているしな」

「……先輩には敵いませんよ」

いや、ホントに。

だから、やめてください。それ。

……そういや、こんな感じで生徒会に入れられたんだよな、俺。1年の頃なんて、まったくそんなもの興味なかったのに。

俺はなにかいたたまれなくなつて席を立つと、キッチンまで行くと洗い物を始めた。

なにやら先輩方がなにやら話をしているような雰囲気だったが、なるべく聞かないようにした。意味もなく立ち聞きはよくないだろう。

しばらくするとやがて、真田先輩が食器を持って歩いてきた。

「美味かったよ、ありがとな」

「……いえ」

俺はそれを受け取り洗い始める。

礼を言われることが、こんなにも居心地の悪いものだなんて知らなかったな。

……他人からの評価なんて気にしたくもないのに。

食器も片付け終えた俺は、すでに学校に行く準備は終えていたの  
で歯を磨いて、すぐに寮を出ようとする。

が、ロビーになぜか岳羽がソファアに座り込んでいた。

「どうしたんだ、岳羽」

「ん、あー、夜由良か。いやさ、『転入生』の彼を送っていくように桐条先輩に言われちゃって……」

「……それで待ってるのか、まあ初日だからな。案内もいるだろうけど、一向に来る気配がないぞ」

「うん、そうなんだよね」

「……寝てるんじゃないか」

「あ、やっぱそう思う?」

他にないだろうと俺は思う。

部屋から出てきた様子すらないんだから。

「俺も同じ階だしな、少なくとも出てないのは間違いないぞ。……起こしに行つてやろうか?」

「……いや、いいよ。わたしが先輩に頼まれたんだし」

「そうか? ……なあ、あんまり無理すんなよ。先輩ら自分達を基準にしてるからさ、なんでも出来て当然だと思ってるけど、俺だつてまともに出てくる訳じゃないんだ」

「……ん」

俺はその元気のない返答に一応頷いて、玄関から出た。なるべくその表情は見ないことにしておく。

振り返ることなく、俺は早足で歩き始める。

どうも岳羽って、なんでも一人で背負ってる感じがするんだよね。一線を引いているところがあるって言うか、誰も頼っちゃいけないと思ってる節があるように思う。まあ、それは完璧な天才とみ

んなから賞賛されている桐条先輩にも言えることなんだけとさ。

……誰か支えてやれるような奴がいればいいんだろうけど。

俺が不特定の他人に期待しなくちゃならんとは気に入らないがな。ま、でも実際、その役割は自分のことではいいっぱいじゃない俺じゃ無理だからな。

誰か助けて……ね。

……言えたらいいんだろうけど、な。

\*

俺は学校に着いてまずクラス割り当ての掲示版を眺め、自分の名前を探しそうとする。

前にいるデブが邪魔で見えねえ、って言うかうるせえ。

自分の名前がない、ないとあわてているデブを押しつけて、前に出た。

つか、ねえわけあるか、この馬鹿。

「えーと、夜由良……夜由良」

出席番号が下のほうを探せばいいんだから……お、あったあった。

「ふうん、E組か。……面倒だな」

「あ、夜由良。見た？」

去年同じクラスだった女子が話しかけてくる。

名前は……真南だったけ？

「ああ、E組だったよ」

「わたしも……イヤな担任に当たっちゃったね。ウザいなあ……」

「……そうだな」

なにが面倒って、担任が江古田だっていうことだ。いちいち説教臭くてねちねち回りくどいことばかり言う先生で、あまり生徒受けがよくない。って言うか、他の先生からの評判もよくない。

校内での通称はイヤミ田。いいのか、教師までそんな呼び方で。ま、それでも本人は古参の先生なので、そこそこ校内での権限を持っている。

説教臭くても、生徒のために怒る人なら俺は別にいいんだが、どうもあの人はそもそも子供自体好きでないように見える。仕事自体にもあまり熱心でない、と言うか厄介ごとを持ち込むこのガキどもと言うオーラが透けて見えると言うか。

ま、ある意味俺にとって一番理解しやすい相手なんだが。

「いちいち名前なんて貼り出さなくていいのに。学校なんて、ウワベで付き合うだけなんだからさ」

そんな声が不意に隣から聞こえる。

どこの誰かは知らないが、まあ、同感だ。たまたま学校が同じだってだけなんだから、無理やり仲良しこよしする必要もない。

同じように担任とも、だ。そこそこ付き合えてればそれでいい。

真南が他の女子のところへ行くのを見送って、俺はそのまま掲示板を見る。

特に仲のいい奴もいないので、そのまま教室に向かおうかとも思うが、一応、岳羽の名前も探してみることにした。

幸いそれもないして時間はかからない。

「なんだ、F組か」

別にどこでもいいんだけどな、仲がいい訳でもないし。って待て

よ。

……一之瀬 佐為？

どうやら岳羽と転入生は同じクラスらしい、なんだか作為的なものを感じる。考えすぎだろうか。

岳羽に案内させたり、……できる自分達の限り目の届く範囲においているように思う。

もしそうなら、それだけ期待されているってことなのか？

「まあ、いいさな。どっちにしたって俺は俺のすべきことをするだけだ」

そう、するべきことを……。

……なんかそんな会話、前にした気がするな。

まあ、いいか。気のせいだろう、そんな会話する相手もないし。

これから始業式だったのに、なぜかジャージを着ている馬鹿を横目に俺は教室へと向かった。

その馬鹿が女といちゃついていたのを見て、イラついたのは決して責められるべきことではないと思う。運動をしているのか、焼けた肌のわりと可愛い女の子だった。

くそ、俺にも彼女がいればな。

……まあ、そんな余裕はなんだけども。

さて、んじゃ生徒会の方に行くかね、始業式の準備もいるだろうし。

……ああ、その前に職員室に寄っていくか、いくつか確認する事柄もあるしな。

俺はとりあえず職員室に向かって歩いていく。

本来ならもうすこし、早めに来たほうがよかったんだろうが、桐



条先輩にもともと無理やり入れられただけあって、ある程度自由を保障してくれている。

そもそも俺は単なる数あわせなのだ、特別課外活動部に入っただけではその活動基地である分寮に入寮してからのこと。

桐条先輩から、特別課外活動部から誰かが生徒会に入ってくれたほうがやりやすい、と誘われたのだ。それも暇なときだけでいい、と言う条件で。

たぶん、岳羽が弓道部に入っているから消去法で選ばれたのだらう。

元々期待されているわけではない、それでもある程度のこととはしておく必要がある。これも給料分なのだ。

ん……、見覚えのない娘がいるな。

ロングヘアの眼鏡を掛けた女の子が職員室の奥の教室前にいる。

新入生か？ ……図書室の前で何してるんだ、あれ？

「どうかしたのか」

俺はその娘に声をかけた。

「え、いや、その……」

大人しそうな可愛らしい女の子だった。小さな声でなにかぼしよぼしよと話している。

……引っ込み思案なのか、なにを言っているのかわからん。

「もしかして迷ったのか？」

「あ……う……」

……どうやらそうらしい。

って言うか、まともじゃべってくれないのはアレか、もしかして怖がられてるのか。

……俺、そんな顔ひどいか？

「そうか、心配するな。送って行ってやるから」

「でも、あの……」

「気にするな、これでも生徒会役員だ。生徒の一員でもあるけど、代表として手助けするのも仕事だからな」

「……あり」

「このまますこし待ってる、すぐに戻る」

「……え、あ……」

なにか言いたそうにしていたが、時間がないので職員室へと入ることにする。

一年生を教室に送るまでに、そこそこの時間をとる可能性もある。どうせなら先導する役員と話しておく気だな。

ま、先週作ったマニュアルどおりにやってくれば問題はないはずだけ。

\*

一之瀬 佐為、つまりぼくは心ゆくまで惰眠を貪り続ける。

基本的に無気力に過ごせる時間、ぼくにとって朝は一番気楽で幸せな時間だ。

可能なら、ずっとここで眠っていたいとすら思う。

自室の扉を叩く、音。

「岳羽ですけど、起きてますかー？」

岳羽……誰だっけ？

思い出すのも面倒、ぼくは小さな声で呟く。

「……起きてません」

再び、響くノックの音。

うるさいな……と毒気づく。

「お願い、出てくれないと困るのー」

朝から自分に何のようだろうか。

……非常に面倒だが、今後のことを考えると無視するわけにもいかない。

そう考えて、ベッドから起き上がる。

どうせ、本気でこのままずっと眠っている、そんなわけにはいかないのだし。

「今起きたんで、少し待っててもらえますか？」

ぼくは扉越しに声を掛ける。

ノックの音が止んだのを確認して、着替え始めた。動作がのろのろと鈍い。

鏡に映る自身のその表情はどこまでも気だるそうで、半分寝ているかのようである。

まあ、きつとぼくはいつもそのような表情をしているのだろうか。  
じ。

ようやく着替え終わって、面倒ながらも扉を開けた。

もちろん、そこにいたのは昨日の女子、岳羽ゆかりだ。

「おはよう、眠れた？」

見てわからないのだろうか、眠れたか？ なにを聞いている、むしろ『眠っていた』のに。

返答がなかったものの気にすることなく、岳羽は言葉を続けた。

「あのね、先輩に案内しろって、頼まれちゃって……もう出られる？」

案内……って。

ぼくはため息が出そうになるのを抑えた。

「いいよ、別に。一人でも」

「……断るかな、ふつう」

そう言われても、本当にいらないのだ。

どうせモノレールに乗るのは変わらない。降りる駅さえ知ってれば、目の前にすぐ見えてくる。

「あのね、いいから行くよ？ わたしにも立場ってものがあるし、頼まれてる以上はちゃんとやらないと」

「……そう」

まあ、ならいいか。別に善意ではなく、人に言われてやっているのであれば、後腐れもない。

「わかった、なら案内を頼むよ」

「……うん、じゃあ、行こっか」

もともとぎりぎりまで眠っている予定だったぼくは既に登校の準

備を済ませていた。

朝食はあまり食べる方ではない。転校する前は無理やり、朝起こされて食べさせられていたが、自分が独りの時はいつもなにも食べずに寝ていたものだ。

カバンを持つと、ぼくは岳羽の後に続いた。

新都市交通『あねはづる』車内。

岳羽はなにかと佐為に話しかけた。

ぼくはヘッドホンを付けることなく、一応それに耳を傾け、適当な相槌をうつ。

「通学には、これ使うの、モノレール。珍しいでしょ？」

「ああ、まあそうだね」

……知っている。

と言うより、ぼくは昨日これに乗ってきたのだ。もちろん、学園方面に向かったわけではないのは確かだけど。

「特にココ、海の上進むみたいな感じで好きなんだ」

窓の外は確かに、左右どちらを向いても海である。

海を横断する形で掛けられた橋を渡る、このモノレールは確かに絶景を楽しむポイントであるに違いない。

ぼくがそれに興味を持つかは別にして。

「確かに……いい眺めだね」

「そうでしょ？ あ、学校があるのは、終点の『辰巳ポートアイランド』って駅ね」

「ああ、聞いたことあるよ」

「有名だもんね、辰巳ポートアイランド。人工島の真ん中に、うち

の学校があるの」

世界に名高く日本の経済を支える二つの財閥。あの南条グループと二分する桐条グループが作った人工島、ポートアイランド。

それを知らないものはそういないだろう。

と言つか、ぼくは転入してくるのだからそれくらい知っているのは当然だ。入学案内くらい見ている。

「あ、ほら、見えてきた」

「……やっぱり規模がすごいね」

「うん、島丸々一つが学園みたいなものだしね、お店とかもあるから日中はかなり人も多いしね。その代わり、夜間はかなり人口が減るって聞いたことあるな」

駅から降りれば、そこはすぐに学校だ。

岳羽は友人が多いらしく、たくさんの生徒から挨拶をされている。

「さ、着いたよ。ここが『月光館学園』の高等部。よろしくね」

「ああ、よろしく」

そのまま玄関へと入っていく。

「ここからは一人でも大丈夫だよね」

「……たぶんね」

「うん。じゃあ、えーと……まずは先生にあいさつか」

大丈夫だよ、と確認しておいてまだゆかりは、ぼくを気に掛けている。

ずいぶん面倒見がいいんだな、と感じた。

「職員室は、この先を左に入ってすぐだから、詳しいことはそこだね」

「わかった」

「では……以上、ナビでした。なにかわからないこととかある？」「別にないよ、ありがとう」

そう言って職員室に向かおうとしたが、岳羽はなにかいいたような顔をしていることに気付く。

「どうかしたの？」

「あの子……」

「うん」

「昨日の夜、その……色々と見たでしょ？ あれ、他の人には言わないでね」

色々ね、まあ、確かに色々あったな。

ぼくは元々、誰かにいう気もなかったし、もうさっさと忘れて自分とは関係のないものとする気だったので、素直に了承する。

「わかった、誰にも言わないよ」

「……ありがとう、じゃあね」

……なるほど、やけに面倒見がいいと思っただらそういふことが、ぼくは納得する。

理由もなく親切にされるのは、それなりにわずらわしいことだったので、自分の中でそう整理した。

ぼくはいつも他人との関わりに、どこかある種の息苦しさを感じていたのだ。

この時点ではまだ知らない 夜由良 優と同じように。

その後、ぼくは特に迷うこともなく、職員室にたどり着いた。  
なぜか遠目に武者鎧にある兜を被った仮装姿の教師と、外国から  
の留学生らしき生徒が妙に盛り上がり上がっているのが見えたが、それは  
目の錯覚とすることにした。  
いや、って言うかスーツに兜ってどうなんだ？

教室に入ると待っていたのだろう、すぐに気が付いた女性の教師  
が話しかけてきた。

「おっと、新入生君よね？」

「……はい」

「……一之瀬 佐為。二年生で間違いないわよね？」

「ええ、そうです」

そのまま女性教師は手元の資料をめくっている。

「ふうん……結構、転々としてきてんのねえ……」

「……まあ」

「えー、ご両親は、10年前の……あつ……」

なにかに気づいて言葉を止め、そのまま気まずそうに女性教師は  
佐為を見る。

ぼくはこういった目で見られることに慣れていた。

「ああ、ごめん……バタバタしてて、詳しく読んでなくてさ」

「いえ、気にしてませんから」

なんとも言えない面持ちで見られるが、実際、気にしていなかつ  
た。なんとも思っていないと言いかえてもいい。

なにせぼくは当時のことを……それどころか10年前より以前の



ことをまったく覚えていないのだから。

「ええと、私は国語科主任の鳥海です。よろしくね」

「はい、お願いします」

「……なんだか落ち着いてるわね、君。クラス分け、もう見た？」

君は私の担任するF組よ。でもこの後始業式だから先に講堂ね」

「わかりました」

「案内するわ、ついて来て」

ぼくはなにも言わずにその言葉に従う。

基本的にしゃべらなくていいならしゃべりたくないのだ。

\*

「えー、諸君らの新しい1年の始まりにあたり……」

校長のスピーチが始まる。

なんでお偉いさんのスピーチってこんな面倒なんだろ。

なくても別にいいだろうに。

「あー、『文筆頻々、然る後君子』と言う言葉を紹介します」

「それを言うなら『文質彬彬として、然る後に君子なり』だ、アホ  
め」

俺はぼそつ、と呟く。

あのデブ禿眼鏡のジジイ、いい加減なこと抜かすな。たわけ。

「どどういう意味かね、それは」

小声で言ったにも関わらず見事に聞き取った小田桐が俺に問う。

彼は1年の頃から役員として働いており、2年となった現在では生徒会副会長として桐条先輩を支え、さらに風紀委員長を兼任するかなりのやり手だ。

少々、周囲との連携力が不足しているところもあるが、それを俺が埋めるのが役割分担というものだろう。

その小田桐の質問に俺は答える。

「論語は知ってるだろ」

「孔子だろう？」

「ああ、そうだ。意味を要約すれば、飾りと内容の双方が適度に両立できる人間でなければ君子足りえない、ってことだ。本音と建前と言い換えてもいい。

どちらも社会に必要なものであり、どちらかを軽んじることがあってはいけない、そういう意味だな。ちなみにこの言葉の前に、役人は建前ばかりで、学のない奴は本音ばかりと入る」

「博識だな、君は」

「偶然知ってただけだ、これはマジで……引用が正しければいい言葉だと思っけどな」

「……そうだな、難しくはあるが至言だ」

「まあ、ここで本当のことを堂々と言わないのが、建前の使い方と言うものなのだろう。それを身をもって教えてくれているのかもしれん」

「……思っていない」

「オー、イエス。……そんな回る頭なら校長せずに、まだ現役で教壇に立ってるだろうよ」

「つくづく毒舌だな」

「事実だ」

俺は退屈さとあくびをかみ殺して、ステージを見る。

「うー、この意味はと言いますと……」

なんて説明する気なのか、すこし興味が沸いたがすぐに消えた。どうせ始まるのはくだらない説教と長話だ。

「にしても、君のおかげで会場の設営はスムーズにいったよ」

「なにもしてないが？」

俺、そもそも現場にいなかったしな。

「そうではない、君が提案した行事のマニュアルだ。設営の手順から必要な物品とその物品の保管場所、不測の事態の場合の対応と連絡系統。あれはかなり使えるな」

「他の行事では使えんさ、だが、応用は利くな」

「ああ、あれを基本にしていけば集会には対応できる。これから不慣れな一年の役員が入ってくることを考えればな、かなり重要だ。

……よくあれだけのものを短期間で作れたな」

「……正直ほとんどなにもしてないんだ、入ったばかりでわからないことばかりだからな、そういう人間のためにこれから必要だと桐条先輩に言ったんだ。ほとんどは先輩の手柄だ」

俺がそういうと小田桐は複雑そうに「そうか」と頷いた。

まあ、気持ちにはわからんでもない。

「あの方も忙しい中よくやってってくれているな」

「ああ、本人は卒業ぎりぎりまで会長職を続ける気らしいしな」

「……心強いことではあるが」

「ああ、それじゃ駄目だ。かといって俺達にはあそこまでの能力はない」

「なんだ、弱音か？」

小田桐がすこし、ムツとした様子で俺を見る。  
俺はそれに微笑で返す。

「そうじゃないさ、俺達には俺達のやり方がある。あの人は能力の高い人間が生徒会を率いるべきと考えている節がある」

現状、その最有力候補は小田桐だ。  
もちろん、本人もその期待にこたえるべく努力している。

「その通りだろう、高い能力を持つ強者が全体をまとめていくべきだ」

「ある程度はな。だが、今回のことでわかったはずだ。自分が指揮をしなくても全体が自ら動いていく、このことの有効性を」

「……ああ、確かに。僕がすべきことは最低限の監督だけだった、一年生の整列には戸惑ったがあれは教師達も考えて対応してくれていたし、そのロスも予測の範囲内だったろう」

小田桐の同意に頷く、その部分は俺も見ていたが同じような感想だった。

「俺が思うに、上に立つものの重要な能力とは指導力の高さだけではない。……むしろ、自分が指導しなくてもいいように、環境を作り上げていくことだ」

「いなくてもいいように、だと？」

「お前、忘れてるのかもしれないけど俺達だっていなくなるんだぜ？ その後の生徒会がちゃんと動くようにしていかないと……それは上に立つものにしかない視点だろう？」

「……なるほど、そのためのマニュアルか」

「ああ、おそらくこの一年が勝負だ。桐条先輩がいる今がな、その

後は俺達が前に出る必要がある、マニュアルなんぞ作ってる場合はないぞ」

感心したように頷くこと繰り返していた小田切だが、なにかに引っかかりを覚えたのか考え込み始める。

……ああ、それでいい。なんでもかんでも鵜呑みにする奴なんぞ、いらねえよ。

「だが、完全にマニュアル化すれば柔軟性がなくなるぞ。新しい事態にはどう対応する？」

ほうら、やっぱり来た。

「対策は二つだ、それを考慮したうえで作成すること。限界はあるがな、『新しい事態へのマニュアル作成』のマニュアルなんてものも作れるんだぜ？　だが、こういった事務処理、企画編成マニュアルは運用する人間の能力に大きく結果が左右される。要するに、もう一つはお前が言った部分だな、よい人材を育てること」

「どちらか同時にやれ、と？」

「それが君子の道だろう、どちらか片方じゃ駄目だ。マニュアルだけで中身なし、ってことが不安ならそうするしかない」

「……可能か？」

「お前、一人でやる気が。なんのために二人いると思ってるんだよ、それにこれから新しい人材も入る。ものになるには時間はかかるだろうけどさ、一年だって使えないわけじゃないんだぞ？」

「まさか、人に頼れと言われるとはな」

「一人で出来るなら、生徒会を作る必要はないだろ。出来ないから集まるんだ。全部自分でやるなんて面倒だぞ」

「そうか、面倒か。まさか、君は自分でやるのが面倒だからマニュアルを作成したんじゃない？」

「おお、ばれたか」

「この怠け者め」

俺達は小さな声で笑い合う。

周囲に気付かれないように。

「……桐条先輩がわざわざ連れてくるというからどんな人間かと思えば、まさかこんな奴だとは思わなかったな」

「褒めてるんだよな？」

「ふん、褒められるようなことをしたか？」

「さあ、自分ではなんとも。まあ、なにもしてないしな」

「……よく言う。実際の所、君が来てからだいぶ物の見方が変わった気がするな、自分にこんな面があるとは思ってなかった」

「例えば？」

「さあな、とりあえず性格が悪くなったと言われれば、それは君のせいだろう。あといい加減だ、とかな」

「ひでえな、ま、それが正当な評価ってもんだ」

「おやあ？なんか話し声がしましたねえ？」

やばっ。

俺と小田桐は揃って真面目そうな顔を作る。

どうやら江古田が、話し声に気付いたらしい。

「……鳥海先生のクラス辺りですかあ？」

よし、俺らじゃない。

俺が小さくガッツポーズをすると小田桐に睨まれた。

不謹慎だって？ いいじゃん、それくらい。

「……つたく、静かにしてよ！ 怒られんの私なんだから！！」

そんな鳥海先生の科白が聴こえて、小田桐が絶句する。  
ねっ、ほらあんな先生いるんだから別にいいだろ、これくらい。  
いやー、にしても好きだな鳥海先生。俺、ああいう人好きなんだ  
よね、鳥海先生のクラスがよかったな。

「夜由良、なんだかFクラスがすこし騒がしくないか？」  
「今気付いたのか、小田桐」

俺は最初から気付いている、ずっと小声で噂しあっているのだ。  
原因は一つ、だ。ヒントは『転入生』。

まあ、こんなことは小田桐に説明してもわからんだろう。俺はな  
にか聞きたそうにしている小田桐を黙殺した。  
いや、やっぱ一言。

「これ以上、役員がしゃべってちやまずいだろ」

苦々しくあきらめる小田桐。

俺に注意されるのは屈辱だろう、いやー、俺って性格悪いなあ。

\*

ホームルームを終え、ぼくは転入してきて初めての放課後を迎え  
ようとしていた。

初めての学校での一日の感想どころじゃなく、なによりもあるの  
は疲労。

なぜ、こんな疲れているのかと言えば……。

「よっ、転校生！」

急に声を掛けられ、ぼくは思わずはっとする。  
いたのはなぜか屋内で帽子を被っている、気のよさそうな男子生徒。

あごヒゲがあるせいで若干老けて見えることは、本人に伏せるべきだろう。

「なあんだよ、そんなマジビツクリした顔すんなって！」

「……誰？」

「ん、オレか？」

男子生徒はにやり、と笑ってみせる。

「オレは伊織 順平。ジュンペーでいいぜ」

「……ぼくは一之瀬 佐為」

「ああ、さっきの自己紹介聞いてたかな、名前はわかるぜ。……」

実はオレも、中2ん時、転校でココに来てさ。転校生って、色々

1人じゃわかんねえじゃん？」

「まあ、そうだね」

「でな、オレが最初に声かけなきゃってな。へへっ、イイ奴だろ？」

ソレって自分で言うことかな、と突っ込もうかどうか迷っている  
と、その横に岳羽が呆れた顔で立ったことに気が付いた。

その視線を追う形で、順平は岳羽に気付く。

「お、ゆかりッチじゃん！また同じクラスになれちゃうとは、思わ  
なかつたぜ」

「まったく、相変わらずだね……。誰彼かまわず、馴れ馴れしくし  
てさ」



岳羽は順平の態度に対し、ため息で答える。

「ちょっとは、相手のメーワクとか、考えた方がいいよ?」

「な、なんだよ。ただ親切にしてるだけだつて」

「ふうん、なら、いいんだけど」

そう順平に言つと、岳羽はぼくに対し向き直つた。

「なんか……偶然だよな。同じクラスになるなんてさ……」

「そうだね」

とりあえず、ぼくは同意する。

基本、なんでも同意や肯定するのがぼくのスタンスだ。とにかく合わせておけばいいだろう、と言つて感覚がある。

なので、実際の所、いつもはそこまで相手の話を吟味したり聞いているわけでもない。なんとなく流れで頷いている。

「うん、実際驚いたよ……」

「おいおい、オレだつて同じクラスだぜ? なんか扱い違わねーか!?!」

順平の科白を流すゆかり、二人は仲が悪いんだろうか。

ぼくはすこし、判断に迷つ。

その時、順平が白い歯を見せて楽しそうに笑つて言った。

「てか、実際、訊きたいことあるんだけどさ。お二人さん、仲良く一緒に登校したんだつて?」

そう、これなのだ。ぼくが疲れていた理由は。

朝からずっと、始業式の時から聞かれている。小声で周囲のクラ

スマートフォンはみんなして噂をしているのだ。  
なんとなくだが、学年全体にそういう状態が広がりつつあるようにすら思う。

「詳しく聞かしてくれよー」

「えっ、ちょっと、やめてよ！ 彼とは、たまたま寮が一緒ってだけ。何でもそういう話に結び付けすぎだっの。ってか、ウワサになるの早すぎでしょ！ ホント、なに考えてるわけ!？」  
「いや、そこまでオレに言われても」

岳羽は必死にぼくとの関係性を否定する。

順平はその剣幕に押されて若干、引いているようだ。

ある程度、順平に文句を言って落ち着いたのか、岳羽はぼくに近づく。

「……ちょっと、いい?」

「うん」

「あの事とか……言っていないよね?」

「ああ……誰にも言わない約束だからね」

「ならいいけど」

しつこいものだ、と思う。

と言うより、本当に秘密にしたいのなら、こんなところで内緒話もないものだ。

しかし、さらに岳羽はぼくに向かって念を押す。

「昨日の夜の事……ホント、言わないでよ……?」

「……!??」

どこで誰が聞いてるともわからないどころか、隣に順平がいるの

に。

と言うか、今まさに聞いているのに。

「き、昨日の夜って……え？」

「え、ちよっ……なんか誤解してない？」

するだろう、それは。

「とにかく！ 彼とは昨日会ったばかりで、ホント何でもないので！

いや、そこまで必死になられると一層怪しいのをわかっているの  
だろうか。

たぶん、わかっていないのだろう。まあ、どうでもいいか。と佐  
為は結論づける。こんな噂長続きしたりしない。

「もう、……じゃ私、弓道部の用事あるから行くけど、変なウワサ  
広めないでよ……？」

最後に強い口調でそう言って立ち去っていくゆかり。  
順平は肩をすくめた。

「別に、ウワサなんてどうって事ないじゃん。なあ？」

「うん、どうせすぐなくなるよ、噂なんて」

「だよな、チヨイ、自意識過剰っぽいよな……でも、スゲーじゃん、  
初日から浮いたウワサなんてよ！」

「そういう問題？」

「おおよ、あいつ、アレでケッコー人気あんだぜ？」

「まあ、だろうね」

こんなにも注目を浴びるくらいだし。

確かに見た目はかなり可愛い方だろうし。

「ま、とにかく、これからよろしくな。……佐為、でいいか？」

「ああ、好きに呼んでくれていいよ」

「よし、じゃ佐為。よろしく！」

「……うん、よろしく」

ぼくはそのまま順平に誘われるがままに、一緒に帰ることにした。学校を出てまず目に入るのは、満開の桜並木と走り回る運動部。

「がんばってんなー、オマエは部活入ったりすんの？」

「どうだろ、あんまり興味ないな」

「ふうん、まあ、新規入部ってことになるから、まだもうちっと後だけどな入れるの」

「時期、決まってるんだ？」

「そう、人数調整とか色々あるんだわ」

「……へえ」

珍しくぼくは誰かと会話しながら帰って行く。

でも、たぶんこれも長くは続かないだろう。そう思った。

\*

寮のラウンジで、桐条先輩が一人で読書をしている。

俺は目の前のソファの前へと立った。

「ちょっと失礼していいですか」

桐条先輩が顔を上げた。

穏やかなそれでいてキリッとした表情で微笑する。

……すこし動揺した。つて言うか、半端じゃなく動揺した。

「ああ、かまわない。君も読書か？」

「ええ、自室で読んでもいいんですが、ここではお湯が手軽に手に入りますから」

そう言つて、俺はココアが入ったカップをテーブルに置く。

「なにを読むんだ？」

「ファンタジーと神話ものが多いですかね。それとミステリーをすこし。古いものは読まなかったんですが、最近ようやくアガサクリステイを読みました、正直びっくりしましたね、むしろとても新鮮な気持ちで読めました。名作家と呼ばれるだけではありません」

「ああ、確かにそれはわかるかもしれない。ミステリーはパターン化されてしまっているが、それを始めに作り上げた世代が一番純粋に読める気がするな」

「あとは、心理学の本が意外とおもしろいですね。俺は正直心理学からは離れてると思うんですけど、ユングとか……読み物としてはいいと思います」

「……変わっているな、君は」

「そうですね、ああ、でも漫画も読みますよ。最近のから古いものまで。俺、不真面目なんで歴史はソレで勉強しましたね。先輩はどうです？」

「漫画は正直、読んだことがない」

ああ、だろうな。そんな感じがする。このあいだ、牛丼食べたことなかったつて言つてたもんな。

すごい喜んでたな、正直、……ちよつと萌えた。

あ、なにこの気持ち、あ、これが萌なの？ つて感じだった。

……俺の初萌えは先輩です。

「なにを笑っているんだ？」

「いえ、別に」

「……漫画が勉強になるのも知らなかったな、そういうものに触れたことはない」

「勉強になるものもあるっただけですよ、でも感動できるものもあります。良かったら今度貸しますよ、きっとお気に入りも出来るかと」

「本当か？ それはいい楽しみが出来た」

先輩が嬉しそうに笑う。

「うわー、なんか幸せだ。もうこの笑顔を間近で見れるだけでいい。もう、桐条グループの権力に脅されて来たようなもんだけど、今の瞬間のために先輩に従っていると云っても過言じゃないな！」

「そう言えば、今日の始業式の時……興味深いことを言っていたな」「始業式……ですか？」

「上に立つものがすべきこと、だ。自分が指導しなくても良いように、環境を整えるだったか？ 思わず感心させられたよ」

「あ……聞いてらしたんですか」「最初は注意しようかと思ったんだが、つい聞き入ってしまったな。すこし耳が痛い部分もあったが」

思い返してみれば、桐条先輩のやり方を否定するようなことを言っていたような気がする。

実際そういう気持ちになかった、とはもちろん言わないけどな。

「……すみません」

「いや、いい。私自身力ある個人に任せようと思っていたことは確かだ、桐条グループの最も重要な理念を忘れていた」

「理念？」

「ああ、だから目から鱗が落ちたような、そんな気分だったよ」

「そんな立派なことは言ってますよ、ただ俺自身に力がないから。実際、マニュアル作りも一人じゃ無理です、全体を指揮できる能力もありません。だからそんな人間でも、なにかが出来るようになるにはどうしたらいいか、と……」

「だが、こうして私達を動かしているだろう？ それも誰も気付かなかったことで、だ。それに既に自分達がいなくなった後のことなんて考えている。それは確かに完璧なものではないかもしれない、だが、確実に生徒会は前へと進んでいるよ。」

……生徒会の将来を不安に思う2年や3年は数多いが、みなそこから前へと進んではいなかった。今までは、な。そう考えると、まったく小田桐も変わったものだ、以前は集会中に雑談などしなかったのに」

「ははは、小田桐が言っていましたよ。自分が不真面目だと言われたら俺のせい……だったかな」

「性格が悪いと言われたら、だろう。それといい加減だったか？」

「……本当によく聞こえてるんですね」

「こう見えて耳はいいんだ」

「ほんと、敵わないですね」

俺はすっかりココアを飲み忘れていることに気付いて、口を付け始める。

すこし冷め始めているが、まあいいだろう。

「盗み聞きしていたようで、少々申し訳ないが。」

でも、そう、小田桐は柔軟になったと言っべきかな。ずっと彼には他者の言葉に耳を傾ける力が必要だと思っていた。それがまさか、君がそのきっかけになるなんてな」

「……アイツにはきちんと考えて話し合える相手が必要だったって

だけです、先輩の後任ですからね、プレッシャーもあつたんでしょ  
うしね」

「本当に有り難く思っているよ」

「……それはどうも」

だから褒めるのは、やめて欲しい。

お願いだから、やめてほしい。

そのたびに心臓がぎゅっと締め付けられたかのような、そんな痛みが走る。

「にしても、君は存外口が悪かったんだな、今まで知らなかったな」  
「あー、素だとそうですね。正直、先輩達との会話でも出そうになります」

「そうだな、たまに口調が碎けているときがある。だが、君の本来のしゃべりはそれとは非にならないだろう？」

まあ、それが君の持ち味なのだろうし、ある意味で気を許しているということだろうから、ある程度は出ても構わない、と私は思う

「そうですか？ ……ありがとうございます」

「だからといって、集会中にしゃべっていいとは言っていないぞ？」

「覚えておきますよ」

俺は苦笑しながらそう答えた。

……先輩と話しているとどうも肩が凝るな。

ん……………物音がする。どうやら誰かが階段を下りてきているようだ、足音の響きからなんとなく真田先輩だと判断する。

ビンゴ、やっぱりそうだ。

降りてきた真田先輩は軽い調子で、桐条先輩に声をかける。

「ちょっと、出てくるぞ」

「……今日もか？」



「ああ。そつだ、美鶴、気付いてるか？ ……このところの新聞記事」

「……ああ。それまで普通だった者が、ある日を境に急に口も聞けない程の無気力症に陥る。最近、流行りらしいな」

俺は二人の会話に入ろうか迷うものの、とりあえず口を開く。

「専門家によればストレス性らしいですね、少なくとも記事では…  
…ですが」

「そんな訳あるか。絶対『ヤツら』の仕業だ。 ……でなきゃ、面白くない」

「……そつという問題ですか」

玩具を見つけた子供のように話す、真田先輩。

俺はなんと行ってやったらいいかわからない。

そんな真田先輩に桐条先輩はやや呆れ混じりに話す。

「相変わらずだな ……しかし、今は後輩を率いる身だ。無茶はするなよ」

「なに、心配ない。トレーニングのついでだ。 ……そつだ、夜由良、今日はどうする？」

俺は一拍だけ考え、すぐに返答する。

「まず桐条先輩とともに業務につきますよ、特に動きがなければ途中からトレーニングに …… 実戦訓練に付き合ってもらっていいですか？ …… まだ成功させたわけじゃないですから、今日はそつちに集中します」

「 ……だがお前は実戦では成功しているだろう、それも2回も」

「1回目は …… 夢遊病状態で意識がありませんでしたし、2回目は

必死すぎました。常に使える武器であるべきでしょう、あの力は「わかった、お前の判断にまかせる。じゃ、俺は行ってくるぞ」

そう言っただけから出て行く真田先輩。

その背中を見送ってから、桐条先輩は呟く。

「……まったく、明彦のやつ……遊びじゃないんだぞ」

「まあ、気持ちはわかるんですけどね」

俺は苦笑するしかない、確かにどこか真剣味が足りないのだ。

油断しきっている……その上。

「本当にヤツらの仕業なら、現実に被害者がいるってことなんですよ」

でも、きっとあの筋肉馬鹿せむはしは、俺がなにを言ったところで戦うことを楽しむことをやめられないのだろう。

\*

4月8日 水曜日

特に学校でおもしろいこともなく。

まあ、そんな毎日、日常が遊園地のように娯楽に溢れているはずもないわけ。

そんな中、ぼくが寮に帰ると見知らぬ男性と、岳羽がラウンジのソファで話していた。

センスのいいスーツと眼鏡、それに落ち着いた年相応の佇まい。十分紳士として通用するだろう。そんな容貌の男性だった。

「あ、帰ってきました」  
「なるほど……彼か」

なぜかぼくに二人の視線が注目する、ぼくを待っていたと言うことだろうか？

座ることを促され、素直に対面して座る。

……誰だろう、この人？

「やあ、こんばんわ」

「……どうも」

「私は、幾月修司。君らの学園の理事長をしている者だ」

「理事長……なんですか」

「そう、理事長のイ・ク・ツ・キだ。……言いくいだろうか？ おかげで自己紹介は苦手だよ。油断すると噛みかねん……」

自己紹介なんてどうでもいい、呼びもしない理事長の名前なんて興味もない。

ただ、なぜわざわざ理事長がこの寮に？

「部屋割りが間に合わなくて、申し訳なかったね。正式な割り当てが決まるまで、まだ少しかかりそうだ」

「……そうですか」

つまり、しばらくはこの寮だと言うことか。

まあ、それは別にいい。それより、それをわざわざ伝えるために来たって言うのか？

「さてと。何か訊いておきたいことはあるかい？」

「……なぜ貴方がこの寮に？」

「なぜって……君を迎えるためさ。ダメかい？」

「……ダメかい、って」

「あ、岳羽君。そう言えば、桐条君は？」

理事長は突然ゆかりに問いかける。

ゆかりは特に戸惑うこともなく答えた。

「ハイ、もう上に」

「いつもながらマジメだねえ。顔ぐらい出せばいいのに……あ、他に質問はあるかい？」

どうやら真面目に答える気はないらしい、そうぼくは判断する。なら、これ以上話しても無駄だろう。

ぼくは黙って首を左右に振る。

「よろしい。じゃあ、よい学園生活を。私はそろそろ失礼するよ」  
「……ありがとうございました」

「ああ、転入したては色々と疲れるだろ？ 早めに休むといいよ。身体なんて、ぐーぐー寝てナンボだからね」

「はあ」

「昔、マンガにあったらう？ 『ぐーぐーナンボ』？」

「……………」

「なんちゃって」

思わず、ぼくは岳羽に目を向ける。

ぼくも同じような表情をしているだろう、今にも頭を抱えたような顔をしている。

そして小声で一言。

「ごめんね……」

そう呟いた。

……いや、謝られても困るんだけど。

まあ、どうでもいいや。今日はもうさっさと寝よう。

別にあの理事長の言うことを聞く訳じゃないけど。

\*

俺が朝、登校するとすぐに真南に話しかけられた。

なにか妙にそわそわしながら近づいてくるのを見てすぐに気が付いた……ああ、このパターンか、と。

「ねえ、夜由良くん。あのウワサ聞いた？」

「噂？」

やっぱり来た、そうだと思ったんだよな。

真南は知っている中でも噂にはなかなか耳ざとい女子だ。

「うん、クラスの……あの人、学校来なくなっちゃって、家でずっと、壁に向かってるんだって」

「へえ」

「で、お母さんが声を掛けたらね、『来る……来る……』ってつぶやくんだってー！」

「ふうん、そうなんだ」

「……信じてないなっ!？」

いや、事実でもじゃなくても関係ないし。興味なんて欠片もないし。

そもそも俺にどうしようもないだろ？

ま、とにかく。

「そんな感じで、結構広まってるみたいですね」  
「……私のクラスでもそうですね」

岳羽が俺の言葉に同意する。

校内全体での状態らしい、まあ、あえて『転入生』と岳羽の關係に関するうわさ話が同じような状況になっていることは伏せる。

……横から蹴り入れられたら嫌だからな。

「ふむ、とうとう校内でもか」

「まあ、予想はしていた訳ですが」

こんなに被害者が出れば、校内にも関わりは出てくるだろう。

ちなみに今は特別課外活動部の活動中なので、一応制服姿である。

その上で、『S・E・E・S』と書かれた赤い腕章をつけなければならぬと言う妙な義務が存在している謎。

……誰の趣味だ？

ちなみに、『S・E・E・S』はSpecial Extrac  
ricular Executive Sector の略称だそう  
だ。

桐条先輩は神妙そうになにか考え込んでいる。

「しかし、被害者の急激な増加だな。何か理由でもあるのか？」

「それは……現状ではなんとも」

俺達が桐条先輩と話していると部屋に誰かが入ってきた。

幾月修司……月光館学園の理事長であり、特別課外活動部の顧問  
だ。

そして、俺をここに入れた張本人でもある。まあ、恨んじやいな  
いんだけどな。

「お疲れさま、どうだい、『彼』の様子は？」

「先ほど就寝しました。今は眠っています」

理事長の問いかけに、桐条先輩はモニターを見ながら答える。

そう、ここは寮内に密かに仕掛けられている監視カメラの映像を、見ることの出来る監視室になっているのだ。

正確には俺達が怪物と戦うための情報を統括する、作戦室……となっている。

「理事長、やはり彼は……」

「まあ、とりあえず見守ろうじゃないか。……もうすぐ影時間だ」

まあ、確かにもうすぐ零時だ。結果はそれを見る方が早い。

\*

その頃、辰巳ポートアイランド裏路地、そこに座り込む、一人の男性。

ラジオを聞いていた彼は呟いた。

「はあ……つまんね……」

そう言っつて、ラジオを放り投げる。

そのラジオからは軽快な音楽が流れ続ける。

だが、その曲もやがて終わり……。

「K」プレゼンツ、ザ・ベイ・ハッピー・チューナーズ。えー、来週もまたこの時間にお会いしましょう」

DJが番組の終了を告げる。  
声の主が女性へと移り変わる。  
もはや、ラジオの主の男性は眠気をこらえるばかりで耳を傾けて  
はいない。

「この番組は、人に・永遠の・快適時間、桐条エレクトロニクスの  
提供でお送りしました。……まもなく零時です」

その声から3秒、2秒、1秒。

そして、世界は……。

変異した。

「……ん？」

男は周囲を見渡す、あきらかに先ほどとは雰囲気が違う。  
照明は消え、ラジオの音どころか一切の物音が消え去っている。  
いや、そのせいで今まで聞こえなかったささやかな風の音が大き  
く強調されている。

「なん……なんだ？」

さきほどまで周囲にいた人々は棺桶のようなそびえ立つオブジェ  
へと変わり、辺りからはあちこちから血のような赤い液体が染みだ  
し流れ、血だまりを作っている。

「……は？」

その時、背中に何かが落ちた。

「…あ…あ」



身体が動かない、そして気付く。  
自らの身体を覆う真っ黒い何かに……。

「ああ……ああああっ……うわああああああ！」

そして彼は、食われた。

\*

「寝てますね、彼」

俺はそう理事長に言った。

そう、なんの変化もなく、すやすやと一之瀬 佐為は眠っているのだ。それはもう、気持ちよさそうに。

……ちよっと羨ましい。

「フム……そうだね。平然と眠ったままだ。毎晩零時になるたびに訪れるこの『影時間』は言わば、隠された時間だ。

普通の人間は棺のような姿に『象徴化』して、この時間があることにすら感じない」

「じゃあ、彼は……」

その言葉にゆかりが答えた。

理事長は頷く。

「ああ、見ての通り、彼に『象徴化』は起きていない。眠ってはいるけど、彼は今、ちゃんと影時間を体験してる。あとは『適性』があるかどうかだ」

そう言って顎に手を添えて、モニターを見、考え直したかのよう  
に言う。

「……と言っか、あるんだろうね……。無ければ今頃、『ヤツら』  
の餌食になってる」  
「餌食……ですか」

ゆかりの顔色がどこか悪い。  
気は強いけど女の子だけあつて彼女は結構、繊細に出来ている  
のだ。

ま、あれだ。本人に言ったらたぶん怒られるけど。

「とにかく、もうあと何日かは、こうして様子を見てみないと」  
「はい」

理事長の言葉に桐条先輩が同意した。  
しかし、ゆかりは気分が悪そうに顔をしかめる。

「隠れてこんな事して、ちょっと気が引けますけどね」  
「同感だな、もしかしたら逆に俺達がこうして、モニター越しに眺  
められていた可能性もあると考えるとムカムカするね」

俺が腕組みしながらそう言つと一層、ゆかりの表情が憂鬱そうな  
ものになる。

理事長が飄々とした態度で肩をすくめる。  
桐条先輩も同様に平気そうな顔をしているが、俺の言葉を聞いた  
とき僅かに変化があった。

この人は何かをこらえるときに、逆に顔の表情が固まるのだ。非  
常にわかりやすい。

まあ、誤解されやすいところなんだろうけどな。

つか、これで一番平気な顔してやがる人間が教育者だったのが、一番ムカムカ済んだけどな。いつか絶対、ぶっ飛ばしてやる。このアゴヒゲ眼鏡め！

にしても、すごく気持ちよさそうに寝てんな、コイツ。

……… いったい、どんな夢見てるんだかな。

\*

4月9日 木曜日

どうも今朝は不思議な夢を見た気がする。

……… 覚えてないけど。

ぼくが教室に向かってしていると順平が声をかけてきた。

「ちーす、おはよ。なんか最近ずっと眠くね？」

「うん、眠い」

「こついつ時は授業中寝るに限るよな、なんか頭がスゲースッキリすることね？」

「ああ、わかるな。それ」

「あるよなつ。その方が勉強もはかどるし？ でも、それだと授業聞けねえんだけどよ」

この日もぼくは順平と一緒に帰って、よくうちの生徒が帰りに寄るといふポロニアンモールを案内してもらった。

……… 確かに学校帰りの学生で賑わっているようだ。

「まあ、ここで一通りのものは揃うな」

「ぶっん」

「で、なんだ。みんな、カラオケとかゲームセンターとか……あとCDみたりとか」

「CDね、それはよくお世話になるかも」

「ああ、お前いつつもなんかかんか聞いてるもんな。あとアレよ、クラブ」

「クラブ……へえ」

ぼくはじっと、順平を見る。

「……ええ、行ったことありませんけどねー」

「だと、思ったよ」

ずっと順平はぼくに関わってくるけど、それがただ面倒でなく、まんざらでなくなっているぼくがいる。

でも、ダメだ。そのうちまた、いなくなるんだから。

それでもなんだか心地いい気がする、と言う事実は変わらなくて。

ぼくが寮に戻ると桐条先輩がカウンターの奥で作業をしていた。どうやらパソコンに何かを入力しているようだ。

「君か、おかえり」

ぼくは軽く頭を下げる。

「……どうも」

「今夜は月が綺麗だな」

「もしかして満月でしたか？」

「ああ、たまには月明かりで本を読むのもいいかもしれないな」

そう言えば、しょちゅう本を読んでいるイメージがある。

……趣味なのだろうか。

「……先輩はそこでなにをしているんですか？」

「ん、ああ、これか。このパソコン自体は元々寮に設置された共用のものなんだが、今ではこうして寮での生活記録を学園に送ったりするのが主な使い道だな」

「へえ」

「それでも一応は共用だからな、なにか必要なことがあれば言ってくれ。ある程度の制限はあるが、インターネットやデータを印刷するくらいのことには出来る。……とは言え、今では使っているのは私ともう一人ぐらいのものだが」

「もう一人？」

「生活記録は私が代表して行っているが、一人ひとり見えているものも違うだろうと思っただけ。二年の方でも書いてもらっている……君と同じ男子生徒だよ。彼は他に必要経費を入力していたな、家計簿と言っていたか？」

「家計簿……ですか」

「本人曰く、だがな。意外なぐらいにマメな男だよ、同年代だしそのうち会うこともあるだろう」

「はい」

心の底からどうでもいい。

そんな面倒なことを進んでやるなんて、ぼくとは性格が合わないと思う。

いや、合ったら合ったらでコミュニケーションをとろうとは思わないんだけど。

ぼくはそのまま部屋に戻ろうと進んでいく。

「おかえり」

声を掛けてきたのは、岳羽ゆかり。  
彼女はラウンジでソファで寛いでいた。

「……ただいま」

「夕食は？」

「外で済ませてきたけど」

「……そっか」

それがどうかしたのだろうか。

「……ここって前は寮母さんが居ただけど、今は寮生だけなんだ  
って」

「ああ、前は居たんだ」

「私は見たことないけどね。でも、これだけ立派でキッチンもある  
わけでしょ？ もったいないと思わない？」

「まあ、確かにね」

「うん、私もそう思ってたんだけど、君の前に入ってきた夜由良……  
……同じ学年の男子んだけど、彼もそう思ったみたいでさ。料理始  
めたんだよね」

それはもしかして、今さっき桐条先輩が言っていた人だろうか。

「最初は違ってたんだけど、いつのまにか寮生全員がごちそうになっ  
ててさ。私が言うのもなんだけどさ、良かったら君も食べに来たら  
いいと思うよ。……みんなと食事するのって、そう悪いことでもな  
いじゃない？」

「うん……」

「……って言っても、私はなにもしてないんだけどね。料理とか上  
手くないし。桐条先輩もそういうことしないし。別に男とか女とか  
言う気はないけどさ、ちょっと複雑ではあるんだよね。……君は料

理とかするの？」

「出来なくはないだろうけど、しよつとは思わないな」

「……まっ、普通はそうだよな。やっぱり」

「やっぱり、夜由良って変わってるなあ……とそう小声でつぶやく岳羽。」

「……結局、岳羽はなにが言いたかったんだろうか。」

「まあ、特に気にすることもないだろう、そう判断してぼくは階段を上がっていった。」

\*

影時間の作戦室にて。

「あー、一応アイツ飯は食ってたんだ」

「うん、本人は外食って言ってたけど……」

「……んー、って言ったってなに食ってるんだか、ヘンなもんばかり食べてたら栄養偏るぞ。つか、今朝もアイツ飯抜いてるんだろ？ 教室でなんか食べてた？」

「いや特に。って、彼だって別に子供じゃないんだからさ、そんな心配しなくても」

「別に心配はしてねえよ。ただなんかあったら困るだろうが」

「……それを心配って言うんじゃないかな」

「俺は岳羽と会話を交わしながら、モニターを見る。」

「特に今日も変化はなさそうだ。」

「まっ、この分なら問題なさそうだな」

「まあね、って言うか問題起きたら一大事だけど」

「……もう少ししたら、真田先輩と合流しに行くかな。特にやることもないんだし」

俺の言葉に桐条先輩が反応した。

「夜由良、そつちの方の調子はどうなんだ？」

「全然ダメですね、まったく進展なし。反応はするけど発動はしません、みたいなの？」

「……君に力があることは間違いなんだがな」

「ええ、一応、俺も2回は確実に出せているわけですからね。コツさえ掴めればなあ……」

「まあ、そう焦ることはないさ、ゆっくりやればいい。……焦って『何か』が起きるよりは、な」

……何か、ね。

まるで『何か』が既に起きてしまった、そんな経験があるような感じだな。

作戦室の扉を開けて、誰かが入ってきた。

「どうだい、様子は？」

もちろん、それは我らがアゴヒゲ眼鏡。幾月 修司だった。

俺は彼の問いかけに答えない、まったくもって答える気などない。

「……昨夜と同じです」

桐条先輩が律儀に報告した。

先輩はそうやらそこそこ、理事長を尊敬しているらしかった。

桐条先輩は嫌いじゃないが、と言っかわりと好きだけど、特に笑



ったときの表情とかすごく頭がいい癖に無知なところが好きだけど……正直、まったく持って俺とは性格が合わないな、とそう思う。人間的に合わない、それも根本的な部分だ。

「フムフム……やはり興味深いね、『彼』は」

理事長は新しい材料を検分するコックのように、モニターの向こうにいる彼を見る。

「たとえ影時間の適性があっても、初めはもつと不安定になるものだ。記憶が消えたり混乱したりね。……今までの誰とも違う、実に例外的なケースだよ」

ええ、そうですね。俺なんか未だに不安定で、記憶が飛んだり、真夜中に夢遊病であるかのようにふらついているみたいですしね。でも、そんなことは口に出さない。

出せば、次の観察対象は自分である可能性も出てくる。

俺は自分がそう言う目に遭いたくないから、彼がそんな扱いを受けてもそれが中止になる程には抵抗しない。

……そんな義理は俺にはない。

「でも、なんか……これじゃモルモットみたい」

岳羽がそう罪悪感溢れる表情で言う。

俺だって、そうだ。出来るならこんな馬鹿みたいなことに参加したくない。

「そう言ってくれるな。彼は、クラスメイトだそうじゃないか」

理事長はそう言って微笑む。

それだけを見れば、そこそこの年齢にいった独身女性ならコロツと騙されてしまいそうだ。

どうも、俺はこの人が胡散臭く見える。ぶっちゃけ結婚詐欺師っぽい。

「君だって同学年の仲間がもう一人出来れば心強いだろ？ それも同じクラスならなおさらだ。……我々には、どうしても力が必要なんだよ」

「それは、分かってますけど……」

と、突然作戦室に鳴り響く電子音。

これは確か……外からの緊急呼び出し音だ。

「こちら作戦室だ」

すぐに応答する桐条先輩。

「……明彦か？ どうした？」

「凄いヤツを見つけたっ！ これまで、見たこともないヤツだ！」

……内容から察するにとんでもない化け物が見つかったようで。結構やばい状況だと思っただけど、なぜか向こうからの音声がよく興奮しているように……さらに言えば、かなり嬉しそうに聞こえるんですが、気のせいですかね？

「ただ、あいにく追われててな……」

「なにはしゃいどるんだ、筋肉馬鹿っ！」

はっ、つい、素で突っ込んでしまった。

「もうすぐそっちに着くから、一応、知らせておく」

幸い、向こうに声は届いていないらしく、さらに報告が続けざまに入った。

って、おい。そうなると必然的に……。

「それ……ヤツらが、ここに来るって事ですか!？」

驚いて叫ぶように言う岳羽、ですよね、そうなるよね。

状況を把握した桐条先輩が檄を飛ばすかのように言い放つ。

「理事長っ！ 今日の監視はひとまずここまで。我々は、応戦の準備をします！」

「……た、頼んだぞ！」

頼りにならない顧問だ、と冷やかな目で見ておく。

つか、我々は、ね。まあ、そうなるよね。

俺は桐条先輩に続いて、ロビーへと向かった。

「クッ……」

扉を背もたれにして立つ、真田先輩。

右手で左の脇腹を押さえるようにして、佇んでいる。

桐条先輩が真っ先に駆け寄る。

「明彦っ！」

「大丈夫だ……それより、凄いのが来るぞ。見たら、きっと驚く」

不敵に目を輝かせて言う、真田先輩。

「面白がってる場合か！」

ホントにな。もし俺がこの筋肉はかと同学年だったら、二度とそんな顔で笑えなくなるまで折檻してやるところだ。

「真田君、『ヤツら』なのか!？」

「はい、ただ普通のヤツでは……」

真田先輩がそう答えた瞬間。

建物全体が 衝撃共に揺れた。

小さく悲鳴をあげる岳羽。

「なにこの揺れ……冗談でしょ!？」

「……どんだけやばい化け物なんだよ」

正直、勝ち目があるかどうかわからない。

真田先輩だつて逃げることにしか出来ないような相手だ。

「理事長は、作戦室へ！ 夜由良、岳羽。君達は2階に居る彼を起こして、裏から逃がすんだ！」

桐条先輩が指示を飛ばす。

「えっ……先輩達は!？」

戸惑うように問い返す、岳羽。

……わかった、と素直に大急ぎでダッシュしていく足手まといあしづまといととても対照的です。

「ここでなんとかしても食い止める。明彦、連れてきたのはお前だ。責任は取ってもらうぞ」

そう真田先輩に向かって桐条先輩は言った。  
不服そうに言い返す、真田先輩。

「ヤツらの方が勝手について来たんだ！ まったく。……何をしてくる！ お前らは早く行け！」  
「……いやだなあ、真田先輩、桐条先輩。俺をのけ者にする気ですか？」

俺は二人にやにやししながら、その横に立つ。

「俺も残りますよ」

「君はっ！ ……遊びじゃないんだぞ！」

「わかっていきます。だからここで確実にヤツらを倒し、俺達は生き延びなければならぬ。真田先輩がナンパに成功してきた以上、もうこの位置は敵にバレた訳でしょう」

別にナンパしてきた訳じゃ……とつぶやく筋肉は無視する。

「もう逃げ場はないんですよ、全員がここから脱出して安全を確保するなんて訳にはいきません。ここは俺達の本拠地ですからね、ここで逃れたにしても次の影時間でまた襲われる。……どちらにしろ、戦うことは避けられない。」

それなら岳羽達を逃がすために敵を惹きつけるにしろ、今ここで倒すにしろ戦力は少しでも必要でしょう？」

「だが、しかしっ！？ 君の仮面は戦闘向けじゃない上に、君はそれを使いこなせてすらいないっ」

「それでも戦わずに死ぬよりマシですっ！ それくらいなら、戦っ

て勝利の先に生を掴むことに全力を尽くします！」

おそらく、俺一人なら逃げられるのだ。

俺の仮面ちからは戦闘用ではない。俺は確かに未だ能力を使いこなせていない、がそれは戦闘に向けた力をろくに発揮出来ていないと言う意味だ。

それ以外の意味でなら、俺は十分すぎる程に力を使いこなしている。

俺はたった一人のなら、容易にここから抜け出せる。それも誰にも気付かれることなく。

そのことに……桐条先輩は気付いている。

「いいじゃないか、美鶴」

「明彦っ！」

「もう問答をしている時間はない、これ以上言い争うのは時間の無駄だ。一度覚悟を決めたヤツを説得するの簡単じゃないからな。

……覚悟は出来てるんだろ、夜由良」

俺は頷く。

そのまま岳羽に俺は向きなおった。

「岳羽、悪いけど一人で行ってくれ。安心しろ、ここは絶対に通さない。……絶対だ」

「わ、分かった」

「なら行けっ！早くしないと奴が危険だっ！」

何かを振り切るかのように、急いで走り去る岳羽を見送る。

俺は、その姿が見えなくなったのを確認して、ふう、と一息吐いた。

桐条先輩から来る痛い視線。

「また勝手なことを……」

「すみません、でも俺達2年だっていつかは戦わなくちゃならないんです。それが今だっていいじゃないですか。……特に俺はもう2回も実戦を経験してるんですから」

「それとこれとは話が別だ」

こりゃ相当怒ってるな、桐条先輩。

でも、そんなに怒ることかな。ま、確かに指示を無視してるけどさ。

俺が心の中でぼやいてると、真田先輩が真剣な表情で扉に向かい、拳を構えた。

「おしゃべりはそこまでだな……来るぞ！」

俺は隠し持っていたナイフを引き抜いた、化け物と戦うには心もとない武器。ヤツらには護身用にすらならない、それを。

\*

ぼくはその衝撃で目を覚ました。

なんだ、今の揺れは？

……もしかして夢なのか？

一瞬、様子を見に行こうか悩む、が。

ぼくは寝なおすことに決めた。

たぶん、地震かなんかだろう。別に違ってても……どうでもいい。

そう思って、布団の中でだらだら過ごしていたらすぐに眠気が襲ってきた。

ああ、この感じならよく眠れそうだ……。  
だんだん意識が遠く……。

「起きて！」

え？

突然、扉の向こうから聴こえた声に驚く。

けど似たようなことがあったためにその声の主が岳羽だ、と即判断出来た。

なんで起こすかな……。よし、無視して寝直そう。

「ゴメン、勝手に入るよっ！」

は？

ガチャガチャと音がして、最後に小さく開錠音がした。  
堂々と部屋に入ってくる侵入者、もとい、岳羽。

「悪いけど、説明してるヒマないの。今すぐ、ここから出るから！」

「いや、説明もなにも、今鍵……」

「とにかく急いでるの！一階の裏口から外に出るよっ！」

無視ですか、そうですか。

……無視したばくに対する嫌がらせか？

しぶしぶぼくはそのまま起き上がり歩き出す。

着替えてる暇は……。ま、ないんだろうね。やっぱり。

「早く、走って！じゃ、一気に行くよ！」

向かうのは一階……。ぼく達は階段を駆け下りる。



「よし、ここまで来れば……」

裏口の前まで到着したその時、電子音が鳴り響いた。携帯のようなものを岳羽が耳に当てる。漏れて聴こえるのは、桐条先輩の声のようだ。

「岳羽、聞こえるか!?!」

「ハ、ハイッ! 聞こえますっ!」

「気をつける! 敵は一体じゃないみたいだ! こことは別に本体がいる!」

「マジですか!?!」

そう岳羽が返答した瞬間に、裏口の扉が鈍く叩きつけるような音とともに揺れる。

「うわっ!?! ひ、ひとまず、退却!?!」

どうやら想像以上にぼくは、妙なことに巻き込まれてるらしいかった。

\*

「真田先輩、間違いないんですね?」

「ああ、こいつは俺を追ってきたヤツとは別物だ!」

目の前にいるのは、何本もの腕が生えた黒い塊。その手には切っ先が鋭く光る剣が握られており、その腕のうち一本だけが顔の描かれた薄っぺらい青い仮面を、親指と人差し指でつまむ様にして持っていた。

その仮面の表情をまるで俺達に見せようとするかのように、順に

その表面を向けていく。

「だが、姿かたちはよく似ている。おそらくヤツの手下かなにかだろっ」

「なら本体は……どれだけでかいですか」

そう、その手下であるその化け物だけでもロビーを埋め尽くすよ  
うな大きさなのだ。

たくさんの腕で這うようにして、すこしづつにじり寄ってくる化  
け物。

その間にも、その手に持った一枚の仮面をあくまで俺達に向かい  
正面に合せて来る。

これはつまり……。

桐条先輩が冷静に口を開く。

「どうやら仮面あで我々を視認しているようだな」

「ふん、あれは仮面ではなくれつきとした顔と言っわけだ」

そう真田先輩が言った時、化け物が剣を突き刺すべく腕を伸ばし  
てきた。

伸びてきた腕は3本、1、2と真田先輩はそれを紙一重で避け、  
一気に相手へと接近していく。最後に続いた3本目の腕……避け様  
のないと思われたそれを、なんとアップパーで剣カットしたごと防いだ。

……おいおい、なんだその反射神経。

移動した勢いを殺さず、そのまま流れるように化け物の身体に左  
を打ち込む。

「はぁぁあぁっ！」

ねじ込む様に放たれた拳は、それを防ごうとした2本の腕ごと化け物を貫いた。

……さすがだな、戦闘用ペルソナであるだけでなく実戦経験者は格が違うと言っことか。

だが、その一撃を受けても化け物はなお動きを止めない。

……ダメージを受けていないのか？

「明彦っ！」

真田先輩はなぜかそのままうずくまりだした。

それは完全に無防備な状態。

その隙を狙わないはずがない、一気に真田先輩に向け腕が殺到しようとして動き出す。

既に予測していた桐条先輩が、その手に握っていたのは銃の形をした物体。 召喚器。

桐条先輩はその銃口を頭に突きつけ、ためらうことなく化け物を真っ直ぐに見たまま、引き金を引いた。

「行けっ、ペンテシレアッ！」

眩しさを伴わないその光とともに顕現するのは、桐条先輩の仮面ヘルソナ『女帝ペンテシレア』。

その姿はまるで全身を鎧に身を固めた女騎士、しかし王冠と言うその高貴さのシンボルを伴った、剣を掲げ誇り高く戦うことを決めた桐条先輩に相応しいその形。

ペンテシレアはその剣を振りかざし、凍気フツを化け物に向けて放った。

真田先輩に剣が向かった剣が氷結していき、その腕までも凍りつく。

その攻撃によつて、敵が動きを止めたタイミングを計り俺はその背後から唐突に現れた。

現れた場所は宙、化け物の青い仮面……そのすぐ上空。

俺は一気にナイフを振り下ろす。

「終わりだっ！」

吸い込まれるように刃は仮面へと向かい、何かが割れるような音と軽い手ごたえと共に両断した。

俺は床に転がるように着地する。

ちよつと身体が痛いがそれは今後の改善点としておこつ。

振り返ってみれば、蒸発していくかのように、化け物の全身は黒い霧と化し消えていく。

俺は立ち上がりながら、真田先輩の元へ近づいた。

「大丈夫ですか、真田先輩？」

「クッ……ああ。……くそ、ここに来るまでにヤツにやられた部位がここまで痛むとは、な。一撃打つたびに、かなりキツイ……」

「どうせ試しに戦おうとして痛い目みたんでしょ？」

「……………」

先輩は左わき腹を抑えたまま沈黙する。

つて、マジでそうなのかよ。おいおい、いいのかそんなんで。

「明彦、お前は下がれ。その状態では満足に戦えまい」

「……………仕方がないな」

「グッジョブ、夜由良。ナイスフォローだ」

桐条先輩が緊迫した表情を崩さず、俺に言うとそのまま鞘から剣を引き抜き、前へ出た。

俺はなんとなく緊張感をそがれたような気分でナイフを構えなおります。

「ありがたいですけど、その言葉を受け取るのは後にしましょう」

さつきよりもやや小型の化け物が続々と寮内へと入り込んでくる。状況は悪化する一方だ。

「ちつ。明彦、後方から援護を。夜由良は私が引き付けている間に止めを！」

「わかった」

「わかりました」

真田先輩は頭を下げ、その額に召喚器を突きつける。

引き金を引いた瞬間に現れるのは、比喩でない文字通りの逆三角形の胴体。腕はかなり太くムキムキで、右手はドライバーのようになった金髪長髪の異形。真っ白なだけの目が気持ち悪い。

描写に悪意がないかって？

ないない、そんなもんはない。ただどう考えても、格好良く描写できなかつただけだ。

最もしょうとも思わないが。

その真田先輩の仮面ヘルメットは一番槍とばかりに、電撃シオを放ち、敵に先制する。

ほぼ同時に桐条先輩は剣を振るい、敵の群れに切り込み。

そして、俺は……姿を消した。正確には消えたわけではない、この場にいる全員が俺を極端に認識しなくなったと言っただけだ。

俺の能力、それは同化。アナボリックそして同調。シンクロ

説明するのが難しいのだが、触れているものと同化する、周囲にあるなんらかの対象に同調する。俺には大きくこの二つの能力がある。

この能力を併用することで出来るスキルの一つが、ステーク隠密潜行だ。見せ掛けだけを触れているものに同化させ、周囲の気配に同調することでは完全にその認識の対象からはずれる。

いわば見えているのに、見えていないと言っ状態を作り出す。

そう、俺の仮面は戦闘用ではなく、スニッキング隠密行動に特化した偵察用と  
言うべきものだ。

ベルソナ仮面は、魔法のような特殊スキルだけでなくその身に宿した使い手の基礎能力を底上げすると言っ特性を持つ。

だが俺はその能力上昇が最低レベルのもだった、皆無ではないが、第一線では戦えない。

だからこそ、ここで俺がするのは背後からの急所狙いの一撃。攻撃に転じる時には、意識・意思が気配を消すことではなく、攻撃に向いてしまったために、解けてしまう。

相手の反撃を耐える耐久性は備わっていない俺は、かなり狡猾に慎重に攻撃のタイミングを計らねばならない。

自分が確実に仕留めれて、かつ、安全を確保できる。その確信があつた時のみ、俺はナイフを振るう。最低レベルの攻撃で、的確に殺せると思っただけ。

故に、その一撃は必殺。

最低最小の攻撃は確実に相手を消す。

桐条先輩に群れていく化け物どもを背後から急襲していく。真田先輩の電撃ジオと相まって、フォアードで戦い続ける先輩の援護としては十分に機能した。

だが、それでも。

数の利は圧倒的過ぎる、俺達は僅か数分とたたずに劣勢となった。

「美鶴！ もう電撃ジオは放てん。俺の能力じゃ限界だ！」

真田先輩は電撃ジオと言う遠距離に対応した特殊攻撃と、近接戦の双方を扱えるバランスのいい能力者だ。だが、どちらかと言えば本人の好む近接戦寄りで、電撃ジオなどの特殊攻撃を使用出来る回数はそう多くない。

それに俺が止めをさせる数も限られている、そこまで俺は戦闘に慣れていない。敵が隙を見せたとしても、それを俺が突けるかどうかはまったくの別問題だ。

「……ここまでかつ！」

桐条先輩の剣が跳ね飛ばされる。

他に何もできない俺は、咄嗟に先輩を庇うようにつき飛ばした。変わりに体当たりされ、そのまま化け物に馬乗りになられる。

桐条先輩が前線を維持できなくなったために、真田先輩のところにも敵は接近していた。真田先輩には近接戦をするしか手立てがない。

「夜由良!？」

目の前の化け物が、俺を処刑するために剣を振り上げようとする。俺はその光景を見ていることしか出来ない。

……早かったな、俺の人生の終わり。

特に頭を駆け巡ることもない。

心の残りは、そう、まだ俺は何かを見つけていないと言うことだけ。この言いようのない焦燥感の謎を突きつめていないだけ。

仕方ねえか、俺じゃここまでだ。

最後まで何かをやり遂げるなんて、俺に出来るはずがない。

(本当にそれでいいのか?)

誰だ?

時間の経過が遅くなる。

瞬の字を冠する瞬すはたきすら、ゆったりとしたものに成り下がる。

(我は汝であつて、汝で無き者。汝、我が力を望むか?)

なんだ、何を言っている?

(本当に汝の望みはここで死することか? それが汝の選択か?)

そんなわけねえ、俺は……。

(ならば、我が手を取るがいい。……選択せよ、そして誓うのだ。

例え何が起ころうと汝は汝の思うがままに生き、その選択の結果を



背負つと)

は、馬鹿じゃねえ？ お前、そんなもん。

「ここに来た時から決めてんだよっ！」

いつのまにか俺はその左手に召喚器を握り締め、こめかみへと当たっていた。

当然のように引かれる、引き金。

揃えて、やけに遠くから聞こえた気がする、桐条先輩の声。

「覚悟しろっ、ペンテシレアっ！」

(我が名はバイアグーナ、無貌のものにしてルー＝クトウの魔神である可能性を持つ存在。未だ定まらぬ不定のもの。)

我は汝であり、汝で無き者。覚悟を決めよ、いつかここで生延びたことを後悔せぬように。あるいはその後悔すらも背負つことを

覚悟しろって？ 後悔を背負つことを？

「ごちゃごちゃうるせえよ、そんなもの覚悟しなくても背負つ羽目になんだよ。」

俺は同調する。シンクロ

俺は『女帝ペンテシレア』、誇り高く、死の間際まで護るべき者のために剣を振るうもの。

ペンテシレアから放たれる広範氷結マハブフがロビーを覆いつくす、そして。

\*

今、ぼくと岳羽は屋上いた。

裏口をやぶり、殺到してきているなにかから逃げ出すために。

「フウ……………」

鍵を掛けて一息つく岳羽。

「これでひとまずは、大丈夫かな……………」

「……………ここから出られないけどね」

「大丈夫だよ、先輩が来てくれるから」

また寮の裏側から響いてくる、衝撃音。

……………だんだんそれが上がってくる!?

屋上のふちに掛けられる真っ黒な手。

もう一本、伸びてくる腕には額の位置に?と書かれた青い仮面があつた。

なんだ、あれ?

そんなとぼけた感想は次の瞬間消し飛ぶことになる。

一斉に現れた何十と言うその腕に月明かりを浴びて輝く、凶器（凶器）が握られていたからだ。

「嘘ッ……………!?!?」

岳羽が悲鳴混じりに言う。

「外を昇って来たの……………!?!?」

光を反射しない漆黒に何本もの、細長い腕が生えている。いや、細い腕なんかじゃない、腕が長過ぎるから、距離が離れているから、その巨大な腕が細く見えているだけだ。

「あれがココを襲って来た敵……『シャドウ』よー！」

……シャドウ。それがあの化け物の名前なのか？

「そ……そうだ、戦わなきゃ……。『召喚』……私だって、できるんだから……」

そう言っつて、岳羽は太ももにあるホルスターから銃器のようなものを引き抜く。

それを両手で持ち、額に当てるも……引き金が引かれることはない。

そんなこととは無関係に接近する『シャドウ』。

岳羽は息を荒くガタガタと身体を震わせて、それでも引き金を引くことは叶わなかった。

「……あ

目の前にそびえる『シャドウ』になす術もなく、その身体は跳ね飛ばされる。

そして、その銃器のようなもの……召喚器はその衝撃によって転がった。

一之瀬 佐為、ぼくの足元に。

ぐらっ……と、ぼくへ向きを変える『シャドウ』。

ぼくは足元の召喚器それを拾う。

使い方は分かっている、なぜかそれがなんであるかも。そして、それがおそらく自分には可能であることも。

迫り来る『シャドウ』をこの目に映し。

ぼくは呟く。

ペルソナと。

(我が名はオルフェウス。我は汝、汝は我なり……)

それは豎琴を持った、どこかぼくに似た面影を持つモノ。

……だった。

突然、それを内側から引き裂くようにして顕れる、禍々しい存在。それはオルフェウスと言う皮を引き破り、この満月の空に出現した。

抑えきれないほどの力の暴走。

死の顕現……闇色の複数の棺を翼とするモノ。

動物の骸のような顔だけが白いそれは、剣を振るい、腕を振るい、噛み砕き、飲み干すようにして。

圧倒的な力を持って、目の前の敵を殲滅せんと襲い掛かった。

\*

作戦室にて。

「何だ、これは……!？」

真田が自覚も為しにそう呟いた。

岳羽達の現在位置と状況を把握するため、確認したモニターに映

ったのは、予想を遥かに超えた事態。

一同は驚愕を隠せずにいた。

あの強力な『シャドウ』と戦うどころか、一方的になぶり攻撃する。これは戦闘ではなくもはや虐殺。

気を失い、作戦室のソファーに寝かせられている夜由良だけがそこに加わらずにいる。

疑問を感じる以前に、目の前に映るものを理解することすら出来ない。

一同は動くことすら出来ずに、ただモニターを見つめ続けることしか出来なかった。

虐殺が終結し、一之瀬 佐為が気を失うまで。

倒れた一之瀬を見て、岳羽が泣き叫ぶまで。

俺と『女顔と天狗』（前書き）

どこまでも好き勝手する夜由良君です。

## 俺と『女顔と天狗』

俺は気が付いたら、白と黒のタイルが敷き詰められた空間にいた。明かりは何一つないのに、全く持つて見ることに困らない。

こんな場所他にありえないはずなのに、どこか見覚えのある気がする。

気が付くと俺は誰かを捜そうとしているかのように、辺りを見渡していた。

……なんだ？

自分の行動に疑問を抱くも、すぐにそれを振り払った。

たぶん、これは夢だ。

だから、なにがあっても不思議じゃない。自分の行動がおかしくても問題はない。

ふん、見れば見る程、奇妙な場所だ。もとい、奇妙な夢だ。

支える天井がないのに、そびえる柱。

端の方は暗転して、床がないようにすら見える。

……もしかして床自体が浮いてるのか？

ふと、部屋の真ん中に青い色の扉が現れていた。

さっきまでこんな扉あったか？

まあ、突然生えてきたんだとしてもなんら不思議はないんだが、もうなんでもありだよな夢って。俺の想像力が続く限り。

……いや、それにしても殺風景つうか、もしかして俺の頭の中身ってこんななのか？

想像力が続く限りと言いつつ、俺の想像力って意外と貧困なのかもしれない。美人のひとりふたり転がってることもなさそうだし、

札束の入ったバスもないし？

いや、その発想がもうありきたりか？

なるほど、俺の頭の中身ってこんなもんだな、たぶん。納得。

とくにすることもないので、俺はその青い扉を開ける。

って言うか、赤い扉とか黄色い扉とか選択肢が欲しいね。そして迷わず赤い扉選ぶから。

俺は扉を開けて中へと踏み込む。

その瞬間、俺は息をのんだ。

それは青い、どこまでもなにもかもが青い部屋。

いや、部屋……と言うのは正しくない、これは巨大なエレベーターだ。

どこまでも果てしなく上昇を続ける、エレベーター。

そこにいた、礼服を身に纏う……一人の。

天狗。

とてつもなく鼻が長い、はげたおっさん。白髪ついでが後頭部だけ生え  
たおっさん。

目がスゲえ充血して、眉毛がにろぎよろつとなった。天狗みた  
いなおっさん。

なぜか、耳の先がとんがってる色白のおっさん。

それが部屋の中央にある小さな青いテーブルの向こう側に、椅子  
に掛けて座っていた。

……ああ、あれか。コレ、作り物か。

「よく出来てんなあ、コレ」

「おやおや、これは……初めまして、ですな。お客人。私の名は…

……」



「おお……って、しゃべった、だと!？」

まさか、こいつは……。

俺は一瞬で目の前のその存在の正体に気付く。

「アンタ、本物の天狗か？ 天狗なのか？ って言うか天狗だな!？」

「お客……落ち着いて下さい。私わたくしは天狗などではございません」  
「おお、またしゃべった!？ つか、鼻なげえな、本当に本物かコレ!？」

「ひっ……引つ張るのをお止め下さい! 鼻が……鼻がもげっ、もげる! もげてしまますっ!」

「うわっ、温かい! すげー、本物だ。俺、天狗初めてみたよ。いるんだなっ、天狗って。『いたんだ、天狗はホントにいたんだっ!』」

「……みたいなの？」

「だから、私は天狗などでは……」

「ん……でも、そういうコレ夢なんだっけ? うええ、驚いて損したわ。感動しなきゃよかったな、くそー」

「……きいとりませんな?」

俺は天狗への興味が一気に尽きた。

冷静になって見回してみる。

天狗の横に立つ、部屋に合わせたかのような青い服を来たうら若い美女。サラサラの白髪はくはつショートカットが絹のように輝く。

……は気になるけど、ちょっとさっき興奮した姿を見せた手前、気恥ずかしくて話しかけられんからいいとして。

もう一人、ここには人間がいた。

天狗と相對して座る、男。

モニターでだけ、見覚えがある。

片目を髪で覆い隠し、日常的に感情を廃しているだろうと予測できる、笑顔で刻まれたた皺がない顔。

中性的というよりは、すこし髪形をいじれば十分に女として通じるその作り。

ぶっっちゃけ、女顔。

「一之瀬 佐為か？」

「……君は？」

「あ、悪い。俺は夜由良 優、アンタと同じ分寮に住んでる者だ」

「ああ、名前は聞いたかな。……結構、変わってるらしいね？」

「天狗と知り合いつばいお前ほどじゃないな」

天狗が興味深そうに、鼻をさする。

そんなに痛かったかな？

「ほう、一之瀬様とのお知り合いですか。これは奇縁だ、それも本来はありえぬはずの……」

「俺は知り合いつて訳じゃない、直接あったのはコレが初めてだ。

いや、直接じゃないな、夢だし。って言うか、夢は直接会ったカウントにしているのか？」

俺は女顔いぢのせに問いかける。

「……さあ？ ぼくは別にいいような気もするけど？」

「つか、夢なんだから現実には会ってないだろ」

「お互いに覚えてたらいいんじゃない？」

「たかが夢だぜ？ そんなファンタジー要素ないだろ。つか、これどっちの夢だ。女顔いぢのせの夢なのか？」

俺に天狗なんて想像する余地ないし……ちなみにそう言いつつも、俺は自分の夢だと思っただがどう思う？」

「……ぼくはそれでいいよ」

「うわ、どうしてもよさそうっ!？」

「いや、まあ。って言うか、どうでもいいし」

「……うん、まあ、俺も実際どうでもいいな」

とりあえず、わけのわからない納得をする。

わけわかんないこと言ってる自覚はあるけど、いいじゃん。夢なんだし。

そんな俺を見て、天狗がつぶやく。

「どうやら、かなりマイペースなお客人のようすな」

「うむ、確かに俺は自分のペースでしか生きられないB型人間だが？」

それがなにか問題でも？

「お二人が自己紹介を終えた所で、私もお名乗り申し上げましょう」

「へえ、天狗にも名前があるんだな」

「私はイゴール、天狗などではなくこのベルベットルームの主でございます」

「ああ、よろしく天狗<sup>イゴール</sup>」

「……なぜですか、あまり扱いが変わっていないような気がするのですが」

「不満か？ ……だが、天狗と言うのは本来『いなかった』妖怪の一種だ、日本の各地で成立したんで姿かたちが土地ごとに違うあやふやなもんだろ。人を魔道に導くともされる癖に、義経こと、牛若丸を導いたともされてる。」

意外にアンタにぴったりのイメージじゃねえの？ どうしてもと  
言うのなら、キノピオでもいいけどな」

なんとなく目の前イコールいる天狗にそう言ってみる。  
ふむ、やっぱり合ってると思うけどなあ。

「……なるほど、あなたは物事の核心が見えておられる。さすがは『隠者』のアルカナを保有しているだけのことはありますな」  
「隠者？」

「丁度よいですな、これからすこし説明いたしましょう」

天狗は俺達に向き直る。

「いや、その前に俺の椅子は？」

「……今、用意させましょう。エリザベス」

天狗の後ろに立つ、美人が頷いて俺へ向かってくる。  
何時の間にか、その両手で掴んでいるのは椅子。  
さすが夢、ご都合主義。

「……どうも、美人さん」

「エリザベスでございます、夜由良様」

「ああ。ありがとう、美人さん」  
エリザベス

うわ、こんな美人人間近で見ちゃったよ。

綺麗な髪だな、触りたい。って言うか、撫でたい！

「では、お話いたしましたでしょうか」

あ、天狗。……まだいたんだ？

「まず、そうですね。どこから始めるべきか……そう、貴方は力を覚醒したショックで気を失われたのです」

「覚醒？」

女顔いちのせが天狗に問いかける。  
なるほど、流れはわかったぞ。

「つまり、この女顔も仮面ペルソナに目覚めたんだな、天狗？」

「初対面の相手を女顔呼ばわりって……」

そう一之瀬に突っ込まれる。

やべ、つい口に出しちゃったか。

……まあ、いいよね。夢だし。

「……さすがに夜由良様は話が早いですが、さよう。一之瀬様は仮面ペルソナという力に目覚めたのでございます」

「ペルソナ……確かにぼくはあの時、そう呟いた」

「一之瀬様も夜由良様は実は既に気づいておられるのでしょうか。ペルソナとは、もう一つの貴方方自身であり、その本質でもあり影」

確かに、桐条先輩も筋肉きんとうもあのペルソナはその本質であるように思う。

あれはそう、その魂の形を具現化しているかのような存在。

「もつとも夜由良様は不完全ながらも、既にその力を扱っておられた様子ですが」

「……ああ、先輩方みたいにペルソナを完璧に召喚は出来てなかったけどな」

「ペルソナとは、貴方方が貴方方の外側の物事と向き合った時、表側に出てくる『人格』……様々な困難に立ち向かって行く為の、『仮面の鎧』と言ってもいいでしょう」

「その理屈でいくと外側にあるものに向き合う数の分だけ、被るべ

き仮面があるように聞こえるが？」

「ふうむ、つくづく貴方様はおもしろい方ですな」

質問には答えようよ、天狗。なに、はぐらかしてんの？

って言うか、ここは客人にお茶も出さんのかね。駄目だなあ、口には出さんけど。

つか、なんだろう。似たような話を誰かとしたような気がする。

「話を続けましょう、次にこのベルベツトルームはなんらかの形で契約をなされた方が訪れる場所なのです」

「……部屋って言うか、エレベーターだよな」

「この部屋の形は契約をなさった一之瀬様のお心や、その契約の根底に関わる部分によって形作られております」

「こいつの？」

俺は思わず女顔を見る。

その顔に特に感情は見られない。

……巷で話題の無気力症みたいなヤツだな、あだ名を無気力症にするぞ、この野郎。

天狗は一枚のカードを取り出す。

「これがその契約ですな」

そのカードにはこう書かれていた。

『我、自ら選び取りし、いかなる結末も受け入れん』

その下にはきっちり、綺麗な字で一之瀬佐為と書かれている。

「へえ、きっちりした字を書くんだな、じゃなくて。よくこんな怪

しいもんに署名したな、お前？」

「ああ、確かに。自分でもどうかしてたと思うよ、正直」

「おかげで変な夢を見る羽目になったわけだ、簡単に勢いでサインしたら損するぞ？」

「……今度から気を付けるよ」

本当か、お前すごく流れに身を任せるタイプに見えるんだが？

それも物臭なんてレベルじゃなさそうだぞ。たまたまそういう状況だったから、っていう理由で女の子からの告白OKしたり、戦場に身を投じたり、死んだり人殺したりしそうだ。

「なんだか、さっきからすごく失礼だね」

「気にすんな、夢だし。俺は気にせんから」

「……そついう問題かな？」

明日には全部忘れてるって、大丈夫大丈夫。

「そついう夜由良様もなんらかの契約をかわしていらっしやるはずですよ」

「俺は署名なんてせんよ、面倒な」

「契約は署名とは限りません、口頭でした約束や誓い……いや、口にする必要すらありませんな。必ずや、しておるはずですよ」

「はあ？」

そんなややこしいことなんてしないはずだけどな、まあいいさ。

「この部屋は必ずやなんらかの形で貴方方の力になることでしょう。もちろん、ペルソナに関して、でございますが」

「そつそう、それでさ。俺が『隠者』ってのは？」

「ペルソナと貴方方が戦った『シャドウ』にはそれぞれ、アルカナ

「よって分類されております」

「アルカナで隠者で分類、……タロットカードのか？」

「はい。一之瀬様が宿した力は『愚者』。数字を持たぬワイルドカードであり、その力はなんにでもなれるが故になにも属さぬ特別なもの。対して、夜由良様は『隠者』である『バイアグーナ』。さらに、その力は『不定』であり『混沌』に属しております」

その言葉を聞いた瞬間、淡い光とともに俺の手に現れるのは一枚のカード。

？の数字が冠され、その下には大文字で『THE HERMIT』の記載されている。

そして、描かれているのは真っ黒な身体を持つ、性別もなににもかもが不明なモノ。被っている白い仮面から、その正体がまるで読み取れない。

なぜなら、その仮面には凹凸がまったくないからだ。表情も顔の作りもわからない、まるで顔が存在しないかのように。

「こりゃ、俺のペルソナか。気に入らないデザインだが、『顔なし』の『バイアグーナ』ってどこかね？」

「さすがは夜由良様、慧眼ですな」

「一之瀬のと……俺の力はどう違うんだ？」

『不定』と『無属』。『混沌』と『万有』。

一之瀬は特別であって、俺はそうでない。この両者はなにが違う？

「それはご自身で確かめられるがよろしいでしょう」

あ、俺、コイツ嫌いだ。

いや、たぶん天狗も俺のこと嫌いなんじゃないかと思う。まあ、こんだけ天狗呼ばわりされればな、普通は嫌いになるわ。



天狗はそのまま話を続ける。

「そして、もう一つ。貴方方の持つ『ペルソナ能力』とは『心』を御する力……『心』とは『絆』によって満ちるものです」「絆だつて?」「

計らずとも、女顔と俺の声が揃う。

無理無理、そんな俺の柄じゃねえもん。

俺達は無意識に顔を見合わせた、ああ、と気が付く。この時、俺達の心は間違いなく一つだったと。

「さよう、他者と関わり、絆を育み、貴方だけの『コミュニティ』を築かれるが宜しい。『絆』こそが『ペルソナ能力』を伸ばしていくのです」「へえ……なんかありがちな、流れだな。さすが夢、んじゃ俺帰るわ」

明らかに俺向き出ない話が来たので、俺は帰ることにする。帰り方? ……俺は知らんよ、つか帰る気があるならどうにでもなるわ。

俺が立ち上がると、俺の服のすそをつかむ女顔。

「……なんだよ?」

「ぼくも帰る」

「あ? いいんじゃないね、別に。好きにしたら? な、天狗」

俺の言葉に頷く、天狗。

「そうですね。私の話もう終わりですし、それがよいでしょう。これ以上のお引き止めはむしろ負担になりますからな。ただ、覚え

ておいて下さい、心とは絆によって育まれるのだと」

「要するに強いペルソナになりたきゃ、友達作れでOK？」

「ああ、夜由良様は話が早くて助かりますな」

……あ、いいんだ。そんな認識で。

「んじゃ、おい。行くぞ、女顔いぢのせ」

「ああ、わかったよ。……夜由良」

俺は一之瀬を連れてベルベットルームの扉を開く。

一步を踏み出した瞬間に、背中に声が掛けられた。

「ああ、そうそう。貴方方のいらっしやる現実では、多少の時間が流れたようすな」

そりゃどうも。

俺は振り返りもせず、軽く手を振って部屋を後にする。

なんとなく、一之瀬は後ろを振り返ろうとしたような、そんな心配がした。

「今度、お目にかかる時には、自らここを訪れになることでしょう。ではその時まで、ごきげんよう」

4月19日 火曜日 く『成り行き任せの選択』(前書き)

まずは一之瀬君サイドで。

彼からの視点はまた違ったものがあります。

4月19日 火曜日 『成り行き任せの選択』

4月19日(日)

少しずつ意識がはっきりしてくる。

見えてくるのは白い天井。

ここは病院のベッド……だろうか。

なんだか、ずいぶんと眠っていたような気がする。

「……あ、気がついた？」

女の子が目の前にいる。

ええと、彼女は……。

「岳羽さん、だったけ？」

「え、あ、うん。……その、き、気分は……どう？」

「まだ眠い、かな」

ぼくがそう答えると、彼女は安堵したように息をはいた。

「眠いって寝すぎだったば。……でも、良かった……やっと起きたよ。本気で心配したんだから」

「……心配？」

「うん、身体のほうは大丈夫なのに眼を覚まさなくて。お医者さんは過労みたいなものだった」

「へえ。で、今日は何日？」

「え、ああ、19日だよ、だから……」

「なるほど、ぼくは十日間も寝てたんだ。……通りでだるいと思っ

た

「……なんか、本当に冷静だね。うん、これなら大丈夫そうかな」

ぼくは少し身体を動かしてみる。

指、手、足、特に痛みはない。問題はなさそうかな？

ベッドから上半身を起こした、一瞬、視界が暗転しかけるも、問題なし。

「あ、駄目だつて。いきなり無理したら」

「大丈夫、問題ない」

「……もう」

この分なら、すぐにでも動けるだろう。

だいぶ身体はなまってそうだけど。

「あ、あのお」

なんだが、もじもじしながら話しかけてくる岳羽。

「なに？」

「ごめんね。あの時は、何にも出来なくて……」

「あの時？ ……ああ」

あのシャドウとか言う、化け物に襲われたときのことを言っているのか。

「気にしてない、アレは動けるほうが異常なんじゃない？」

「……ん、まあ、そうかもしれないけど。でも驚いた。……すごいね、君の力」

「力、ね」

夜由良とイゴールが言っていた、ペルソナと言う力か。

「でも、正直なにか起こったかっつ言うのはあまり覚えてないんだよ。うつすらとだけで」

「うん、それはそうだよね。あんな状況じゃ……」

「化け物がいたこととかは覚えてるんだけど」

「シャドウね、わたしたちが戦っている敵」

「わたしたち？」

「うん、今度説明できると思う。それと、あなたが使った力。仮面ペルソナのこと。ごめんね、隠してて……」

「……そう」

別に説明しなくてもいいのに。

余計なことに巻き込まないでくれるなら、全くそんなものいらない。  
い。

……嫌でも巻き込まれるんだろうな、いや、もしもあれが全部夢じゃないと言っのなら、必然的にぼくは。

もうこの出来事を中心にいる？

「えっとさ、いきなりでなんだけどさ……私もね……あなたと一緒になんだ」

「本当にいきなりだね。一緒って？」

「あのね、私のお父さん、小さい頃、事故で死んじゃってさ……」

「……ああ、そういうこと」

「うん、それでお母さんとも、距離が空いてて……あなたも……独りなんでしょ？」

「まあ、そうだね」

つまり、彼女はぼくの家族が全員、あの10年前の事故で死んで

いることを言っているのだろう。

でも、ぼくは彼女と違って家族のことなんて覚えていない。それは大きすぎる差だろう、ぼくは過去を引きずりようがない。

一時は親戚をたらい回しにされたけど、そこまでひどい扱いも受けなかった。

とある遠い親戚に引き取られてからは、あちこちを転々としたけど、きちんと面倒も見てもらった。その人だけじゃなく、たくさんその人の友人にまで。

高校にあがってからは、独り暮らしみたいなものだけど。でもそれは自分で望んだことだし、生活に不自由したことはない。

それをぼくは不満に思っていない。だから、ぼくは彼女を理解できない。

「実は私……あなたの身の上、色々、聞いちゃってさ……」

「そっか、気にすることないのに」

「でも、私だけ知ってるのも嫌だし、話さなきゃってずっと思ってた……」

話されても困る。

ようやく、なぜ彼女がこんなにもぼくに構うのか理解出来た。

ぼくは誤解していた、彼女は義務感だけじゃなく……理解をぼくに期待している。

「昔ね、この辺りで大きな爆発事故があったの。父さん死んだの、そのせいらしいけど、詳しい事情、分かってないんだ……」

それはたぶん十年前、のことだろう。

ぼくの家族が死んだのも、同じ日でほとんど同じ場所、つまりこ

の辺りだ。

「父さんが勤めてたの、桐条グループの研究所だったの。だから、ここにいればなにか分かるかもって。学園にいるのも、この前みたいなことしてるのも、そういうワケ」

「そのためにはなら、どんな危険なこともやる。そういうことで桐条先輩の傍にいる、って？」

やっぱり理解できないな、……でも。

「まあ……そうなるかな。でも怖くて。……私も初めてだったんだ、敵と戦うの」

「……すごいね、岳羽さんは」

「えっ？」

「ぼくには出来ないよ、……すごいと思う岳羽さんは」

これは本音だ。

ぼくにはそんなことは不可能だ、そこまですようとなんて思えない。

「でも、私のせいでこんな……」

「これは君のせいじゃない。君は不慣れな中でも、怖い気持ちを抱えながらもぼくを護ろうとしてくれた。結果的にはこうなったけど君が助けに来てくれなかったら、ぼくは死んでたかもしれないよ？」

「……うん」

恐怖を覚えることは責められはしない、恐怖を覚えないことは賞賛されない。

恐怖を抱えて、なお立ち向かえること。それが勇気だ。

それでもなお、護ろうとする姿は賞賛されるべきものだ。



……ぼくはそう教わった。

「すごいね、その人」

「ああ、ぼくもそう思う」

あの人は、すごい。ただそんな単純な言葉でしか表現できない。どんな苦境にあっても、平然と戦う<sup>コウル</sup>ことを宣言する、あの人はぼくには絶対に真似できない生き方をしている。

答えを出さない、と言う答えを出している。見つけず、探し続けると言うことを見つけた、あの人はどこまでも強い。

「でも、ゴメンね……それに起きた早々こんな話。待ってる間も考えちゃってさ、今まで隠してきたし、まずは自分のことから話さなきゃって」

「そりゃ十日もあれば色々考えるよね、長いもん」

「ふふっ、そうだね。……聞いてくれてありがとう。誰かに話したかったんだ、ずっと」

ぼくは君を理解できないけど、その部分に関しては賞賛を送るよ。君はすごい、ぼくには絶対に真似できない生き方だ。

「……じゃあ、そろそろ行くね。目を覚ましたこと、伝えなきゃ」

「そう、それじゃ」

「うん、……じゃね」

あ………そういえば。

「あ、ちよつと待って」

「……なに？」

「あの、夜由良って人はどうなったのかな」

「 ああ、彼は君と同じように倒れて……」

やっぱり。なら、あれは夢じゃなく……。

「一週間前くらいに目を覚ましたよ？」

「……はい？」

\*

4月20日(月)

「おーす、久々じゃん。どした？ 腹でも壊してたか？」

ぼくが翌日、登校すると順平が能天気話しかけて来た。  
桐条先輩によれば、今日の夜色々と話があるとのこと。

……非常に面倒くさい。今から気分が憂鬱だった。

「まあ、そんなとこかな」

「ふうん、まっ、気をつけるよ？ つか、ちょっと聞いてくれよー」

「……朝から本当、元気だね？ そっちこそ、どっか頭的な部分が

……」

「ビョーキじゃねっつもの！」

うん、最後まで言わなくても分かっているところを見ると自覚症  
状があるらしい。

しかし、自分が病気であることは認められない、なるほどこれは  
深刻ですね。なんて。

「はっ、いかんいかん！ オレはもう昨日までのオレとは違うんだ！ くっ、ごめんな、オレばっかり……」

「なんで、そんな可哀想なものを見る目でぼくを見てるわけ？」

「まあ、オマエも元気出せよ。それでも、オマエとオレは友達だからさ、ウンウン」

駄目だ、こいつ。

早く誰かがどうにかしないと、駄目だ。

大幅な外科手術が必要で、具体的には脳に。

「朝から元気だねー、ったく……向こうからでも聞こえたよ？」

ぼく達に声をかけてきたのは、岳羽だった。

「あれ？ お二人さん、同じ寮なのに別出勤なの？」

「もう、そのネタはいいから。……一之瀬君、身体大丈夫？」

「うん、特に問題なし、かな」

「そう？ 起きていきなりだけど、今日ね、理事長からあなたに話があるらしいの。放課後、寮の4階に来て欲しいんだ」

「……わかった」

……例の件だろう、たぶん。

ちら、と見たような顔が通り過ぎていく。

気の抜けたような顔をしたストレートの黒髪の男子。

ポケットとしてそうで、密かにその目は辺りを満遍なく見渡している。

彼は、夜由良……優？

その時、目が合った。  
僅かに持ち上がる、口の端。  
そのまま、声を掛け合うこともなく通り過ぎていく。  
岳羽も順平も彼に気付くようなそぶりはなかった。

\*

放課後、分寮。4階の部屋。

入ってみると、そこにあるのはかなり値段の高そうな家具。

豪華なソファーにきちんとデザイナーによって、造形されたようなテーブル。

ここは……？

座っているのは、岳羽と桐条先輩。理事長、それに見知らぬ男子生徒。

そして、夜由良 優。

「お、来たか」

理事長が声を上げた。

「身体のほうは大丈夫そうで何よりだ、安心したよ」

「ええ、おかげさまで」

まあ、何もしてもらってないんだけど。

……ああ、入院費は出してもらったか。

「退院早々ここへ呼んだのは、他でもない。君に、話さなきゃいけない事があったね。まあ、かけて」

「ここは素直に座っておく。」

「あ、そうそう名前は聞いてるかな。まず、彼が真田くんだ。君の  
1つ先輩だね」

「よろしくな」

彼は知っている、全国でも有名な人物。  
高校ボクシングチャンプ、真田 明彦。

「そして、もう一人が君と同学年の……」

理事長の言葉を遮るようにして、彼は口を開く。

「はじめまして、俺は夜由良優。アンタとは同学年で生徒会なんぞ  
をしてる者だ」

はじめまして、の六文字にかなり強めのアクセントをつけて、彼  
は言う。

その目にはどこかなにかを楽しんでいるような、そんな雰囲気がある。

だけどなぜか、それ以上の感情を読ませない。

「……はじめまして、ぼくは一之瀬 佐為だ」

ぼくも同じように、はじめましてにアクセントを置いて返す。  
間違いない、アレは夢じゃなかったみたいだ。

「ああ、よく知ってるよ。こっちはね。うん、同学年のヤ・ユ・ラ・  
ユ・ウだ。……言いにくだらう？ おかげで自己紹介は苦手だよ。  
油断すると噛みかねん……」

なんだか、どこかで聞いたことのある自己紹介だ。

理事長が「いや、それは僕の……」と言っているが、誰も反応しない。と言うか、ものすごく夜由良が楽しそうに見えるんだけど気のせいかな？

気を取り直して、理事長が向き直る。

「……まあいいさ、自己紹介も終わったみたいだし？ 話していいかい？」

なんだろう、どこか哀愁が漂っている気がする。

「いきなりでアレなんだけど。実は、一日は24時間じゃない……なんて言ったら、君は信じるかい？」

「……それはいったいなんの話ですか」

「フフ、まあそうだろうな……」

ぼくがそう言うと、桐条先輩が笑った。

そこになぜか口を出す夜由良。

「ああ、一応言っておくとあれだぜー之瀬。日没までの時間に微妙にズレがあって、閏年が出来るとかそういう話じゃないぜ？」

「……そんなのいちいち誰も考えないよ」

「マジかっ!？」

そう驚いてみせる夜由良。

どこまで本気なのか、まったくわからない。

一見すると、ただの変な人なんだけど。

不思議そうな顔で、理事長が尋ねる。

「君達はアレかな、実はもう結構打ち解けているのかな？」

「いやいや、コレが実質初対面ですから。少なくともカウント上は」

「……カウント？」

「まあ、会つのは実際初ですよ。その前に色々と知ってるだけで」

色々ね、色んな言い方があるんだな世の中には。

そんな二人をおいて、桐条先輩は言葉を続ける。

「言われても君は理解できないだろう、しかし君はもう既にそれを何度も体験してるはずなんだ」

「なにをです」

「……初めてここに来た夜のことを覚えているか？」

「……ええ」

「あの日、君は色々不思議な体験をした筈だ。消える街明かり、止まってしまう機械、街に立ち並ぶ棺のようなオブジェ……」

忘れようもない、あの光景は。

現実感のない、異質な世界。

「薄々は感じたんじゃないか？ 自分が『普通とは違う時間』をくぐったことを。あれは『影時間』。1日と1日の狭間にある『隠された時間』だ」

「隠された、ですか」

理事長が頷く。

「そう、まあ隠されたと言うより、『知りようのないもの』ってとこかな。普通の人間にはね、でも影時間は間違いなくある。毎晩、零時になると絶対に訪れるんだよ。もちろん、今夜も。そしてこの

先もね」

真田先輩がその言葉に補足を連ねる。

「普通の人間は棺おけに入ってお休みつて訳だ、だから感じられない。けど、影時間の面白そうなところは、見た目なんかじゃない」

面白い、と言う科白を言った瞬間、夜由良と桐条先輩が嫌そうな顔をした。

特に夜由良からは若干、押さえ込めないほどの殺意すら感じられるような？

「オマエも見ただろ？……怪物だ。俺達はこれをシャドウと呼ぶ。シャドウは影時間に現れて、そこにいる生身の人間を襲う。

だから、俺達でシャドウを倒す。どうだ……面白いと思わないか？」

「明彦！ どうしてお前はいつも……痛い目をみたばかりだろ」

「確かに。ボクサーが殴ることに支障来たしてる時点でちよつと考えましようよ？ 肋骨先輩？」

その真田先輩に対し、桐条先輩と夜由良から注意が入る。

そして、不自然なくらいに笑顔なのに、どこか名前を呼ぶ時に刺々しさが入る夜由良。

……そしてその科白での真田先輩の落ち込みようと言ったら、珍しいことにぼくが真田先輩を気の毒に思ってしまったほどだ。

「ま……まあ、いいじゃないか。ちゃんと戦ってくれてるワケだし？」

「ちゃんと戦えなくなったから、言ってんですよ。駄眼鏡？」

「……そうだね」



素直に頷く理事長。

心なしか、すごく小さく見える。

「……とにかく結論を言おう。我々は特別課外活動部。表向きは部活だが、実際はシャドウを倒すための選ばれた集団なんだ。僕が顧問をし、そして……」

「私が部長をしている」

桐条先輩が力強く言った。

そこからわかるのは桐条先輩が自らの意思で活動に参加している事実。

「シャドウは精神を喰らう、襲われればたちまち生きた屍だ。このところ騒がれている事件は殆どがヤツらの仕業だろう」

「ああ、事件つてのは……無気力症とかだ。あれがそうじゃないか、って俺らは睨んでる」

桐条先輩の言葉を繋ぐ、夜由良。

桐条先輩にはあまり……と言うか、それなりに好意的に見える夜由良。少なくとも表面上は平然と話している。

一年と言うことでか、萎縮しているように見える岳羽とはかなり様子が違う。

「話はわかりましたよ、実際にこの目で見ましたしね。警察とかそういうものが役に立たないこともわかります。

でも、高校生にしか過ぎないほくらがそんな相手と戦えるんですか?」

「うん、実はだね。ごく稀にだけ影時間に適応できる人間がいる。そういう人間はシャドウと戦える力を覚醒できる可能性がある。そ

れが仮面ヘルソナだよ。君が使って見せたあの、力さ」

ああ、そう言われることはわかっていた。

ぼくが戦う力があるのはわかっているさ。でも、ぼくが言いたいの  
はそうじゃなくて、なぜぼくらが戦わなくちゃならないか、だ。

「シャドウはペルソナ使いにしか倒せない、つまりヤツらと戦える  
のは君達だけなんだ」

「他の、大人のペルソナ使いとかは？」

「……残念ながらないね、今のところ、そういう人間は一人も確  
認出来ていないよ。もしかしたら、力の発現には年齢が関係するの  
かもしれないね。まあ、確証はないんだけどね」

「……状況はわかりました」

「飲み込みが早くて助かるよ」

そう理事長は笑ってみせる。

桐条先輩が夜由良に合図を送る、夜由良は頷くと机の上にトラン  
クを出し開いた。

トランクの中にあるのは、銀色に怪しく輝く銃。

それを示して、桐条先輩は言った。

「要するに、君に仲間になって欲しいんだ。一度使っただろう？」

これは君専用の『召喚機』だ。……君の力を貸して欲しい」

「昨日今日で急に言われても……」

目覚めたばかりでこれか。

可能なら……うやむやにしたい。

そこにようやく復活した真田先輩が軽い調子で入る。

「そんなに深刻に考えることはないぞ、ちょっと付き合えよ」

「私からも是非、お願いしたい」

その態度には全く注意することのない、桐条先輩。  
夜由良が二人を見て、ため息をつく。

「ちよっ……先輩らに詰め寄られたら、彼だつて困るんじゃ……」

心配そうに岳羽がそこに割り込んだ。

しかし……。

「そりゃ、仲間になってくれるなら、その……心強いですけど」

まあ、君はそういうよね。

うん、うすうす気付いていたよ。そういう人だろうなあ、って。

一同の視線は自然と夜由良へと向かう。

「へ？ ああ、俺？ 俺は別にいいんですけどね、どっちでも  
ただ言わせてもらつと、一之瀬。もうお前がこつち側に来たこと  
は取り消せないだろ、何も分かんずに巻き込まれたままよりかは、  
少しでも選択肢がある方にいたらどうだ？」

別にここで確定しなくていいと思うぞ、とりあえず仮に入って嫌  
になつたら言えばいい」

真田先輩も適当だけど、夜由良が一番ひどいな。

ぼくがそんなことを思っていると、さらに続けられた一言。

「それにここで断つたら、アレだ。ずっと在学中毎日勧誘され続け  
るぞ？ 学園理事長と生徒会長ダブルで」

やけに重みのある科白。

ああ、それを察して入ったのか、コイツ。

「さすがに毎日はしないが、まあそうだな。我々には戦力が必要だからな」

苦笑しながらも否定しない桐条先輩。

あくまで否定はしない、桐条先輩。これ、断ると断ったらで面倒な感じだ。

ぼくはため息をつく、夜由良に。

「もう別にどうでもいい」

「なぜ、俺に向かって言うっ!?!」

岳羽がそれを聞いて首をかしげながら言った。

「それ、拒否しないってことだよね?」

すごい前向きに捉えられたな、今。

「ふう、良かった。あなた、断ると思ってた……」

「まあ、最初はそのつもりだったけど」

それしか選択ないだろう、どう考えても。

自分の選択には責任を持て、ね。イゴール、あの契約は今考えても理不尽だ。

「ちょっと心強いかも」

その岳羽の嬉しそうな小さな呟きを聞いて、なお思う。

この世界は、どうあっても選べない選択肢や選んでも無駄な選択

肢だらけだ。

「何はともあれ、受けてくれて助かるよ。分からないことは何でも訊いてくれ」

桐条先輩が口元を緩めながら言う。

受けたと言うか、なんと言うか。……もう分かってていつてますね？

「いや、感謝するよ、ホントに」

理事長も嬉しそうに言う。

「ああ、そうそう。君の寮の割り当てだけどね、このまま今の部屋に住んでもらおう。偶然のびのびになってたけど、こりゃ怪我の功名だね、ハハハハ……」

とつとつ笑い出す、理事長。

それを静かに見る、夜由良。なんとなく何を考えているかは分かる気がする。

読み取れない、けどわかる。

「偶然のびのびって、あれは……調子いいと言うか」

ぼくが再び吐いたため息はそう言った岳羽と重なった。

ぼくだってわかってるさ。

たまたま男子寮に入れなかった人間が、たまたま分寮に入れられることになって、それがたまたまのびのびになった上に影時間に適応してて、さらにその上たまたまペルソナ能力を持っていた？

おいおい、そんなわけないだろ。

それでもぼくは従うしかない。

ああ、神様なんているのかは知らないけど、ぼくがこの選択が責任を持たなきゃならないものだなんて言わないで欲しい。

これは不可抗力だ、ぼくにはそうとしか思えない。

\*

その夜、ベッドでうとうとしていると彼は現れた。  
いつかの子供。

「やあ、元気かい？」

「……君か」

ぼくは上半身だけを起こす。

これは夢なのかな、いや、これも違うんだろうな。

「一応言つとくと、鍵は掛けたはずだけど？」

「そんなものとは関係なく、ぼくはいつだって君の傍にいるよ？」

「怪しすぎるよ、その発言は」

「そうかな？」

なにかをこらえる様にクスクスと笑う、子供。

「もうすぐ……『終わり』が来る」

「終わり？ 前にもそんなこと言ってたね」

「あ、覚えててくれたんだ？ うん、なんとなく思い出したんだ、だから君に伝えなくちゃと思って」

「そんなのはどうでもいいよ」

心の底から、どうでもいい。  
ぼくは早く寝たい。

「……そっか。ま、君がそう思うならいいや。実は僕にもまだはつきりとはわかんないしね」

「それをぼくに言われてもどうしようもないとは思わない？」

「そうだね、君の言うとおりだ。……それよりとうとう『力』を手に入れたみたいだね、それもちょっと変わった『力』みたいだね」

「ああ、おかげさまでね」

「たぶんなんにもしてないけどね、僕」

ああそうだね。

それは分かってるよ、分かかっていていつてるんだ。

「君の『力』は、そう何にでも変われるけど、何にも属さない『力』。それはやがて『切り札』にもなる力だ。君のあり方次第だね」

「ああ、それは夢でも言われたな」

「うん、だろうね。大事にしなよ、その『力』。……ああ、そういえば、初めてあったときのこと覚えてる？」

「……そりゃね」

「ならいいよ、交わした約束は、ちゃんと果たしてもらおう。僕はいつでも君を見てる、たとえ君が僕を忘れててもね……」

「自分の選択には責任を持つ、ね。ぼくはあれに署名したこと自体を後悔し始めてるよ」

「まだ後悔には早いよ」

再び、声もなく笑う子供。

「じゃあ、また会おう」

子供はまた溶けるように消えてしまった。



4月19日 火曜日 、『成り行き任せの選択』 (後書き)

次は夜由良君サイドで書く予定です。

こうした第三者目線からの夜由良君はどうでしょう？

わりと、一之瀬君は客観的な人間なので色々見えています。

4月10日 金曜日 、『凡庸詐欺師の二律背反』(前書き)

あんまり説明めたことはしたくないんですが、今回は夜由良君の能力について、です。

4月10日 金曜日 『凡庸詐欺師の二律背反』

自分の人格に二面性、あるいは不誠実さを持ちながら  
テクニクや手法だけで人を動かし働かせ士気を高めようする

……そこには最終的な成功はない。

いずれは、その二面性によって相手に不信感が生まれるからである。

『ステイブン・R・コヴィー』

「なんで不信感が生まれちゃ駄目なんだ？」

「ぼくに言われても……信じきれない相手とは一緒に入れないからじゃない？」

「俺が不信に思われようが別にいいだろ。世界にいるのは俺だけじゃないんだぜ」

4月10日（金）

生徒会室にて。

数多くの生徒会役員の中に、学年で言えば2年3年生の生徒が集

まっている中に紛れ込む、そうでない幾人かの生徒。

ようするにその生徒は入学したばかりの1年生であり、当然のことながら役員ではない。

そもそも入学したばかりで、一週間と経っていないだろうこの時期に、一年生でありながらここに居ることは学年全体で見てもなかなか珍しいことである。

右も左もわからず、校内の全体図すら把握しているか怪しい。

そんな生徒が生徒会室に居ると言うのはそうあることではない。

そんなときにここに居ると言うことは、はつきり言って変わり者だと言える。

とは言え、矛盾するようだがそんな毎年必ず居る存在でもあった。理由はいくつもある、一つ、先輩の中に知り合いがいるなどの理由で、元から生徒会に入る予定だったと言う場合。

ある程度、どこの学校でもありえるものだが、ここ月光館学園は初等部、中等部、高等部が存在し、生徒はほぼ繰り上がる形になっている以上、それはこれと言って特筆する様なことではない。

なかには初等部から続きずっと生徒会代表でありつづける場合もあるのだ。

もう一つが、そんな最初から役員になる予定の生徒に誘われ、それに興味を惹かれ、あるいはなんとなく、もしくは嫌々ながらも少々付き合う形で来た場合。

これも役員が正式に募集される前から来る、生徒の一つの実態だ。

だが、『彼女』はそのどちらでもなかった。

それはよくあるありきたりな理由であり、なんの珍しさもないものだった。

しかし、だからこそ誰一人として知り合いを伴わずに、それを実行することに対する決心や不安などと言ったものは、ある程度の想像力さえあれば容易に理解できるものだった。

その理由とは、至極簡単シンプルなもの。

『自分を変えたい』

彼女はそのためたった一人で誰も知り合いのいないこの場所に来たのだ。

……いや、本当なら知り合いは一人だけいるはずだったのである。自分がここに来るそのきっかけとなった、その決心の理由となつたその人が。

「正式な役員の募集は来週からなる予定だが、一足早く来てくれた君達にはその活動の一部を知ってもらい、正式な参加を考えるための参考になればと思う。これから定例会を行うが君達も疑問があれば言ってくれて構わない」

まずそう会議の前の口上を述べたのは、現生徒会長であり、同時に一年の頃からずっと生徒会の任期の間、常に会長職を務めていると言つ桐条 美鶴その人だ。

彼女は言うまでもなく、月光館学園で最も有名な人物であると言える。

なにせ学園の最大の出資者であり、同時に実質的な経営元である桐条グループ。

その総帥の一人娘にして次期当主である彼女は、その類稀なる能力と容姿を差し引いても注目の的だ。

そんな彼女を崇拜し、女神のようにあがめる生徒も少なくはない。

その桐条 美鶴が間近にいる、この事実は新入生にとっては緊張せざるをえないものだ。

……もつとも割合、本人はそんなことに無頓着と言うか、自身にはない他者の部分を察するには非常に鈍いと言わざるをえない。

しかも、最近はより一層その部分の鈍さを増している。

それもひとえに、とある二年生のせいであると言える。

その人物が平然と当たり前のように（あくまで桐条美鶴の視点からすれば、だ）彼女に対し、一個人として接していることや、他の役員とのかかわりの際に直接の緩衝材役として働き、間接的には作成されたマニュアルによって直々に指示を飛ばす回数が減った、などが理由となってそういったことに配慮する機会を減らしたからなのだが、それが現状表立って問題になることはあまりない。

副会長を務める小田桐はもちろん、彼だけでなく、桐条 美鶴を補佐する役員は一般的な水準と比較すれば割合優秀なのだ。

桐条 美鶴と言う指揮者がいたために、全体を指揮する経験・能力と言う面が不足してはいるが、指示に対し迅速に動くことに関しては、かなりのものである。

逆に指示がなければ動けない、と言う弊害が出ているのも間違いないことであるが。

その緊張感の中、たった一人の例外である新入生。

『彼女』こと、伏見 千尋は周囲をずっとそのいるはずの誰かを探すように、見渡していた。

……どうしていないのだろう。

彼は間違いなく役員のはずなのに。

別に用事があるわけではないのだが、それが気になってしまつのはどうしようもないことだろう。

そんな時、伏見からすればまだろくに名も知らない一人の生徒、

小田桐が桐条美鶴に聞いた。

「会長」

「なんだ？ 小田桐」

「夜由良がまだ来ていないようですが……」

……『やゆら』？

伏見は首を傾げたが、もしかしたらその人物が探し人かもしれないと思案する。

夜由良は時間が空いている時にだけ来れば良い、と言う形で生徒会に入っている。

それは桐条美鶴が無理を言って、夜由良を連れてきているということにしているためだ。もちろんこれは、夜由良自身の希望でもある。

そのため定例会に来ないこともめずらしくはない。普通の役員でさえ、定例会で話すことの重要性が低ければ、他の用事を優先して連絡を出さないことさえある。

しかし、夜由良は自分で請け負っている仕事を中途半端に投げ出すことはない。

そう、小田桐は判断しているが故の確認だった。

さらに言えば、今回の会議の内容は、水曜に行われた始業式の改めての反省から、今後どうマニュアルに反映させるかと言うものの状況によっては、マニュアルの存在そのものの是非はどうであるかと言ったことにすら話が及ぶ可能性すらある。

その中で発案者であり、作成の功労者の一人でもある夜由良が来ていない状況で、話を進めるのはどういうことか、と言う意味をも含んでいる。

……桐条美鶴が彼を忘れて、話を進めたと言っことはありえない。

桐条美鶴はわずかにどこかためらいを見せる形で目を逸らすも、誰一人不審さを抱かせることなく、いつものようにはつきりとした口調で述べ始める。

「……昨夜、彼は寮内で倒れてな。現在は病院に入院している」  
「入院っ!?!」

小田桐は驚きの声を上げた。

「ああ、医者が言うには過労のようなもの、と言っことだ。大事ではないそうだから、近いうち意識は戻るだろう……」  
「彼が過労ですか……」

小田桐は腕を組んで考え込み始める。  
彼にそういったそぶりがなかったか、必死に記憶を洗いなおしているのだ。

小田桐の中での、夜由良という人物への評価はかなりのものである。たいして長い付き合いでもないのにも関わらず、もっとも信頼を置いていると言ってもいいほどに。

だが、生徒会全体ではどうか？

「アイツ……そんな働いてたか？」  
「って言うか、別に、ね？ 集会の時だっ会場設営してなかったし？」

「過労たっ生徒会とは関係ないだろ。どうせ遊んでたんじゃないのか」

そう、彼は最近、生徒会に入った新参者でしかなく。仕事に慣れ



ておらず、たいして働けもしなければ、特別要領がいい訳でもない。ただ桐条美鶴について回っているだけの助手ないし、連絡役。その程度のものだった。

彼が言ったマニュアル作りも、彼が自分に理解できないから自分への説明のために用意させたとしか思っていない。

それを察した小田桐は苦虫を噛み潰したような表情を作るも、個人ではなく生徒会全体が一つの集団として機能させる、と言う夜由良が言い続けていることを思い出し、沈黙を保つ。

今、小田桐が考えたのは他の役員の理解力のなさ、に対する失望と侮蔑だ。これを、おそらく自分の価値観や視点で見ただけの物言いだ。と夜由良は否定するに違いない。

周囲に耳を傾ける、どんな理屈でもそれは立派に存在する意見だ。集団が機能するには耳を傾けるところから始める。それは上に立つ者の視点だ。

以前、夜由良は小田桐のある質問にそう答えたのだ。

そしてさらにこう言うだろう。これが自分への評価なのだ、と。それはそれとして、きちん受け止め、否定するには、目に見える結果や過程を見せるしかないのだ、と。

小田桐は今はいこれでいいと自分を納得させつつもその上で、このことを夜由良が知ったら『周りがそう言っていた？ 俺に関係ねえ』などとどうせ無責任なこと夜由良を並べるんだろう。とも、同時に把握してはいた。

あくまで夜由良にとって自分とは、上に立つ人間ではないのである。

一方の伏見は困惑していた。

自分が思っているものと、今いる場所。探している人がまるで違うものかと思えたからである。

……それでも彼女にとって、あの時の彼は……。

「心配するな。送って行ってやるから」

「生徒の一員でもあるけど、代表として手助けするのも仕事だからな」

はっきりとそう言った彼の姿は、力強くとても頼もしいものだった。

\*

某日、影時間。

真田明彦は月明かりの下、街を走りながら桐条の通信に耳を傾ける。

「その辺りだ。シャドウがいることは間違いない！」

「……だが、美鶴。この辺りは」

「ああ、あの場所が近い……いや、待て」

声が途切れるも、真田は足を止めようとしなない。

同時に周囲を警戒し続ける。

いつ、敵が目の前に現れてもいいように注意を張り巡らせる。

一点へ集中することよりも、より広く多くのものを視界に入れるように意識する。

いつ敵の襲撃が来るか。

真田の中にあるのは戦慄などではなく、期待。

自分がどれだけ強くなれたか、それを確かめることの出来る瞬間。

真田はそれを常に待ち望んでいた。

そう、ボクシングでも強敵と対峙し感じるのはその感情。打ち倒したとき、思うのは自分が強くなれたことに対する喜びと、まだ足りないと言つて渴望。

まだ上がある、そこへ行ける可能性が残っている。踏破するべきものがあると言つて確信と追い立てられるような焦燥感。

ひたすらに高みへと駆け上がろうとする、その姿勢は他者から見ればストイックですらある。他に興味を持たず、それだけを追求し続ける様はクールだ、と同級生に男女問わず言われ続けてきた。

そういつた評価に興味を持たない部分は、桐条とよく似た部分でもある。

さらに蛇足するならば、実際本人がどうであるか、はさておいて、『他者の評価を気にしない』と言つて表面上のスタンスは、この時点ではまだ『出会えていない』二人の生徒にも似ていた。

ただし、この二人は自分がどう思われているか、と言つて事実そのものには、とても目ざとかつたし、評価を気にしないと云つて姿勢ではいるものの、それを完全に意識から除外できていない部分もまたあった。

気にしていない、と口では言つていても現実にそうできないのもまた人間である。

もしも、二人に自身の先輩達とのその差がなぜ生まれたか問えば、こう答えるだろう。

「こつちはある程度気にしてないと生きていけなかつたからね」「つか、あの人達は気にしてる余裕がないんだろ？ ……自分のことではいっばいっばいだからな。どう見ても」

その事実を的確に把握しているかどうか、今後の彼らにどう影響を与えるのか。

この時点では考えようもないことである。  
いまは、まだ。

「わかったぞ、あの場所が近いなんて話じゃない。ヤツら、あの場所の目の前にいる！」

「なんだと？ ……なるほど、巢から這い出てきたばかりと言う訳だ」

「だが、様子がおかしい。そこから動く気配が …… なっ …… これは！？」

活動中にはサポーターとして、冷静さをあくまで保とうとする桐条が取り乱した。

本来、真田と変わらないほど熱くなりやすい彼女だが、真田と対象的に彼女は務めて表面上は平然としようとしている。

最近、岳羽が後輩として入ってきたため、なおさら仮面を被るかのようにそれが崩れることがなかった。

…… その事実が尋常ならざる事態であると真田を自覚させる。

「どうした美鶴？ きちんと状況を説明してくれ」

桐条が取り乱せば、対照的に冷静になる真田。

長い間、二人で活動してきた彼らは、その役割を常に無意識のうちにバランスを取る形で替え支えあって来ていた。

その落ち着いた声に、我を取り戻す桐条。

「 …… シャドウの反応が次々に消えている、これは …… 同士討ちか？ いや、違う。 …… しかし？」

「まさか誰かが戦っているのか？」

「そう思うがなぜか能力者の反応がない、悪いが明彦、その目で確認してくれ」

「ああ、そうさせてもらうぞ。……面白くなってきた」

「くれぐれも慎重にな」

「それぐらいわかっているさ」

怖いもの知らず、と言う言葉が似合う笑みを浮かべる真田。

それを顔を見るまでもなく、桐条は想像できてしまった。

遊びじゃないんだからな、と言う言葉は飲み込み、桐条は現状の把握を優先する。

いつ、変化が起きてもいいように。

「……シャドウの数は20以上だったようだ……だが、その反応がかなりの速度で消失している」

「とんでもない数がいたもんだな」

「今……10を切ったぞ！」

「おい、早すぎるぞ……間に合うか？」

走る速度を速める真田。

ペルソナによる基礎能力強化を受けたその肉体は、本気を出せば常人をはるかに超える速さになる。

それでもあくまで人間の範疇を超えることはない。

やがて、見えてきたのは一人の男。

どこかうつろに遠くをみるような、ただぼうつと立っているだけに見える男。

一見すれば今流行しつつある、無気力症の患者のような。そう、彼はいた。

シャドウの巣である、その塔の目の前に。

「危ない！」

真田が声をあげる。

その彼の背後に数匹のシャドウが飛び掛っていたからである。明らかな死角から、それも複数の襲撃。

致命的な状況、自分でも避けられる自信は持てない。

だが彼は、当然のように避けた。

振り返ることもなく、そのすれすれを僅かに存在するシャドウとシャドウの隙間を針で縫うかのように。

その動きと同時に、逆手に握った小さなおもちゃのような凶器。

それを一気に翻す。

真田は見た、その流れるような動きを。

あらかじめ、決められた手順で動く演舞であるかのように、すべてが定まった動きであるかのように、彼はその小さな凶器をシャドウに突き刺し、引き抜く。

潜りぬけるうちに、刺し。

振り返り様に飛び掛り、もう一匹のシャドウの振るう腕を上半身を僅かに逸らし、避ける。そして、同時に一步踏み出し、腕を振り切ったシャドウへ接近。

ぎりぎりの間合いを計って、攻撃させたかのような、その動き。

動体視力と一瞬の状況把握に長けた、真田だからこそその一連の動きを分析出来た。

真田だからこそ、そのちっばけな凶器がなんなのか、明かりのな  
い中で行われる戦闘にそれが使われていても理解できた。

同時にそれは理解の外だった。

そんなはずはないからだ。そんなもので、シャドウが倒せるはずはない。

にもかかわらず、すべてのシャドウはほぼ一撃で仕留められるか、その腕などを切り落とされるような形で戦える能力を失っていた。

そう、腕は切り落とされた、その凶器と呼ぶのもばかばかしいようなもので。

それはようするに。

……カッターナイフ。

それも、どこか百円均一でも売っていきそうな頑丈さの伴わないもの。

工作などには使われない、事務ですら耐久性のなさによって使わないようなそれを。

彼はそんなガラクタを凶器として、使いこないしていた。

「なにが……起きている？」

真田の耳には、通信として流れる桐条の現状説明を要求する言葉が入っていない。

ただ、真田はその動きを見つめ続ける。

まるで、その一挙一動を目に焼き付けるかのごとく。

とつとつ残るシャドウはあと一匹。

カラスのような形態を持つ飛行するシャドウ。

その両手につかまれているカンテラが薄っすらと明かりとして辺りを照らす。

キチキチキチ……。

対峙する男がカッターナイフの長さを調節する。  
たやすくへし折ることの出来るそれを、長く長く伸ばす。  
切ることはまだしも、斬り断つこのなど出来ず、当然ながら刺す  
ことも不可能なもの。  
本来ならば、だ。

その時、シャドウが羽ばたくようなモーションを見せ、  
火炎<sup>アキ</sup>を放った。

男はそれを避けるそぶりすら見せず、真っ向から。

手のひらを広げそれを掴み、握りつぶした。

その男の背後に薄っすらと現れる。

全身を漆黒に染めた、ペルソナ。

白い仮面だけが特徴としてある、存在感のまるでないその力の具  
現。

次の瞬間。

そのペルソナが分かたれるようにして、たくさんのカラスの群へ  
と姿を変えた。

元の姿と同じように、真っ黒なその身体。

それは対峙するシャドウにも似ている。

「ペルソナが姿を変えた……だと!？」

いや、それ以前にこの目の前の男は。

召喚器もなしに平然とペルソナを使いこなしている。

男は飛翔するかのように、宙に躍り出た。

そして呟く。



「ブラックレイヴン……二連牙」

聞き取れるかどうか、ぎりぎりの小さな呟き。  
間、髪と入れず叩き込まれる完成された技、二撃の突き。

左右の翼を剥ぎ取られ、墮ちるカラスが地面へとつく前に。

さらにもう一閃。

「見えたっ！」

その男の声と同時に、はじけ飛ぶシャドウ。

一連の一瞬とも言っていない流れの中、動体視力に優れた真田に見えたのは、なんの抵抗もなく、そのシャドウの肉体へとスツとカッターナイフの刃が入られたと言う事実。

まるで一切の硬さが存在しないかのように、刃の根元まで刺さっていた。

いや、そんなはずはない。

人間の肉体ですら、そんなことは不可能だ。

だが現実にも目の前の男は実行して見せた。そして、その手を返す、刃をひねる、それと同時にシャドウははじけた。

……これは夢か？

たやすくシャドウの群れを殲滅して見せた男の目に映るのは。

自分。

「ふうん、おいおい。適正者かよ？」

熱の感じられない眼は値踏みをするかのようになり、真田の眼を見る。その奥の置くまで覗き込もうと。僅かにも動けない。

今までどんな相手と戦ったときもなかった、初めて感じるもの。そう真田は知ったのだ、殺されるかもしれないと言う恐怖を。闘う者と殺す者、対面してわかる。その両者の圧倒的なまでの違い。

自分はシャドウと闘うことを望み強者との対決として喜ぶが、一方、目の前の相手はシャドウを殺すことをただの作業としている。何が違うか、何もかも、だ。

自分が戦士だとすれば、誰が相手だろうが殺せる、そんなモノは……。

「……死神か」

「死神、それ、さすがにひどくね？　つかそれなら屠殺者って言葉よ、ありやどう言った所で自然の摂理、生の営みの具現なんだから。たぶんそっちのが近いぜ」

男は真田の呟きに対し、やけになれなれしく、とらえどころのない態度で話す。

「……屠殺者、だと」

「そ、屠殺。豚や牛殺すのと一緒」

「化け物を殺すのが、か」

「アレが化け物なら、アンタはなんなんだよ？」

ベルソナ  
「仮面使い」

「……なぜわかる？」

自分が適正者だと言うのは見ればわかるだろう、だがペルソナ使  
いだと言うのは、それを調査する能力を持ったペルソナによる力な  
どがなければ、わかるまい。

相手がその力を見せていないのなら。

「シャドウがいる場所に平然と近づいてこれる適正者、仮面使いペルソナ  
じやなかったらアホだろ？」

そう、至極真つ当なことを述べると、小声で「ま、あと……なん  
となくわかる」と男が続けてみせた。

この男は、敵なのだろうか。

それとも……自分達と同じよう人間なのだろうか？

シャドウと戦うことを決めた、人間。

人間……？

「……お前はいつたいなんだ？」

「なんだ？ ああ、『なんだ』と来たか。『誰だ』じゃなくて？

ああ、いいな、面白いよアンタ。でも、つまらないことに俺が返せ  
ることはいつも同じだぜ？」

そのまま、彼は言葉を続けようとするも。

なぜか、目を見開いて……。

自分をその身体で押しつける。

真田が振り返ると、そこには。

浮かぶ二つの眼球のようなもの。

いや、違う。

それは突然、浮き上がるように現れた。

口をあけた老人のような顔。

そのシャドウは自らの姿を隠し、潜んでいたのだ。自身を透明化し、気配を隠蔽できるシャドウ。

『隠者：デスサーチャー』と言う名称のそのシャドウは、浮かぶ巨大な老人の顔、と言う姿のシャドウだ。ただし、自らの、眼球以外を消し、攻撃時以外はその姿を隠して行動出来る。かなり強力なシャドウだ。

真田がその接近気付かなかったのは、油断よりも今までそんなシャドウを確認したことがないと言う要因が強いだろう。

その接近にいち早く気付いた男は、なんとその両腕をそのシャドウのそれぞれ左右の眼球へと突っ込んでいた。

「おいおい、こんなヤツまでいんのかよ。狡いな、いや、俺みたいな能力があんだから、そりゃ当然なのか？ なんにしたって、まあ、二度目はねえがな」

そのえぐりこむように眼球に刺さった腕は、よく見ればシャドウに同化しているようにも見える。

「お、おい。お前、その腕……！？」

「ああ、気にすんなよ。アンタ無事か？」

「あ、ああ」

「ま、ならいいや。……つか、ならしゃあないよな。今回は不可抗力だ。失敗じゃねえ」

意図の掴めないことを言いながら、目は見開くようにシャドウを凝視し続ける。

その腕を引き剥がそうとするかのようにも見えるシャドウ。

しかし、まったくその腕に逆らえる気配がない。それどころか、そのままシャドウは攻撃してくる様子すらない。

「いや、違うな、アンタ少し気にしてくれ。んで、頼む」

「……なんだと？」

「俺の安全、アンタに預ける」

もう決まりきったことだと言わんばかりに言う、男。

「それで、……出来れば俺のことは誰にも言つなよ？ 少なくとも俺が目覚めるまでは」

「それはどういふ……」

男は真田に、ふ、と笑う。

さわやかに、なんの気負いもなく。  
何も背負うものなどないかのように。

「さあ……中からぶっ壊してやんぜ。さっさとぶちまけろっ！」

老人の顔をしたシャドウはその身を破裂させ。

破片が辺りを舞った。

それを間近に全身で受け止める男。

辺りは静けさを取り戻し。

シャドウが黒い霧となって霧散した頃。

男はひざから、一気に崩れ落ちた。

「……っおい。おい、どうした!？」

駆け寄る真田。

これが真田が夜由良優と最初の出会いである。もっとも夜由良優からすれば憶えのないことであるし、こちらは真田明彦と言う人物を見たことがあり知っていたわけだが。

真田明彦からすればこれが初めての出会いであり、夜由良優が知りようもない一つの事実でもあった。

そして、この事実はその大半の詳細が真田の胸のうちに秘められることになる。

命の恩人である男の、頼みだったために。

\*

4月12日(日)

消毒のような臭いと、わりあい強めな花の香り。

俺は目を開いていく。

場所はすぐにわかる、ここは病院だ。

……最近、本当に病院に縁があるよな。

今年で3度目か？　なんだ、まだ4月なのに幸先いいな、俺、今年どんだけ病院送りになる予定なんだよ。

……間違っても死神の予定帳は覗きたくないもんだ、死ぬ予定ありまくりな気がして仕方ない。要因なんてかなり身近にあるからな月に2回ほど死ぬ、って書いてあったらどうしよう。

なに、そのノルマみたいの。生き返れること前提？

ま、ゲームじゃねえだから死んだら一度つきりだろうけどさ。本当にありえそうで嫌だ。

周囲を見渡して、誰もいないのを確認する。

……看護婦さんいないから、ナースコール押さなきゃ。

つかまた個室かよ。

さすがに変なとこばっか金使ってるな、それぐらいなら分寮に専属シエフ雇えよ。絶対可能だから。

ふと、棚を見る。

花束が2つ。

簡素だけど、きちんとまとまった形の花束。一本の花を引き立てるようにして、合わせるように添えられるいくつかの花。

全体的に淡い色でまとめられた、見舞いには無難な花束。

もう一方は、やけに金のかかっていそうな絢爛な花束。

それも全体的になんか派手。

うん、たぶんあれだな。どれにしたらいいかわからなくて予算だけ言って、作ってもらった感じだな。

……ちよつと外食何回いけるんだよ、ぐらいの予算で。

うわ、なんとなくわかるのがあれだよな。どれが誰だか。

間違はなく少なくとも、後者は桐条先輩だろう。自分で花束買うなんて初めてだったに違いない。

手配だけした可能性もあるけど、そしたらきちんと事情をわかってる人がやるだろうし、あまり華美でないお見舞いを考慮した雰囲気の花束になってると思う。……お偉いさん宛に考慮された地味高い花束とも言う。

……ちよつと桐条先輩の買い物風景をその場において見たかった気が。

ま、あれだ。機会があれば適当な誰かを病院送りにしよう。そして、改めて桐条先輩が買うのを見ればいい、初めて買う場面に立

ち会えなかったのは残念だが。

たぶん、あの人、花言葉とかも知らないか、知っててもごく一部な気がするな。

ま、さらに勝手なイメージなんだけど、無駄によくわからない花を選んで種類だけ豪快に買ったたりしそうな気がする

あ、これ綺麗、あ、じゃとりえあずこれで。みたいなノリで。

で、もう一方がアイツ……だろうな。

わざわざ入院した奴に、花買いそうな育ちのいい奴他に知らんし。そもそも俺の交友関係が少ないんで、かなり絞込みやすい。

意外と高いんだぜ？ 花束って……いや、ピンキリなんだけどさ。

他に花くれそうな知り合いねえ、どうかな。色々いるけど学校にばれたらまずいのばっかな気がするな。

主にバイト関係とかで。

いや、バイトじゃないんだよ。手が足りないって言う、知り合いのお店を手伝っていただけで、そこに雇用関係はまったく存在しないんだよ。

お金をもらっていたとしても、それは俺が生活に困っていたことを知っての純粹な善意なんだよ。

……今度、顔出してみるかな。いきなり仕事やめることになっちゃったわけだし。

うん。ホント、申し訳ないよな。

好きでやめたんじゃないんだけどな！

……まずどつちにしたって、ナースコール押さなきゃ。

ぼちっとな。



一人だし、俺がナースコール押さなきゃ誰が押すみたいなの？ いや、普通は一人だと思っただけ？

病室で目覚めると女の子が来てたなんて、夢だろそれ。

そんなんあったら、素直に目をつぶって改めて目を覚ますことを決意するよ、つかどこの勝ち組の話だよ。そんな主人公みたいにな奴いたら俺がぶっ飛ばす。

……物理的に勝てそうならな！

いや、スニーク隠密潜行かけて奇襲すればいけるか？

主に、さなだ筋肉先輩とか一撃できればだいたい奴には勝てんだろ。

あ、来たかな。

……前も見た若いナースさんだ。

ちなみに名前は並木さんです。下の名前はカヤさんだそうです。

ああ、胸にプレート付いてるの読んだだけじゃないよ。その場合書いてるの、苗字だけだし。

聞いたんです。……1度目の入院のときに。

「どうもです、また入院しちゃいました」

てへ、なんて言ってみる。

うん、つか3回目ってなんだよ。と自分に突っ込み。

「ふうん、元気そうね。とりあえず、血圧とか測っていい？」

「どうぞ」

なんか、気だるげな並木さん。

3度の入院でかなり打ち解けた気が……いや、もともとこんな態度のようなの？

「って言うか、きみ、しょちゅう倒れてるんだね？」

「いや、最近ですよ。こんな体質になったのは」

「いや、ほんとに。」

「なぜ、こんな体質になっただろうね？」

「体質って、過労だったんでしょ？ …… Dr来るまで少しかかるから」

「へえ……俺過労なんだ。ならこれからはもう少しだらけます」

「どうぞ、好きにしたら」

「今、Drが来るのに時間がかかるって言ってたよな。」

「ふむ、もしかして。」

「あの、ちなみに今日何日です？」

「12日」

「端的に答える、並木さん。」

「ああ、すみません。明日、目を覚ませばよかったですね」

「選べるなら昨日起きようよ」

「なんの話かと言うと日曜日なのだ。」

「ようするに今、病院で働いている人少ないんで、かなり先生が少なかったり。ナースさんも忙しくて、予定外の何かあると仕事が滞るのです。」

「夜中よりはいいんだらうけどね？」

「つか、なぜ昨日？」

「あのね、早く目を覚ましたほうがみんな安心するでしょ？ わたしも仕事減るし」

「なるほど……って別に誰も心配しませんよ」

「馬鹿なこと言わない、きみはガキか？」

そう言っつて頭を軽く小突かれる。

いや、ガキですけどね。かなり。

「お見舞いに来てくれた子達、みんな深刻な顔してたよ？」

「……それは非常に申し訳ない」

「誰だよ、政治家か」

「政治家はこんな素直に謝らないですよ、辞めさせられるから」

「はいはい。馬鹿言っつてないで反省しようね」

そんなあんまりガキ扱いしないで下さいよ、惚れちゃうじゃないですか。

……かなりストライクゾーンです、並木さん。

いつ、下の名前で呼ぶか虎視眈々と狙ってます。

ああ、でも親しくなるにはまた入院せんとアカンな。よし、入院しよう。月2のペースで。

……だからなんだ、そのノルマ。

久しぶりにゆっくりしているような気がする俺は。

少しだけ、幸せだった。

「あ、そう言えばね」

「はい」

「お友達、入院してるよ？」

「……はい？」

\*

同日、夕方。  
作戦室にて。

俺はあの夜に何が起きたかを、改めて先輩方に説明してもらっていた。

同時に俺が仮面ベルソナの力を使いこなせるようになったかどうか、その確認も兼ねている。

色々とわかったこともあったからな。

「へえ、一之瀬も入院ですか」

「ああ……ペルソナを覚醒させたショックではないか、と理事長はおっしゃっていたが」

「なるほど、まあ、俺もそんな口ですからね、ね、真田先輩」

俺は真田先輩に話を振る。

だが、返答はない。

「先輩？」

「……まあ、そうだな。と言っても、お前はシャドウと戦っていた所を発見された訳だから、な」

「戦ってたって言っても意識なかったですけどね」

記憶も何もない。

実際、俺がどんな感じで戦っていたかは、それを見ていた真田先輩しか知らないのだ。

桐条先輩が口を開く。

「影時間に覚醒して間もない時は、なにかと不安定だ。無意識のうちに出歩いていたとしてもおかしくはない。そのままの状態でシャ

ドウの群れと戦えていたと言っつのは興味深いが」

「でも、あれじゃないですか。一之瀬みたいにペルソナが『暴走』してたとかじゃないですか？ アレ、本人の意識関係なかったばいんですよね？」

真田先輩が首を左右に振る。

「いや、きちんとお前は戦えていたよ。ペルソナを使いこなしてな」

「はあ、無意識なのにどうやって？」

「……それを俺に言うなよ、言われてもわからんからな」

なんか真田先輩が言葉を選んでるように思う。

なにか隠してるのか。よほど、俺の状態がひどかったとか？

まさか、な。

「そついや、岳羽が見あたらないですね？ なにかあったんですか？」

「彼女は……一之瀬の病室だろう」

「一之瀬の？」

「責任を感じているらしくてな、暇さえあれば付きつきりだ」

「責任で、あの状況じゃ戦える方がおかしいですよ？ 彼女、初じやないですか」

初陣での状況だ、まずまともに戦えないだろう。

そもそもそれを言えば、あの状況であいつらに付いてかなかった俺にも責任がある。

まあ、あの時点ではアレが最善だと思ったのも事実だし……屋上に逃げた岳羽の判断ミスもないわけじゃないだろうけど……。

それでも、な。俺がもしも……。

そこに扉を開けて現れる、理事長。

「いやあ、待たせたね。話はどこまでいったんだい？」

「あ、理事長。お迎えありがとうございます。あ、あと入院費も？」

「いやいや、いいんだよ。それくらいは、ね。僕なんかあの夜、役に立てなかったわけだし。入院費も経費だから気にしない気にしない」

「まあ、そう言ってくれるなら気が楽なんです」

確かにこの人が、あの時、役に立たなかったのは事実だし。

俺の中での理事長は、もはや『駄洒落好きの駄目眼鏡』で決定している。

略して、『駄眼鏡』。

戦闘の時には後ろで引っ込んでるのが仕事です。

「あの、僕、お礼を言われてたんだよね？」

「もちろんそうですよ、りしちよう駄眼鏡」

だから、科白と科白の行間なんて読むんじゃない。

寿命を縮めるぞ、駄眼鏡。

つつても俺、この人尊敬の欠片もないけど嫌いじゃないのだ。

なんかどこか俺に似てるんで、嫌うと同属嫌悪にしかならず格好悪い気がして、嫌えないんだよね。

気に入らないのは間違いない、でも理解は出来る。

……悪い奴じゃないんだ、致命的にいい奴じゃないだけで。

「こう、他人を思い通りに動かして目的を達成しようとしてる風味とか、他人をどこまでも駒として見てるとことかね」

「……なにを小声で言ってるのかね」

「いや、別にたいしたことじゃないですよ。今話してたのは、当日  
なにかあったのか、ですね」

「フム、じゃあ、その時の映像とかは見たかい？」

「……いえ、あるんですか？」

そんなものが残っているのか。

それは気になる部分ではあるけれど。

「ああ、監視カメラの映像は録画してあるからね。変化のない映像  
は省略する処置を組んでるからね。ざっと10年分は外部の保存機  
器を使わなくてもそのまま録っておけるはずだね」

「何気にいいもんなんですネ、ここの」

「影時間の時も使えるしね。桐条の技術が贅沢に使われてるわけだ  
よ、と言っても実はこれでもちょっと古い機材なんだけどね」

「なるほど、日々の技術の進歩は目覚ましいものがありますからね」

「そういうこと、ああ、閲覧はきちんと許可をとってね。プライバ  
シーだからさ。パスさえあれば、あらかじめ許可した映像だけは見  
れるんだけど」

まあ、それでも俺の部屋の監視カメラは映らないけどな。

気付いた瞬間、まずすることはそれだよな。

そしてもう、俺の脳波やらなにやらも計れなくしてやった。

……あの部屋すごいぞ、いる人間の体温から心拍数までわかるか  
ら。

たぶん、それも記録されてるんだろうけど、それは消し方が分か  
らなかつた。

簡単にはいじれなくなつてんだよね、管理者じゃないと。

いずれ必ず消す、絶対に。

問題は俺に確認できない部分、この監視室じゃない部分のカメラとかがないか、なんだよな。アレだぜ、部屋覗かれてるって何も出れないぜ？ …… いろんな意味で。

盗聴されてたら、…… どうしよう。

っていうか、いまだに見られてたらお嬢にいけなくなる！？

…… いや、貰われる予定はないんだが。

そういつつも、別に監視されてても生活できればいいや、とか若干思ってたなり。

そういう新事実発覚したらそれを理由に辞めるなり、金貰おう、とか思ってたなり。

…… 今更、ねえ？

それくらいなに、俺自分が汚れきってんの知ってるもん。たぶん、みんなも知ってるぜ？

「それで、君自身の能力はどうなんだい？ …… なにやら発見があるとのことだったが」

「ええ、まあ、たいしたことじゃないんですけど」

一同の目が集まる。

「まず俺のペルソナは『バイアグーナ』、アルカナは『隠者』です」

この辺はペルソナをカード化して見せれたら早いんだが、どうやらそれはベルベットルームじゃないと出来ないらしい。

あれが夢かどうかについては……。

俺のペルソナに対する感覚と同様にマジだ、と認識している。

目に見えない、けどそうだ、と言う実感って言うの？



ただ同時に、あれは夢でもある、とは思ってる。どうも上手く  
いえないのだけど、夢だけど夢じゃなかったみたいなの？  
目に見えない、この不思議な感覚。

「って言うか、個人的にはアルカナとか分類とか教えてほしかった  
ですね」

そう、先輩方は知ってたらしいのだ。

そういう分類分けがペルソナとシャドウの双方にあることを。  
桐条先輩が不思議そうな顔をする。

「……それはすまない、だがそれは重要なことなのか？」  
「ええ、タロットのアルカナで分類されている、ないし出来ること  
の意味とか色々考えれるじゃないですか。まあ、そこまでタロット  
詳しくないんですけどね」

これから、タロット占いの勉強しなきゃ、とか密かに思ってたなり。  
……手相の見方とかはわかってるんだけどね、役に立つから。

「ま、あとシャドウまで同じ分類の仕方っておもしろくないです？  
それは桐条の方でも研究してるんでしょうけどね。なぜ、桐条が  
そんなことを知っているかは知りませんけど？」

桐条先輩はなにも俺に返答しない。

少し、暗い表情。

ああ、そういう意味で言ったんじゃないのに。  
俺は微笑む。

「いいですよ、話さなくて」

「……夜由良？」

「なんでもタイミングってものはあるでしょうし、仲間同士にだつて隠し事はあるものでしょう、てかあっていいです。今話すべきじゃない、と先輩達が判断してるならそれでいいです」

「隠している訳ではないんだ、ただ……」

「無理しないでください、先輩。いいんです」

色々、相当不味いこと話してないっばいな。

先輩方も駄眼鏡もみんなみんな、ここにいる人間はそうだ。つか、ぶつちゃけ卑怯なんだと思う。

「俺、待ちますから。先輩らがいいと思うときまで」

「……夜由良」

「どんな理由や訳があつたとしても俺は構いません。俺は俺に出来ることをするだけです、先輩らもそうでしょ？　ここに居るからには、それ以上でも以下でもないはずですよ。……俺がここで戦う理由なんてそんなもんですからね」

他には生活のため、とか？

家賃かかんないし食費もかかなくなつたし。

「隠し事はしてもいいですよ、信じてますから。でも、嘘はつかないでください、それだけはやめてください。……約束してくれませんか？」

先輩らは互いに顔を見合わせる、そしてそのまま笑みを浮かべた。頷きあい、先輩らは言った。

「わかつた。そして、約束しよう。嘘はつかないと」

「俺もだ、確かに俺達にはまだ言っていないことがある。だが、いずれはそれを説明する日も来る。それも近いうちにな」

「……はい、んじゃ、待ってますんで」

俺達がそう話したところで、理事長が頷く。

「うんうん、いいねえ。青春って奴だねえ」

「言っておきますけど、理事長？」

「なんだい？」

俺は先輩達に感化されて生まれた、その柔らかい笑顔のまま言う。

「隠し事はいいですけど、嘘は吐かない方がいいですよ？ 敵を増やしたくないならですけどね」

ようするに、俺を敵に回したくないなら嘘吐くなって言ってるわけだ。

この人、どう見ても俺と同じ臭いがするもんで。

「あはははは、そうだね。覚えておくことにするよ、しっかりだね」

「ええ、そうして下さい。単に『言わない』なら全然構わないんで、俺もそこは聞かないですから？」

「うんうん、信頼関係って……大事だからね？」

超爽やかに笑いあう、俺ら。

ここで約束するとは言わないのがミソだね？

嘘つきの鉄則だね、ヘタに約束しない。嘘を吐くときは真実をブレンドする。

さらに言つと、意味のある嘘とそうでない嘘を両方日頃から吐いておくのも、ポイントです。

「ああ、信頼も大事だけど、君の能力……僕、気になってしかたが

ないんだけどね。もう興味津々でさ」

「あ、すみません。俺のペルソナ能力は前説明したとおり、アナボリック同調シンクロの二種です。俺の保有するスキルはこの二つを併用するような形です」

「スキル？」

そう、まずこの場にいる全員が知っているステーク隠密潜行。

触れている物体や景色に見せかけ上同化し、周囲の気配に同調することで自らを隠すスキル。

見えているのに見えていない、と言う認識阻害能力。

まあ、ある程度は物理的に見えずらく出来ているので、自分の姿を完全に消せるのかもしれないが、今の技量じゃ無理だ。

「それと他に出来そうになったのが、二つを併用しての共鳴探知レゾナンスナーですね。生物とペルソナ、シャドウならなんとなく感じられます」

「それは……調査型アナライズのペルソナと言うことかな？」

「さあ、専門的なのはちよっと。現在位置はなんとなくわかるかな、でも遠距離は他の気配に邪魔されて無理だし、詳細な情報はダメです。近距離ならある程度はいいんですけど」

なぜわかったのか、たとえば、先輩方がペルソナ使いだということが感覚でわかるようになったからだ。

おおよその力の強さ、どういう方向性に特化しているのかが曖昧ながらも理解出来る。

共鳴現象というべきか、他のペルソナがいることに俺の『バイアグーナ』が喜んでるっつか、騒いでるっつか。

ちなみに、二人とも直接的な戦闘力じゃ俺と段違いです。俺が武器持っても、二人とも素手だけでたぶん勝てる。

「で、さらに一步踏み込んで、ですね。映像残ってるってことは、みんな見たんですかね？」

「なにがだい？」

「あの夜、俺になにが起きたか、ですよ」

それぞれ全員が肯定する。

おお、ならさすがに話が早い。

「なら、見たんじゃないですか。いや、俺は見てなかったんですけどね」

それどころじゃなかったし？

あの状況下でそこまで周囲を冷静に見れるわけがない。

「俺のペルソナの能力。同調を最大限に活かした、同調対象の特殊能力の上乗せ、要するに他の人のペルソナの力を増幅する能力です」

名付けて、同調増幅<sup>アップ</sup>ってトコですか。まんまだけど。

「俺、あの時のことですけど、桐条先輩のペルソナ『ペンテシレア』になってたような気がするんですよ」

俺自身が、と言っのが感覚上だが、たぶん実際は……。

「あれ、はたかた見てたら俺のペルソナが変化したんじゃないですか。……いや、あれか。俺が『ペンテシレア』をもう一体出した、ように見えた、かな？」

「ああ、その通りだ」

桐条先輩が俺の言葉を認める。

「そして、桐条先輩が放った特殊攻撃、広範氷結マハフフが全てのシャドウを倒した、ってところですかね？」

「……本来はそれほどの威力はないはずなのだが、な」

「そうですね、あのシャドウの強さだとせいぜい足止めですよ。本来は。でも、同時に俺のペルソナが発動したために状況が変わった」

桐条先輩のペルソナに同調することで、自身のペルソナの姿を変え、その対象の攻撃力を倍増させた。

それがたぶん、あの時に起きた事実なのだろう。少なくとも感覚的にはそうだと思う。

「それが桐条君以外の、他のペルソナとも出来るならかなりの戦力だね」

理事長がそう言った。

まあ、今までみたいにアサシンごっこする必要はなくなるわな。ガチンコ勝負じゃ負けるけど。

「一つ、聞きたいんだが、夜由良」

真田先輩が俺へと顔を向ける。

なんか、さつきから色々と考え込んでるように見えるんだが？

「なんです？」

「お前のペルソナのその変化……維持出来ないのか？」

「維持……ですか」

「ああ、そうすればお前の能力も強化されたままになるはずだ」

なるほど、確かに。  
でも、たぶん……。

「長い間はつらいですかね、隠密<sup>スニーク</sup>潜行もそうなんですけど、他のことに意識がそれると解けちゃうんですよね。

だから攻撃に移ると敵に姿が見えてしまって、無防備になるわけですよ。同調<sup>アンプ</sup>増幅もそうですね、常に意識を割いてないといけないんで」

どう頑張っても攻撃した直後に解ける、と思う。

しかも、その攻撃の瞬間は動きが止まって無防備。  
慣れたらまた違うのかもしれないんだけど。

でも、まあ……。

「先輩らの技、1回分ぐらいは持つから……まあ、別に増幅<sup>アンプ</sup>じゃなくても、先輩らのペルソナが目の前にいるなら、理論上は模倣<sup>コピー</sup>して単独で特殊攻撃を撃つぐらいは出来るかもしれないね」

ただ、難しそうだ。

同調<sup>アンプ</sup>増幅は、ペルソナを召喚する桐条先輩に合わせるだけだったから成功した訳で。それを維持するとか、先輩が他のこととしてるのに、模倣<sup>コピー</sup>して本体のペルソナとは別の行動するなんて、難易度が違いすぎる。

「基本的に先輩らに追従するのがいっぱいだと思いますって下さい。とりあえず、力の増幅は出来るぞ、と」

それが俺の限界かな、現状。

「……そうか、わかった」

そのまま、なにか言いたそうに真田先輩は黙り込んだ。  
なんだよ、使えない奴だと思っんならそう言えよ。

「君の能力は以上、かな」

「ええ、今のところはですけど」

「ちなみに弱点とかは？」

「……弱点？」

「ああ、桐条君は氷結を扱う代わりに火炎に弱く、真田君は電撃を扱える代わりに氷結に弱い。それぞれ弱点があるんだよ。もちろん、弱点がない場合もあるんだけどね」

「へえ、かなりファンタジーしてますね」

ああ、じゃああれだ。

真田先輩は桐条先輩に弱いわけだ。

……超納得です。

「なんだよ、その目は」

「いえ」

とりあえず、真田先輩をじっくり見てみる。

特に他意はない、いや、ほんとに。

で、俺の弱点？

「あー、特にないですね。扱える属性がない代わりに、弱点もないみたいなの」

「……なるほど、無属性むじゆせつタイプか」

「強いて言えば、基礎能力がたいして底上げされないのである意味全部が弱点ですね。殴られても痛いし、蹴られても痛いし。特殊攻撃なんか防げませんか？」



全部、直で食らいます。

ありとあらゆる攻撃がある意味『効果は抜群だ』、かも？

たぶん、ほかのペルソナに……たとえば、真田先輩のペルソナに同調してれば電撃は一時的に防げるのかな。その代わり、氷結はよ  
り食らうだろうけど？

「ほかにご質問は？」

俺は周囲を見渡すも、特になし。

まあ、こんなところですよね。

桐条先輩がしみじみ俺を見て言う。

「それにしても君の力は個性的だな、その姿を変えたり消したり。敵を発見したり。本当に戦闘用と言うより、偵察用スカウト向けの力だな。いや、どちらかと言えば密偵スパイか？」

「……姿を変えるつつても、俺の姿は変わりませんけどね？」

変わるのはあくまでペルソナです。

……目の前にいる相手限定ですけど、しかもほぼ一瞬。

まあ、同調増幅あるけど単独ソロで行動する方が向いてるのかもしれない。俺、協調性ないしね？

チームで戦う？ やめてくれよ、ぶっちゃけ反吐が出る。

なんで足の引っ張り合いせなアカンの。自分の失敗は自分でなんとかしろよ、少なくとも俺はそうしたいから。

自分が何かをしたせいで、他人に被害が出る。他人のせいで俺が怪我する。どっちもごめんだね。

誰かに背中を預けるなんて嫌、なら敵に晒す方を選ぶわ。

……言わないけどね、誰にも言えないけどね。  
もうその瞬間、俺の株大暴落だからね！

「しかし、これで戦力が揃ったな」

「ああ、ようやくあの場所にも行けそうだ」

先輩達がそう会話を始める。

あの場所……影時間にだけ現れる、シャドウの巣。

どこまでも無限にシャドウが沸くらしい、謎の多きその場所。

そして、俺が真田先輩に発見された場所の目の前であり……。

俺がここにいる本当の理由だ。

「ようやく、ですね」

「……お前もずっと待ち望んだものな。まあ、俺も同じ気持ちだが」

まあ、あの場所に行けるって言うから、俺はここにいるわけですからね。

それはそうと真田先輩が明日が遠足だ、と言う小学生のような顔をしている。

いい表情です、すごく楽しみだ、って言う顔してます。

……よし、曇らせよう！

「え、何言ってるんですか？ 真田先輩行けませんよ？」

「……なに？」

俺に同調するように頷く、桐条先輩。

「そうだな。明彦、お前前回の負傷が治ってないだろう？」

「左脇腹でしたよね。知ってますよ、アバラがやばいらしいですね」

もう完全に調査済みです。

俺がただけナーズさん方と仲いいと思ってるんですか？

プライベートの保護？ いや、俺身内だから、自分の先輩を超心配する後輩だから。

「のんびり静養して下さいね、肋骨先輩。さなだ俺がきつちりかつちり全部、攻略しちゃいますから」

「なっ、狡いぞ。夜由良！」

「狡くないです、俺は入院してたけど負傷してないです。そして、先輩が復帰する頃には出番無しを狙います」

「させるかっ！ すぐに復帰してやる！」

ほう、すぐに復帰する？ へえ、そんなこと言ってるいいんですか？  
では、左手をご覧下さい、その隣で聞いている方がいらっしやいます。

「……ア〜キ〜ヒ〜コ〜、お前という奴はどうしてそう自分の身体を……」

「美鶴っ！？ いや、だけどな……」

「だけでももしかشもないっ！」

うんうん、仲いいな。

羨ましいです、あれ？ 実はこれってイチャイチャしてるんですかね。

わお、より羨ましい。ついでに妬ましいからまた今度嫌がらせしよう、決定。

……いや、二人にその感情がないのは知ってるんですけどね。

って言うか、たぶん合わないよ。そういう意味では。二人とももつと他の人が合ってると思う、俺は。

まあ、恋人と相棒って違うからね、相棒みたいな関係で付き合うことを俺は否定しませんけど、そこに安定感はあるとしてもときめきはないですよ？

と、俺に話しかけてくる理事長。……なんだよ？

「それにしても、夜由良君はすごい意気込みだね。いやあ、頼りになりそうだなあ」

「……俺はあの場所を探索するのが目的ですから」

「フムフム、改めて興味深いね。なぜだい？」

「なぜって、……駄目ですか？」

「駄目ですかって……」

ちょっと理事長風に言ってみる。

いいじゃん、いつもアンタこんな言い方だろ。すげー、参考になるぜ。アレ。

「フツー、気になるじゃないですか。シャドウの巣ですよ？」

「……素直に答えてくれそうにないねえ、夜由良君は秘密主義だなあ。実は君は、恥ずかしがりなのかい？」

「いやあ、理事長と同じぐらいにはですかねえ。シャイボーイって奴です」

「僕はもうボーイって年じゃないけどねえ。でも、まあ、確かに僕はこう見えて上がり症だからね。うん、同じ恥ずかしがり同士、仲良くやっていこうじゃないか」

「ええ、是非。俺はずっとそのつもりですよ。俺の目的に一致する限りは全力で協力したいです」

「若いっていいね、元気で。本当に頼もしいよ。僕もそうありたい

ものだね」

互いにきちんと約束しないところがいいよね？

うん、すごいなんか俺と限りなく近いタイプだと思う。

\*

その後も若干ミーティングを続けたが、すぐに解散した。

一之瀬も目覚めてないからね、岳羽もいないしなにかもを決めるには早い。

「夜由良、ちょっといいか？」

なぜか桐条先輩が俺を呼び止める。

「いや、あの。夕飯の支度を……」

「今日くらいは休め、病み上がりなんだからな」

「はあ……」

え、じゃあ、みんな何食べる？

さすがに全員カツプ麺とかはやめてね？

いや、桐条先輩はそんなもん食わないんだろっけど。

健康管理大事だよ、みんなもっと身体を大事にしようぜ。

「それで何のようですか」

結局、桐条先輩には逆らえないので、素直に聞いておく。

厄介ごとですか、生徒会以外になにやらす気ですか？

「……その、だな」

「はい？」

「……すまなかった」

「……すまなかった？」

「なんの話だよ。なに、無理矢理に特別課外活動部と生徒会に入れたことですか？」

「あの時、私は君を守りきれなかった。逆に君が私を庇うような形で……」

「ああ、そのことですか」

「そう言えば、襲撃された夜、そんな状態だったような気がする。いちいち覚えてないけどね。」

「本来なら、君に会って真っ先に君に謝るべきだった。しかし、夕イミングがな。他のメンバーや理事長が……いや、違う。これは言い訳だ、どんな状況でも私はすぐに謝るべきだったんだ」

「……先輩」

「すまない、私の不甲斐なさが今回の……」

「そりゃ勘違いですよ」

「なに？」

「なに責任感じてんだ、この人。」

「誰もアンタに期待してないぜ？ ……いや、みんなしてんのかもだけど、俺はしてない。」

「この人は誰かのフォロワーとか、護るとかなんて全く持って向いてない。」

「まず、先輩。言っておきますが、あの時残る言ったのは俺自身ですよ。自分で覚悟してね？ そこで謝るのは侮辱です」

「し、しかし」

「俺は自分が安全だから残ったんじゃないんです、命を危険にさらすことを前提にすることを決めました。先輩達が護ってくれると思っただから、言っただんじやないんです。」

他人がどう思っただんじやない関係なく、自分でそう決めただんじやないんですよ。」

確かに予想外のことは起きました。俺は危険な目に遭いました。」

でも、自分にとって予測出来ないことがあったからって他人に責任を求める奴がいたなら、それは馬鹿ですよ。考えなしです、覚悟を決めてない奴ですよ」

「……そうは言っただんじやない、私は君達の」

「いいですか、選択する。数あるものの中からたった一つの何かを選ぶ、決めるってのはそういうことなんです。約束と違う？ 聞いてない？ こんなはずじゃなかった？」

ふざけんな、です。予想しない、聞かないアンタが悪いんだ。知ろうとせず、努力しなかった本人が悪いんです。なにもしなくても全部自分に周りが教えてくれると思う奴は痛い目見て当然だし、周囲に迷惑掛けるだけですよ？」

……先輩の生きてる世界もそうでしょう。桐条グループ次期当主の名の重みは、それを教えてはくれませんでした？」

「……ああ、自分のすることの影響の大きさを考えない日はない。そして、誰もが綺麗な部分だけを口にする中、真実を知るには自分で知ろうとするしかなかった」

「ええ、世界ってそんなもんでしょう。で、俺は自分で覚悟したんです、命を賭ける。そして、今後の人生という配当金を得てみせるとね。そこで謝られたら、ねえ。俺をなんだと思っただんじやない、って話ですよ」

誠実さ、責任感の強さ。

褒められるべき美点だが、俺はいらぬ。

重要なのは誠実さではなく、誠実だと思われることだ。責任感の

強さではなく、請け負った仕事をこなすだけ実力と成してきたと言う実績だ。

責任感ではなく、プロ意識と言ってもいい。

プロフェッショナル  
仕事人としての誇り、責任感なんて聞こえがいいだけだ。自分に責任があるのは自分の仕事の内容だ、関係ないことまで負う責任感なんて自分を潰すだけだ。

上に立つ人間は潰れちゃ行けないんだぞ、桐条美鶴？

「先輩はね、怒るべきですよ。なぜ、自分の指示を聞いて一之瀬の保護に向かわなかった？それがこの体たらくか、とね。一之瀬は意識不明、岳羽は危うく負傷するところだった。そして、命令無視の本人は病院送り、ねえ？ひどくないです？」

「だが、もし君がいなければ我々はやられていたかもしれない。現に私は君に護って貰った訳だし……」

「結果的に助かったんじゃないかって？それは結果論ですよ、なら今後も命令無視を是としますか？」

「そ、それは……」

「まあ、怒られてもあの状況なら俺はまた残るだろうし、先輩を庇うでしょうけどね」

桐条先輩は沈黙する。

なんと答えたらいいかわからないのだろう。

「あと言わせて貰うと、お礼を言うのも間違ってます。俺はろくに戦力にならないから、先輩を身代わりになるのが最善だと勝手に判断したんです」

「……どういうことだ？」

あれ、ちょっと先輩ムツとしてる？



「あの時優先されるのは、戦力的に桐条先輩です。司令塔である上に、一番、余力がありましたから」

「……だからと言って自分が犠牲になってもいいと思ってるのか！」

あ、怒った。

いや、犠牲になるなんてゴメンだけどね。俺にも目的があるし。シヤドウの巣に行きたいなんて、わけのわからないものだけど。俺はなんだか、爆笑したい気分になりつつ、その言葉に返答する。……逆に問いかける形で。

「逆に聞きます、先輩。もしかして、なんの犠牲もなしに終われるとでも？」

「なっ……」

先輩は絶句する、考えたこともなかったと言いたいのだろうか。

おいおい、俺達はいつ死ぬか分からないんだぞ？

「なんです、忘れてるんですか？ 俺達は化け物と戦ってるんです。理由はそれぞれでしょうけど、命を賭けてね。それで、俺達は目的を達成する中で犠牲を一人たりとも出さないとでも？」

「……そうあるべきだし、そう努力するべきだ」

「はい、そうですね。で、そうはいかなかったら？ みんな犠牲になるな、と指示。で全滅を選ぶ？」

「……そうはさせないさ」

「目的を達成するのに犠牲を出さない、出したくない、出せない。そんな覚悟ですか。メンバーの誰かと目的、天秤に掛けられない。ほう、なのに俺達を危険にさらす、と？」

完全に答えられなくなる先輩。

いや、いじめたい訳じゃないんだけど。  
そんな顔しないで下さいよ……罪悪感、感じるじゃないですか。

「すみません。言い過ぎました」

うん、とりあえず謝っておこう。

かなり落ち込んでいる桐条先輩、うわ、もっと本気で謝った方がいいかな？

「……いや、恐らく君の言うとおりなんだろう。本当に不甲斐ない先輩だな、私は」

俺はなにか微笑ましいものを見ている気がしてきた。

「いいんじゃないです？ それで」

「は？」

俺は思いつきり前言を覆す。

「いや、だから。それでいい、と言ったんです。なに言ってるんですか、先輩、まだ子供でしょう。高校生ですよ、未成年ですよ。命を賭ける？ いやいや、無理だって。こんなに前途有望なのに、死んだら損ですって」

「え、い、いや、でも、今……」

「はい、確かに俺達のうち、誰かがいつか死ぬかもしれないです。先輩はその上で、俺達を自分の目的のために集めたんですよ」

「……そう、その通りだ」

「いや、だから。でも、俺、結局了承したじゃないですか。覚悟決めてるんですよ、これでも。自分の意思です、そこで謝るのは俺達の意思とかそういうものをないがしろにしちゃうって言ってるじゃ

ないですか」

いや、自分でもなにしてるんだろうね。

すごい落ち込ませて……んで、コレ？ 本当になにしてんだろ？

「もう少し、力抜きましようよ。んで、楽しんで下さい。先輩高校生ですよ、女子高生ですよ、青春真っ盛りじゃないですか。……確かに入院しましたけど、ま、それも3度もですけど。そんな俺って頼りないです？」

「……そんなことはない、とても頼もしく映っている」

「いや、褒めるのはやめて下さい。俺、今まで内緒にしてたんですけど、実は本気で褒められるの嫌いなんです」

「……なら、私にどうしろと？」

「むしろ罵って下さい。冷たくして下さい。……いや、やっぱり普通で。ヘンな趣味に目覚めると困るんで」

どうしよう、段々素になってきた。

いや、だって。先輩が無防備なトコ見せるのが悪い。

もっと偉そうに桐条を前面に出したり、会長オーラ出さないのが悪い。

駄目だぞ、弱みを俺に見せたら。つけ込むぞ？

先輩はきよんとした後、ほんの少しひかえめに吹き出した。

「なんだ、それは」

「そうそう、そうしていると年相応の普通の女の子ですよ。もっと今後はそうするように」

「だから、それはなんだ」

意外に受けてるな、いや、ねえ。これ、そこそこ本音ですよ。

だって、オーラ出されると俺、逆らえないんで。庶民だから。

「……ふう。謝るのも駄目、礼を言つのも駄目、褒めるのも駄目。私はどうしたらいいんだ？」

「だから叱ればいいじゃないですか、それと……」

「それと？」

「これからもよろしく、ですかね。仲間だし？」

考えもしなかった科白を言われ、また一時停止する先輩。

いや、なにこの生き物。予想以上に可愛いんですけど。

「あの、ヘンに先輩だからって気張らないで下さいよ、近寄りがたいから。ほら、真田先輩ぐらい脳天気でどうぞ」

「近寄りがたい、脳天気、ね。……私達をそんな風に思ってたのか？」

「みんな思ってますよ、学校中ね。岳羽もたぶん。……ああ、真田先輩は違うか。やけにファンの娘とかはクール扱ってますよね、単純熱血馬鹿なのに。しかも、ヘンに娯楽に超飢えてるし」

「私の周りもみんなそう見ているようだな。クールで……なんだっ たかな、ストイックだったか？」

「そんな完璧人間じゃないんですけどね、先輩ら」

「つくづくひどいな、君は」

「俺、口悪いんですよ。知らなかったんですか？」

「いや、まあ……そうだったな」

小声で「小田桐が変わったのはこれか」と呟く先輩。

どこか嬉しそうだが、なに、先輩。……実は罵られるのが好きなん？

あー、すみません、それはちょっと引きます。正直。

「……夜由良」

「はい、なんででしょう?」

「今後は勝手な行動は慎むように。必要以上に自分を危険にさらすことは禁ずる」

「……はい」

「それと、ありがとう。とても助かった」

「いや、だから……」

「部長命令だ……素直に受け取ってくれ」

「……まあ、命令なら? どういたしまして?」

「よし。……で、その。ほら、あれだ。こゝ……これからもよろしく頼む」

なに、この人。赤い顔して言ってるの?

……そんなに隙だらけで、俺に虐めて欲しいわけ?

確かに俺、真田先輩だけいじんのも飽きてきてるけどさ、さすがにそれはちよつと。

「あー、はい。……こちらこそ?」

いや、まあ。どうせ逆らえないんだけどね?

うん、いいよ。なんだってイエスだって言ってるさ。

そこに現れる、真田先輩。

おお、俺的には助け船だ。

「お、まだここにいたのか。夜由良、今日のトレーニングなんだが……」

前言撤回、空気読め。

いや、筋肉アシタはそれでいいんだけどさ。

「明彦……夜由良は病み上がりなんだぞ？」

「いや、別にいいですよ」

「夜由良？」

「……身体なまっていますから、リハビリがてら？ それに強くなり  
たいんで」

自分の力のなさが身に染みたのは、先輩だけじゃないんですよ。

「ああ、三日動けなかったのは大きいが、きちんとメニューは考  
えられているぞ。少しづつ馴らすようなトレーニングをな。……俺も全  
力じゃ動けないからな、丁度いいだろう」

「ええ、頼りにしますよ。筋トレ先輩」

「もちろんだ。これからもお前の戦力には期待しているが、負ける  
気は毛頭ないからな」

「……その言い方だとまるで俺がライバルみたいじゃないですか？」

「……そのつもりだが？」

なに言ってるの、この人。

俺がアンタに勝てるわけじゃないじゃん、どう見てもドの付く方の素  
人だろ、俺。

はっ、なに。頭の中まで筋肉なの、この人？ つか馬鹿なの？

って言うか馬鹿なの？

でも、鍛えてくれることには全く異議がないので、俺がそのま  
ま真田先輩について行くこうとする。……と、桐条先輩が声をかけて  
きた。

「夜由良、無理はするなよ？」

俺はほとんど素で即答する。

「むしろ、先輩がね」

苦笑混じりに桐条先輩は「ああ、そうだな」と頷いた。  
ずいぶん、素直ですね。俺、そういうの気持ち悪いです。

そんな俺達を微笑ましそうに見る、真田先輩を見て俺は。

よし、またその表情を曇らせよう、否、ボロボロにしてあげよう  
と心に決めたのだった。

うん、よし、これでいつも通り。

4月10日 金曜日 、『凡庸詐欺師の二律背反』(後書き)

以上、なぜかすごいデレてる先輩方でした。

すごい強い感じがする夜由良君ですが、実際のところはそこまででもないです。ただ、夢遊病の方の夜由良君は、また状態が違います。

って言うか、能力説明のところ気に入ってないです。なんだかかくどくなかったでしょうか。気になります。



4月13日 月曜日 く 『お疲れ気味に唱う意志』 (前書き)

一之瀬君が出てこない！ いや、入院中だからなんですけどね。

実際、思っんですけど人間って単純にこういう性格だって、言い切れないのがおもしろいとおもっんですよ。

4月13日 月曜日 〳〵お疲れ気味に唱う意志〳〵

4月13日(月)

偽善者でも何でもよい。

表面を作るという事は内部を改良する一種の方法である。

『夏目漱石』

「偽善者であることを不満に思ったことはない、後悔する気もない」  
「って言うか、実際さ。相手にとっては偽善だろうがなんだろうが」  
『どうでもいい』んだよ

「そうだ、相手が喜んでくれる。なら、もうどうだっていいだろう？  
少なくとも俺はそう思いたい」

一人の少年が自己紹介を初める。

誰にか、はわからない。

ただなんとなくその少年には見覚えがあった。

遠慮を知らない、黒髪短髪の……活発そうなその子供に。  
明るい表情のどこか、その奥を読ませない風貌に。

ああ、たぶんこいつは『俺』だ。と直感的になぜかそう思った。

「って言うんだ、俺の名前」

その紹介を受けた『誰か』は、どうしてもよさそうに返答する。  
まるで興味のない風を装って。  
戸惑いなど感じていないかのように。

「ふうん、女の子みたいだね」

繊細さなどないその無神経な返答にも、『俺』はひるまずに『誰か』に話しかける。

「初対面で失礼な奴だな、お前。んで、さっきから一人でなにやってんの？」

「……別になにもしてないよ  
「ふうん？」

その誰かの顔を覗き込む『俺』。

『誰か』はなんだよ、と言うかのようにたぶん顔をしかめた。

「でよ、俺、お前の名前まだ聞いてねんだけど？」

「なんでそんなこと聞くのさ」

「名乗られたら名乗り返すのが礼儀だろ？」

うつ、と詰まる『誰か』。

答えようとしなない。

……それでも沈黙したまま、『誰か』を見つめ続ける『俺』。  
すぐにその『誰か』は根負けた。  
ずいぶんと根性のない奴だった。

「……ぼくは、その、……×××××だけど」

『俺』は思わず笑う。

「んだよ、お前だって女みたいじゃん」

「うるさいな、好きでこんな名前じゃないよ」

口の先を尖らせるように、いじけるように『誰か』はきつと言った。

でも、『俺』は名前が聞けて嬉しそうに言う。

「でも、いい名前だぜ。呼びやすいし。名前だけならな」

「なら、きみだってそうじゃない。変わった苗字だけだよ」

「うるせえな、俺の名前はいいんだよ」

「……なんか理不尽だ」

そう理不尽だ。

理屈なんて通用しない、自分が言いたいから言って、やりたいか  
らやる。

無茶が通れば、道理が引つ込むを素で通すのが『俺』だった。

『俺』はそれが一番の用件だったのだろう、出し惜しみするかの  
ように、一つ、クッションを置くように、本題を切り出した。

「なあ、お前ひとりなんだろ。いつもそうだ」

「……だつたらなにさ」

「友達つて奴に成れねえかな」

「え?」

「俺いないんだわ。なんかいつつもつるむ奴、欲しくてさ。……頼  
むよ」

「え、でも、ぼくは……」

言いよどむ『誰か』。

それは『俺』にとってただの際にしかない。  
つけ込むぞ、と言うかのように笑った。

「よし、じゃ決定な」

「な、なんでさ？」

「なんだよ、駄目なのかよ」

「そつ、それは……」

「ああ、いいよな。じゃ決定で。あ、俺、お前のこと名前で呼ぶからさ、お前も……」

それは遠い日の記憶。

そして、現実かどうかも定かでない思い出。

いつだって思い出は美しい。

遠い思い出だけがいつだって美しい。だってよく見えないから。

だって……よく思い出せないから。

定かでない思い出では、いつだって優しい。自分にとって美しい。

それはもう、思い出すことのなかった。物置にしまっていたよ  
うな思い出。

「なんでいきなり名前で呼び捨てなのさ！」

「そりゃ、お前……」

本当の友達は、名前で呼び合っただぜ？

\*

……目を開ける。

一瞬どこにいるのかわからなくなる。

自分が誰なのか、わからない。

んで、気付く。

なんだ、今までののは夢か、と。

でも、どこからどこまで？

非現実的な部分が全部ならペルソナとか、あの辺から？

俺がバイト全部やめて、朝飯作ってるとか、あの辺も？

……朝飯？

あつ、と俺は飛び起きる。

やべ、味噌汁作らなきゃ！

……つて、俺はオカンか！

「おはよう、今日も早いな」

「おはようございます、真田先輩」

俺が朝飯の準備をしていると、キッチンへわざわざ声をかけに真田先輩が顔を出した。

どうやら、トレーニングウェアを着ているようだ。

「今、帰ってきたんですか？」

日課らしい早朝ランニングだろう、と勝手に推測する。

影時間にも走りこんでるのにないつ寝てるのかは謎だ。

ちなみにそのトレーニングウェアは俺と色違いでおそろいだっさりする。真田先輩が赤で、俺が黒。

……どこのカップルだよ。おい！　なんで俺が野郎とペアルックせなアカンのじゃ！？

でも、せっかく買ってくれたので着ないわけにもいかん。

まあ、かなりいいものらしく着心地はいいし、保温性抜群の代物

で、俺も着た瞬間はテンションが、まあ、その？ …… ちょっぴりあがっちゃったりもしたんだが。

……その時の『してやったり』みたいな、この野郎の顔がね、まあ、ムカついたね！

それからより一層、隙あらば虐めようところろして日々研鑽しているわけです、はい。

「ああ……今からシャワーを浴びてくる」

「ちょうどいいですね、きつとあがる頃には出来てると思うんで」「そうか、楽しみにしてるぞ」

そう言っつて、爽やかに去っていく真田先輩こと、別名、筋トレ王子。

いや、呼んでるの俺だけなんだけどね。

さらに余談だが、真田先輩はボクシングの体重調整をする際には、トレーニングウェアの下にトレーニングウェアを着るって言う、玉ねぎ式サウナスーツ法をするらしい。

昨日のトレーニングの時、超楽しそうに言っていました。

前々から思っただけけど、あの人、トレーニングに関する話をする時、まあ輝いてるよね。楽しそうだよ、嬉しそうだよ、誇らしげだよ、俺こんなこと知ってるぜ、すげえだろ、と言わんばかりだよ。巷で言う、どや顔ってたぶんアレを言っただぜ？

……はっ、まったく興味ねえよ、馬鹿が！

あるわけねえだろ、別にマッチョになりたい訳じゃねえよ！

つか、なに？ あいつ、合コンの場で筋肉談義始めんばかりの勢いじゃね？

正直、あの笑顔を見る度に、叩き潰そうかと思えます。

……物理的に不可能なんですけどね。

いや、あの筋肉馬鹿のペルソナの弱点は確か氷結属性だったから、  
隠密潜行ステークによる不意打ちからの、桐条先輩の氷結フローズンに同調増幅アップに乗せ  
からの、金属バットで必殺『脳天葬らん』で追撃……ならいけるか？  
どうかな。……奴の頭には脳みそではなく、筋肉かプロテインバ  
ニラ味のうちどちらかが詰まっていると思われるから、ダメージは  
低そうだな。

普通に筋肉と言う名の装甲がない、無防備な部分にこの包丁で…  
…。

「なにをブツブツ言ってるんだ、夜由良？」

「ひいつ!?!」

うわ、ごめんなさい。ごめんなさい!

殺そうとしたわけじゃないんです、ただ滅殺したかっただけなんです!  
す!

なんか、あの笑顔うぜえな、って思ってただけで他意はないんで  
す!

……って、なんだ。桐条先輩じゃん。ビビッて損したわ。

「おはようございます、先輩!」

それはそれは、輝かんばかりのいい笑顔で言ってみる。

挨拶って大事だからね?

「ああ、おはよう。って、いや、確かに挨拶は大事だと思うが、ま  
さか今の一連の明らかに不審な言動をそれで流せると判断してるの  
か?」

「不審? いえ、アレです。ちょっとテンションが高いだけですよ、  
せくんぱい」



具体的には殺意が原因で高いだけですよ、はい。

「……それだと、君はテンションが上がると物騒なことを吹き始める人間になるが」

「あ、はい。それでいいですよ」

「いいのかつ!？」

「まあ、あれですね。強敵を倒すための戦術を構築するのは一つの日々の努力、研鑽って奴じゃないですか」

「朝食を作りながら、か？」

「いつだって考えてますよ、俺は」

奴を倒すための手段はいくつあってもいいからね。

ちなみに、土下座からの不意打ち、毒を塗った画鋲を仕込んでの握手して不意打ち、プロテインに下剤を混ぜてトイレに爆竹仕掛けてからの不意打ち、などが他にあります。

正々堂々正面から？ いやいや、俺あの人のパンチ喰らったら死ぬから。骨折やら打撲どころか、いい感じで涼しげな風穴あくからたぶん。

それくらいなら、笑顔で素敵に堂々と罠を仕掛けるね。

……あだ名が肋骨じゃなくて、風穴になるのはちよつとさすがに遠慮したい。

「……いや、だから……やっぱいい」

「途中でやめないで下さいよ。言いたいことあるなら言って下さい」

「いや、いい。正直……自分がものすごく無駄なことを言っている気がしてならないんでな」

「おわ、なんか見捨てられた感満載ですね」

うんうん、なんか一晩でかなりフレンドリーになった気がする。

いや、俺の方がね？

……先輩がじゃなくて、あくまで俺がね？

あ、そついや、俺、今日、何人分のご飯作ればいいんだろう？

「あの先輩。今日、一緒に朝ご飯食べれるんですか？」

たまに先輩はいらない、と言う時があるので聞いてみる。

すると、先輩が言いづらそうに目をそらした。

「いや、それがそうもいかないんだ。……今日は少し、桐条の方の用件が、な。学校に向かう間も車の中で書類を読んで過ごすことになる」

「……ちよつと残念ですね。あの、夕飯は？」

「……今日は帰りが遅くなるから用意してくれなくて構わない。おそらく外で済ませることになる」

「あ……じゃ、はい。……わかりました」

なぜか互いに沈黙する。

え、いや、そんなに俺は残念ではないんだけど。

……なんだろ、この空気。え、コレ、俺のせいですか！？

「あ、あの先輩」

「……なんだ？」

「花、ありがとうございます」

そついや、まだ言ってなかったよな。うん。

「入院してた時の花束、先輩が持ってきてくれたんですね？」

「ああ……正直、ああいうのは初めてでな、アレでいいのかはわからなくてな」

「おお、やっぱ先輩だったか。  
よかった、当たってて。」

「明彦と一緒に買って買ったんだ。お互いそういう経験があるわけではなかったから、結局店員に聞いたよ」

「は？」

「今、おい。なんか聞こえたぞ？」

「もう一回、ちょっと確認。」

「誰ですって？」

「いや、だから明彦と一緒にだな」

「……ほう」

「どうやら、折檻はきつめがお好みなんですかね？ あの筋肉は。」

「実質、貰った奴は全部野郎じゃないですか。」

「八つ当たり？ ふん、それで結構だ。戦いなんてものはそのほとんどが八つ当たりだ。復讐なんてのは正当な八つ当たりにしかならない。……とか、言ってみる。」

「まあ、残りの一つの花束が俺の予想通りの相手なら、だが。」

「だが、すまない。見舞いには、一回だけそれも僅かな時間しか行けなくて、な」

「え？ ああ、だから今まで言わなかったんですか」

「身体の方、あまり無理はしないでくれ。その様子なら大丈夫そうだが」

「ありがとうございます、なるべく気を付けますよ。先輩もお体には気を付けて」

「ああ……では行ってくる」

行つてらっしゃい。と手を振る俺。

くすりと、声もなく笑つて桐条先輩は歩いて行つた。

うん、さて……。

今日も頑張ろう。

この日の登校は真田先輩と一緒にだった。

これはあまり珍しいことでもない、と言つより住んでいる場所が同じで、乗る乗り物もモノレールなんだから普通は一緒に登校するようなことになるだろう。

生活のリズムが違うとか、わざとずらしているとか、そういうことがない限りわね。

んで、俺は岳羽と一緒に登校したことは一度もない。

なにかと距離をとられてはいるとは思っていたけど、退院してからはますますだね。

なんとなく理由はわかるけど、とりあえずあの娘は俺が何かを手伝おうとしても、まず間違ひなく断る。

一之瀬のこともそうだったけどさ、他人の手は借りたくないようだ。特に俺や先輩方の手は。

ふむ、どうしたものかね？

信頼以前に、頼られないんじゃない手の施し用もない気がする。不信なら態度で挽回すりゃいいんだが、まるで俺に頼るのが犯罪みたいに忌避してる。

……潔癖性だねえ、ある意味で。

まあ、いくつか手も考えてるんだけどさ。あまり実行したくはない、他人任せだからね。でも、それでも……。

ないよりは、いい。

「どうした、夜由良。深刻そうだな」

「そうですか？ いや、それほどでもないんですが」

この人に相談……しても無駄だろうな。

あまり他人の様子から何かを察する感じでもない。

いや、しても先輩の場合、それは本人が乗り越えるべき問題だと考えそうだ。この人の生き方からするとそれが自然だろう。まず、戦うべきは自分自身みたいなの、ね。

それも一理あるんだけどね、実際。

「いやね。あんまり人のこと構わない方がいいのかな、って思いまして」

「……なんの話だ？」

「岳羽です、あんまり寮になじんでないみたいで。まあ、仲がいい相手がいるわけじゃないんで仕方ないんですけどね」

実際、桐条先輩と真田先輩とは友達になれんだろう。  
なれたら、そりゃアレだ。どう考えても変人の域だ。

わりと常識人の岳羽には無理だろう、もちろん俺ともそんな関係にはなれない。

「……アイツがなじんでない、か？ 今朝も朝食は一緒に摂ってただろう」

「ええ、そうなんですけどね」

そこそこ岳羽の味の好みもわかってきたんで、いい感じでおかずも用意出来てると思う。

本人には聞いてないけど、複数のおかずを用意したときの減りが違うわけだ。

でも、なにかな。時々、おかずを食べたときに……顔をしかめているような？  
それも自分の好きなものであれば、あるほどに。

「つか、もう俺の作ったものに不満があるなら言っただけでいいんですけどね」

作ってもらってるから遠慮して言わないのか？  
実は俺が勝手に誤認してるだけで、不満たらたらなのか？

「いや、美味いぞ、実際。そりゃ店には負けるだろうが飽きない味付けではある」

「味付けって、バニラ味やらバナナ味やらの異物プロテイン混入してる人がなに言ってるんですか。絶対味変わりますよね、アレ」

「……食事モトレーニングの一環だぞ」  
「はいはい」

昨日もこの人、牛井に入れてたからな。  
生卵のトッピング付きで。

そう、昨日の晩は先輩とトレーニングのついでに、海牛って言う牛井屋で奢って貰ったのだ。どうやらお気に入りチェーン店らしい。

とても美味しく頂きました、って、つい先輩には野菜も食べる、プロテインを堂々と入れるな、と説教してしまったけどな。

なんか俺に「うるさいな」と文句言いながら、どっか嬉しそうにしてたのがとても気色悪かったです。

……なんだろね、あのリアクション？  
するとしみじみと俺の顔を見ながら真田先輩が言う。

「……やっぱり似てるな」

「は？」

「いや、なんでもない」

そのまま詳しくは語らない真田先輩。

え、なにこの人。

……なんか怖いんですけど。

「にしても、昨日は成功だったな」

「え？ ああ、そうですね」

成功、とはペルソナ召喚のことだ。

ようやく召喚を意図的に出来るようになったのである。

これでぎりぎり、足手まといではなくなったわけだ。いや、前線はきついんだけどね。

そして、試したことはもう一つ。同調増幅アップの使用実験。

俺が真田先輩のペルソナの力に同調し、その力を高めることが出来るのか、と言うもの。

桐条先輩には無断で、おもしろそうだからって言う、真田先輩のノリに付き合ってみた。

って言うか、いや、まあ、やるだろ。普通。

桐条先輩に断ったら、病み上がりだからどうのと、面倒な話し合いが始まるからな。説得する自信はあるけどやりたくない。

なんで、つい、こうね。真田先輩責任でやってみた。

結果から言えば、成功。

意図的に使えると確認出来た上に、桐条先輩のペルソナとだけって言う限定技能でないことがわかった。

これで少しは戦えるわけだ、まあ、一人じゃ雑魚だけどさ。

「なににせよ、作戦の幅が広がりますね」

「ああ、あとは一之瀬が目を覚ませばいいんだが」

「アイツの力は半端じゃないみたいですからね……ただ」

一度、暴走した力だ。

真剣な話、いったいどこまで信用出来るか。

最悪の場合は……。

「また考え込んでるな」

「先輩らが考えがなしだから、俺が代わりにやってんですよ」

先輩らに出来ない、岳羽にも出来ん。じゃあ、俺がやるしかない。

俺だって好きでやってんじゃないんだよ。

真田先輩は平然と言葉を返す。

「そりゃ悪かったな。……だが、あまり背負い込むなよ」

背負い込む？ 俺が？

……まさか。

「そんなんじゃないですよ、つか先輩らなりふり構わなすぎなんですよ。もっと慎重に行きましょう。岳羽だって、ろくに訓練つんでないんだし」

「アイツはアイツでちゃんと自分でやってるさ。自分の力だな」

「……やっぱそれですか」

気付いてはいるんだ。

一人で部屋に籠もって、ずっと召喚訓練してるの。



「俺には訓練付けてくれたじゃないですか」

「確かに誘ったが、最終的にお前が自分で希望したからだな。岳羽は違う」

「それはそうですね」

「お前は自分で考えて俺とトレーニングをした。実戦まで召喚は出来なかったが、出来ないなりに戦い方を覚えた。結局、ああいうのは自分で乗り越えるしかない。だろ？」

「……そうなのかもしれないですね。でもみんなが強いわけじゃないんですよ」

一人で乗り越えられる人間ばかりじゃない。

俺は……一人で生きようとはしてる、でも乗り越えられたものがない。

弱い、人間だ。

「俺だって強い訳じゃないさ、俺はまだまだ弱いよ。だが、弱いからこそ強くなるために努力出来る。自分に何が足りないか知ることが出来る。より強くなるために、な」

「……で、そんなに強くなってどうする気ですか？」

「どうって……」

「なにか目的でも？」

「………目的か」

先輩はそのまま深く考え込み始めた。

いや、アンタ。今さっき、俺が考え込むこと自体否定してなかったか？

……なんだ、この人。

まあ、いいか。この人が変なのは元からだし。

俺は誰になんと言われようが、俺に出来ることしかできないし、それ以上のことはどれだけ頑張っても出来ないんだから。自分のやりかたで、せいぜい頑張るとしよう。

それからモノレールに乗って、間もなく学校に着き。

真田先輩とは玄関で別れた。

あ、そっぴや、もしかして俺、クラスでも過労扱いなのかな？

……生徒会に情報流れてんならそうなってるんだよな。きつと。

そう、小田桐からのメールで知ったんだが、俺はどうやら過労で倒れた、で統一見解なされてるらしいです。

ちなみに小田桐には昨日のうちに連絡入れました。

退院したことで、今日学校に来れることぐらいは伝えて置いたのです。心配してくれたみたいだからね。

そして、噂の出所が桐条先輩だと発覚、くそ、余計なことを！話が大事になってるじゃねえか！

まあ、いいや。

あんまり嘘付くの得意な人ではないからね。自分からは言わないだろうけど、人に聞かれたらそう答えるだろうな、とは思っよ。

あの人の場合は、さ。

まあ、どうせクラスメイトに俺の心配する奴もわざわざ声かける奴もいませんよ。

なんてね、思ってたんです。

んで、教室に入っつてのかけられた第一声。

「あの、夜由良君。学校来て大丈夫なの？」

なんかかなり大人しそうな感じのショートヘアの女の子に声を掛

けられました。

真面目そうなんだけど、きちんと制服着てない。ちぐはぐな娘。どうきちゃんと制服を着てないかって言うと、女子の制服にはリボンがあるはずなのに付けてないし、制服の下には堂々と寒色系のセーター着てるし。

ああ、もう、風紀委員に喧嘩売ってるよね？

いや、うちの会長なんかヒールブーツ履いてるくらいだから、それはそれでアレなんだけどさ。別に校則違反ではないし？

そんなこの娘の名前は、そう……確か。

「ああ、もう平気だよ。ありがとう……山岸さん」

山岸風香。

彼女は今回クラスが一緒になっただけの女の子だった。

今まで同じクラスだったわけでもなく、話したこともない。

特に目立つこともない、俺。そして同じように特に目立つたことをしている記憶がない彼女。

今まではまったくの関わりも、接点もなかったはずの少女。

それがなぜ？

あ、そんな相手の名前をなんで覚えてるかは愚問だ。

一度聞いた女の子の名前と誕生日、好きな物などは忘れないのは当然だろう。

「よかった、ちょっと心配してたんだ。……いきなりだったから」

静かに笑った、どこか儂げな笑顔。

たやすく壊せてしまえそうな、表情。

なぜか、胸が締め付けられる。

……なんだ？

「あー。わざわざどうもね」

「え、いや、あの。……別に礼を言われることでもないから」

お礼ならさつきも言ったんだけどね、聞いてなかったわけ？  
でも、なんでこの娘が俺にわざわざ？

「あの、わたし、それだけだから」

「ああ、うん」

適当にそう言って送り出す。

なんだろう、まったく掴めない相手だったな。

俺は自分の席に座る。

隣の席にドカッとでかい態度で勝手に座る、女子。

真南、ほぼ唯一の俺に用もなく話しかけてくるクラスメイト。

あとは、せいぜい生徒会関係で話しかけてくる奴ぐらいだった。

……寂しい高校生活、送ってんなあ俺。

いや、前は、てか最初の頃は違ったんだぜ？

……去年、遊びに誘ってくる奴全員バイトで断ったらこうなった  
んだ。

かつ、悲しくなんかないやい。俺は好きでやってんだい！

「やつほー、元気そうじゃん。夜由良」

「ああ……まあ。見ての通りだ」

「過労って聞いたけどさ、いったいなにしてたわけ？ ……またバ  
イト？」

「まあ、端折って言ってしまえばそんな下」だな

かなりほぼ全部端折ると、な。

「かわんないねえ、相変わらずひどい生活送ってるわけだ」

「ひどい言うな、自由を満喫してんだ」

「働きづめの人生のどこが自由なんだか」

「ほっとけ」

俺は好きでやってんの。

そう、好きで……やってんのか？

少なくとも、好きで命賭けてる訳じゃねえなあ。

「ま、実際、お前の言うとおりかもな。でも、例えそうでも自分で選んだ道ならそれは自由だろ」

「わかんないよ、なんでそんなことするの？ 働かなくても生きていけるんならその方がいいでしょ、それで好きなこと出来るならさ。お金があってもしたいことに時間を使えないなら、それは自由じゃないよ」

「まあな、俺もそう思う。でもなんか、人の金で生きていきたくないって思ったんだよ」

「……んー、やっぱり理解出来ない」

「それでよくね？ 俺は俺、お前はお前。だろ？」

「……なんか遠回しにもうどうでもいい、って言われてる気がするんですけど？」

「そうは言ってねえよ」

別に他人なんか理解しなくていいって思うだけだ。

たぶん、したらしたらでめちやくちゃ面倒だしな。

……わかってるさ、自分がガキなのは。

他人に生かされてる自分が嫌だ、って言ったってそうじゃない人間がないのはさ。

「理屈じゃないんだよ、なんかそう思ったんだ」

「男子ってわけわかんないね」

「男子でくくるな、みんながみんなそういう訳じゃねえだろ」

でも、今の生活。普通に考えたら人の金で生きてるよな。  
いや、その分働いてるんだけどさ。

「夜由良」

「なに？」

「もしかして山岸と仲いいの？」

「いや、話したのたぶん初だと思っけど」

たぶん、俺の記憶が正しければ。

「ならいいんだけどさ、あんま山岸と関わらない方がいいと思うよ」  
「なんで？」

「ん〜、それはそのうちわかるんじゃない？ でも、ま、それが山岸のためでもあると思うな。ヘタに仲のいい男子がいるってのはさ、  
ね」

「どういことだよ」

「男が首突っ込んでよくなることなんて、世の中にはなんもないっ  
てこと」

ひどい理屈だな、それ。

まあ、いいさ。元々首突っ込む気はないしな。

たいして知らない人間のことをせつせと調べる趣味もない。  
だから……。

「ホント、なんにもないんだから……」

真南の繰り返すような小さな呟きは聞こえなかったことにした。

\*

同日、放課後生徒会室。

生徒会の活動日は基本的に月・水・金と、曜日で決められている。内容は基本的には定例会、つまり各委員会の活動や今後の生徒会全体の予定について確認するわけだ。

もちろん、なんらかの行事がある場合はこの限りではないし、三役と呼ばれる重職、会長、副会長、書記は一般役員と会議する前に、その打ち合わせのための会議を行うことがある。

三役会議と呼ばれるそれは、わりあい頻繁に行われているが一般役員はあまりその存在を気にしていないし、下手をすると知らないだつて自分が活動するのに関係ないからね。

自分達が会議で話し合う前に、きちんとある程度の枠組みを誰かが考えて話し合つて決めている、なんて言うのはあまり興味のあることがらでもないだろう。

でも、物事つて言うのは、実際始まる前には既に自分の知らないたくさん人の頑張っている人がいる訳だ。

自分の知らない間に、誰かがいつも頑張っているから日常を送れているっていうのは、別にドラマチックでもなんでもないことだつて言う事実は案外、みんな知らない。

で、そんな事実を知っている数少ない人間、ようするに俺、夜由良優の役職はなにか。

三役じゃねえよ？ 入ったばっかだしね。

じやなにか、聞いて驚け。『副』書記。

……そんなもの、あるのかつて？

ねえよっ！ あるか、そんな役職聞いたことねえよ！

……つまりはあれなんだそうだ。

もうすこししたら、3年生は引退して、2年が上に立つ。桐条先輩だけは自分が在学中の間は会長職を務める気らしいんだけど、そんなもの特例中の特例な訳で。

漫画とかじゃ、卒業ギリギリまで3年が会長やってるけどさ、そんなことされたら重役が誰もいない空白期間が出来るじゃん。ちょっと現実的に問題なわけだよ。

部活動とかと同じ、シーズンが終わったら籍は置いて重職は降りる。代替わりは案外早いわけ。

個人的には桐条先輩がいつまでも生徒会で会長してることには、わりと問題あると思ってる。それだとみんな成長しないしね。でも、たぶん、あの人が会長職を続けるのは責任感と言うよりは……。

まあ、いいさ。その中で桐条先輩は、俺を次期書記にしたいんだそうだ。そんなわけで本来はありもしない重役職に俺はついている。仮に、ってことで。

おかげ三役会議っー、重役会議にも参加させられてるし。

あー、まあ、現実的な問題として、俺はどこの役職にもつけようがないのだから仕方ない気もする。……現状じゃ空きがないんだよ。少なくとも3年が引退するまでは、ね。例えば小田桐は副会長だけでなく、風紀委員を取り仕切っている。重役が他のと兼任なんて早々ないんだけど、役員がそれぞれ、なんらかの委員会を持って働くわけ。でも、俺はない。

なんで、とりあえずここに就けてるって見方も出来る。

少なくとも、他の役員はみんなそう思ってるだろう。



で、なにが言いたいかというと、俺はヒマだと思われてるわけだ。もう一度言う、思われてるわけだ。

「それで？」

「君には1年の育成を頼みたい」

なんでもないことかのように言う小田桐。

ちなみに今日は桐条先輩不在もあって、会議なしです。

それぞれが事務活動してます。

「……ほう」

「そんな顔をするな、そうそうマニュアルの件だがおおそアレで通った。今後は僅かな文章表現の訂正の後、アレをベースのちにしていくつかバリエーションを作成してもらうことになる」

「あー、そうですか。で、誰に？」

「君以外にいるわけないだろう。わからないところは聞け、たいていのことなら答えられる」

「そうだね、去年もお前副会長だもんね。うわあ、超頼りになるわあ……いやいや、ならお前やれよ」

「あのな、僕は風紀委員の方もやらねばならないんだ、1年が入ってくるからな。全委員長が委員会を近々開いて顔合わせしなければならぬ。それには活動予定のプリントも作る必要があるし……」

「はいはい、俺だってわかってるけどな。あと言っておくが1年に仕事教えるなんて無理だぞ？」

「いい機会だと思うがな、なにも知らない1年にも理解できるマニュアルを作るんだろう？ 間近で見聞けて一石二鳥じゃないか」

「は？ 誰が言ったんだ、そんな面倒なこと」

「お前だ、たわけ」

うっ……小田桐が素っ気ないです。  
なんかマジで遠慮を知らない物言いになってます。  
前はガチガチに真面目君でかなりの堅物だったのに、なんで若干柄が悪くなってるんだ。  
うむ、最近の若者の乱れっぷりは半端じゃないですな。真に遺憾であります。

「あとな、いくつか委員会のプリントも作成してもらおう」  
「まだやんの!？」

「作成内容は去年の資料を閲覧すればわかる。それとほぼ変わらない」

「はあ、どこにあんだよ」  
「それはだな、確か……」

小田桐が生徒会のロッカーに向かったので、俺も付いていく。  
どれだよ、なんか色々ファイルあるけどさ。

「去年の年度のファイルからだな……」

ちよつと探すのに戸惑う、小田桐。

「あのさ、年度ごとじゃなくて委員会ごとにファイル作ったらどうだ」

「……それはどうかな、行事とは違ってそこまでプリントの枚数はないぞ?」

「いや、でも時間かかってるじゃん。だいたい委員会の歴代資料なんてその委員会の委員長しか見ないし……せめて行事専用のファイルはつくるつよ」

「そうだな、それは必要になりそうだ」

「どうせ俺らが先に三役会議するんだろっけどさ、資料まとめて会

議用のプリント作る羽目になるんだから使いやすくしないと」  
「で、誰がやるんだ？」

……俺以外なら誰でもいいよ？

「もう、いつそデータで管理しようぜ。データをまとめて管理するサーバーぐらい用意できるだろ。この学校、パソコンも揃ってるしさ、どのパソコンからでも役員が資料を検索できるようにしようよ」  
「それは便利だろうが……」

「望むべくはあれだね。外部からでもアクセス出来れば、うちの分寮でも作業が可能になるぞ」

「いや、だからな。結局それは誰が……」

誰でもいいって、そんなの用意すんのはさ。もち、俺以外なら。

つか、俺にできるわけないじゃん。てか、一人じゃ無理！

「一年の手を借りてもいいぞ」

「無茶言つなよ……なに、1年にその辺の知識豊富な奴が転がってるの？」

「君が転がせ、で大きくして拾って来い。その辺は育成係の仕事だろっ」

「そんな係つくんなよ！」

「どんだ俺に仕事させる気だよ。」

「過労死すんぞ、マジで。マジじゃねえぞ、俺はマジで！」

「はあ……出来る範囲でいい。今すぐ全部やれとは言っていないだろう、ゆっくり順番に少しずつやればいいだろう。君一人に任せるとも言っていないしな」

「なら最初から早くそっついえよ」

「君が勝手に解釈したんだろう」

そう言っつて、ファイルから何枚かのプリントを抜き出す。  
俺はしぶしぶそれを受け取った。

仕方ねえな………なに見た感じ、年度とか、委員長の名前とか変えればいいんだろ。余裕。

年間活動予定の変更点はちょっとわからないかな、まあ、いくつか確認するか。

「また倒れられたらかなわんからな、きつくなったら言え」

「なんだよ、それ」

「もう一度言うが、誰も君1人に働かせようなんて思っていないんだからな。君が僕を1人で働かせようとしないうちに、な」

「……へいへい、言われなくても無理なんかしませんよーだ」

可能なら無料で働きたくなんかないしな。

っつて、ああそっぴや忘れるトコだった。

「あー、俺の病室に見舞いに来たの、お前だろ？　ありがとな」

「……なんだ、いきなり」

「いやね、花束がさ。なんかお前っぽくなって。違うの？」

「どの花束かは知らんが、確かに持っていったな」

やっぱな、あのきちんとした花束、お前か。

似合わない？　いや、コイツはこう見えて、超友情に厚い奴ですよ。俺と違って？

俺、仮に役員の誰かが死んでも、別に葬式すらも行かないな。自信あるもん。

うん、偉いよな、小田桐。ちよっと尊敬。

「嬉しかったよ、実際。お前、なに、ああいうの慣れてるの？」

「慣れてる？ 常識の範囲で選んだまでだが、変か？」

「いや、そういう訳じゃないさ。花が好きな奴はいても、花束を選びなれてる奴はそういないと思ってな」

「ああいうのは基本は1つだ。1つを主役にして、引き立てるように選んでいく。まあ、別に同じのを束ねてもいいと思うが」

「お前の常識の範囲何気に広いよ。……ああ、そっぴやお前料理とかは出来るの？」

なんとなく興味が沸いたんで聞いてみる。

「それは誰だって出来なくはないだろう、本の通りにやれば失敗はないし、普通にやっても、味はともかく食べられるものならば問題あるまい。それがどうかしたか？」

「いえ、とても常識的な答え、ありがとうございます」

ぶつちやけ、つまらない答えです。だめだめだね、君。

「なんだ、それは」

「……『なんだ、それは』って、それはさっきの俺の台詞のパクリですかね」

無視して机に向かう小田桐。

あれ、俺軽くあしらわれてね？

やばいなあ、俺、あしらわれるの嫌いじゃないんだよなあ。

くそう、一方的に好感度あげるぞ、この野郎。

俺は席に着いて、生徒会の備品であるノートパソコンを広げた。隣にいる小田桐も同じように作業を始めるんだろう。

「つて、1年来なくね？」

「確かに。ホーームだろうか……ああ、生徒会に入るための手続きかもしれないな。だが、もう来るだろう」

「……だな」

まあ、考えても仕方ないことなので、俺はパソコンの電源を入れ資料に目を通し始めた。

たいして時間はかからなそうな作業だな、となんとなく当たりをつけて。

\*

1年生は生徒会室からは若干離れている。

生徒会室の位置は実は2階にあり、2階は2年生の教室が詰めている。位置的にはおおよそ、Fクラスの前だ。

3年生は3階。対して、1年生は4階。

降りるだけならたいした距離ではない。

1年がここまで時間が掛かったのは、ホーームでの事柄のせいだ。

そう、実は今週から部活動、生徒会役員、委員会の募集が始まったのである。

月光館学園では基本的には生徒個人個人の意欲を重視しているが、こと部活動に関してはその制限が大きい。部活動の募集には時期があり、その締め切りが存在するほどに。

人気のあるもの、レベルの高いものは人数が集まりやすく、その締め切りも早い。

これは部活動に属している全員がきちんと支援を受けられる体制をつくるため、とされている。が、必ずしも生徒受けがいいかと言

われれば微妙なところだ。

とはいえ、例外がないわけでもないのだが、あえて述べることはすまい。

ほかに制限と言えば、過度な部活動の勧誘は禁止されていることだろうか。

少なくとも廊下で呼び止めたり、先輩が教室を訪問したりすることはない。

生徒自身の意志を尊重することになるとは限らないからである。

その代わり同好会は規制が緩く、結成するのは簡単である。希望する人間が1人でもいれば認められる。場合によっては、きちんと許可さえ取れば教室の使用すら認められる。

一方、そうそう学校から援助資金が降りることはないと言う側面もあるのだが、生徒の自治に任せる特色が強いこの学校ならではの言えるのではないだろうか。

そのために自治を任せられる生徒会の負担が大きいことは、夜由良優が実感する通りである。

生徒会に限らず、この学校では教員は陣頭に立って動くものではない、むしろ行事などの活動では生徒の補佐としての面が強い。

これは桐条美鶴が会長になってからより一層強くなった部分で、それまではまだ教員の力が強かった。

古文担当にしてEクラス担任の江古田などは、古くからいることもあって、そのことに關して色々と思うことがあるらしく、その思いをこぼしているのが生徒に目撃されているらしいが、そこは今回特筆することではない。

自ら生徒に対し、積極的に動く教師がいることも、それがどういう意味で動くものであるのかも今回は特筆することではない。

今回は、そう伏見千尋と言う少女の話だった。

そう彼女は始業式の時、自分の教室がわからなくて夜由良に助けられたあの少女であり、思い切って生徒会に入ったもののその夜由良本人が入院していた、と言う微妙に間の悪い例のあの一年である。

もっとも生徒会に入った目的は夜由良ではなく、自分を助けられた夜由良のように、はっきりとした頼れる人物になりたい、今の内気な自分を変えたいと言う願いによるものだ。

現実に夜由良がそんな立派な人物かは、各々の判断に任せたい。

事實はどうあれ、人がその内心でなにを考えているか、普通はわからないものなのである。

そんな彼女は外見からして、内気で大人しそうである。

眼鏡を掛けたストレートの長髪、前髪は左右にきつちりと分けられたワンレンと呼ばれることもある髪型だ。髪の色は黒ではないが染めたのではなく、もともとの淡い色をしている。

それだけなら内気と言うイメージに必ずしもなり得ないが、常に若干俯いたような姿勢であり、すこし人の顔色を上目遣いで伺いながらいるような風なのだ。

その上、男子とは全く話せないと言うことから、周囲からは非常に取っつきにくい人物であると思われる。

しかし、それを差し引いたとしても、彼女達1年にとって、2年生の廊下を通ることはなかなか抵抗のあることである。

なにより、まだ半月と入学してから経っていないのだ。

ろくに行くことのないよくわからない場所、それも自分の先輩達が大勢いる……内気な彼女にとっては十分に魔境であると言える。

そのため、彼女がその場所に行くには思い切った決意が必要だっ



た。

最初の一步を踏み込む前に、伏見は必ず心の中で……。

「よしっ！」

と気合いを入れる。

先日の生徒会室に最初に行ったときもそうだった、たった一人で強く時間を掛けて決意するのである。人知れず。

「よし」

「っ!？」

と、呼びかけと共に肩を叩かれて全身を震わせて驚く伏見。

「え、なに。そんなに驚かないですよ」

伏見が振り返るとそこには見覚えのある女の子がいた。

知り合い……と言うほどのものでなく、彼女は……。

「キミ、あれでしょ。この間、生徒会に見学に来てたでしょ」

「あ、はい」

「マキも同じなんだ。隣に座ってたんだけど覚えてない？」

その女の子は自分を指して、マキと言った。

伏見はその言葉に頷く。

「ええ、覚えてます。お友達と一緒にでしたよね？」

「そうそう。って、同じ学年なんだからフツーにタメでいいっしょ。

いやさ、あの娘はやっぱいい、ってやめちゃって結局わたし一人になっちゃって」

「そうなんですか」

「いや、だからさ。タメタメッ！」

とりあえず訂正して言い直す、伏見。

「……そうなんだ」

「うん、いやあマキさ。こう見えて中等部でも役員だったんだよ、見えないっしょ？ よく言われんだ。キミは違うでしょ？ 誰かに誘われたクチ？」

「……ううん、自分でちよっと」

「へえ、すごいねー、えらいねー。……実はちよっと変わってるって言われない？」

「あの」

「まあいや、そんなことよりここでなにしてるの？ ここ階段だよ？」

「いや」

「あー、そっか。ちよっと入りにくかったんだ。なら最初から言うてよ。うちが連れてってあげるからさ、生徒会行くんでしょ？」

「あ……」

「ほらほら、おいでって。ほらっ」

すっかり流されている自分にうちひしがれそうになりながらも、なんとかそのマキと名乗る女の子に付いていく伏見。

正直、混乱して話についていけないのが本音である。

「どもー、よろしくお願いしまーす」

大声で元気に生徒会室に入っていくマキ。

それを追う、伏見。

「……おっ、お願いします」

中にいる役員はみな、書類と向き合いながらそれぞれバラバラに話し合っていた。

一番、入り口にいる二人の男子学生が向き直る。

「む……1年か」

オールバックで目つきが鋭そうな男子。

鋭そう、と言うよりは意地が悪そうにも見える。伏見にはなじめなさそうな人物だった。

先週の紹介によれば、彼は確か小田桐秀明、2年生でありながら、既に副会長を務めていると聞いている。

そして、その隣にいるのが……。

「あ、なんだ。来たじゃん。ほら副会長、相手しろよ」

どこかやる気なさそうな様子で隣にいる小田桐を肘で小突く。髪の毛の短い黒髪の男性。

先週はいなかった人物であり、同時に伏見が生徒会に入ったきっかけでもある人物。

名前は、そう『やゆら』であっているはずだ。

そこに物怖じせず、真っ先に挨拶するマキ。

「あ、どもー。副会長さんですよっ。マキです、あ、フルネームだと横田マキね？」

「……副会長の小田桐秀明だ」

「どもー、ユウです。あ、フルネームだと夜由良優ね？」

不機嫌そうになる小田桐と、へらっと笑う『やゆら』は非常に対

照的だった。

「あー、マキのマネしないでくださいよー」

「ああ、悪い悪い。副書記のヤ・ウ・ラ・ユ・ウね。言いくいだる、おかげで自己紹介は苦手だよ、油断すると噛んじやうからね」

「変わった名前ですねー、ってか、もしかして過労の人？」

「え、なにソレ。俺そんな覚えられ方なの？ マジで!？」

「そりゃ、初日からですからねー」

「あーじゃそれでいいや。そうそう、すぐ過労になるから無理させないでね。なるべく自分で頑張って」

「うわ、やる気なさげ!」

伏見は思った。

ああ、また置いて行かれてる、と。

ふと、『やゆら』の目線が伏見に向かう。

「で、そこの君は？」

突然、自分に話が振られ戸惑う伏見。

「あ、その、わっ、わたしは」

「この娘も役員になるんだってー」

マキが勝手に言葉を繋ぐ。

「へえ、なに。二人は友達？」

「ううん、違うよー、すぐそこであっただけ。この娘さ、ずっと階段のトコにいたみたいだよー」

などと、言われたくない事実まで平然と暴露され、ますます落ち

込む伏見。

ああ、やっぱり自分には生徒会なんて向いていないのかも……。と、伏見が思っていると目の前の男子二人が話し始める。

「ふうん、まあ、しゃあないな。2年の教室の前なんて来にくいだろうし。な、小田桐」

「ふむ、確かに一人ではな。それも女子ではなおさらかもしれない」「入ったばっかなんだし、来づらくはあるよなココ。生徒会室の位置、悪くね？ あとどうでもいいんだけど、普通1年が下の階で、その上に順に2年3年の教室があるべきじゃね？」

「……それを言っても仕方ないだろう、とりあえずはそのうちに慣れて貰うしかあるまい」

「ん、だな。ま、アレだよ。君もこうして仲間がいるんだからさ、大丈夫だよ」

なにを大丈夫だと言っているのかわからないが、とりあえずそう伏見に笑いかける『やゆら』。

ただ相手を安心させよう、と言う気持ちだけは伝わる。なんとなく、初めて会った時よりも優しい印象を伏見は受けた。

「……はい」

「うん、よろしい」

伏見が頷くと、満足そうに『やゆら』は言う。

その『やゆら』に小田桐は話しかける。

「それはともかく夜由良、彼女たちはどうする？」

「どうするって、今日は会議もないんだし、正式に誰の下に付けるかも決まってるんじゃないだろうか？」

「ああ、そうだ。……それでも育成係は君だな」

「あ、マジなんだ、それ。でも、俺だったらやらせることは1つだな」

「なんだ？」

『やゆら』はなぜか楽しそうに二人に向き直る。

……なにをすればいいんだろうか。

「二人とも、椅子持ってきて」

「椅子？」

「うん、その辺の使っていないヤツならなんでもいいや。この部屋の隅にたたんであるヤツでもいいけどな」

伏見達はとりあえず従う。

会議がないせいとか、全員が集まっている訳ではなく、そこそこ使っていない椅子があるようだった。

だけど、本当にその椅子を持っていったのか、二人とも少し戸惑う。生徒会室にあるもの全てが他人の物に見えてしまうのだ。自分の物ではない、そんな雰囲気。

ふと、男子二人が小さく話すのが聞こえる。

「君が女子に椅子を持ってこさせるとはな」

「なに、そんな意外か？ まあ、いつもなら俺がやるな。主に桐条先輩の、とか」

「……なにを企んでる？」

「いや、企むってお前な。……フツーだよ、自分で自分のことをする練習。自分の居場所は自分で作らなアカンでしょ」

「ほっ……」

「……なんだよ」

「別に」

それは聞こえないように話すつもりで小声だったのか、それとも上手く耳に入れさせるための計算されたトーンだったのか、それはわからない。

それでも2人はそれを聞いて……。  
自ら、自分の椅子を手に取った。

「あの、持ってきましたけど……」

「あ、うん。んじゃ、俺らの隣に座って」

「隣……ですか」

「そう」

伏見とマキは顔を一瞬、見合わせる。

だが、マキは平然と小田桐の隣に椅子を置いた。

それを見て伏見も、男子の隣に座るのは抵抗があるものの椅子を置き、腰掛ける。

心なしか、隣にいる『やゆら』からは距離をおいて座る。

「これでいいんですか？」

マキがそう『やゆら』に尋ねた。

「そう、問題ないよ。それでおっけーね」

「それで、マキ達はなにをすればいいんですか？」

一同の目……小田桐の目も含めて、『やゆら』に集まる。

『やゆら』はなににも考えていないかのようだ、あっさりと言った。

「なにもしなくていいよ」

「は？」

一同の声が揃う。

頭上に並ぶ見えない疑問符。それを平然と無視する『やゆら』。

「そのままここにいて、まずはそれが仕事」

全員が疑問に思っていることはわかっているだろうに、自分からその疑問に答えたりはしない。

伏見があまりに予想だにしないことを言われたせいで、ほとんど素の状態で『やゆら』に問いかける、まったく男子と話していることに対する緊張感などはもはや伏見の中にはなかった。

「それだけでいいんですか？」

「うん、いい」

「で、でも。それって仕事じゃないんじゃない？……？」

「仕事だよ、生徒会室に慣れるって言うね。まずはそこからだろ」

「生徒会室に？」

「そ、見慣れない場所にいるって疲れるじゃない？　まずは見慣れようね、ってこと」

それを聞いてマキが不服そうにする。

「あの、マキはこれでもずっと役員やってきたから多少のことは出来るんですけどー」

「うん、じゃ隣の小田桐の仕事を見て覚えればいい。自分にもそれが出来そうだったら、言ってみせてもらえばいい。要はなんでもいいから、ここに馴染めばいいんだよ。自分のやり方でね」

「むう……わかりました」

どこか納得いかない様子で、マキは了承する。



それをにこにここと一貫して笑顔で見る『やゆら』。  
なんか不思議な人だなあ、と伏見は思う。  
その視線に対し、振り返る『やゆら』。

「ああ、君もね。替わりたかった言っつてよ、喜んでやってもらうから。補助はするし。でも、まあ、ぶっちゃけぼーっとしてていいから」

「あ、はい」

「うん……あ、小田桐はそれでいいか？」

「君に任せる。君がいいというなら、そのやり方でいいさ。今回はな」

「どうも。ちなみに2人とも質問は随時受け付けるんで、なにかあったらこの頼りになる方の先輩に言っつてね」

「なぜ僕を指さすんだ！ 君も質問に答えろ」

「いやいやいや。俺、飾りの副書記だから。で、そんなお前は副会長、いよっ憎いねっ」

「飾りっつて……そう皆から言われているのを知っているなら、もっときつちりやらないか！」

「いやいやいや。俺、マイペース人間のB型だから。あ、そう言えれば、二人とも血液型は……」

「まず人の話を聞け！ そして吟味してくれ！」

「なんだか、『やゆら』先輩はイメージと違うな。」

「そう、どこか遠い目で思う伏見。」

「マキもなんとも言えない顔をしていたが、結局、そこそこ『やゆら』の言葉に付き合っつてにぎやかに話している。」

「と、突然、話ながら『やゆら』はパソコンを打ち込み始めた。」

「そのまま伏見に話しかける、『やゆら』。」

「んー、これからね。委員会のプリントを作るんだけど、なんでも

そうなんだけどこういう場合、一から新しい物を作ることはまずない。大変だからね、時間がもったいないだろ」

「あ、はい」

「一番いいのはデータが残っていれば、それをベースに作り直すこと。なるべく楽をするのがいい。これは悪いことじゃない。疲れるほど働くのは良くない、効率よくなるべく最低限の力で出来るように頑張る。余力があれば、他の人も手伝える」

「……はい」

「ああ、そう堅くなるなよ。すこし、楽しんで」

「楽しむ、ですか？」

「そう、楽しく仕事はするべきだ。そしたら疲れない。少なくとも働いている間は疲れを自覚せずにすむ。ま……でも、今回はデータがないんで、去年のプリントを見ながら必要な部分を改訂しつつ全部打ち直す訳だ。パソコンは使える？」

「……得意ではないです、家にないので」

「十分だ。今からたくさん使う機会があるしね、間違ひなく覚えられる。得したね」

「……得？」

「うん、だつてさ、今まで出来なかったことが出来るようになるんだぞ。得だろ？ ああ、データがありや楽なんだけどな、なんかさ、先輩方、自分でやったもののデータ自分で持つてみたいでね。パソコンに入つてないんだ」

「……そうなんですか」

「あ、失礼」

と、そう伏見に声をかけて『やゆら』が小田桐に話しかける。

「なあ、今後はきちんとデータを統括させようぜ。お互い声かけ合つてさ、新しく作ったデータ関係を俺達で管理すんの。個人主義もいいけどさ、さっきの話もそうだけどそうしておかないと大変だろ

「？」

「……ああ、そうだな。手間が大きい、非効率的だ」

「バックアップも忘れないようにしないと、今度桐条先輩と相談しようぜ」

「了解した、僕の方でも考えてみよう」

『やゆら』は「おう」と元気に声を発し、パソコンに再び向き直る。

また、手がキーボードを打ち始めた。さつきから、話している間も手が休まらない。

視線はずっと机に置かれたプリントと画面モニターを行き来している。

時々、打ち間違えては、ボードを一瞬だけ見る。

伏見の視線に気付いて、間違えた自分を恥じるようにまた笑った。

そう、伏見はずっとそれを見ている。

……自分もこんな風に成れるのだろうか。

再び、『やゆら』が話し始める。

「ああ、そうだ。そう、もし……君が……ああ、ごめん。名前聞いてないな」

「あ、はい。そうでした」

確かに自分は結局、自己紹介をしていない。

「あの、伏見千尋って言います」

「ふしみちひろ、ね」

『やゆら』はそう言いながら素早く、ふしみちひろ、と打ち込む。そして、順番に変換し始めた。

「……この字？」

画面にあるのは『伏見 千尋』。  
間違いなく、自分の名前だ。  
伏見は頷く。

「はい、あつてます」

「うん、ちなみに俺の名前は……夜由良 優ね」

そう言って、同じように自分の名前を打ち込む。

「『由良』って名字自体はあんまり珍しくない部類らしい……俺は見たことないけどな。それに夜が付いてるんで、若干希少価値はあると思う。私見だが……レアだぜ、俺」

「れあ？」

「ああ、珍しいってこと。知らない？ 優って名前は、まあ、これは珍しくないな。女の子みたいだとは言うなよ、言われなれてるからさ。俺の名前よか、その科白の方がもうありきたり」

「はあ……あ、そう言えば確かに、まとめて言うといいづらいですね」

「あ、さっきの覚えてた？ そうなんだよな、3回早く言つてとか言われたら、絶対囁むぞ。自分の名前のなのにまともに言えないもん、たぶん」

気が付くと、男子相手なのに自然に話せている自分がいる。

不思議だ、まったく気後れせずにすんでいる。

すごく不思議な感覚だ。自分が自分じゃないみたいだ。

伏見はそんななんとも言えない感想を抱く。

「で、さっきなんか言おうとしてたんだけど………忘れた。なんだっ

け？ 俺、なに話そうとしてたんだっけ？」

「いや、それはわたしに言われても……」

「ですよね、あ、思い出した。もし、伏見がさ、こうして書類を作る時にはきちんとデータをこのパソコンに残してね。そういうのわかんなかったら、俺とか小田桐とかに言ってくれれば……いや、間違えた。小田桐とか小田桐とかに言ってくれればいいから」

「おい、聞こえてるぞ、夜由良。間違ってもいないのに言い直すな」「えー、俺の中じゃ渾身の間違いなのに」

隣の小田桐に目を向ければ、既にマキが席を変える形で作業をしていた。

それを見守る、小田桐。

ああ、向こうは既に自分できちんと動いている。

「よし、名前を付けて保存。『保健委員会……』えー、『顔合わせ……』、まあ、いや。題名は後で変えられるか。んじゃ、次はこのプリントを……」

そう呟きながら、夜由良は表にしていたプリントを入れ替える。

わたしも……負けてはいられない。

「あの、わたしにやらせてください！」

「へ……？」

「さっきみたいにするばいいんですよね？ 同じ風に打ち込めばいいんですよね？」

「……うん、わかった。んじゃ、席替わろうか」

「はいっ！」

なぜかさつきとは違い無表情を装う、夜由良。

でも、伏見は気付いている。

夜由良のその顔がどこか嬉しそうなのを。

さらに、その中でその顔がさっきの相手を安心させるための表情とはどこか違う、二人は座るときに浮かべていた、つかみ所のない不思議な笑みとは違うことを感じていた。

だから思う。たぶん、これこそがこの人の本当の笑顔なのだ。必死にこらえようとしているような、口の端だけを緩めるようなこの表情が、この人の本当のこぼれるような笑顔なのだ。

……そして、伏見は早くこの人のように頑張りたい、そう思った。

\*

とりあえず、呟いてみる。

「ふうむ、困ったものだよ。本当に」

なんて。

いや、なにがってさ。

段々、物言いが駄眼鏡りじちやうじに似てきた気がするんだよ。

いやあ、日頃から参考にしすぎかな、本当にアレなんだよ。すげー、参考になるんだよ。あの息をするように、うさぐささをまき散らす感じがさ。

一見すると凄いいい人だからね、アレ。見習って使うべきだよ？いや、でも、悪い人じゃないんだよねえ。あの人、いやホントに……ただ、人間としてアレなだけでね。悪い人じゃないんだ。

正味さ、たぶん、分類すると善人だと思う。だけど、善っていうのはさ、結局、最終的にどれだけ人間のためになるかって話なんだよな。実際？

なにを言っているかわからないと思うが、俺もよくわかんね。でも、あの人に關してはそのうち分かると思う。

ただ一つ言っておくと、悪人は人を傷つけて不幸にするけど、その人数は限られてる。でも、善人はたくさんの人間を結果はどうあれ、自分が正しいと思ってることに巻き込むってこと。

善行を為せるって言うのは、どこか盲目的だから可能なんだな。コレが。

本当に色々な人を見て、相手の立場になれちゃう人は、思ったよりもなんにも出来ないんだよ。だってなにがこれから起こるか、なんとなく読めちゃうからさ。悪を殺したら、たくさん罪のない人間が迷惑で危険だって知ってるからさ。

善だっということと、正しいってことはイコールじゃないんだよ。常にね。

たまに同じだって言うだけで、むしろそっちの方が例外なんだよ。

「な〜んつつてな、特に意味はない呟きでした〜」

そう言っつて、大根をイチヨウ切りにしていく。

いやあ、なんかいいね。楽しくて。

とふと、玄関の扉が閉まる音。誰だ？

「ただいまー、今日の晩ご飯はなに？」

岳羽がそう言っつてキッチンに顔出す。

うん、やっぱり食事自体には不満はなさそうだけどな。

「あ、おかえり。部活終わったのか？」

「そう、つて大根？」

「うん。ああ、今日のおかずだっけ。ええと、ひじきと油揚げの煮

物でしょ、ふきと豚肉の炒めものでしょ、あとニラ玉?」

「……なんか微妙」

「微妙つて……もう、じゃあなにが食べたいんだよ」

ひどいな、これでも色々と考えてるんだよ。

栄養とかさ、そうさ、鉄分とかビタミンとかね。……あと、値段とか。

ふきなんか、近所からの貰い物だしね。うん、近所の付き合いは大事です。

「こう、なんかもつとパツとしたものとかないの?」

「パツと? 洋食とか中華的な?」

「そうそう」

「ふむ、なら明日はそうすつか」

まあ、ずっと和食だったからな。

だって、桐条先輩喜さなだぶんだもん。あ、あとあの肉野郎もこういう感じの料理好きみたいです。ことあるごとに牛丼をリクエストするがな!

だれが聞くか、そんな要求!

あー、まあ豚汁くらいは作ってやってもいいけどさ。なんで、ヤツは牛丼屋のメニュー的な要求ばっかするんだろっかね?

「あ、じゃその大根なに? 夕食にないじゃん」

「ああ、コレ? 漬け物でも作るうかと」

「なに、漬け物だと?」

そこに乱入してくる真田先輩。

噂をすれば影ですね、いや、口にはしてないんだけどさ。



「先輩も夕食が気になってるんですか？」

「い、いや。そういうわけではない」

「はい、残念。牛丼じゃないです。はい、また来週」

「……まさか、今週は作らない気か！」

「ええ、それがなにか？」

あつたり前じゃん。そりゃね、あれだけリクエストされたら作るわけねえだろ。むしろ、やらねえよ？ 食わせねえよ？

てか、そもそも昨日食ったじゃん。俺の目の前でじゃんじゃん食ってたろ？

つか、アンタが喜ぶってだけでやる気失せるわ。消えろっ！

「そ、そんな……なぜだ！」

「まず昨日食べましたよね？ 同じメニューばっかじゃ栄養偏るじゃないですか？」

あとアンタが喜ぶからだよ！

「サラダだって食べたぞ！」

「俺が口うるさく言ったからね」

「はっ、わかったぞ。さてはお前、俺がうるさいって言ったの、根に持ってるな」

「はいはい、それでいいから。ちゃんと野菜も食べましょうね」  
「理不尽なっ」

なら、アンタが作れよ。

と言つか、よく考える。俺はお前等のオカンちゃっぞど？

真田先輩をあきれ顔で見る岳羽。

いや、君も夕食に文句つけてたから。おおよそ同類だと思っよ、

俺は。

「もう、今、忙しいんだから後にしてくださいよ。よし、だいたい切ったな……これ、どこに干せばいいんだ？ 風通しのいい場所ってどこだ？」

俺は切った大根を持ってうろろろする。

どうしたもんかな、よく考えてなかったぜ。

「なんの漬け物なんだ？ タクアンか？」

「あの、もしかして先輩、大根は全部タクアンになると思ってません？」

「失礼な、福神漬けにだってなるさ！」

「もつと色々あるよっ！ それに福神漬けは別に大根オンリーじゃないよっ！」

駄目だ、この人。

基本的にラーメン屋と牛丼屋で食物思考が定まっている。

大根以外で、他の知ってる漬け物は紅シヨウガとか言いそつだ。いや、間違っちゃないんだけどね。

「あー、今、作ってるのは『このもん』ですね」

「このもん？」

岳羽と真田先輩の声が揃う。

君らってたぶん、食事に関しては同レベルなんだろうね。

いや、『このもん』は知らなくても別にいいんだけどさ。

「『このもん』って言うのは、沖縄で言う『漬け物』って言う意味らしいですね。わかりやすく言うと、大根の甘酢醤油漬けですか？」

「沖縄の漬け物？ …… 美味しいのか？」

「さあ、そもそも漬け物作るの自体初めてですからね。今週中には出来ると思いますけど、まあ、美味しかったら食卓に並びますね」

「そうか、楽しみに待ってるぞ」

「って言うか、どこからそんな情報を知ったんだか」

なんとなく呆れ顔で言う、岳羽。

漬け物の情報もと？ ネットとか、雑誌とか？

具体的には主婦の友を古雑誌で見るとかしてます。資源回収であつたおばさんから、そういう系統の雑誌貰うとかね。

そして、最近店頭で自分で買った本のタイトルは『新妻の貴女へ』初めての料理編』です。

そういうの恥ずかしくないのかつて？ …… 恥ずかしいわっ！  
決まってるんだろっ！

でも、この本、基本用語からきちんとかいてあつたんだもん。塩少々ってどれくらいだよ、ひとつまみって具体的に？ …… みたいな感じなんだもん俺！

あ、そっぴやタロットの本買おうと思ったのに忘れてたや。今度買おう。

そして、なんとかして経費で落とそう。タロットカード付きの高いヤツ買ってやるぜ！

で、なんとか浮いたお金で新しい服を……あれ？

「…… なぜかな。最近、俺主婦っぽい気がする」

「なにを今更……」

「てか、今気づいたんだ？」

なんだよ、二人して！

思ってたっただら、もつと早く言いやがれよ。くそう。  
もうすぐ理事長みたいな主婦が誕生しそうな予感です、まる。

\*

同日、夜。 11時。

私は小さくつぶやいて空を見上げた。

「だいぶ遅くなったな」

リムジンに送られて寮の前に立つ。

おそらくもう閉まっているだろう、と思いつつも手をかけるが、  
鍵は開いていた。

不用心な、戸締まりを忘れたのだろうか。

もちろん、明かりは消えている。

そのまま寮に入ると予期せぬ声。

「おかえりなさい、遅かったですね」

見れば、カウンターの奥にパソコンに向かう夜由良。白いカーデ  
イガンを羽織り、いつもはない眼鏡を掛けている。

そして、どこから持ち出してきたのか、机に照明代わりの小さな  
ランプをおいていた。

……小さな優しい光だ。

「ああ、ただいま。起きていたのか？」

「ええ、家計簿と……今日の日誌を」

「……別に活動日誌は毎日書かなくていいんだぞ？ 夜由良」

「落ち着くんですよ、こつこつという感じ」

そう言って、カップを手取る。  
どうやら、彼の気晴らしの一環のようだった。

「いいですよ、ここ。すごく静かで、で広くて」

「……そうだな」

「一人つて意外に嫌いじゃないんですよ、楽だし、余計なことを考えなくていいし。あ、先輩がいちゃ駄目って訳じゃないですよ？」  
「わかってるさ」

私がそう言うと、彼は眼を柔らかく細めた。

いつもより、とても穏やか表情。何というのか、いつものような賑やかさが無い。

ふと、どこからか、なにかの香りがほのかに漂ってくるのに気づく。

なんだろう、この匂いは……。

「……バラか？ それと少しだけ、柑橘系だな。おそらくオレンジか」

「へえ、耳だけじゃなくて鼻もいいんですよ」

あと……も、と小声で呟くのが聞こえた。

なんて呟いたのかはさすがにわからない、きちんと音として発音しなかったからだ。

誰にも伝える気のない、言葉。

「でも、実はバラじゃないんです。ゼラニウムってわかります？」

「ああ、知っている。南アフリカ原産の花だな、一年中咲く、強く可愛らしい花だ」

「へえ、そんなんですか。俺より詳しいですね」

そして、バラだけでなくアップルやレモンなど様々な香りのものがあり、ハーブとしても知られるものはお菓子の材料や、なによりハーブティーとしても使われる。

私が詳しいのはそれが理由だ。

「……なるほど、言われてみればそんな香りだ。ほとんどバラと変わらないが……君はこういった香りが好きなのか？」

ランプの影に隠れるようにさらに置いてある、アロマランプ。ベルの形をした、透き通るような青い……アロマランプ。なかにまた小さな明かりが灯っているようだ。

「あー、違います。色々と試してるんですよ、雰囲気作りに」

「雰囲気作り？」

「そう。なんかいいリラックス法、ないかなって。でも失敗ですね、これ単体で置くべきでした。その方が楽しめそうですもん、ああ、あともうちょっと香りを抑えたいな。無理かな？」

「……多趣味だな、夜由良は。正直、すこし羨ましく思う」

「いや、多趣味って言うか」

すこし、言葉を探すのに戸惑う様子を見せる。

どうしたのだろうか。

「実は、俺の趣味って全部受け売りって言うか、どこかの誰かに合わせて出来たものなんですよ」

「合わせる？」

「ええ、んー、映画も音楽もカラオケも占いも。あと時には読書全般、怪談とかミステリー、神話。星の見方も料理も。今、このアロ

ママこの過ごし方も。こういうのあった方が会話の時、話ふくらむでしょ？」

「……まあ、そうだな」

「前にこういうの好きだって言った人いたな、って思い出して。誰かにこういうことしたんだよって、話題ない時に話そうって思ってた。きつと笑ってくれるかな、盛り上がるかなって思ってた。……人目気にしてやってんですよ、俺は」

「それは」

意外だ。

彼は、そう、自分の好きなことを自由にやっている人間だと思っていた。何というのか、心そのままに自分の信じるもののために無理をして行く人間だと。それでも潰れない強さと信念があるのだと。自分とは違う、絶対に真似できない生き方をしているのだと。届かない、違う世界のどこかにいるような人間だと思っていた。確かに多くのものを背負うような所はあった、それでも。

「格好悪いでしょ？」

「いや」

「自主性がない、とか思いませんか？」

「思わない」

「そう、ですか」

「ああ」

「……なら、いいです」

ああ、なんだ。

彼は普通に、こんな弱いところもあるのか。

そうは見えないかもしれない、初めて見た人ならそうは思わないだろう。

でも、そう、これはきつと彼なりの弱音だ。

「……なんです？　どうかしました？」

「いや、意外な一面を見たなと思ってね」

「そうです、か……」

「ああ。……そう言えば君は目が悪いのか？　眼鏡をかけている所なんて初めて見たぞ」

「ええ、良くはないですね。授業中はよく掛けてますよ、黒板の字がたまに見えずらくて。字の小さい先生とか、黄色い字とか、はちよつとね」

「そんな暗いところでパソコンなんてするからだ」

「それは言わないでくださいよ、月明かりで本を読む人の台詞ですか？」

「ふふ……確かにな」

意外に何気なく言ったことも聞いているのだな。

「たまに色々と忘れなくなるじゃないですか、こういうことをしていると考えなくてすむですよ。……忘れられるわけじゃないですけどね」

「そういう気持ちはわかるさ、私でもな」

「人間が煩わしいって言う人の気持ちわかるんです、俺。いや、バイト先の知り合いなんてみんなそんな人だったんですよ。でも、なにわざわざ人の大勢いる場所に来る……寂しいんでしょうね」

「そうか」

「誰でもいいから向こうは話したい、別に俺じゃなくてもいいんですよ。みんな。でも、俺ぐらいしか聞けるヤツいないから」

「……それで趣味のことを？」

「ええ。みんな愚痴聞いてほしいんですけど、それだけでいいんですけど。……それでも自分と趣味が合うと嬉しいじゃないですか。

喜ぶんですよ。だから次会うときには勉強して……俺、馬鹿みたい



じゃないです？」

「そんなことはないさ。むしろ、そうだな。そのことを相手が知っても喜んでくれるさ」

「そうかな、嘘ついてたみたいに思わないですか？ 無理矢理合わせさせたみたいにがっかりしないですか？」

「しない。いや、する人もいるのかもしれないが、私だったらきちんと自分の言ったことを覚えてくれたことを喜ぶ」

よくわからない、と表情が言っている。

いつもは見せない不安げな目。

なるほど、そういえば夜由良は年下でまだ子供だったな、と思わされる。いや、私も未成年なんだが、彼はどうもいつもそう思わせない。

わざと子供ぶつていると言うか……妙な振る舞いをしてるからな。

「そんな台詞、普通は誰もきちんとして受け止めてはくれないだろう。

だが、君はこうして何気なく人が言ったことを覚えて、次に会うときにはそのことに自分も詳しくなるうとしてくれる、表面だけじゃなく、実際にこうして実践までしてくれる。……喜んでくれるさ、きつとな」

「そうかな」

「そうさ」

「……そう、ですね。……はい、きつと……そうなんです。そう言うってくれる人もいますから。間違いないですね」

ああ、なんだ、やっぱりイメージと変わらない。

彼は自分の信じるもののために生きていく人間だ。

私には真似の出来ない生き方だ。

矛盾するように、彼は生きている。

矛盾するように、強く生きている。

きつと、いつもこうして迷っているだろう。いつもこうして弱音を吐いているのだろう。働きたくない、と言って頑張る。無理をする気なんてない。と言って努力して。

他人よりも自分のことを、などと行って他人を見る。それは自分の目的のため、確かにそうなのだろう。でも……君はそれだけなのか？

「俺、もう寝ますね。なんだか、少し疲れました」

「そうか、そうだな。それがいい」

「今日は真田先輩には付き合えません」

「フ、毎日あのペースに着いていたら身体を壊すぞ」

「俺もそう思いますね、ありや異常です」

そう言って、片付けを始める夜由良。

私そのまま歩いて行こうとすると、夜由良が思い出したかのように入った。

「あ、晩ご飯は食べたんですか？」

「ああ。済ませてきたよ」

「はい……じゃあ、おやすみなさい」

「おやすみ、戸締まりはしっかりいな」

私はそう言って部屋に戻る。

「もちろん、わかってますよ」と囁くような声で返事をしたが耳に入った。

気がつけば、時間はそろそろ影時間に近い。

まったく、こんな時間まで夜更かしをして……本当にしょうがない奴だな。

4月13日 月曜日 く 『お疲れ気味に唱う意志』 (後書き)

朝はやりたくない、昼はやらなきゃな、夜はやらなきゃ眠れない。  
言いたいことと気持ちが一日の間に動いている。  
まるで、日が昇って落ちるみたいに。

4月14日 火曜日 『期待はずれと裏切り方の関係性』 (前書き)

今回は真田先輩メインの話。どっちかって言うと桐条先輩とばっか仲良くしてるイメージですよ？ 客観的に見るとどうなんですよ？

まだ本編には入りません、もうすこしかかります。

4月14日 火曜日 『期待はずれと裏切り方の関係性』

4月14日、火曜。

夜、分寮の屋上にて。

目の前に立ちはだかる一人の男。  
赤いトレーニングウェアを着た、その男は俺を真剣な表情で見つめる。

その左手には召喚器。

いつでも秘められたその力<sup>ベルシナ</sup>を出せる、その体勢のまま。

「血迷ったんですか、先輩」

俺はその男に言う。

目の前にいる、真田明彦に。

「血迷った？ いや、違うな。これが俺の望みだ！」

「望み？ …… ずいぶん物騒なこと考えて生きてるんですね」

「そうさ、だがそれが俺という人間だ」

もう説得は出来る段階じゃない。

俺が何を言っても聞きはしない。

なにはともあれ、俺はもう了承してしまったのだから。

それでも俺は一応、言葉を連ねる。無理なのは知っていても戯れ言を並べる。

「やめましょうよ、先輩。こんなことするなんて……」

「怖じ気付いたか、夜由良？」

「はい？」

いや、そりゃ……。

「それとも俺なんかじゃ相手にならないと言いたいのか？」

「な、なに言ってるんですか」

「なら、本気でやれ。夜由良」

「……先輩」

なんだ、この威圧感。

尋常じゃないくらいに闘気をひしひしと感じる、痛いぐらいに叩きつけられる視線。

おいおい、マジか？

……マジなのか？

「さあ、夜由良。俺は本気で行くぞ？」

やや顔を左下に向け、召喚器を額に突きつける真田先輩。

わかる、これからペルソナが放たれることが。

俺の中の『バイアグーナ』が叫んでいる、悦んでいる。

目の前にある存在とその力の具現、その瞬間を。

「お前の覚悟ほんきを見せてみろっ！」

そして先輩は引き金を引き絞り。

背後に顕現する、その心の鎧。

真田先輩のペルソナ、『皇帝ポリデュークス』。

ああ、なんでこんなことになったんだ？

それは全部……。

＊

それは絶対的な力の具現だった。  
相対するものに絶対的な死を運ぶ者。  
死神のペルソナ、俺はそれをそう呼んだ。

漆黒に染まった衣を纏う、獣の骸を頭にする異形。  
鎖によって連なる八つの棺おけを翼とするそれは、不気味なほど  
に輝く金色の満月を背負うようにして、現れた。

そして咆哮。

我はここにいる、そう奴は空気を震わせた。

心臓が鳴る。

目の前にそれがいるわけでもないのに、俺は汗を握る。

勝てるわけがない、相手は死そのものだ。

勝ち負けじゃない、生きとし生きるものはすべてそれに贖うこと  
はできない。

同じ次元にこれと俺はいない。

もし、勝ち目があるとするなら……。

奴は主である一之瀬を見下ろし、続きその伽藍堂なその双眸でそ  
の敵を見下す。

自分より明らかに格下なその存在を。

額に？と描かれた青い仮面を持つ、黒い手。その無数の手の集合  
体であるシャドウ。

便宜上、その数字からアルカナに合わせて『マジシャン』と仮に  
命名された巨大シャドウは、その手に存在するそのすべての剣を一  
之瀬へと向けた。

それを見て、空虚な骸のその頭で死神がなにを考えたか、読み取  
りようがない。

俺の無貌ペルソナとは別の意味で、顔がないのだ。

肉も皮も存在しないその顔は、ほとんどただの仮面と変わらない。凹凸のない白色の仮面を持つ、俺のバイアグーナと奴はどこか似ていた。

そう、伝説上の死神は骸の顔を持つ。性別も感情も意思すらも存在しない、いわば顔なし。パーソナリテイ人格を持たない自然界のシステムとしてだけ存在する機構。プログラム

人格を持たない仮面。

パーソナリテイのない、ペルソナ。

個性のない無と言う名のモノ。

無個性だけが冷徹で優しい死を表現できる。

シャドウが動く、全身の腕という腕を伸ばし、放たれるのは巨大な炎の塊。

桐条先輩の氷結系特殊攻撃、それに俺が関わっても拮抗するどころか、完全に飲み込まれるであろう最大級の火力。アキダイン烈火炎と呼ばれる等級の特殊攻撃形態。

それが迫り来るのを見てもなお、その死の具現は動かない。

その格下の相手に対し、なんら反応を示さない。

目前に熱気的那のうねりが直撃する、その寸前。

奴は動いた。

いや、それを視認することは俺には敵わなかった。

抜き離れた一振りの剣、巨大シャドウ『マジシャン』が持つその剣とは比べられない程に小さなソレを引き抜き。

……一閃したのだろう、俺が見えたのはその結果だけだった。

突然、かき消された炎。



そして、その直線上に存在する『マジシャン』の腕が宙を舞った。  
1、2、3、その巨大な腕がいくつも闇夜を回転しながら飛ぶ。  
大きな複数の衝撃音とともに落下。

ようやく『マジシャン』は痛みのためなのか、悶えだした。

おいおい、なんだそれ。

ただの剣での一撃だろう、違うのか？ 斬撃が飛んだ？

それ以前に、あのペルソナ。普通にシャドウに物理的に干渉出来  
やがる。なんだあの反則。

あんな真似出来るなら、ペルソナを攻撃の楯にする戦術すら可能  
だろ？

映像がぶれた。

即座に死神は『マジシャン』の目前、出現する。

片手で『マジシャン』を持ち上げ、地面に叩きつけた。

何度も、何度も。

何度も、何度も、何度も。

黒い肉片、もしかしたら血なのかもしれない。それらを撒き散ら  
し、叩きつけ続ける。

それを見ているはずの一之瀬に動きはない。

アイツ、目の焦点があってない。どこみてやがる？

やがて、動かなくなる『マジシャン』。

それを確認した死神は剣を仕舞い。

その顔と同じく、骨のように純白な両腕で……。

指先に力を込めるようにして、シャドウを解体し。

喰らい始めた。

俺は顔を両腕で覆う。

……ここまでかよ。

強いのはわかった。

『マジシャン』の手下、正確には分裂体らしきものにすら、俺達は苦戦した。

それを一人で倒したというのだから、暴走とは言え、かなりの能力だろうと。

だが、これは……。

虐殺？ いやいや、遊びだ。あれは捕まえたトンボを解体するガキみたいなもんだ。

もう勝負は決まってる、もう1発いや、普通にあの剣で2撃たたき込めば終わってた。

あえてそれをしないのは、なぶり殺しにするためだろう。

最悪だ、あれ、まったく本気じゃねえ。剣撃の時は構えやらなにやら、正統な戦い方の型つてもんがあつた。でも、それ以降の動きは違う。

こいつがもし味方に向かったら……。

想像もしたくないな、最初から敵ならまだいい。

いくつか対策をうてばいいだけの話だ。コイツを敵として戦うのなら手はある、フツーに駄目なら逃げればいいしな。

だがもし、味方だと思つてた奴から背後からこのレベルの攻撃が放たれたら？

最悪、一撃で全滅だ。

「どつしたもんかね？」

一之瀬が仲間になるかどうかはわからない。

それでも、仲間に勧誘しないことはありえないだろう。俺の意思

はどうあれ、あの駄眼鏡じしちやうも桐条先輩も入れようとするのは間違いな  
い。

それに戦力としても十分だ。これに安定性さえ加われば、なにも  
問題はない。

……力の暴走か、考えてみれば俺達のペルソナだって暴走の危険  
性はあるんだよな。

召喚器はペルソナの召喚を安定させるためのものだ、実際はなけ  
ればペルソナが使えないなんてものじゃない。ただない場合その分、  
召喚時に不安定になるし、より精神力を使うわけだ。

ただし、俺なんかは隠密潜行スニークやらは、召喚器に頼らず使用出来て  
いる。

先輩らも、召喚器を使わなくてもその身体能力が底上げされたり、  
氷結や電撃などの自分の属性を防ぐことが出来ることから、その能  
力を発揮すること全てにペルソナ召喚が必要な訳ではない、よって  
必ず必須ってもんじゃない。

たぶん、召喚器がなくても発動出来るタイプの能力もまだ数多く  
あるんだろう。俺みたいに。

だが、逆に言えば召喚器なんてものを使わないと特定の状況では  
すぐに暴走する危険がある、とも言える。

一之瀬が使ったのはアイツの召喚器ではなく、岳羽専用調整さ  
れた召喚器だ。効果がないわけではないだろうが、他人の召喚器を  
使うのはむしろ危険な行為だ。無理矢理、他人の服着るようなもの  
だろうからな、どっかこっかに無理は出る。

それなら、俺が専用のを支給される前に使っていた、安定性だけ  
は保証出来る汎用召喚器を使った方がマシだ。服でいやあ、フリー  
サイズと言うべきか。召喚時の戦力はがた落ちらしいけどな。

もつとも俺の場合、駄眼鏡によれば召喚時の安定性だけはピカイチらしい。と言うより、暴走してもそれだけなら誰にも被害がないと以前分析されている。

喜ぶべきか？

ただ、同調した結果発生する暴走は保証出来ないとのこと。

そりゃそうだ、不安定なペルソナに同調したらそりゃ不安定になるだろう。

よって、一之瀬の死神ペルソナに同調するのは難しいだろうな。

あー、対抗手段が一つ減った。いや、最悪実行してもいいんだが暴走が二人になるだけは回避したいな。

気が付くと、画面から岳羽の悲鳴が聞こえてきたので、映像を切った。

そう、ここは作戦室。時に一番いいソファがあるラウンジとして、桐条先輩が寛ぐこともある場所だったりする。

俺の中の別名、監視室。パスさえありゃ、この人間の私生活をのぞき見出来るろくでもない場所だ。

すっ、と開く部屋の扉。

開けた主と目が合う。

「夜由良、どうだった？ なにかいいものは得られたか」

「いえ、ちょっと……有意義ではあつたんですけど、どう考えてもハッピーじゃないですね。真田先輩はどうでした？」

別室から現れたのは真田先輩。

今日はトレーニング前に襲撃時の映像から何か得られないかと、相談しお互いに映像を見直し分析を始めた。

真田先輩はボクシングの試合の映像を見直して、トレーニングの仕方を変えるなんてこともしているの、その提案を受け入れるのはかなり早かった。

「今は身体をあまり動かさせないからな、それでもやるべきことはわかった」

「そうですか、俺も分裂体との戦闘は見直しましたよ。もし、次にあの状況になれば、問題なく対処出来ますね」

「ああ、お前の能力の幅が広がったことは大きいな」

「ええ、それにはいち早く真田先輩に復帰して欲しいところですが……」

「そうしたいのは山々なんだがな」

「だろうね、すぐにあばらが治るとは行かないだろうよ。さすがに骨はな。」

悪化させない程度にせいせい頑張ってくれ。

「ま、復帰前に終わらす約束ですからね」

「してないぞ！ 断じてしてない！」

「残念そうな真田先輩を見ることだけが楽しみです」

「待て！ お前は俺になんの恨みがあるんだ！？ すこし話を聞けっ」

聞かないよ、聞くわけないじゃん。

恨み？ アンタが俺より顔がいいことだよっ！

あと強いて言えば、そうだね、プロテインだねっ！

「……もう、そうやって先輩は後輩のやる気を削ごうとするんですか？ あまり褒められた事じゃないですよ」

マジ空気読めねえな、この人。みたいな目で見てみる。

「そう言う問題か！？」

「先輩なんだから、こうもつと後輩のやる気を引き出すようにしないと。後輩への指導と協力の一環ですよ？」  
「いや、その場合俺は犠牲と言わないか？」

言わないよ、協力だよ。

人生とアイデンティティと言う尊厳を賭けた協力だよ、自己犠牲なんかじゃないよ。

って言うか、戦わなくていいんならむしろ感謝するべきだろう、普通は。損する点と言えば、アンタの存在価値とキャラ性が失われるぐらいだぜ？

「で、それはそうと先輩のやるべきことってなんですか？」

「……ああ、そのことでお前に頼みたいことがあってだな」

「スパarringsに付きあえて言ったら、殴り……いえ、桐条先輩に言いつけることにしましょう」

「あからさまに変更した!？」

だって俺、アンタに勝てないし。

つか、それ結果的にスパarringsに付きあってたんじゃない。

んー、他に俺に出来る反撃ってあったか？

「あ、そうだ。一週間肉抜きでもいいや」

「本気か!？」

「俺、別に肉なくても生きていけるし……この間うるさいって言われたし」

「すまんっ、なんか知らんがすまんっ」

そこまで嫌かい。

アンタ、どんだけ飯に命賭けてんだ？

「はっ、つい謝ってしまったが違っぞ！ スパーリングは今は諦めている」

「ああ、先輩にも常識ってあるんですね。その状態で人を殴っちゃいけないってことぐらいはわかるんだ」

「おい」

「いや、冷静に考えたらその状態でシャドウ殴ってたな。あ、あれか。いくら先輩でも何度もやれば学習するってことか」

「おいつ！」

「冗談ですよ、それで結局なんなんですか？ って言うか、結局話進まないじゃないですか、さっさと終わらせて一週間経たせたいのに」

「誰のせいで進まないと思ってる？ と言うか、一週間経たせたいってなんだ！？」

「……次、無駄口叩いたら俺、寝ますよ？ そして牛井は再来週です、おめでとう」

「やってみたいトレーニングがあるんだがいいか？」

手のひらを返したように態度を変える真田先輩。

最近、わりと従順になって来たと思う。

うん、食を一挙に握るだけでこんなに発言力があがるものかな。

驚きです、今夜夜食に牛井を作ってあげましょう。若干、気分が良くなったから。

「いいですよ、すこしくらい」

「ああ、じゃあ着替えて屋上まで来てくれ」

「はい、屋上ですね」

俺は特に疑問を持つことなく頷いた、いつものことだからだ。屋上では一般人に見られたらまずい訓練をしている。

影時間でも適性があれば、ペルソナ能力を持たない一般人に目撃

される可能性もあるわけだしね。

俺のナイフでの実戦訓練もよくしているし、ペルソナの発動実験もよくやった。……そんなわけでまあ、また実戦形式の訓練だろうな、どうせ。

そう思っ行って行ったのだけど。

\*

「これだよ、命賭けだよっ！」

先輩のしたかった訓練。

前回の戦いはペルソナの発動時の消耗に、真田先輩が耐えきれなかったために、陣形が崩れた。

だからこそ、自分のその部分を鍛え直し、二度と同じ失態がないようにしたい。

なるほど、目的はいいね。やり方もまあ、いいさ。

よつするにペルソナによる特殊攻撃、真田先輩の武器の一つである電撃シオを自分の気力が持つ限り、撃ち続けるつもりなんだそうだ。まあ、それならいいと思う。

でもなぜ、ターゲットに俺を選ぶんだ？ 耐久訓練したいんなら、空にでも空撃ちしてるよっ！

「的確に相手に当てることの出来ない攻撃など無意味だろうが」

「俺を相手にすんなって言ってるんですよ！」

「回避の訓練にもなって一石二鳥だろうが」

「巫山戯けんなあああっ！」

喰らっても死にはしないだろう、たぶん。

一般人よりはペルソナ使い同士やシャドウからの攻撃に対しての、



耐性は備わっている。本来ならば死ぬような攻撃も、最弱の身体能力を持つ俺でもある程度は耐えられるだろう。

でも、おい。電撃だぜ？ それを回避？ 避ける？

出来るかつ！ アンタ、電気の流れる速度知ってんのか？

その速度は光の速さとほぼ同じと言われ、数字で言えば秒速約30万キロだとも言われる。

現実には抵抗があるし、そもそも物の移動速度は観測の仕方や定義によって一定ではない、見方によっては光の速度だって水中では減速すると言えるわけだし？

それでも人類に避けれるレベルじゃない、この距離なら観測と同じ時に直撃してる。

回避するなら、余裕を持って太陽と地球ぐらいの距離は欲しいね。なら、どうやって攻撃を喰らわないようにするか？

それは簡単な話だ。

「ええいつ、ちょこまかと動くな！ 狙いが定まらんっ！」

「定められてたまるかつ」

とにかく動き続ける。

回避が成り立つのは、相手の攻撃が放たれてからは遅いのだ。

相手が狙いを定め、ペルソナを出し、攻撃を放つ寸前、その間に相手の照準からなんとかしてズレていくようにするしかない。

くそ、相手が銃を持っているのと変わらないか、それともよりまだマシか？

軽く両足でジャンプするように動き、照準が定まったような気配がした時に、片足による急速ジャンプに切り替える。

あー、ダンスでも踊ってる気分だな。

その時間も長くない、真田先輩は『皇帝ポリデュークス』の召喚を維持出来ず、その形を保てなくなる。

一瞬で、その力の具現は霧散した。

「くそっ」

「召喚を維持出来ないのは俺と変わらないみたいですね、さっさと撃たないからですよ」

「お前が動いているから……」

「相手が止まってくれると思う方がおかしいんですよ、実戦じゃなりましたね」

「くっ、その通りだな……」

「召喚時間を維持するように訓練するか、短い間に動いている的に当てるか、ですよ」

それにもし、召喚時間を維持するなんて真似が出来たら、一度の召喚で何度も電撃を繰り返せることになる。これはかなり驚異的な戦術だ。

そもそも召喚のためにわざわざ自分の頭に召喚器を撃つ、なんてモーションを入れるなんてのは隙だらけだ。

俺ならその間に倒すね、接近戦じゃ命取りなんてレベルじゃない。仲間の援護なしに召喚なんて、俺でも3度その時間に接近して相手を倒せる。

「なるほど、よくわかった」

「……はっ、しまった!？」

もしかして、今全部俺口に出して説明してた!？

「確かにそれは有効な戦術だ。お前の指摘にも聞くべき所は多いな」  
「ですよね、ま、アレですよ。それに免じて今回は……」

「来いっ！ 『ポリデュークス』」

「うん、やっぱそうなるよねっ!？」

再び、自らの額に召喚器の銃口を付きつけ、引き金を引く真田先輩。  
輩。

顕現するポリデュークスは……。

俺は直感的にバックステップでその場から、距離をとった。

目の前の床にぶち当たる、光。

……床から煙り出てますけど？

「速攻は戦闘の基本だろ？」

「……そうですね」

間髪入れずに電撃をたたき込もうとする、真田先輩。

「そして、息を吐かせぬほどの怒濤の連続攻撃もなっ！」

舌打ちする間もなく、俺は動き続ける。

真田先輩は召喚を維持したまま、召喚器の引き金を連続で撃ちづつける。

同時に放たれ続ける電撃、その軌道は肉眼では追うことも出来ず、単なる連続する閃光にしか見えない。

なっ、そんなやり方があんなのかよ！ つか、目がやられるっ。単発ならおおよその視線で撃たれる位置を予測出来そうなものだけど、こんなのそれどころじゃ……。

「ふつ、意外と出来るもんだな」  
「って適当かよ！」

浮かんだだけの思いつきを簡単に実現してんじゃねえ！  
主人公かつ、お前は！？  
だがこれなら、すぐに精神力が尽きるに……。

「ぐっ!？」

身体に衝撃を受けた？  
理解不能、身体が思い通りに動かない、気が付けばその場に倒れている自分。

……床の冷たさを感じる感覚すらない。  
なんだ、コレ？

「リズムカルに動きすぎだ、夜由良。お前の動きはワンパターンだし、そもそもステップを踏むな。動くタイミングが目に見えて分かる」

「は……?」

「全身を使ってリズムをとるな、と言っているんだ。膝に力を溜めた時に動いて、柔軟に着地する動きそのものはいい。着地からの動き出しも早い。」

お前の使う動きはスプリットステップに近い、それはその溜めの間隔が短い程、すぐに動き出すことが出来る。スポーツという観点から見れば、まあ、素人にしては悪くはないだろうな」

「……なにを？」

「だが、着地地点では無防備。地点の予測も容易」

俺は感覚が身体に戻ったのを察知して、なんとか立ち上がり始める。

まだ、どこか虚ろな気はするが仕方ない。

「随分、余裕ですね？」

「事実だ、よく格闘技の真似をした素人がする行為、リズムをとってみせるのは悪手だ。自分のもつとも動きにくいタイミングを相手に教えているに他ならない」

「ほう、素人の物まね扱いですか」

「なんの変化もつけず、かといってフェイントも入れずにそのまま。これが素人の物まねでなくてなんだと言っただけ？ 素人同士の喧嘩でもありえんな」

俺はそれに返答せず、皇帝を顕現させたままの真田先輩に向かって走り出す。

先輩の電撃という能力を考えれば、果てしない距離を 怒りのまま真直線になんの考えなしに……。

「馬鹿な奴だ……」

どつちかだ、このバカ。

真田先輩は再び、引き金を引くために自らの額に召喚器を当てる。

「行くぞっ、電撃<sup>ジオ</sup>」

「行くぜっ、電撃<sup>ジオ</sup>」

同時に叫ばれるかけ声。

引かれる引き金。

なんの考えもなしに……俺はそう見せかけたただけだ、このタコっ！

同調能力を生かした、増幅を伴わない召喚。

俺の背後に顕現するのは真田先輩と同じく、異形『皇帝ポリデュークス』。

既に召喚が成されている、真田先輩が寸分早く電撃を放ち、俺に直撃するも電撃への耐性によりなんとか踏みとどまる。

……十分、痛いけどな。

だが、これでカウンターが決まる！

ダメージは低くても、とりあえずは不意打ちの一撃目だ！

遅れて放たれた俺の『ポリデュークス』による電撃。

は、なんの効果もなしに弾かれる。

静電気のような青い光が、真田先輩の周囲に僅かに走った程度だった。

威力と受けたダメージに差があるだっ！？

彼にとっても予想外であろう事態にも、まったく動じず連続して引き金を引く、真田先輩。

それに同調して、まったく同じタイミングで引きつける俺。

放たれた電撃は3つ、それらは互いにぶつかり、拮抗。

したかのように見えたが、1秒足らずで簡単に飲み込まれ、俺へとその全てが襲いかかった。

「ぐわあああああ！」

たやすく俺の模倣されたはずの電撃耐性を打ち破り、強力なダメージを負う。

なんだ、コレ？

俺の同調によるペルソナ召喚は、相手と同じ能力を持つ訳じゃないのか？

俺はそのまま膝をつく。削られた精神力はかなりのものだ、もう電撃は一回か二回ほどしか放てないだろう。

「……まさかここまで差があるとはな」

まるでこうなることを知っていたかのような、先輩の言葉。

「なにを言ってますか、先輩？」

「どんなに力があるペルソナも扱うのは自分自身だ、その力の発揮に本人の能力が影響するのは当然だろう」

「ようするに先輩の精神力の方が俺より上だ、と」

「ああ、そうだ。……どうやら今のお前は、本当に俺に勝てんらしいな」

は、なんだその巫山戯た言い方。

舐めてんのか、見下してんのか。

つか、アンタ何様のつもりだ、勝手に期待した癖に。

……俺をそんな、失望したような目で見るんじゃねえ。

そついや言っつてやがったな、天狗がペルソナとは『心の鎧』だと。ならペルソナ同士の戦いは心の戦いだ。

ついでにペルソナが自分自身だとするのなら、俺が同調して他のペルソナを召喚したところで、俺はどうあったところで相手にはなれない。ならその模倣も不完全なものなのだろう。

なら、俺が本物以上の力をだせる時は、相手の力を伸ばそうとする時だけだ。

……身体的にも劣るだろう、ペルソナによる強化を除いたってな。

人間同士の戦いって言う目で見たって、経験はアンタに劣るだろうよ。

でもな、これは……。

「ただの人間の戦いじゃない」

「……なんだと？」

「身体能力や経験？ ああ、人間と人間の喧嘩ならそうだろうよ。心の戦い？ ああ、単純にペルソナ同士力比べならな。でもな……これはペルソナ使い同士の戦いなんだよ、それだけで決まる訳じゃねえよ」

「……それがどうした」

「見てろよ、必ずだ。アンタのその涼しげな面、張った押してやる」

その目が気にいらねえ。

勝手に人に失望して、見下すような目がな。

俺は立ち上がる。

「次、地面に這いつくばんのはアンタだ」

「……おもしろい、やってみせる。俺は俺にお前を接近させる気はない」

「アンタが弾切れ起こす前に近づいてやるっ、どんな手を使ってでもな」

いいか、見てろよ。

おもしろい？ 二度と言えなくしてやる。

「膝付かせて、跪かせて、這わせて、吐かせて、切り刻んで、踏みつけてやるよ」

そう言いながら、俺はナイフを取り出した。



幸い、誰も見てる人間は他にいない。  
……背後から堂々と潰してやる。

\*

夜由良が右頬をさすりながら俺を恨めしそうに見る。

「思いつきり殴りましたよね、先輩？」

「……加減はしたぞ、手心は加えてないが」

そういいながら、俺は用意されていたクーラーバックから保冷剤を取り出し渡す。

夜由良は顔をしかめながら、頬にそれを当てた。

そのまま不服そうに文句を言い始める。

「だいたいボクシング医者に止められてるくせに、人を殴るなんて」

「これはお前も同罪だろう」

「先輩が勝手に殴ったんですよ、殴れなんて言ってません」

「やらなきゃお前、本気で当ててただろうが」

「無抵抗に俺に切り刻まれりゃいいんですよ！」

「出来るか！」

……さつきからこんな調子だ。

まったく、どれだけ熱くなっているんだか。

少しは頭を冷やして冷静に動くべきだぞ、まあ、挑戦的なその戦いに対する姿勢や闘争心は感心するがな。

「にしても、わからんやつだ」

「なにがです？」

「てつきりスニーク隠密潜行でこそこそ襲うだけだと思っていたぞ」

「……ありや、相手が気付いていないか、他におとりがいるから成立するんですよ」

そう、隠密潜行はあくまで相手に認識されにくくなる、気付かれにくくなるだけのスキル。

見えずらくはなるも、見えなくなるわけはでない。気配が希薄になるも、気配がなくなるわけではない。存在感がない、と言ったって存在しなくなるわけでもない。

あれは影や障害物がある場所、特に屋内で光るスキル、単純な戦闘では効果の薄い能力だ。

肉薄した接近戦で、スピードで相手を翻弄し死角に入り続ける、などというありえないほどに熟練された技術があるならまだしも、拮抗した一対一での戦闘ではたいした力を持たない。

集団での乱戦ではまた別の効果があるのだろうか？

実際の所、あの時の、こいつはいつたいどうやってあの動きを可能としたのか、考えれば考える程興味は尽きない。

あれは自分でも明らかに無理な戦況だ、集団の暴力は一個人の戦力をたやすく凌駕する。

もっともその状況下で戦わねばならぬ時に、それを理由に勝ちを諦める気など、俺にはないわけだが、それでもあの数に無傷なんて言うのは物理的に不可能だと思えない。

あの時の夜由良と、今の夜由良。

いつたどこにその差があるというのだろうか。

いつかその謎の答えを出してくれるのだろうか、こいつは。

俺の視線に気付いた夜由良は、もう一つある大きめ鞆を漁りなにかを取り出した。

「じつと見ないでくださいよ、気色悪い」

「気色悪いだどっ!？」

突然、暴言を吐く後輩。

そう言いながら、トレーニングのエネルギー補給に用意して置いてくれたのだろう。バナナを取り出し俺に渡す。

可愛げがあるのかないのかわからん。

どうやら夜由良は俺が屋上でトレーニングすると言っ前から、色々と用意してくれていたらしい。今、コイツが使っている保冷剤も夜由良自身がなにかあった時に、と持ってきた物である。

アイシング用の道具は治療的処置にもトレーニング後のケアにも、また筋肉のもつともいい温度を保持するにも使える必需品だからな、まったく気が利く奴だ!

闘争心むき出しの睨み付けるような表情、そのまま真っ直ぐに前を見ながらバナナを食う夜由良。

ああ、いい表情だな。俺も怪我がなければ全力で相手をしてやりたいんだが。

俺もバナナの皮を剥き食べ始める。

バナナはこう見えて馬鹿に出来ん。エネルギー効率がいい、いわばトレーニングの友だ。俺もよく世話になっている。

夜由良は真剣な顔で、なにかブツブツ言いながらバナナを食べる。恐らくは先ほどのトレーニングを分析しているのだろう。まったくもって頼もしい限りだ。

さつきはああ言ったが、どちらにせよ油断出来ぬ奴であることには変わらない。なにせ……。

「……男二人並んでバナナを食っ図って最低だな」

……今なにか、夜由良から聞こえた気がする。

お前、そんなこと考えてたのか?

つくづくなに考えてるのかわからん、俺には理解出来ない思考構造をしていると思えん。

夜由良は思い出したかのように言う。

「とにかくもう俺には先輩の電撃は通用しませんから」

そう、コイツはあの後、俺の電撃シオを完全に弾いたのだ。弾く……と言つのも、正確な表現ではないな、なんというのか逸らしたと言すべきか。

どうやったのかいまち理解出来ん。

いや、わかることにはわかるのだが、実際やってみると言われたらどうやれば出来るのかわからないのだ。

「あの手品の種はなんだ、教えろよ夜由良」

「教えても先輩の力の使い方じゃ無理ですよ、最大最速に固執してるだけじゃ駄目ですね。持久戦に持ち込めば、俺の勝ちですよ今のルールなら」

「一発貰ったのはお前だがな」

「先輩が殴るなんてわけわかんない真似するからですよ」

よほど殴られたのが不満らしい、いや、やらなきゃやられてたろうが。

「わけわかんないって、どう考えてもわかるだろうがそれは。いいから教えろよ」

俺がそう言うと、不服そうに夜由良は言い始める。

「……俺の力は所詮は劣化コピーです、今まではそのコピー精度を上げることに固執してきました、同調度合いを上げることだね。で

すが逆に言えば劣化具合を調整して最小最遅すら目指せるんですよ、力の制御力では俺のが上ですね」

「なんだと？」

「意味わかんないでしょ？ 俺が言えるのはここまでですね」

俺は頭を掻く。

どう考えてもそれは戦闘において悪手だろうが。それは必要のないものだし、鍛錬で底上げ出来る物でもないと思うが。

「いいんですよ、先輩はそこは考えなくて。まあ、別に考えてもいいですけどね、ヘタすると先輩の長所潰しちゃいますよ？」

「む……そうか？」

「ええ、1の力を消費してもっとも効率よくダメージを与える。先輩の力の使い方でしょ？」

無駄はなし、今できる最大の効果を持つ攻撃と戦術を」

「まあな」

「それでいいんじゃないですか、ヘタに色々と手を回すより。電撃耐性なら先輩はもう持つてるんだし？ 必要のない技ですよ」

「それはそうなんだが……」

「とにかく長所を伸ばすべきですよ、超近距離と中遠距離のオールラウンダー。その中でも攻撃速度は最速、それでいいじゃないですか」

もしかして、これは褒められてるのか？

だがコイツの場合は冷静な評価という気がする、余計な気回しがない分、そのままを受けられて気が楽と言えばそうなんだが。

「そっぴゃ話は飛びますけどね、真田先輩と桐条先輩っていつからの付き合いなんですか？」

「どうした、いきなり？」

「いや、二人ともなんだかんだ気兼ねしない関係って感じじゃないですか、なのに一緒にいることは滅多にないし、無条件に仲良さげって風には見えないんですね」

そう言われれば、確かに常に一緒にいるわけではないな。むしろ、それぞれがそれぞれの役割を果たしている関係と言っべきか。

「……それで？」

「いえ、最初は幼なじみなのかな、って思ったんですよ。最近知り合ったばかりにしてはか信頼関係もあるし、性格もわかりあってるみたいだし？」

信頼か。確かに俺にとってアイツは、今居るメンバーの中でもっとも信頼していると言ってもいい。

互いに弱みを見せられない中で、それを僅かにでも吐露できる数少ない相手。

「まあ、自分達で言うのもなんだがお互い癖がある性格だからな、なかなか無条件で気を許せる相手がいない。……そう言う意味ではアイツと俺はどこか似ている部分がある、それと同時に相反する部分も備えている。だからこそ、わかりあえるし補い合える」

「なるほど。まあ、俺から見てもそんな印象ですね。でも、相棒じゃないんでしょう？」

「……そうだな」

それは、違う奴に送られるべき言葉だ。

俺の隣で、背中を任せられる最も信頼出来る相手。

「相棒か……改めて言われてみると不思議なものだな、色々と考えさせられる」

「そうですか？」

「ああ。アイツは間違いなく俺にとって掛け替えのない仲間だ、命を賭けて助け、助けられた、な。アイツのためにならどんな危険にでも飛び込む覚悟はある。だが、その仲間と言う中にも様々な形があるものだ、とな」

「……深いですね、あなたは本当に真田先輩ですか？」

「どつという意味だ？」

「あ、すみません。バナナだけじゃキツイですね、とりあえず水飲みます？」

「……あからさまに話を変えたな」

だが、俺は夜由良の差し出した水を手で制するように断る。

「俺は自分でドリンクを作っている」

「へえ……すごいですね」

「そうでもないさ、これは疲労回復に効く奴だな」

そう言って、互いに飲みながら話す。

そろそろ身体が冷える前に動かないと拙いかもしれんな。

「あ、ちなみにそのドリンクの中にプロテインは？」

「……入っていない、なんでもかんでも入れると思うなよ？ アレにもタイミングや必要な量がある」

「失礼、飲食物全てに入れてると勝手に誤解してました」

「まったく……」

「あ、じゃあ今日食後に飲んでたコーヒーに入れてたのって、もしかしてミルクと砂糖ですか？」

「他に何かあるか言ってみろっ！」

夜由良は肩を震わせながら、声もなく笑う。

「はあ、本当にどうしようもない奴だな。隙あらば人をからかおうとして。」

「こうしてみると全然奴には似てないんだが、どこかさりげなく人を見ているときの印象がな。いやしかし、そう、どちらかと言えば……。」

「いや、いかんいかん。他人に重ねて人を見るなんてのは、どちらに対しての不誠実だ。」

「……それが身内ならなおさらな。」

「ああ、そう言えばどうして幼なじみじゃないと思ったんだ？ お前の話し方で行くとそうだと勘違いしたままでもおかしくないと思うぞ。」

「勘違いね、やっぱりそうなんですか。いえね、子供の頃から一緒にらそうはならないな。って思いました。」

「なにがだ？」

「距離感ですよ。それならもっと近い距離で補い合う関係になると思っんですよ、直接至近距離で世話し合うみたいだね。なんて言うか、もっと目が離せないっーか、ほっとけないっって言うか。」

「……なるほどな。」

「たいていの場合そういうのって、距離が近すぎてこじれると長くなるんですけどね。人間関係ってほどよく距離をとってんのが大事なんですよ、長く続かせたいんならね。だから先輩らの距離感好きですよ、とても参考になります。」

「本当によく人を見ているな。」

「いやあ、それほどでも。」

「あながち褒めてはいないかもしれんぞ？」

そう言って、俺は密かに夜由良に呆れを示す。



コイツは常に周囲を怖いくらいに見ている、まるで全て知っているかのようなしゃべりだな。まったく占い師か、コイツは。

いや、占いなんて物は信じちゃいないんだが、コイツを見ているとそういう得体の知れない物が世の中にあるんじゃないかと思いたくなる。

まあ、ペルソナなんて物もあるんだからオカルトオカルトがあってもおかしくないのかもしれないがな。

「それで結局、いつからなんです？」

「中学からだな、美鶴との付き合いは」

「ほう、との、ね」

……なんだ、妙な返しだな。

「まあ、いいです。その頃からこんな活動を？」

「そうだな」

「トレーニングも？」

「いや、それは……」

「あ、いいづらいならいいです」

そう言っつて勝手に話を切る夜由良。

俺が顔に出過ぎなのか、コイツが鋭いのがわからん。

「……別に話してもかまわんが、な」

「ぶっちゃけ興味ないです、先輩がプロテインと筋トレマニアに走った切っ掛けなんて」

「おい、もつと言いつつてもんがあるだろうが？」

本気なのか冗談なのか。結局、からかおうとしてるのか、素直じゃない思いやりなのかがまったくわからん！

「それよりそのドリンク気になりますね、いいですか一口？」  
「ああ……かまわんぞ」

俺はそう言っつて、ドリンクの入ったプラスチックボトルを渡す。  
ふむ、なんだかんだコイツもトレーニングには真剣だしな、なん  
だつたら作り方を教えてやってもいい。  
別に二人分作るのも手間ではないし、それなら……。

「ブツ！」

「ん？」

「ぺっ！」

「っ！？」

俺にボトルを爽やかな笑顔で突き返す夜由良。

コンビニの定員と言っつより、テレビの洗濯物のCMに出てきそ  
うな笑顔だ。

「あ、ありがとうございます。もういいです、本当にありがとう  
ございました」

「今、お前吐いたよな？ 絶対に吐いたよな？」

「えー、目の錯覚じゃないですか？」

「床を見るっ！ どこが目の錯覚だ！」

「……ああ、雨の日には流れますよ、綺麗に」

「そう言っつ問題か！」

「つか。これ、マズイですよ、かなり。っつ言っつか、酸っぱいだけ  
じゃないですか、なに平気な顔して飲んでるんですか、俺、まだ唾  
液止まりませんか？ こんな喉渇くでしょう、むしろ」

そう言っつて、水を飲み始める夜由良。  
凄く嬉しそう、かつ美味そうに水を飲んでいる。

「……酸味には疲労回復の効果があつてだな」

「ああ、クエン酸的な」

「そうだ、だから……」

「だから、マズインですね。勉強になります」

コ、コイツは……。

「お前、人がせっかく飲ませてやったのに……」

「じゃあ、聞きますけど先輩。コレ、美味しいですか？」

「いや、だから酸味にはな……」

「じゃなくて、美味しいかマズイかの二択で言ってくださいよ」

「……それは、だな」

「美味くは、ない。……ですよね」

くっ、すまん。俺の特製ドリンク……もうお前の弁護は出来ん。

プ、プロテインにだって飲みやすいのと飲みにくいものがあるんだぞ！

俺が手に持ったボトルを眺めながら、そんな言葉を飲み込んでいるとため息が夜由良から聞こえた。

「はあ、しゃあないですね……今度、俺が作りますよ」

「なにっ、本当か！」

「ええ、自分で作ったことないのに人のに文句つけるのもフェアじゃないでしょ？ これからちょっと勉強しますよ。しばらく待ってください、飲んだらトレーニングの励みになりそうな考えますから」

「おおっ、楽しみにしてるぞー！」

それは期待出来るかもしれん！

フツ、これはいい楽しみが出来たな……今日はいつもよりトレーニングにも力が入りそうだ！

「つか、フツにレモンの蜂蜜漬けベースとかじゃ駄目なのかな……」

夜由良を見ると、もう既に色々と考えているようだった。

うむ、気の早い奴だ。気持ちは分かるがな！

4月14日 火曜日 、『期待はずれと裏切り方の関係性』（後書き）

書いていて、真田先輩が可愛くなりました。

学校では桐条先輩と生徒会関係で一緒、学校の外では真田先輩とトレーニングで一緒な感じですが。本編行く前に、もうすこし寄り道。

4月15日 水曜日 く 『混迷していく詐術師の道』 (前書き)

そろそろ本気でろくでもないことを始める夜由良君。

ここから物語は狂うのか狂わないのか？ 愛想つかさないであげて欲しいです。

4月15日 水曜日 『混迷していく詐術師の道』

4月15日（水）

夕食の後片付けを終えた時、なぜか先輩達は作戦室に俺を呼び出した。

あまり好い予感がしない。

短い人生ではあるが生きてきて、好い予感がしたためしもないと言ふ事實は、まあここは置いておこう。

そもそも、生きていてなにかいいことがあったか？ と聞かれても返答に詰まる俺だ、そんなことを気にしていたら生きていけない。

いや、人生に不満があるわけじゃないんだけどね。こう見えて、でも物事って良いとか悪いとか言い切れないことばっかじゃん？

もし物事を良いか悪いかで判断してるヤツがいたら、そりゃどっか間違えてるよ。仮に悪いことがあったとしても、それを含めて今の自分がいるわけだしさ。

って、それはさておき。

一応、軽くノックしてから入室する。

「来たか」

部屋のテーブルに向かい、高級感溢れるソファアームに座っているのは桐条先輩。……いい家具ばかりだな、この部屋。正直、自室に持ち帰りたいくらいだ。

一通り見渡したものの、他に人は見あたらない。

「真田先輩はどうしたんです？」

「話の内容には了承したんだがな、任せると言ったきりどこにいったのやら……」

たぶん部屋に籠もって筋トレですね、わかります。間違いなくあの人の部屋汗臭そう。

それはそうと真田先輩、夜に外に出て行くときはきちんと桐条先輩に報告していくからな。さすがにそういう常識はあるらしい、単独行動多い癖に、団体行動の基本はわきまえてる。

いや、さすがに報告なしで次に前触れなく、シャドウの大群引き連れてきたときはそれでも公開処刑だよ？

まず、左の肋骨だけでなくバランスよく両方砕いた後、今まで考えてきた殲滅戦術全てを順番に試行してやる。そして、その後の食事は野菜オンリーにして、精進料理を食べているお坊さんも真つ青な、味を度外視して健康だけを追求した食事にしよう。

でも、ほら、俺は優しいから骨折が治るようにカルシウムもばっちりとれるようにするよ、うん。

その肋骨が治った後、また「はい、2週目」って言いながらで同じ事を繰り返すかどうか悩むところだが。

「それはともかく……話の内容ですか？」

「ああ、かなり重要な要件だ」

……それはいいニュースですか、悪いニュースですか。

両方あると言われたら、どっちから聞こうか悩みます。強いて言うなら、どっちをオチとして持ってきた方がおいしいか聞いてから判断したいですね？

「……そんな緊張した顔をしなくてもいい、とりあえず座ってくれ」



……そっか、顔に出てたか。

我ながらよほど動揺していると見える。

余計なことは言わずに、大人しく椅子に座っておく。

「そろそろあの場所に探索に出ると言う話はしたな？」

「出られるかも、と言う程度のことだったような気もしますが。そうですね、覚えていますよ」

「……一之瀬が目を覚まし次第、動きに入るつもりだ」

「あー、それはいい節目かもしれないですけど」

間違いなく、引き入れて戦力を増強させて臨むつもりだな。  
でも、ま、どちらにせよ、だ。

「岳羽にとつてもその方がいいでしょうね、彼女は彼に関して責任を感じてます。一之瀬が目を覚まさない状態での、戦闘への参加はかなり精神的に……」

「話はそのことも含んでいる」

「は？」

岳羽の、話ですか？

「岳羽は未だペルソナを召喚出来ていない」

「確かに。それでも能力は検査であることは確定してるらしいですけどね」

「また、前回の実戦では恐怖で動けない状況にあった」

「しかし、彼女は初陣だった訳ですから仕方なし、でしょう」

「……そうかもしれない、しかし現実的な問題としてこれから彼女は戦えると思うか？」

難しい質問だ。

正直、やってみなければわからない。

初陣つてのは結構デリケートだ。それで上手くいけば波に乗れるし、出来ないならトラウマのようになって次の戦いにも大きく影響してしまう可能性もある。

今回の結果のせいで岳羽が二度と戦えなくなってしまった、そんな可能性は零ではない。

まあ、それを踏まえて言えることがあるとすれば……。

「個人的には鍵となるのは、まあ、一之瀬だと思っではいますよ。俺はね」

「……彼が？」

「ええ、岳羽は今回の結果に責任を感じています。それは本来、アイツだけが負うべきものじゃないんですけどね。でも、それはマイナスにだけなる訳じゃないですよ」

一之瀬が参戦するのなら、まず岳羽にとって大きな支えとなる可能性はある。

さらに、彼が前線に立つのなら、その彼を今度こそ護るために同じく、彼女も戦場に立とうとするだろう。果たせなかった責任を果たすために。

戦う理由は多ければ多い程いい、護るべきモノが多ければ多い程、人は強くなれる。

俺はそんな立場に身を置きたいなんて毛頭思わないけどね。俺は護りたいモノがなくても戦うし、それが一番いいとさえ思っている。大切なモノのために強くなれるって言うのは、逆に言えばそれがなきゃなんにも出来ないってことだから。ただ人にはそれぞれ合ったやり方があるわけで、そのやり方に関して万人共通の絶対の正解なんてない。

「ともかく岳羽に関して言えば本来は果たさなくてもいい、背負わなくてもいい責任ですが、それはきつと彼女の力にもなると思います。彼女が潰れてしまわなきゃですけどね」

そこは俺も頑張らなきゃな。だけど、おおざっぱには一之瀬に任せたいところだ。

他人を頼りにはしたくないんだけど、役割分担だもの仕方ないさ。まだ仲間になると決まった訳じゃないけどね。

「君は……そんなことを考えて日々を過ごしているのか？」

「いえ、自然と頭に浮かぶだけです。なんとなくね。四六時中、思考しているわけじゃないですよ」

ある程度、見てたらわかる。

それに人と言う生き物が、いちいちなにかをするのに言葉に出来るような理由があるってことくらいのは知っている。

俺みたく、よくわかんないけどそうしたいから。なんて風なこと命を賭けてまで生きてるのはわりあい少数派だ。みんな、命がかかったりと手間がかかると退くみたいだから。

「すごく身勝手なことを言いますが、引き金を引くのにはいちいち理由なんているんですかね。

生きるって事は少なからず戦うってことだし、さらに言えば嫌でも自分の選択に人生を全部を賭けることですよ。俺からすりゃ悩んでどうすんの、って感じなんですけどね。真田先輩を見てたらその辺、馬鹿馬鹿しくなりますよ?」

「厳しいな、君は」

「そうですか?」

「……戦うことに理由を求めない者はいないさ、そこに違いがある

とすれば、その理由が言葉に出来るかどうかの違いがあるだけだろう」

「言葉に出来ることは重要ですかね」

「言葉に出来る、と言うより説明がつく納得できることが重要なだろう。君は戦うことや選択することに躊躇せず、それをするのが当然のことだと思っっているのかもしれない。」

だが、たいていの場合そこに人は重みを感じ、その重さゆえに理由を必要とする。引き換えにするかもしれない、命や残りの自分の人生がとて大きな価値を持つからだ。もっとも、その理由というもの……言葉にしてしまえばきつとそれは他人からしてみたらくだらない理由なのかもしれないがな」

「んー、一理ありますね、でもそういう人間は暇さえありゃ、生きていることにすら理由を求めますね。きつと」

「……かもしれないな、君はそれを馬鹿馬鹿しいと思うか？」

「自分が納得したいだけの理由探したら馬鹿馬鹿しいと思いますね、理由があるうがなろうが実際生きてるわけですから。」

一つ言わせて貰うと、立ち止まって考えても分からないなら、歩きながら考えるしかないんですよ。色々なモノと向き合いながら探すしかね」

って言っても、俺は理由探しやら自分探しとかなんかクソ喰らえだし、そんな言葉自体が嫌いな訳なんだが。

そんなもん、探すまでもないだろうって言う。自分のやりたいことを見つけない？ それがないのがお前なんだろう？ って言う、ね。

まあ、これは人には言わないけどさ。どう考えてもひんしゅく買うから。

「ああ、つい話がそれちゃいましたね」

桐条先輩を見ると色々と思うところがあつたらしく、かなり深く  
思索していた様子だった。俺はただ思ったことを言っているだけな  
んだから、そんなにきちんと考えなくてもいい気がするんだがな。  
……我ながら少し話すぎたかもしれない。

「いや、これは私の方が原因だろう。すまなかった」  
「やめてくださいよ、先輩。結構、こういう話するの自体は嫌いじ  
やないですよ、俺は。……ただ先に用件へ行きましょう、その方が  
すっきりしている」  
「そうだな、そうしよう」

桐条先輩は腕組みをしながら、改めて俺を見る。

「話を戻すと、あの場所を探索するに当たって私達三年は前線に立  
てない」  
「先輩らが？ ……確かに負傷している真田先輩は仕方なしとして  
も、桐条先輩はなぜです？」  
「君も以前聞いたろう、あの場所……シャドウの巣である『タルタ  
ロス』特性を」

タルタロス、シャドウが無限に湧き出る謎の建造物。

外観は天を突くのではないか、と言う程にどこまでもはるか高い  
塔。

そう、俺はここに入るに当たって、あの場所に関する情報をいく  
つかもらっている。

俺がここにいる理由が、その『タルタロス』を探るためである以  
上、それらに関する情報を欲しがるのは当然だろう。そして、もう  
一つ理由があるとするなら、理事長と先輩達にとって俺が彼らと組  
む利点を理解させる必要があつたからだ。  
メリット

よつするに俺は一人でも探索が可能なら行つつもりだったが、それが困難であることを俺に納得させるべく、彼らは自らの情報をある程度開示してきたのである。

一つ、タルタロスは影時間にだけ現れる特異点である。

一つ、タルタロスはシャドウが無限に現れる危険域であり、探索には危険を伴う。

一つ、タルタロスはその内部構造が安定しておらず、また毎日変化するために、探索は容易ではない。

一つ、タルタロスに影時間が終わっても、その内部に留まるのは危険である。

一つ、タルタロスが出現した経緯についてはともかく、なぜ現れたかと言う根本的な理由については謎であり、あれがなにであるかは誰も知らない。

……俺はその情報を聞いた上で、半強制ながらこの活動への参加を了承した。

単独での探索が现阶段では難しいと判断したからだ、シャドウが群でいるのはまだいい。だが内部構造が安定しない中、不測の事態に対応するのはある程度の経験が必要だ。

少なくとも、彼らから情報を十分に得たことで、俺は自分の力をつけるまでは協力しよう。そう考えるようにはなったと言う次第である。

まだ、こちら側には俺に提供されていない情報もあるようだし？

まあ、焦りはしないさ。時間はまだある。

「まあ、話して頂いたことについてはあらかた頭に入っていますよ」

なにはともあれ、俺はそれだけを返す。

「ならば、分かっていると思うがタルタロス内では不測の事態がおきやすい。それに対応するためにも情報の面からサポート出来るバツクアツプ要員は必須だ」

「……つまり？」

「私のペルソナには調査能力がある。レベルは高くないが、桐条の資材で補強することでなんとか実戦にも耐えられる程度には使える」  
「なるほど、そのために先輩は前線には立てないと」

「そういうことだ、となれば君達2年だけに前線に立つてもらおうことになる」

2年だけ、でね。

と言うことは必然的に戦うのは、俺と岳羽、そして一之瀬の3人。

……あまり安心感のあるメンバーじゃないなあ。戦闘向きじゃない半端者に、未だ力を扱えないペルソナ使い。おまけに暴発の危険性のある新入りと来たもんだ。

俺なら間違っても一緒に戦いたいとは思わないね、自分で言うのもなんだが。

って言うか、短い期間ではあるけど先輩らを間近で見ってきたからな。あらゆる状況で攻めにいける攻撃速度最速のオールラウンダー。もう1人は常に堅実に隙のない戦い方を重視し、強力な特殊攻撃で最後の決め手になりえる司令塔<sup>コマンド</sup>。

この2人と比較するとどうしても、な。

「正直、戦力的に無理……と言いたところなんですけどね。俺は「君の慎重さは理解しているが、臆病に過ぎるのも考えものだ。少なくとも低階層では、タルタロスで遭遇するシャドウも貧弱だ。今の君ならナイフだけで十分、殲滅可能だ」

あれ、課外活動部がタルタロスに探索をかけるのは初めてじゃなかったですか。どうしてシャドウのレベルなんか知っているんです？

まあ、いいさ。そこは言わないでおこう。

「俺だけじゃないのが問題なんですよ、とても岳羽と……まあ、一之瀬もですか。2人も素人の面倒を見るのは……」

「私も可能な限りバックアップする……それに岳羽にもそろそろ選定が必要な時期だ」

「選定？」

桐条先輩はどこか言いにくそうに目をそらす。

俺にはそれだけで、十分に理解出来てしまった。

「ようするにあれですか、最悪の場合、その探索での岳羽の様子次第で解雇通告が行くわけですか」

「いくらなんでも放り出したりはしないさ、彼女が戦えなくても桐条が必ず護る。それにたった一度の探索で決めることもない。少なくとも半月は様子を見るつもりだ」

「……岳羽にそのことは？」

「まだだ。と言うより、言う気はない。変に意識をしまえばなおさら失敗する可能性が高まる」

「なるほど、あまり望みはない。と思っているわけですね」

その俺の科白になにかがど元に詰まったかのように、表情を苦しそうに歪める先輩。

桐条先輩がはつきりとは言わない部分を読み、率先して言う俺。

これは空気が読めてないってことなのか、逆に読めてることなのか。ま、どっちでもいいんだけどね、俺は。

「要するに戦力外通告で前線から外すけど、課外活動部からは出さないわけですね？ まあ、ペルソナ使っただけで利用価値十分だ……ってことにおけば、桐条の方への言い訳が立つってトコで



すか。なるほど、その身を保護する名分も付く」

「君は……いや、だいたいその通りだ」

なにかを言いかけてやめる先輩。重くため息を吐いてから、俺の言葉をおおむね肯定する。

「いたく気まずそうな顔をしているが、別に気まずくはない。こつちはね。」

「それでいいんじゃないですかね、本人も万が一そんな状況になっ  
てしまった時にはそれを望むでしょう。一応、彼女は志願者ですか  
らね。なんらかの形で部に残すつてのは」

「だけど、そうなるとますます責任が重いね。」

「俺が彼女のフォローをするの？ いやいや、無理だから。」

「どうやったって、短期間で岳羽からの信頼を得る手段はない。彼  
女は信頼関係のない相手から受けるフォローをよしとする、そんな  
人間ではないように思う。」

「まあ、何はともあれ状況はわかりました、岳羽の件についてもね。  
話は以上でしょうか？」

嫌な予感はいしたけど、ぎりぎり許容範囲だ。元から岳羽について  
は気に掛けていたから、仕方なし。

「タルタロスに行くのも予定通り、むしろ遅かったぐらいだ。」

「いや、本題はここからだ」

「……は？」

「これ以上、なにがある？」

「あれ、頭のなかですっと警鐘が鳴り続けている。これ以上聞くと拙

いぞ、つて。

「我々3年が現場に出られない以上、現場での即断即決が求められる場面で決断出来る人間が必要だ。的確に冷静な指示が出来る指揮官<sup>ダイ</sup>がな」

「……なに言ってるんです？ 指示は桐条先輩が通信で」

「それが常に通用するとは限らない、確かに私のペルソナは調査能力を有するが、現場にいる人間にしかわからない部分は多いだろう。情報分析はバックアップの領分だが、そこから判断するのは前線に立つ指揮官<sup>リーダー</sup>の役目だ」

「ちよつと待つてください！ それってつまり……」

俺は立ち上がり、声をわずかに荒げる。

桐条先輩を制止するように。

「ああ、そつだ」

だが先輩は止まらない。

「君に現場での指揮官<sup>リーダー</sup>を頼みたい。それが現状、最善の選択だ」

選択。

たくさんあるものから、なにか一つに決める。その決めた結果に責任を負うとき、人はそれを選択と呼ぶ。流されるのではなく諦めるのではなく、選ぶ、と。

よつするに、俺にその責任を担え、と？

「君の判断力はとても評価している。その洞察力も」

嫌だ。

「岳羽については今話したように、問題点が大きい。実戦経験者である一之瀬は強力な力を持っている可能性が高いが未だ不明瞭だ。消去法……と言えば、聞こえが悪いかもしれない」

嫌だ、嫌だ、嫌だ。

「だが、もし君以外のメンバーが実戦経験を備え、力の扱いに問題がなかったとしても私は君を推しただろう。その能力が戦闘に向かないことを差し引いても、だ」

勝手に俺に期待するんじゃない。

俺をそんな目で見るな、俺を出来る人間だと思わないでくれ。

俺はそんなたいした人間じゃないんだ、本当だ。嘘じゃない、俺は平凡にすら一歩及ばない人間なんだ。

それを口先で誤魔化してるだけなんだ。

「なぜなら君は、ん……？」

距離をとっていれば、気付かれないと思ったんだ。

なんとなくいつも手を抜いているように見せていけば、仕方ないって思われるだろ。本気で頑張っているも、本気じゃないって思われてた方がいいじゃないか。

努力していて、この程度だって思われたらみんな……。

「夜由良？ どうした、顔色が悪いぞ」

お願いながらやめてください。

俺に期待しないでください。

必死に努力してそれでなんとか合わせられてるんだよ、顔色うかがってみんなのやつていることを見て、マネをしてぎりぎりのレベルを保てるようにしてるだけなんだ。俺は俺の出来ることしか出来ないんだよ、それ以上なんか無理なんだ。

何もかも、周囲を見ながらやってようやく生きてるんだよ。

「夜由良、夜由良！」

だから、もうやめてください。

もう俺を見ないでください、期待なんかやめてください。

重いです、つらいんです。胸が締め付けられるように痛いんです、頭が重くて目が開けられなくなりそうなんです、お腹がきりきり音を立てるんです、吐きそうなんです、ずっとため込んできたドロドロの何もかもが音を立って責め立てるんです。

嫌なんです。

だって、先輩。俺のこと……失望するじゃないですか？

きつと、期待はずれだって言うじゃないですか。すごく残念そうに言うんじゃないですか、こんなものかって。

もっと出来るはずだ、ってそう思ってたのに。こんな所止まりかって。

言いますよね、言うんでしょうね。そう、見るようになるんでしょうね。

嫌です。

先輩にそんな目で見られたくないです。

俺……だって。

肩を叩かれる感触。

「……大丈夫か？」

心配そうに伺うような声。

いつの間にかその場にうずくまっていたらしい、俺は顔をあげられない。

「見ないでください」

「は？」

「お願いですから、今は俺を見ないでください」

「……夜由良、もしかして泣いているのか？」

いいから、見ないでください。

俺にこれ以上、近づかないでください。

俺はあなたに嫌われたくないんです、失望されたくないんです。

期待はずれだ、と言われたくないんです。頼もしい、と思われたまままでいたい。

でも、これ以上期待しないで欲しい。それに俺は応えられない。

俺は今の……先輩達との生活が、すごくすごく楽しいんです。嬉しいんです。

美味しいって作ったご飯食べてくれる誰かがいて、おかえりって言ってくれる誰かがいて、たまたま見かけただけに傍まで駆け寄ってくれる誰かがいて、一緒にいたら誇らしげに話したり頑張ったりしてくれて。

それを失くしたくない。

なにかを選んだ結果でそれが消えるのは嫌だ、俺は今の状況を維持したまま生きていきたい。そんな選択肢が欲しい。

そんな選択肢は……？

そうだよ、そんなものはない。

なら、そんなにそんな選択肢が欲しいって言うなら……。

「……夜由良？」

俺は涙と醜くも流れ出てきた、よだれや鼻水を裾で拭いながら。そこまで醜悪な姿をさらしながら、顔を上げた。

可能な限りの全力の笑顔で。

「なんでもありませんよ、先輩」

「なんでもないって」

「少し具合が悪かったただけなんですよ」

「……夜由良、君は……」

俺は笑顔と沈黙で、先輩の科白を押し潰す。

それ以上、先は言わせない。そんな気はない。

俺はなにも失う気はない。

「俺、少し考えたんですけど、今の話って真田先輩もOKしたんですよね？」

「……そうだが」

「でも、ちよつといくつか問題があると思うんです」

俺はさえずる。

聞こえのいい、誰もが納得してしまいそうな論理。

俺は主役にはならない、主人公でいる気はない。そんなものは本物である先輩らがなればいい。偽物の俺は影に徹する脇役でいい、黒子のように存在し、密かに傍らで見守る、そう『隠者』がいい。

その上で、俺は俺の目的を果たしてみせる。

だから……。

「まず、ですね」

\*

夜由良優は、私と同じ2年生だ。

私がF組で彼はE組、今まで接点もなく1年の頃なんて彼の名前すら記憶になかった。

そんな彼が、突然分寮に入ってきて課外活動部の仲間としてここにいる。

先輩達とも仲が良く、率先して料理や日誌などと言った雑務なんかもしていて、おしゃべりなヤツかと思えば、それは印象だけで全体を通して考えると実は口数が少ない。必要な時しかしゃべらないからだ。それでいて何かと人の世話を焼こうとする癖に、学校では人付き合いが少ないように見える。

軽薄を装う癖に家庭的っていう、ちぐはぐな振る舞い。

私はそんな彼が……苦手だ。

どうしようもないくらいに、苦手だ。

嫌いなんじゃない。いや、どうなのかなホントは嫌いなのかもしれない。

彼の行動や言葉、一つ一つが私の嫌なツボを刺激する。

生理的とかじゃなくて、なんていうんだろう。あー、もうっ、じぶんでもよくわからない。とにかく苦手なのだ。どうしたらいいのか、わからなくなる。

最近朝起きて、一階に下りてみるとどこからか歌声が聞こえてくる。

それは日によってジャンルがまちまちで、例えばそれはタイタニックのテーマだったり、誰もが知っているような昔のアニメだった

り、今流行っているバンドの歌だったりする。

鼻歌じゃなくて、カラオケみたいにガチで歌っている。タイタニツクのテーマなんか全部英歌詞だった。

その歌っている主は、そう朝食の準備をしている夜由良なのだ。最初に気付いたときには、呆れるを通り越して絶句した。ちよつとどっかおかしいんじゃないか、とフツーに思う。

……それが嫌っていうわけじゃない。

変だな、とか、変わっているなどは思うけど。嫌いになる理由じゃないはずだ。

ま、それはいいんだけどさ。

とにかく朝起きてキッチンを覗いて。

楽しそうに料理をしている彼を見ると……どうしようもないくらいに苛つく。

それで、私に気が付いて、嬉しそうに「おはよう」って言う彼を見ると、なにかいたたまれないように気になってくる。

それは彼の作ったご飯を食べるとより一層だ。

夜由良の作ったご飯が美味しくないんじゃない、最初の頃はべつにフツのなんでもない味付けだったけど、最近はどこか懐かしいような飽きない家庭的なものになっている。

この間のキンピラゴボウなんて、すごく……その、私の好きな味だった。

でも、なぜかな。

あ、この味好きだな、と思った瞬間に。

……なぜだかすごく嫌な気持ちになった。どうしようもなく。

いや、本当はわかってるんだ。



だんだん私の好みの味になってきたってことは、ようするにだんだん私の好みを理解してくれたってことで。でも、私の好みの味ってことは……。

やめよう、これ以上は考えたくない。

少なくとも、今は。

「あ、岳羽？」

食事を終え、いったん部屋に戻ろうとする夜由良は私に声をかけたきた。

「……なに」

私は彼にいつも素っ気ない態度をとっているはずなのに、夜由良はいつも笑っている。

先輩達という時も、笑ったり怒ったり呆れた顔したり表情豊かな、そんな感じ。

それが崩れたことはない、私と違って。それがまた……なんか……。

私ってこんなに嫌な娘だったかな。

「あのさ、良かったらでいいんだけど。お弁当作ったんだ」

「え」

思いもしなかったことを彼は言う。

「いつもパンとかなんだろ？ 金も掛かるじゃん。や、お弁当って言ったって、おにぎり今朝のおかず詰めただけなんだけども……」

梅干しとおかか、は平気？」

言葉も出ない。

「もし、迷惑じゃなかったら持つていって。嫌なら、置いておいていいから」

「私は……」

ようやくなにかを言おうとすと、彼はなにを察したのか最後まで聞かない。

私の言葉を隔てて、スッと引き下がる。

「あ、気にすんな。伝えたいのはそれだけだからさ、呼び止めて悪かったな」

そのままキッチンの奥へ歩いて行く。

そのお弁当とやらをテーブルの上に置いて。

数は三つ、プラスチック製の透明なフタの容器。中身はおにぎりが二つと、つくだ煮と漬け物。

きつと、真田先輩と桐条先輩の分なんだろう、2人が持つていくかはわからないけど。

私は……。

私は……。

なるべくそれを見ないようにして、部屋に戻っていった。

なぜ、それだけのことがこんなにも私を苛出せるのかは考えない。

ただ、それがいつかどこかで繰り返したことのよう……そう既<sup>ジャブ</sup>視感<sup>シヤブ</sup>って言うのかな、私の中にそういう感じがあった。

その夜由良優の、学校での彼はなんとというか……そう『おまけ』だ。

私が彼を見かけるときはいつも、桐条先輩か真田先輩と一緒にだ。あとは、そう生徒会役員と、かな。

でも、それを言うなら桐条先輩自身、その生徒会役員なワケだし。それはともかく、彼っていう人間はなによりまず、誰かがいてたまたまその隣にいる。っていう風にみんな思っているようなのだ。

彼が影で今なんて言われているか。

それは桐条先輩の付き人。真田先輩のファンからすると、真田先輩の付き人でもあるらしいんだけど、それは主に放課後以降の話だろう。

ファンの娘から逃げる口実として彼が使われているのを何度か見ているし、学校の行き帰りは一緒にいることもめずらしくないみたいだし。

私は本来ウワサ話ってというのがあまり好きじゃないんだけど、そんな私でも嫌でも知ってしまうくらいに夜由良はウワサに登場する。主に、桐条先輩と真田先輩の『おまけ』として。あの二人は嫌でも目立つから。

だから、彼自身がウワサの対象になることはない。

いや、あるか。

彼は嫉妬の対象なのだった。そう、学校のアイドルを通り越し、ある意味崇拜の対象ですらあるカリスマ二人に囲まれているワケだし。

それをいうなら、私も同じ立場なんだけどいつも一緒にいるわけじゃないし。それにどちらかと言えば、私は先輩とはちょっと寮以外だと一緒に居づらい。

べ、べつに先輩らも嫌いだとか、そう言うワケじゃなくて。

あと言いづらいんだけど……自意識過剰みたいだけと私と同じ寮にいるっていう意味でも、彼は嫉妬されてるみたいで。まあ、そんなこと言ったってどうしようもないんだけどさ。

なんか私は、そういうの嫌だった。

その上、勉強とかスポーツとか、そういうので秀でた所のない彼はなにかと、ろくでもないことを影で言われているようなのだ。本人は気にしているようには見えないんだけどね。

それでも私は嫌だった。

彼は別に悪いことしてるワケじゃないし、私達といるからって、特別な力があるからって調子に乗っているワケじゃない。

でも、彼が苦手なのは事実だし。

あー、もう。頭の中ごちゃごちゃするっ！

とにかく、夜由良が悪く言われるような理由はない、と思う。それだけっ！

んー、本当に夜由良が嫌いなわけじゃないんだ、嫌いなわけじゃないはずんだけど。

どうしても、たまに目の前にいることが許せなくなる。

例えば、楽しそうに桐条先輩と話しながら一緒に歩いているとき。真田先輩に文句を言いながらも、トレーニングに付いてく時。寮の中でなにやら満足そうにテーブルを拭いたり、本を読んだりしているとき。

そう、なんだか思い返してみればいつも同じ顔してる気がする。表情がコロコロ変わっているはずんだけど、いつも同じような感じってどうか。言葉に出来ないんだけど。

なんていうか……。

んんっ、あー、なんでここであの人とダブるんだろっ！  
……全然、似てるところなんか無いのに。

そう全然似ているところなんか無い。  
なんてたつて彼は強いのだ、私よりも。

あの襲撃の夜、私はそれを知った。  
真田先輩がシャドウを引き連れてきた夜に。

私達は真田先輩の到着の連絡を受けて、すぐにロビーへ急いだ。  
待っていたのは、思っていたよりもずっと危険な状況と、自分の  
立場っていう現実。

状況を把握した桐条先輩はすぐに私達に指示を飛ばした。

「理事長は、作戦室へ！ 夜由良、岳羽。君達は2階に居る彼を起  
こして、裏から逃がすんだ！」

桐条先輩の指示を反芻して気付く。  
あれっ、おかしいよ。って。

「えっ……先輩達は！？」

私は桐条先輩に問い返す、戸惑うのは私だけ。

ここで夜由良がどんな顔をしていたかは覚えていないけど、たぶ  
ん平然としてたんだと思う。

……ちなみに、すぐに理事長は「わかった」と一言。迷うことな  
く走っていった。

「ここでなんとかしても食い止める。明彦、連れてきたのはお前だ。

責任は取ってもらおうぞ」

そう真田先輩に向かって桐条先輩は言う。

真田先輩はそれに不服そうに応じて。

「ヤツらの方が勝手について来たんだ！ まったく」

そして、すぐに私達を見た。

……夜由良と私を。

「……何をしてる！ お前らは早く行け！」

どうしたらいいかわからなくなった。

ここで先輩らに任して置いて行って、じゃあ私はなんのためにいるのって。

でも、夜由良は即座に前に出て行く。先輩達の隣に。

「……いやだなあ、真田先輩、桐条先輩。俺をのけ者にする気ですか？」

それも笑いながら。

それは当然だというように。

「俺も残りますよ」と。

桐条先輩はそんな夜由良を叱った。

「だが、しかしっ！？ 君の仮面ヘルメットは戦闘向けじゃない上に、君はそれを使いこなせてすらいないっ」

そうなのだ、彼は力を扱えるけどとてもじゃないけど戦えるよう

なものじゃない。攻撃能力がないのだ。だから、なおさら私が力を  
使えるようにならないといけなはず。

だったのに。

「それでも戦わずに死ぬよりマシですっ！ それくらいなら、戦っ  
て勝利の先に生を掴むことに全力を尽くします！」

彼は迷わない。

戦えるかどうかじゃない、自分は戦う。そう決めたのだ、そう言  
うように。

私は今思い返しても、どうにもそれが……。

……真田先輩が夜由良を認める形で、なし崩し的に桐条先輩も了  
承した。

それから彼が言ったことは今でもはつきり覚えている。

「岳羽、悪いけど一人で行ってくれ。安心しろ、ここは絶対に通さ  
ない。……絶対だ」

その時、状況に混乱していた私はその言葉に頷く。

頼もしさと有無を言わせない説得力を感じたのは確か。

「なら行けっ！ 早くしないと奴が危険だっ！」

そして、そう彼は言ったのだ、私に「行け」と。

その時まで、私と彼は対等だったはず。

私にどんな葛藤があったとしても、それは私の勝手な思い出で都  
合だった。

でも、この瞬間は間違いなく。

明確に私は護られる側で、彼が護る側だった。

夜由良は先輩達の隣に並び、戦える。  
私にはそれが出来ない。

だから、私は一之瀬君を護ってみせるはずだった。  
なにがあっても彼の安全を確保して……。  
それが、逆に一之瀬君に護られたりなんかして。  
もう、ホントどうしようもない、な。

でも、今、考えてみるとアレなのかな。  
夜由良は桐条先輩と真田先輩と一緒にいたいから残ったのかな。  
そうかもしれない、だってどう考えたって……私とは仲良くない  
んだしなんてたって先輩はあの桐条の。

「……岳羽？」

「え」

私は目を開ける。  
目の前には夜由良優。

「寝てたのか？」

視界に入る光景から、思い出す。いや把握する。  
そうか、ここは市内バスか。

私は夜由良の言葉に首を振る。

「寝てたわけじゃなくて、目瞑ってただけ」  
「……そうか」



そう、眠ってはいないはずだ。  
ただ深く考えすぎていただけ。

彼は私の言葉を信じたのかは知らないけれど、なんの興味もなさ  
そうに読んでいたらしい本に視線を落としたりした。

タイトルは『夢と私』

……なんの本だろう。

ふと見て見ると、停車ランプが点灯していた。夜由良がつけたの  
かは知らないけど。

どうやらもうすぐ着く、らしい。

一之瀬君が入院している、病院に。

\*

4月16日（木）

一之瀬の病室にて。

俺はベッドで眠ったように目を覚まさない、一之瀬を見る。  
相変わらず、女顔だ。

いや、相変わったらおかしいんだけどさ。どんだけ顔面にひどい  
ダメージくらったら男顔になると？ みたいなの。

あー、我ながら不謹慎かな、最悪そうなるどころか、それどころ  
じゃない状況にだってなり得たんだし。

「なにじつと見てるワケ？」

「いや、まつげ長いなあって」

「……ふうん」

うん、だからそんな怪しいやつを見るような目で俺を見ないでくれ、岳羽。

俺は間違っても、男に走るような人間ではないぞ。  
めちゃくちゃ女の子好きだからね、俺。こっぴど見えて。  
いや、どっぴど見えてるのは知らないけどさ。

「さて……そんなことはさておき」  
「なにがさておき、なんだか」

冷たいツッコミを受けながらも、俺は自分の手のひらを一之瀬の額に当てる。

岳羽に表情に浮かぶ疑問の色。

口を開こうとするのを先んじて言う、問われることはわかるし。

「……俺の同化アナボリックシンクロと同調を使う」  
「どっぴどいうこと?」

説明したのに疑問符で返された。

わかりにくかったかね、いや、桐条先輩なら察してくれるからさ。  
っいね、省略しちゃうよね。

「俺の能力は把握してる?」  
「あんまり……気配とか姿を隠すんだっけ?」  
「間違ってる。でも、それはもともと応用技なんだ」  
「応用技……って、じゃあ本来は違う能力ってこと?」

違っつて訳でもないんだけどな。  
そっぴいや、俺が能力を説明したとき、岳羽いなかったけな。

「俺の能力は大きく二つ、たった二つだ」



俺は目を瞑り、神経を集中させる。

召喚器は不要、同化・同調そのものに関しては使う必要がない。  
同調増幅アンブを使うわけじゃないしね。

でも、多分、その気になればもしかしたら……。

まあ、いいや。今は一之瀬だけに集中しよう。野郎のことだけ考  
えるなんて、本当なら真っ平ごめんなんだが。

……力を送る。

イメージは波。

その返って来た波を感じ取り、それに合わせて読み取る。

少しづつ修正し、相手に近づけていく。緻密な作業。

これを戦闘のあの一瞬で今までやってきたわけだ、そりゃ同調精  
度も下がる。真田先輩の攻撃に対し、電撃耐性を発揮し切れなかつ  
たのは俺の精神力だけじゃなく、そのせいもあるだろう。

ゆったりと静かな波。

波紋が変わる、これが……こいつの。

捉えた。

深い深い、海。

そんな感覚、どこまでもどこまでも沈んでいけるような、沈んで  
いられることが心地良いような優しい感触。涼しげで気持ちがいい。  
だけど抜け出せなくなるようなこの感じは、優しいというより貪  
欲なまでに相手を逃がそうとしない……ような。

意外と粘着質なのか、コイツ？

「どっ。なにかわかった？」

うるさいな、岳羽。

今、入ったばっかなんだから邪魔するなよ。

……なんでも受け入れるというよりは、なにかもを逃がさない  
つて感じだな。

半端じゃない海のように広く深い器、そのわりに入っているものは  
感覚的に液体チツクな……入っているのはこれだけか？ いや、な  
んかとんでもないものがいろいろと沈んでる。

んー、あんまり覗かないようにしよう、男のアレコレなんて知り  
たくもない。

とにかく、コイツがペルソナ使いなのは間違いないんだが、あの  
時の『死神』の気配がない。なにを扱うのかすら不明。奥のほうで  
沈んでるのか、それとも……。

でも、まあこの感じだと。

「寝てるだけだな、こいつ」

「は？」

「だから、寝てるだけだわ。ただなんとなく反応が鈍いから極端に  
消耗してるのかもしれない。夢も見えていないけど、深い眠りについ  
てるって考えていいと思う」

実は反応が鈍いどころか、反応なしだ。とは言わない。一之瀬か  
ら、なんのイメージも送られてこないのだ。

俺が送った力が反響するのを読み取るだけしか出来ない。同化し  
ているのにも関わらず、なにもわかんないってことは、コイツは今  
なにも考えてないし感じていないってコトだ。

感じていない、そう見えてないし、聞こえてない。五感の一切を  
断っている状態。

それって、ホントは異常なんだけどな。夢を見ている間も音は聞  
こえているし、臭いの影響は受けるし、光は目に入っているはずな  
んだけど。

でも、すべての情報を遮断している状態ってのは体に負担を掛けないってコトだから、回復には最適なのかも。

「え、と。それじゃ彼は……」

「問題ないだろうな、近いうちに目を覚ますよ。3日とかそこらで」

そう言える根拠はある。

彼の奥底にある力がその強力を示しているからだ、ペルソナとは心の力。その精神はまったく傷ついていない。また、その生命力にも問題はなく、既にほとんど満ちつつある。

少なくとも、長くて目覚めに一週間はかからないだろう。っていうのが本音。

見るからに安心した様子の岳羽。

そうだよな、このまま目が覚めないっていうのはキツイよな。自分のせいで人ひとりがそんなことになったらさ。

……だけど、俺の目的はそれだけじゃない。

コイツが目覚めるのに問題ないなら、次に移らないとな。

俺は一之瀬から手を離しながら……。

「一之瀬は間違いなく力に覚醒した、確実に俺達の仲間に入れられるだろう」

静かなトーンでそう言った。

なるべく、岳羽の心を揺さぶるようじに。

「入れられる……？」

「彼の力はかなりのものだ、岳羽も見たる。それを見逃す、理事長や先輩だと思うか」

「……それは思わないけど」

「ま、本人が断る可能性もあるけどな」

そんなことさせる気はないけど、俺は。

それでも、一見、どちらでもよさそうに吹いておく。

「ただ問題がある」

一呼吸溜める。

岳羽が俺の方へ、より注目するように間をとる。

「コイツの力は強すぎる、あれは半ば暴走だった」

それを聞いて岳羽が何かを仰ぎ見るように、その目が遠くなる。

おそらく、あの夜のことを思い出しているんだろう。その力の圧倒的な戦力、同時に自分の不甲斐なさを。

さて、問題はここからだ。

「もし、次に同じように力が暴走した時」

そう、最悪の場合は。

「俺は一之瀬を殺す」

俺の声ははっきりと響いた。

病室が静寂に包まれる。

真剣な表情で、俺は岳羽を見る。

岳羽は俺の言葉が理解出来ずにいる、あまりにも突然過ぎる思いもしないその言葉は、理解に至らない。

「もし、一之瀬がその力を誰か、人に向けたとき。それが本人の意思に寄らなかつたとしても、誰かが止めなくてはならない」

他に止めようがあるならいい。  
でも、もしそれが不可能なら？

「ペルソナ使いはまだ力に対する耐性がある、正直、それがあつても死ぬかもしれないけどな。助かる可能性はゼロじゃない。だが、もしただの人にそれが向けば……」

あの影時間に人々を被う、棺桶のようなオブジェの耐久力なんか知らない。

それでも、あそこまでの力を叩きつけられて無事とは思えない。

「彼が仲間になるうがなるまいが、俺はそうするつもりだ」

本当に出来るか？

それはその時にならないとわからない、でもそうしないと断言なんかない。

必要なら、する覚悟はある。例えば、岳羽や先輩達が一之瀬に殺されそうになれば、俺は仲間を庇うよりもコイツを殺す方を優先する。

……それが確実だからだ。俺が庇ったところで助かりそうな威力じゃない。

なら、これ以上の被害を出さないために、俺は殺しに掛かる。少なくとも、覚悟はある。揺らがないとは言わないけども。

「そ、そんなのって！」

「正しくないのはわかつてる。でも、俺はそうする」

「誰かの命よりも彼の方が軽いつて言うの……」



「いや、そつは思わない」  
「じゃあ……」

「なら止めずにその誰かを見捨てた挙げ句、彼に殺人者として生きて貰うか？」  
「っ！」

桐条先輩は彼女に変な重圧を与えたくないと言った、それは間違っていない。

だがしかし、その圧はかける方向性が大事だろ？ 人は誰しも自分の理由で戦う、でもそれが隣にいる人間のため、って言うんだつたら折れることは許されないはずだ。

たかだか引き金を引く程度のことには理由がいると言っのなら、俺が与えよう。それで彼女が駄目になったなら、その時は仕方なし、だ。

……俺が護ろう。  
ずつとは無理でも少なくとも、あの寮にいる間くらいは。

「だが、今回の暴走はアイツが命の危険に晒されたからかもしれない。例えば追い詰められた故の恐怖心、だとか。……だとするなら、アイツがその力を制御しきれないくらい心が強くなれば、もう暴走しないはずだ」

かも、はず、まったくそこに確かさなんてない。

「なら、一之瀬が課外活動部に入るのは間違いじゃない。ペルソナの力を制御出来るようになるならむしろ最善だろう。問題はアイツがまた、同じように命の危険に晒された時だな」

本当はどうなるかわからない。だけど、救いがいいよりは救いがある方がいいだろ。

フツーは、さ？

「……それは桐条先輩の意見？」

「いや、違う。俺の独断だ」

「そう」

「お前、あの人がそんなこと言うと思ってんの？」

岳羽の瞳が揺れる。

わかりやすい、方なんだろうな。真田先輩ほどじゃないけど。

「無理だよ、あの人には。誰かを見捨てるなんて無理、それを命じることもし出来ない。桐条背負ってくんなら、その覚悟はいるだろうに。」

つか、あの人は、表面上はああだけど、わりとフツーに女の子だよ。桐条での権力もなきに等しいみたいだしな、そう言う意味では頼りにはならないぞ？」

岳羽がそう言う面に期待してるのか、怖がってるのかは知らないけど。

なぜかは知らんが、岳羽は俺の言葉を聞いて深く考えるように目を瞑った。息を吐くように、言葉を連ねる。

「アンタは桐条先輩のこと、ちゃんとわかってるってこと？」

「ちゃんと、って……別になんでもじゃねえよ？ 見てわかることだけだ」

見てりゃわかる。

心は目に見えない、なんてのは嘘だ。心は見える、全部じゃない

けど。きちんと見てりゃ少しはわかるんだ、わからないのはきちんと見てないからだ。

だから、俺は……。

「まっ、いいか。俺はせいぜいその時になった時の覚悟がぶれないようにしておくさ」

最悪の場合なんて、想像もしたくないけど。

想定はしておかないと、な。世界ってのは、いつだって俺達に優しくしてくれない。隙あればぶん殴る気満々だからな。

ソレ喰らって、へこんでる最中だって追い打ちかけたくしてしかたないのが、世界ってヤツなんだから。せいぜい、いつ殴られてもいようにしておくさ。

「させない」

「ああ？」

「そんなこと、私がぜったいにさせないっ！」

岳羽は突如として、俺を睨む。

お前は敵だと、そう言うかのように。

「彼は、一之瀬君は私が絶対護ってみせるっ！」

今度こそ……そんな言葉が聞こえてきそうな科白だった。

その両目には、俺とは全く違う覚悟の炎が灯る。

ああ、それでいい。

そうじゃなきゃ、つまんねえよ。そういつヤツがいると思っから、なんとか救いがあるんだろ、きつと。

「なら、やってみせるよ。岳羽ゆかり」

俺はぼそりとそう言って、その横を通り過ぎて病室を出て行く。岳羽にはもう少し、時間があるはずだ。一之瀬と二人で一緒にいる、その時間が。

\*

4月20日(月)

とうとう一之瀬が目覚め、その日は来た。

これからどうなるか、それはわからない。

ただ少しでも、俺の出来る範囲で物事が進めばいいと思ってる。

「夜由良」

「え、なんですか？」

階を上がる過程で女子のいる3階に着いたとき、偶然、桐条先輩に話しかけられた。

……偶然、なのかな。

「もう行くのか、気が早いな」

「先輩こそ」

桐条先輩は最近、少し疲れているように見える気がする。気のせい、ではないように思うのだ。

「どっした？」

俺の探るような視線に気づき、桐条先輩が言う。

「いえ、別に」

そう返すところか、不安そうに桐条先輩は見つめてくる。こりゃ、ちよっと切れるかもな。このままだと。若干、心配になって俺はなんでもいいから話しかけてみる。

「一之瀬を課外活動部に誘う気ですか？」

返答は知っている。

「もちろん、そのつもりだ」

「……そうですか」

ま、だろうな。

ふうん、前回の俺の話で若干考えてたっばかったんだけどな。まあ、そうそう変わらないよね。って言うか、アレくらいで変わるなら最初からやるな、って感じだけ。

そう思ってたなら、なぜか真顔で見えてくる桐条先輩。え、なに？

「夜由良は反対なのか？」

「へ？」

「一之瀬に参加を要請することを、だ」

一見、普通を装ってるけど、微妙に顔強ばってるよね。つか、なんでそんな声が不安げなの？

「いえ、別に」

いや、本当に別に。ですよ。

むしろ、一之瀬が参加することを前提に考えてますよ、色々。でも、そうだな。ついこの間、話したことを引っ張ってきてみる。

「ただ、覚悟は決めたのかなって」

そう、覚悟の話。

誰を犠牲してでも……それが出来るかどうか。いずれ、桐条の上に立つ先輩が迫られるであろう一つの命題。

実は桐条先輩とはついこの間も、そんな話をしたばかりだ。一之瀬の件で。

先輩の目が俺から伏し目がちに逸れる。

「……正直、君達のうち誰かを犠牲にするつもりはない。それでも私達には力が必要だ、だから協力はしてもらおう」

「ああ、なるほど」

ではでは、つまりこういうことですかね。

「……じゃあその時が来たら自分が犠牲になると？」

「っ！？」

うわ、わかりやす。

この人、なに、どんだけ素直なの？ 腹芸出来ないにも程があるぞ。そのうち、悪い奴にだまされんじゃね？

こんな人が桐条グループの次期当主ね、絶対いいようにされて終わるわ。

特に具体的には、今、ここで、俺とかに。

「ふうん……へえ？」

俺は伏し目がちになっっている桐条先輩の顔を、下から覗き込むように見る。

当然、目は逸らされた。

……その態度は、気に入らない。

「じゃ、アレです。俺が身代わりになります、ハイ残念でした」  
「なっ、君はどうしてそんなっ!？」

どうして？ 俺がそんなこと許すとても思ってるの？

「いや、どう考えても人のこと言えないじゃないですか。嫌なら自重して下さい。ああ、自嘲でも可ですけど」

「うっ……」

いや、うっ……ってなに？

そんなに虐められたいの？ いじられるの好きなの？

つか、俺を悶えさせたいわけか。おお、なら目的達成さ、心中じゃもつかなりアレだぜ、おい。もうだいぶきてるぜ俺は。そろそろ足に来るくらい、バシバシ喰らってるぜ俺は。

とりあえず、見せつける形のため息を吐く。わざとらしく、ね。

「……うん、今後は勝手な言動を慎むように。んで、必要以上に自分を危険にさらすことは禁じます」

「そ、それは前に私が君に言ったことじゃないか!」

「ええ、ですね。で？ なに？ 人には言っておいて自分は守れないと？ ああ、困ったものですねえ」

「せつ、性格が変わってないか？」

「いや、俺こんなもんですね」

ええ、ホントに。だいたい俺ってこんなもんですよ？  
どんな人間だと思ってたんですか、先輩は。

「それで約束は？」

「……む、それは別の問題でだな」

「じゃあ、俺その時にはまた庇いますね。問答無用で。文句は言わ  
せません、先輩が勝手にするなら、俺もそうします」

そりゃそうだろ、先輩達が死んで俺が残されるなんて、本気で死  
んでもゴメンだ。

「……………くっ」

先輩が俯く。

へ、なに、そのリアクション？

そして、何かを振り切るように俺を見た。

顔を真っ赤にして激怒の表情で。

「……………なら、私に君はどうしろと言っただ！」

……え、先輩、つか、よく見たらちよっと涙目じゃないか？

うわ、俺もしかして虐めすぎた？

……ああ、うん。ごめんなさい。とりあえず土下座ですかね。

「もしかして先輩。ずっと夜通し考えた拳げ句の、悲痛な覚悟って  
奴ですか？ みんなを私が危険に晒している以上、いざとなったと  
きは私が、みたいなの？」

「……………ああ、そうだ」

マジか。



……俺、そんな追い詰めてたか。えーと、最大級に謝りたい所なんだけど、あんまり人に謝ったことないや、俺。やりかたわかんねえや。

うん、どうっすかな？

「いや、だから。……先輩が俺らが傷ついたら嫌なように、俺も嫌なんですよ。死んでほしくないんですよ」

「……しかし」

「一人で考えるのやめて下さいよ、だからそんな風に考えちゃうんですよ」

いや、ここではそう言うけど、絶対俺のせいだって思ってるからね？

一人で考えてるせいじゃなくて、俺の非道ないじめのせいだからね。うわ、先輩が潰れたら、絶対俺が悪いんだ。……どうしよう？  
だ、誰か助けて下さい。

「いや、だからね。先輩。……その、ごめんなさい」

うん、もう駄目だ。俺、これ以上誤魔化せないや。

誰か、俺にきちんとした謝り方を教えてください。親に教われ？無理だね、俺、親がきちんと謝ってる姿見たことないもん。だいたい親が子供に謝るわけないじゃん、きちんと教えられたことなんか一度もないね。

って、言ってる場合じゃねえよ！

「な、なにを謝ってるんだ」

焦るように動揺する先輩。

いや、なにを……。

「俺が変なこと言ったせいで、先輩をそんな気持ちに……」

「いや、私に覚悟がないことで……」

「じゃなくて……」

「君が言ったのは事実なんだ、何はともあれ、な。私は危険な状況にみんなを……」

……くそ、もう。この人、めんどくさい！

ああ言えばこう言う！

「あー、もうっ。じゃ、もう覚悟決めなくていいです！俺が全部なんとかしますっ。上手くやりますっ！全員死ななきゃいいんですよね？ ですよね？」

「そ、それが上手くいかないかもしれないからこうして……」

「じゃあ、その時が来たら死にます！俺が！」

「なんだ、それは！意味ないじゃないか！」

「んなこと言っただって、先輩が死んだら俺が目覚め悪いですよ！」

「私には責任があるんだっ！そもそも私は部長で……」

ブチッって音が聞こえた気がする。

あ、もういいや。なんかめんどくさい。

「じゃ背負ってるよ、勝手に！責任？ ……好きにしろよ！

それで、その時には死ねばいいさ！」

本当にこの人、うるさい。

じゃ、死ねよ。好きにしろよ。自由に飛べばいいさ！

ああ、そうさ。わかったよ。そうしろよ。

でもな、覚えとけっ！

「なら俺も勝手に背負ってやるさ！ 一緒にやってやる、ああ死んでやるよっ。もう文句は言わせねえからな！」

「……夜由良？」

「黙ってる、わからずや！ 強制的に人をこんな部に入れやがって、しかも生徒会までよ。さつきから勝手すぎるぜ、アンタッ。でもな、俺は意外と気に入ってんだよ、馬鹿！ 理屈なんかどうでもいいんだよ、そんなアンタに死なれると気分が悪いんだ！」

じゃ、アレだよな？ 俺と一緒に背負えば死によろがないよな、ざまあみろっ、なら俺が覚悟を決めてやる！

よく聞けよ、アンタは俺にとって死んじゃ嫌な人間なんだよっ、アンタらが勝手に関わってきたくせに責任とれよっ。俺なんか、今までかなり一方的に我俣言われてきたのに、どうしよもないくらいに確実に気が滅入るんだよ、少しは人の言うことも聞きやがれっ！

アンタは自分をなんだと思ってんだ、この飛べないアントワネットが！ 頼むから、少しは自分を大切にしてくれっ！」

……ふう、すっきりした。言いたいこと全部言っちゃったぜ。

……む？

……ふむ。

……はっ！？

いやいや、待て待て待て！ 駄目じゃん、言っちゃ駄目じゃん。そもそも全部、俺が悪いんじゃないの？

って最初、俺、謝る気満々だったよね。それがどうしてこんな事に！？

つかさ、飛べないアントワネットってなに！？ 今、ここで何が

起きてるの？

ふっ、こうなったら仕方ない。

先輩が口を開こうとしたその瞬間。

「やゆ……」

「生言ってマジすみませんでしたっ！」

流れるような動作で土下座を決めてみた。

もう、これしかない。俺に他の手立てはない。

なんかもう良心的にも？

「いやあ、もうマジすみません。すげー、暴言吐きましたよね？

って言うか、飛べないアントワネットってなんですかね？ 自分で

もよくわかんないうちに言ってたんですよ、いやホントごめんない。もうなんでもするんで許して下さい。ああ、もうなんなんだよ、

飛べないアントワネットって！」

「待て、夜由良……私はだな」

「ええ、わかります。許せないのはもう、しつかりと。なんで、…

…こつ火が出るまで、床に頭をこすりつけるぐらいに土下座をです  
ね」

「いや、しなくていい！ しなくていいから！」

「しなくていいだっ！？」 ああ、わかりました。石を抱けと

言うなら抱きます。爪もまあしゃあねえや、好きなだけ望むもの  
持っていくがいい！ 貴様にはその権利がある！」

「……なぜ、ちよつと尊大な態度なんだ！？」

「つつわけで、なんとかご勘弁を」

……駄目か？

これでも駄目か。

土下座つて最大級の謝り方じゃないのか？

はっ！？ あった。謝罪の最終形態が！？

「カッターナイフで切腹で、行けますかね？」

「いいっ、するなっ」

「あ、介錯頼めます？ 先輩の武器つて、ああ、突劍レイピアか。首切るの難しいな、いや、サーベルならいけるか？」

「するかっ！ そんなもの！」

うん、しないよ、そんなもの。するわけないじゃん。

俺、まだ死にたくないもん。

っつて、訳で立ち上がる。

「あ、泣き止んでくれました？」

「……………え」

おお、涙目……………は涙目だけど止まってるな。

よし、成功。

しかし、返ってくるのは沈黙。

え、なに、その顔？

目が点、つてこんな感じか？

「先輩？」

「……………」

「俺、なんでもするつもりですから、ね？」

「……………あ、ああ」

ま、謝ったから俺の良心ももう痛まねえや。

もう、全部許されたよね俺。じゃ、今後またなにしてもいいでし

よ？ なに言ったっていいよね？  
でも、ま、これで。

「だから、俺になんでも言っただけでいい？」  
「……ああ」

よし、誤魔化せた。  
なにもかも、これで元通り。  
……だろ？

……え、違うの？

あれ？ そもそも俺、誤魔化す気で謝ったんだっけ？  
……はて？

\*

「あれ、美鶴はどうした？」

俺が人足早くトランクを抱えて、作戦室に入ると先輩から声を掛  
けられた。

ふむ、その質問には正直に答えかねますな。

「んー、その。トイレですかね？ たぶん？」  
「……そうか」

目が赤いんで、ちょっと目薬でも刺してるんだと思います。  
今さっき、「このままじゃ人前に出れないから」なんておっし  
やってたんで。

うん、改めてごめんなさい。反省はしてます。

……ただ、もう虐めないかと問われたら、返答はしません。  
いや、だって。やりたくなるんだもん、真田先輩だけじゃ物足りないんだもん。

つか、岳羽が虐めにくいからなおさら、ね。

しかし、コレだと今日は桐条先輩を虐めるのは心苦しいですね。  
仕方なし、今日は誰か別の人をターゲットにしよう！

俺は適当な位置のソファに座りながら、トランクを床に下ろす。  
位置はおおよそ、真田先輩の真正面だね。

……いやあ、にしてもアレだよな。桐条先輩にはびっくりですよ。  
最近、話してるだけで悶えそうになりますよ、マジで。

てか、なんか思ったより可愛いんだもん。同じ高校生だとしても、  
自分より明らかに弱い年上ってさ。ツボだよな？

いや、しかも相手の方が本来、立場が圧倒的に上な所がいいよね？  
あ、そうだ。そう考えると、女教師って俺好みのシチュエーションだよな？

……いや、誰に同意求めているんですか、俺は。

でもなあ、もし先輩が働いてて一般人で……うん、OLとかその  
辺りなら、やばかったなあ。確実にね、理性がね、保たないよね。  
ほら、そこまで年上の相手ってある程度責任が向こうにあるでしょ？  
……俺、まだ高校生だから好きに愛でていいのかな、って思うん  
だよな。

あー、なら、うん。例えば大学生とかはどうだろ……微妙な年齢  
だな。ちよっと無理かなあ？ 生活感ある感じならいけるんだけど、

明らかに世間知らずだとかかなり罪悪感があるなあ。

うん、どっちにしてもとにかく駄目だ。桐条先輩は、駄目だ。可愛いけど遠くから愛でるだけにしておこう、な？ 俺。

頑張れよ、俺の理性。期待してるぜ？

ん……おいつ、どうしたんだっ、俺の理性！ ……返事がないぞ？ 理性、りせーいっ！

駄目です、完全に沈黙してますねえ、うんうん。くそ、今日の俺はどうかしてるぜっ！

「夜由良、なににやにやしてるんだ？」

「いえ、少し思い出し笑いを。あるですよ、たまに。気にしないで下さい」

とりあえず表面上は取り繕っておく俺。

いや、だって中身ばれたら、よくて変態扱いだからね。

もし、俺を客観的に見てる人間がいたら、とんだ痛い野郎だからね。

「……なにか企んでないか？」

「心外ですね、俺がそんな人間だとでも？」

「聞いたぞ、岳羽と一之瀬の件」

「……ああ、桐条先輩ばらしましたね」

口軽いなあ、いや駄目とは言わないけどさ。

真田先輩はいいかな、それくらいは。

誰かに言わなきゃ、気持ちがつらいだろうし。根がいい人だからな、先輩。

「まったく、お前もろくなことを考えんな。正直、感心はせんぞ？」



「お前も……ねえ。でも、ですよ、岳羽には支えがいますよ。彼女、なにかと不安定ですから。でも先輩らは距離が遠いし、俺は嫌われてますし」

「お前が？」

「ええ、それもかなり。いや、苦手意識かな……彼女、あれなんですよ、桐条先輩苦手なんですよ。なのに、生徒会とかなにかと俺がいつも一緒でしょ？」

「なんだ、美鶴が原因か？」

「いや、だけじゃなくて。男子ってものにあまり安心感がないみたいですね、一之瀬は同じ境遇だし親近感もある、それに顔がほら男っぽくないですからね」

「ほう？」

奴は正しくは女顔、しかし俗に美形だとも言つ。

綺麗な顔してんだ、これが。俺とは大違い。

たまに近目でも、なんのメイクもなしに女に見えるからびっくりするぞ。

いや、まだそんなに会ったことないけどね。数えるくらいしか。

「それに俺が色々、食事とか世話焼くじゃないですか。アレがね、なんかたまに勘に触るみたいで？」

「はあ？ ……なぜだ？」

「知りませんよ、そういう男むかつくんじゃないですか。生活感ある奴？」

「どうも俺にはわからんな……なにかの間違いだろ」

「いいえ、確実にそうです、つか、でした」

俺はあれは間違いないとそう断言する。

まあ、今じゃ100%嫌われてる、ってか警戒されてるだろうけ

どぞ。

でも、元々なぜかと言われれば、俺には覚えがないんですけどもしかしたら……。

「……もしかしたら、嫌いな誰かとダブってんのかもですね？」

「誰か？ ……自分の世話を焼いてくれるような嫌いな誰か？ いるか、そんな奴」

「世の中色々あるんじゃないですか、知りませんけどね」

男だから嫌なのか、性格が嫌なのか、やってることが気に入らないのか。

まあ、仕方ないよな。みんなに好かれるとはいかないさ。

でも、俺。嫌われるのそんな嫌いじゃない。堂々と言われる分には暴言もそこそこ嫌じゃないし？

褒められたり、評価されたり、期待されるよが大分マシだね。コレ、本気で。

と、そこで入って来る桐条先輩。

まず目が合う。

途端に口元には笑み、声もなくフ、と笑う。

……すげーなんか、会長オーラでてますね。うん、今は近寄りやすいです。

正直、オーラ出てる先輩苦手なんだよね。つい、庶民としてかじづきたくなるんですよ。弱ってる先輩じゃないと話しかけようと思わないです。

そのまますっかりした足取りでこちらに向かい、一番いいソファの端に座る先輩。

なぜか……真田先輩寄りではなく俺寄りで。

……いや、近寄りがたいつつてるだろ。

なんでこつちなんだよ、気を使えよ。なんで、俺のほうなんだよ。反対にすわれよ！

そう思ってたら、遅れて理事長と岳羽が来た。

思いつきり俺を睨む、岳羽。

ああ、こりゃ嫌われたもんだな。だけど、こつという敵意は悪くない。

今朝も岳羽は楽しそうに校門の所で、一之瀬と談笑していた。確かに二人の間には絆がはぐくまれつつあるんだろう。狙っているわけだけど、上手くいってなにより。

予想外に面白いのは、そこに伊織順平がいたことだ。

……同じクラスなのは知ってたけどね。

とりあえず、理事長も岳羽も適当な椅子に座る、ように見えて理事長が一番いいソファアの空いている端に座った。

ようするに桐条先輩と同じソファアね。

で、結果的に理事長は真田先輩寄りに。

……ん、ああ。もしかして、位置決まってる訳？

ああ、なるほどね。まあ、俺トランク持ってきてるしね、隣でもおかしくないよね。

ちなみに中身は一之瀬の専用召喚器です。入れる気満々どころか、入れるの確定してるだろ？

しかも、召喚器を専用で作るって明らかに最近の話じゃないよね？ 相当、前からだよな？

陰謀の臭いがします、相当臭いです。

詳しくは知りようもないことだが、専用の召喚器の作成にはそこそこの時間が必要なはずだ。俺が入部してから専用の召喚器を受け取

るまでのラグはおよそ、二週間だった。その後も微細な調整を繰り返してはいたが、少なくともシャドウの襲撃前には一之瀬の勧誘が想定されていたことになる。

彼がペルソナを扱う前に、だ。ペルソナがあるか不明だからの様子見じゃなかったんかい！ って言うね？

あえてここに入寮させたことから鑑みても、転入前から彼を引き入れる気があったと考えたほうがすんなり納得行くかな。既にその頃にはペルソナの能力が高いことすらわかっていた、と。

ただそう考えると、問題はこれが理事長の考えか、上の桐条の意思か、と言うことだ。

当然ながら桐条先輩自身はたいして力がある訳じゃないだろう、そういう陰謀が得意そうではないし、この次期当主は経営そのものに直接携わっているようには見えないからだ。

となれば、相手はさらに上か、ねえ？

最悪、桐条グループは敵に回るかもしれないからな。油断は出来ん。

俺の目的はあくまでシャドウの巣であるあの場所を探ること。ここにいるのは現状、その利害が一致したからに過ぎない。それ以上でも、それ以下でもない。

確かにここは居心地がいいし、ここに居る人たちは大切だと思い始めている。それでも、掛け替えのないわけじゃない。なににも替えがたいものは別にある。

……そう自分に言い聞かせる。

この学園に来る前からあった謎の焦燥感。なにかやるべきことがあるかのような、大切なことを忘れていくかのような追い立てられるような落ち着かないこの感情。

常にあるその気持ち、その正体を知るために、俺はどんな手を

使ってもあの場所に行かねばならない。

そして、その正体を掴んだ時、もしかしたら俺は……。

ここにいる全員を　。

いやいや、そうはならないさ。どうしたって、な。ここを出て行くくらいはあるかもしれないけど。

それでもここは俺にとって大切な場所で、ここに居るのは俺にとつて……。

お、ちょうど一之瀬が部屋に入って来た。

くそ、相変わらず綺麗な顔しやがってほぼ全男子の敵めっ！

ちなみに真田先輩もわりとかなりキツメな敵の部類です。

「お、来たか」

そう、りじちよう駄眼鏡が声を上げた。

そのまま一之瀬に話しかける。

「身体のほうは大丈夫そうで何よりだ、安心したよ」

「ええ、おかげさまで」

おかげさまでって、駄眼鏡はなにもしてないだろう。

あの夜だって、逃げてただけだぜ？　足手まといの使えない駄眼鏡。

ほら、コイツ。影時間に適性ある癖にペルソナだせないからね。

出てくるのはだじやれのなり損ないと金、そして胡散臭いにおいだけですよ。

マジ使えねえ、いや、金は使えるか？

その駄眼鏡が一之瀬に席を薦め、問題なく座る一之瀬。まあ、そこで遠慮されても困る。するとしても、これからの話の内容だろ。

「あ、そうそう名前は聞いてるかな。まず、彼が真田くんか。君の1つ先輩だね」

「よろしくな」

理事長の紹介に、挨拶する真田先輩。

いやいや、よろしくするかどうかは今後の彼次第ですよ？先輩。

「そして、もう一人が君と同学年の……」

続けて、駄眼鏡が俺の紹介までしようとしやがった。

いや、別に俺はもう終わってるんだけどね。あ、夢だからノーカ  
ンか？

とりあえず嫌がらせに科白を遮って、さらに嫌がらせに自分で自己紹介してみる。

「はじめまして、俺は夜由良優。アンタとは同学年で生徒会なんぞ  
をしている者だ」

はじめまして、にアクセントをつけて、だ。

さてさて、こうしたらなんて返してくるんだ。女顔いぢのせ？

「……はじめまして、ぼくは一之瀬 佐為だ」

同じように、アクセントを置かれた。

なるほど、空気は読めるらしい。これなら仲良く出来そうだな、  
今後も。

さて、じゃあ俺は嫌がらせを続行しようか。

「ああ、よく知ってるよ。こっちはね。うん、同学年のヤ・ユ・ラ・ユ・ウだ。……言いにくだらう？ おかげで自己紹介は苦手だよ。油断すると噛みかねん……」

ちなみにこれ、駄眼鏡の真似ね。

その駄眼鏡が「いや、それは僕の……」とか言っているけど、誰も反応する……訳ねえな。そりゃそうさ、ギャグを言ってもスルーだもん。今回だつてするするとスルーするーだらうさあ！

「……まあいいさ、自己紹介も終わったみたいだし？ 話しているかい？」

助け船が来ないことにか、なぜか哀愁が漂わせながらの駄眼鏡。落ち込むなよ、駄眼鏡。俺はアンタのこと嫌いじゃないから。

……やったの俺だけだな。話していいか、周囲にわざわざ聞くところがなおさら情けなさを誘って良い感じですよ。気を取り直して、話始める駄眼鏡。

「いきなりでアレなんだけど。実は、一日は24時間じゃない……なんて言ったら、君は信じるかい？」

「……それはいつたいなんの話ですか」

その一之瀬の科白に桐条先輩がフフ、と笑う。

「まあそうだろうな……」

笑ってないで駄眼鏡のフォローしてやれよ、先輩。  
こんなんでも理事長なんだぜ？

って訳で、俺がフォロー。

「ああ、一応言っておくとあれだぜー之瀬。日没までの時間に微妙にズレがあつて、閏年が出来るとかそういう話じゃないぜ？」

「……そんなのいちいち誰も考えないよ」「マジかつ!？」

「どうやら、フォローにならなかつたらしい。そんな疑問すら持たないだつ!？」

「俺は最初、なに言つてんだろこの人、そんなの当たり前じゃん。とか、間違つた意味で思つてたと言つのに!？」

駄眼鏡が尋ねる、そこには純粹な疑問の色。

「君達はアレかな、実はもう結構打ち解けているのかな？」

「いやいや、コレが実質初対面ですから。少なくともカウント上は」

「……カウント？」

「まあ、会つのは実際初ですよ。その前に色々と知ってるだけで」

「カウントでは初なのです、色々は色々あつたじゃないですか。詳しく言え？」

「……もうっ、なに言つてんだよ。言わせんなよ、恥ずかしい！」

そんな俺達を無視して桐条先輩は言葉を続け始めた。

「言われても君は理解できないだろう、しかし君はもう既にそれを何度も体験してるはずなんだ」

「なにをです」

「……初めてここに来た夜のことを覚えているか？」

「……ええ」



「あの日、君は色々と思議な体験をした筈だ。消える街明かり、止まってしまふ機械、街に立ち並ぶ棺のようなオブジェ……」

まあ、軽く悪夢だよな。

しかも、血のような液体であちこちデコレーションされてたりするし。どこぞのホラーゲームの悪夢の世界だぞ、ホント。化け物がコラボしてるからマジもんだしね。

「……薄々は感じたんじゃないか？ 自分が『普通とは違う時間』をくぐったことを。あれは『影時間』。1日と1日の狭間にある『隠された時間』だ」  
「隠された、ですか」

駄眼鏡がしみじみと頷く。

なんか物知り顔してんのが若干、イラッとするがまあよしとしてやろう。

「そう、まあ隠されたと言うより、『知りようのないもの』ってとこかな。普通の人間にはね、でも影時間は間違いなくある。毎晩、零時になると絶対に訪れるんだよ。もちろん、今夜も。そしてこの先もね」

真田先輩がその言葉に補足を始めた。

どうやら、なにも言わずに聞いているのが暇だったらしい。気持ち分かる。

俺も途中から茶化したくて仕方ない、もしコレがゲームならスキップボタン押してるくらい暇でつまんない。

「普通の人間は棺おけに入ってお休みって訳だ、だから感じられない。けど、影時間の面白そうところは、見た目なんかじゃない」

と、思ったけど、この肋骨アバラがあまりにもドヤ顔で語るので本気でイラツと来た。

面白い、だと？ 貴様、砕けた骨は左側だけじゃ足りないのか。ん？

ああ、そつかあ。なんだあ、もう一本バランスよく逝かせてやればいいのか？

俺のそんな思考に気付かない肋骨（現在は片側のみ）は未だなんかしゃべっていらっしやる。

「オマエも見ただろ？ ……怪物だ。俺達はこれをシャドウと呼ぶ。シャドウは影時間に現れて、そこにいる生身の人間を襲う。」

だから、俺達でシャドウを倒す。どうだ……面白いと思わないか？」

さすがに我慢出来なくなった桐条先輩が怒り始めた。

「明彦！ どうしてお前はいつも……痛い目をみたばかりだろ」

「確かに。ボクサーボクサーが殴ることに支障来たしてる時点でちよつと考えましようよ？ 肋骨先輩？」

超、同感だった俺も一緒に言う。それも超、いい笑顔で。

つか、その程度の痛い目じゃ足りないんですかね？ わかります、駄犬ですね。言っても駄目なタイプですね、身体に分からせた方が良いタイプですよ？

「ま……まあ、いいじゃないか。ちゃんと戦ってくれてるワケだし？」

そんな駄犬をフォローしようとする駄眼鏡。

黙れ、駄眼鏡。駄目同士で調子に乗るな。

「ちゃんと戦えなくなったから、言ってるですよ。駄眼鏡？」  
りじちやう

「……そうだね」

「ちゃんとしおらしく頷いたので、今回は見逃してやる。次はないぞ、あごヒゲ駄眼鏡？」

「そんな物わがりの良い理事長は真田先輩を見ないようにして、一之瀬に改めて言い始める。これ以上は忍びないのだろう、結論を急いだ。」

「最初からそうしろよ、めんどくさい。」

「……とにかく結論を言おう。我々は特別課外活動部。表向きは部活だが、実際はシャドウを倒すための選ばれた集団なんだ。僕が顧問をし、そして……」

「私が部長をしている」

「はつきりとそこに続くのは桐条先輩。」

「シャドウは精神を喰らう、襲われればたちまち生きた屍だ。このところ騒がれている事件は殆どがヤツらの仕業だろう」

「その科白にちよつと補足。」

「ああ、事件つてのは……無気力症とかだ。あれがそうじゃないか、つて俺らは睨んでる」

「事件つて言っただって色々あるんですよ、先輩。」

「いや、あなたは自分の興味あるのしか見てないんでしょうけどね。」

「一之瀬はとりあえず、俺達を正面に見据えて話し始めた。」

「話はわかりましたよ、実際にこの目で見ましたしね。警察とかそういうものが役に立たないこともわかります。」

でも、高校生にしか過ぎないぼくらがそんな相手と戦えるんですか？」

戦えるかって、お前。もう戦ったろう、しかも勝ったじゃん。圧倒的に。」

……どう見ても、もう余裕だろ？　つか、可能だろ？

そんな俺の突っ込みは声に出されることなく、二人は話していく。

「他の、大人のペルソナ使いとかは？」

「……残念ながらいないね、今のところ、そういう人間は一人も確認出来ていないよ。もしかしたら、力の発現には年齢が関係するのかもしれないね。まあ、確証はないんだけどね」

「……状況はわかりました」

「飲み込みが早くて助かるよ」

あ、終わったの？　結論が見えきつている無駄話。

桐条先輩が目線で合図を送ってきたので、机の上にトランクを出し開いて見せる。

中身はもちろん、召喚器。それを示して、桐条先輩は言った。

「要するに、君に仲間になって欲しいんだ。一度使っただろう？」

これは君専用の『召喚機』だ。……君の力を貸して欲しい」

「昨日今日で急に言われても……」

つか、説明だけどさ。「シャドウって化け物いるから、一緒に戦って」で、全部よかったよね。

ぶっちゃけ、一之瀬、もう一通り体験してるから説明ほばいらん

かったよね。いや、いいんだけどさ。別に。  
ためらい、はつきりと返答しない一之瀬を見かねて、口を出す肋骨。

「そんなに深刻に考えることはないぞ、ちよつと付き合えよ」  
「私からも是非、お願いしたい」

追従する、桐条先輩。

いや、あの。あなたはその馬鹿を叱ろうよ、『調子のんな、ボクシング出来ないボクシング馬鹿』って。

「ちよつ……先輩らに詰め寄られたら、彼だつて困るんじゃない……そりゃ、仲間になってくれるなら、その……心強いですけど」

心配そうに言う、岳羽。

彼女は複雑だろうな、とは思っけど。

一之瀬にとつても、入った方がいいって思ってるだろうからなあ。

……乙女心は複雑ですね、うんうん（他人の目線）

つて、アレ？ みんななんで、俺見るの？

俺、そんなに発言力あつたけ？

「ああ、俺？ 俺は別にいいんですけどね、どつちでも」

まあ、言っつていいなら言っつて。

どつちでもいいよ、俺は。……表面上は、ね？

「ただ言わせてもらつと、一之瀬。もうお前がこつち側に来たことは取り消せないだろ、何も分からずに巻き込まれたままよりかは、少しでも選択肢がある方にいたらどうだ？

別にここで確定しなくていいと思うぞ、とりあえず仮に入って嫌になっただら言えばいい」

仮にもなんも、一度入ったら思うつぼだけどな。

本音が入ってない訳じゃないけど、コイツに対してはこんな物言いが一番効果的そうだ。

一見、なんの含みもなさそうに見える科白がね。

「それにここで断ったら、アレだ。ずっと在学中毎日勧誘され続けるぞ？ 学園理事長と生徒会長ダブルで」

なんとも言えない表情をする一之瀬。

まあ、こんなトコだろ。この辺が一番いい、それしか選択肢がなさそうだ、と思わせるだけでな。

ここで苦笑しながらも否定しない桐条先輩。

「さすがに毎日はいらないが、まあそうだな。我々には戦力が必要だからな」

そうそう、いいですね先輩。そのタイミングですよ。

わかってらっしゃる、いや、絶対素なんですけどね、この人。

すると、一之瀬はため息をつき始めた。

……なぜか俺に向かって。

「もう別にどうでもいい」

「なぜ、俺に向かって言っつ！？」

それだと俺が元凶みたいじゃねえか！

やり直しを要求するっ！ お前がため息ついていいのは、そのの駄目野郎共に対してだけだ！

しかし、岳羽はそれを聞いて首をかしげながら言った。  
どこか嬉しそうに。

「それ、拒否しないってことだよね？」

すごい前向きに捉えたな、今。

今、ひそかに俺、お前を尊敬したわ。

「ふう、良かった。あなた、断ると思ってた……」

どうでもいい、って断りたいって気持ち表現してるだろ？

いや、諦めも、だけど。

「ちょっと心強いかも」

小さく、そう呟く岳羽はどう見ても乙女だった。

心強いつてだけじゃなく自分が護らなきゃとも、思ってるんだろ  
うけどな。まあ、思っていたより、一之瀬に対する信頼感は深そう  
だ。

桐条先輩が口元を緩めながら言う。

「何はともあれ、受けてくれて助かるよ。分からないことは何でも  
訊いてくれ」

受けたって言うんだ、今の。

うん、じゃ、受けたってことにしよう。それがいい。

「いや、感謝するよ、ホントに」

駄眼鏡も嬉しそうに言う。

「ああ、そうそう。君の寮の割り当てだけだね、このまま今の部屋に住んでもらおう。偶然のびのびになってたけど、こりゃ怪我の功名だね、ハハハハ……」

とつとつ笑い出す、駄眼鏡。

そうだな、笑いが止まんねえよなアンタは。

……ま、俺も同じようなもんだけどな。

「偶然のびのびって、あれは……調子いいと言うか」

そう言った岳羽の科白と重ねて、ため息を吐いた一之瀬。

お前がなに考えてんのか、知らねえけどよ。

お前が選んだんだからな、一之瀬。

なにも選んでないつもりで生きてても、選ばないって言う選択肢をお前が選んだんだ。諦めるって言う、その道を選んだお前はその道の先で後悔を背負えんのか？ その覚悟はお前にあるのか？

まあ、覚悟とかどうでもいいし背負えなくても背負わされるんだけどな、せいぜい潰れないように頑張れ。

俺もちよっとくらいは手伝ってやるからさ、な？



4月15日 水曜日 く 『混迷していく詐術師の道』 (後書き)

ゆかりちゃんと夜由良くんは些か複雑な感じですが。今まであまり絡みはなかったんですけどね、ゆかりちゃんはたぶん色々考えてる繊細な子だと思ってます。

いよいよ、次回から本編に戻りますね。って言うか、ここまでにこんなに時間をかける人ってフツーいないですよ、ちょっと反省してます。

4月21日火曜日 く 『ありえないものと平常心』（前書き）

いよいよ、課外活動部が活動を始めます。

4月21日火曜日　『ありえないものと平常心』

見えないものを見ることが出来る人間だけが、不可能を成し遂げることが出来る。

ランク・ゲインズ』

『フ

「たぶん、それって幻覚って言えねえか」

「いや、今、他の人が見ていない部分を見れて意味じゃない？」

「ふん、今見えてるものをないがしろにすると、足元のマンホールの蓋が開いてるのも気付かねえぞ？」

「……そのまま落ちないんだったらおもしろいんだけどね、気付かなかったって理由でさ」

4月21日（火）

「おはよ、昨日はその……ありがとね」

朝、登校中にぼくは岳羽に声を掛けられた。

なんのお礼なのか一瞬疑問に持つものの、すぐに納得する。ああ、アレか。課外活動部に入ったことだろう、と。

ぼくは彼女に言う。

「……不用意にそういうこと言うと、また順平辺りに聞かれるよ？」  
「大丈夫、ちゃんと気にしてるから」

そうさりと笑顔で返された。

……気にしてるんだ。  
なら、言い回し変えればいいのに。

「いやさ、真田先輩も怪我してるし、頼りになるの桐条先輩だけに  
なつて不安だったんだ」

「夜由良がいるじゃない」

「彼は……なんか関わりづらいし。それにあまり頼りに出来るって  
感じでもなくて」

「……へえ？」

なんだろ、なにか違和感を感じる。

……なんだ？

「あ、早く行かなきゃ遅刻しちゃうよ？」

「……うん」

考え過ぎだろうか？

\*

放課後、岳羽と教室で話していると教室に桐条先輩が夜由良を伴  
って現れた。

「よしよし、二人ともいるねえ……」

そう言つて、無駄に桐条先輩にばれないようにこっそり、ほ  
くらに手を振る夜由良。

……なんだか楽しそうだ。なにがそんなに楽しいのか、わからな  
いけど。

おそろおそろ桐条先輩に話しかける岳羽。

「あの、先輩。どうかしたんですか？」

「今日、帰ったらラウンジに集合してくれ。全員に伝えたいことがある」

「伝えたいことって？」

「詳しいことはその時にな、じゃあ、伝えたぞ」

行くぞ、と夜由良に声をかけ、きりつと方向転換して歩いていく  
桐条先輩。

それに「はい」と続く夜由良。

なんか、ああいうの御付みたいの似合うな夜由良。

「いや、じゃなくて。今の、アレで終わりなんだ？」

本当に用件だけ言ってったな、桐条先輩。

「……私達と違って忙しいんでしょう？ 生徒会とか、そういうので  
さ」

その場にたまたまいた順平がそれを訊きつけ、首を傾げる。

岳羽の態度に、どこか含みがあるように思ったらしい。

「え……あれ？ ゆかりツチって、実は桐条先輩嫌いなのか？」

「別に……嫌いじゃないけど」

今朝感じた違和感に近いものをまた感じつつも、それがなにかは  
いまいちばくにはわからない。

\*

同日、作戦室にて。

呼び出されたとおり、ぼくと岳羽はそこに訪れた。

ソファ―に座っているのは真田先輩と桐条先輩、そして夜由良の3人。

「おかえり」

ぼくたちを見て、真っ先にその声をかける桐条先輩。

……いつも、おかえりって言ってくれるよな。まだぼくはそんなに日がたっていないわけだけど。

続くように真田先輩が言う。

「待ってたぞ、紹介しておこう」

真田先輩のその発言に首を傾げる岳羽。

「……紹介？」

真田先輩はそれに答えず、外に向けて声をかける。

「おい、まだか？」

「ちっと待って、重っ……」

ぼくたちの背後から現れたのは、たくさんの荷物を風呂敷包みにして背負った。

順平。

「てへへへ、どうモッス」

「えっ、順平っ！？ なんであんたが、ここに！？」

驚きの声を上げる岳羽。

真田先輩がなぜか、胸を張って紹介する。

「知ってるだろう、2年F組の伊織順平だ。今日からここに住む」

「今日から？ うそっ！？ 何かの間違いでしょ！？」

「嘘じゃない、この前の晩偶然見かけたんだ。目覚めて間もないよ  
うだが、間違いなく彼には『適性』がある」

ああ、あれか。真田先輩、自分で見つけたから誇らしげなのか？

「事情はだいたい話してあるが、俺達に力を貸すそうだ」

「適性があるって……それホントにっ？」

岳羽に対し、感情豊かに話し始める順平。

感情豊かって言うか、オーバーアクション気味の方が正しいかな。

「いや、オレ、夜中に棺おけだらけのコンビニでマジベソかいてた  
らしくてさ。つか、正直あんま覚えてないんだけど、見られてたみ  
たいで……ハッズカシー！」

うん、やっぱりいちいち大げさだ。

でも、ぼくはあえて何も言わない。

ぼくまで……頭部に関する外科手術の対象だと思われかねないし。

「でもまー、なんつーか、最初のうちは仕方ないんだってさ。記憶  
の混乱とかがありがちらしいんだよね。キミ達、そういうの知ってた  
？」

順平がそうぼくたちに言う。

「……へえ、そうなんだ」

それは初耳だ、と思う。

……そういうもの、なのか？

でも、なんだろう、なぜかさつきから夜由良が一言もしゃべらないんだけど？

顔はあくまで普段通りのままなんだけどね。

「先輩から聞かなかったワケ？ これ、ペルソナ使いの常識だから、常識」

「……ふうん、覚えておくよ」

「そうそう覚えとけよ、基本だから。コレ。……けどさ。正直言  
うと驚いたぜ？ オマエらもそうだって聞かされた時はさ」

「こっちだつて驚いたけどね」

「ま、そうだよな……でも、知ってる顔いて良かったよ。知り合い  
もなしで一人じゃ不安だったしな。実際、オマエらもオレっちが仲  
間になって嬉しいだろ？」

得意げに言う順平に、固まる岳羽。

「え？ ああ、ま、まあね……」

ものすごく言うまでもなく、不安そうだ。と言うか、不満そうだ。

「ほら、お前もちゃんと言えよ、佐為っ！ オレっちがいて嬉しい  
つてさあ」

「……別に」

「な、ちよっ」

「冗談だよ、学校で出来た初めての友達がいてくれて心強いよ」



「お……おつ、そ、そうか？」

照れてみせる、順平。

素直だよな、ぼくと違ってさ。ちょっと羨ましい。

「ま、アレだけ。お前も俺に任せとけよ、ちゃんと守ってやっからよ」

はりきっている順平を見て、真田先輩が笑みを浮かべる。

「そういう訳だ、よろしく頼んだぞ」

「……どういう訳なんだか」

真田先輩に聞こえないように小声で呟く、夜由良。

……実は真田先輩が嫌いなんだろうか？

「だが、これで戦力も整ってきた。そろそろ始められそうだし始める？」

ぼくがその意味を問おうとしたとき、作戦室の扉が開いた。入ってきたのは、幾月理事長。

「よし、全員来たようだね」

夜由良が理事長に笑いかける。

「理事長待ちでしたよ、俺ら」

「はは、それは申し訳なかったね」

「今か、今か、って感じですよ、本当に」

失礼とも言えるその科白に理事長は苦笑しながらも、目を細めた。  
……すこし、意外かもしれない。二人は親しいのだろうか？  
心なしか、真田先輩が夜由良の言葉に同調するかのように、張り切っているようにも見える。

ん……真田先輩と夜由良はホントは仲がいいのか？ どっち？

「みんな、ちょっと聞いて欲しい」

その理事長の声に、全員の注目が一気に集まる。  
さつきまで談笑していたのが、嘘のように静まった。

「我々の擁するペルソナ使いは、長い間、桐条君と真田君の2人だけだった。けど、最近とんとん拍子が増えて、今や6人まで増えている」

ぼくは何気なく周囲に視線を走らせる。

ぼくと順平を除いて、一同にあるのは期待するような表情。岳羽は少し、不安そうにも見える。

「……そこでだ。今夜零時から、いよいよ『タルタロス』の探索を始めようと思う」

順平がその言葉に首をかしげた。

「タル……？ ……なんスか、ソレ？」

「タルタロスよ、見たことないの？」

「はて……？」

岳羽のその言葉になお、首を傾げ続ける順平。  
ぼくもなんのことだかさっぱりだ。

夜由良がその様子を見て、声もなく笑い出した。

「わかんなくても無理ないよ、影時間の間に出歩いているのならわかるけど、二人ともまだ日も浅いんだしな」

「そうだね、確かに不思議じゃない。なにせ、タルタロスは影時間だけに現れるからね」

理事長が夜由良の言葉に同意した。

順平が呟く。

「影時間の間だけ……スか」

それなら、ぼくたちが知らなくても無理はないか。

ペルソナ使いの常識なんてのも、ぼくは知らないしね。

「シャドウと同じく、面白いと思わないか」

真田先輩の言葉に夜由良が反応する。

「あれですね、もう『面白い』の科白は真田先輩の代名詞ですね」

「アレを面白いと言わずになんて言うんだ？」

「不謹慎ですが心から同意しますよ、前から行きたくて仕方なかったですからね」

「だろ？ それにあの場所は俺達のスキルアップにもうつつけの場所だ。言ってみれば、あそこはシャドウの巣だからな。今まで行けなかったのが……」

語りあう二人を、ため息つきながら見守る桐条先輩。

あれ？ おおよそ、こここの人間関係が分かってきた気がする。

「シャドウの巣って……」

若干、引き気味な順平。すごく気持ちはわかる。さすがに二人のノリには付いていけない。

ずっと二人の様子を見ながら不思議そうにしていた岳羽が口を開く。

「て言うか、真田先輩……その身体で行くんですか？」

「明彦はケガが治っていない、同行はしてもらうが探索は無理だ」

「……わかってるさ」

桐条先輩の言葉に不服そうに言う、真田先輩。

順平と夜由良がその様子を見て、笑いかける。

「先輩の分は俺がバッチリ、カバーしますって！」

「そして、俺達の大活躍でタルタロスは探索終了。先輩の復帰は間に合いません」

「させるかっ！ 見てろ、すぐに復帰してやるからなっ！」

ぎゃーぎゃーうるさい3人だなあ。

って言うか、いきなり仲良いよね。君ら。

「なんか、不安だな……」

岳羽のそんな科白とぼくのため息はまたも重なった。

このパターンが今後も続くのはちょっとつらい。

そんな一同をさておいて、桐条先輩は理事長に問いかける。

「理事長はどうなされますか？」

「僕はここに残るよ」

「さも、当然のように言う理事長。」

「……どうせ、ホラ、ペルソナ出せないしさ……」

「が、次の瞬間そう理事長は落ち込んで見せた。気のせいかな、この間も哀愁背負ってた気がするんだけど。」

「あ、忘れるとこだった」

突然、夜由良が手をポンツと叩きながら言った。ぼくたちに、正確には順平とぼくの二人に向き直る。

「お前ら、武器どうすんの？」

「武器？」

「武器は……召喚器じゃないのか。」

「いやさ、そりゃそうなんだけど。って、伊織は召喚器持ってんの？」

「ああ、オレもあるけど。なんで？」

「いや、なんでって……個人調整は」

手を挙げる理事長。

「あ、僕やった。精密ではないけど、使う分には問題はないと思うよ？」

「……理事長。そんなやつつけで、もしも」

「おいおい、そう心配しないでくれよ。一線は退いたけど、これでも腕の方は衰えてないからね、技術者としてはまだまだ現役さ」

「じゃなくて……」  
「まあまあ、ちょっと聞きたまえ」

2人は耳を近づけ合い、小声で話し合っている。なんの話なんだろう？

1分もしないうちに、2人の会話は終わった。夜由良が最後に理事長を睨み付けていたけど。

「……ふう、まあいいや。もちろん武器としては召喚器で十分だ、だけどペルソナ召喚は精神力が削られるから、それだけだと結構きついんだよ。スタンダードなヤツなら一通りあるけどどうする？」  
「どうする……って」

「とりあえず、あるかないかは置いて剣でも槍でも弓でも好きな物を言えよ、今なくても取り寄せるくらい出来ると思うぞ？」  
「いや、言えよって言われてもさ……」

武器を選ぶなんて、非日常的な行動にすぐさま対応出来るわけ……。

と、思ったら、元気に「はいはいっ！」と前へ出てくる順平。

「オレ、剣がいいです！ やっぱ、戦うんなら剣でしょ！」

夜由良が呆れたように言う。

「……安直だな、お前は。まあ、ヘタなのより使いやすくもいいだろうから反対はしないけどな」

「なんだよー、じゃ、お前はなんなんだ？」

「……ナイフ」

「えー、それ盗賊とかの担当じゃん」

「なら、そっちは勇者担当のつもりかよ。ま、確かに俺の担当盗賊

っぱいけど、別に趣味じゃないからな。俺の場合、長時間持つてると使わなくても、重さだけで手が痺れてくるんだよ」

「え、マジ？」

「あー、いや、お前は大丈夫じゃないかな。たぶん、フツーに戦闘用のペルソナだろうし。ペルソナ使いは常に身体強化がされていて……ちよつと手を貸せ、調べてやる」

二人ともまるでそれがフツーみたいに会話してるよね、ぼくがおかしいのかな。

高校生が武器もってうろつくのって問題じゃない？

「あ、一之瀬はどうする？ こいつは両手持ちの大型剣使らしいけど」

「やっぱ、男のロマンだよな。まさか本当に大剣なんかあるとは……一撃必殺！ カッコイイだろ？」

「遊びじゃねえっつもの。ったく、そんな実用性があるかも微妙なもん選びやがって。誰も使ってねえから指南出来ないからな、腕力だけで上手くいくと思うなよ？」

「わかってるって！」

女性陣からの呆れを含んだまなざしに気付いているのか、気付いてないのか。どこまでも明るい順平。そして、若干二人を羨ましそうに見ている真田先輩。

うん、本気でぼくも羨ましくなってきた。たぶん、真田先輩とは違う意味で。

「で、お前はどうすんだ？」

「やっぱ、まずは男は剣からだだよな？ あ、大剣はもオレっちのだからな、言っとくけど」

「まずはって、なんだよ。クラスチェンジでもする気か？」

「あ、どうしょ、それありかも。一つの武器を一本の絞るのが男らしい気もすんだけどな」

「だから、お前な……」

また二人して盛り上がり始める。

いや、そこにとうとう真田先輩が入って、「なに言ってる、男は両の拳が得物だろうが！」なんて、参加し始めた。

收拾がつきそうにない、ぼくはため息をついた。

「……もうどうでもいい」

……剣でも拳でも何でもいいから、好きにしてよ。

\*

同日、夜。

結局、ぼくの武器は片手で扱えるような剣に決まった。

「戦闘は機動力、身軽に動きやすくするべき」と言う真田先輩の意見と、順平の「冒険は剣から」の融合案と言ったところだろう。

……そこにぼくの意味は特にない。

まあ、いいんだけどね。どうでも。

使う武器は別になんだって、最悪、本当に素手でもいいし。

「着いたぞ」

そう真田先輩が言って、立ち止まる。

いや、着いたって……「こ」は。

「え、コレどういづことッスか？ ここって学校じゃ……」



「見てればわかる。ほら、零時になるぞ」

真田先輩が校舎を見上げて言った。

ぼくもそれを見習い校舎を見上げる。

うん、どう見てもいつも通りの……。

その瞬間、辺りの雰囲気が一変した。

これは、あの時と同じ……なっ！

校舎が、変貌していく！？

それは塔。

様々な別々の奇抜なオブジェと、仮面を合わせたかのような建造物。

どこまでも、暗緑色の夜空と巨大で不気味なほど明るい月を突くかのように、それは伸びていた。

これは……。

「これが『タルタロス』……影時間の中にだけ現れる迷宮だ」

「迷宮？」

なにを言っているんだ？

絶句していた順平が正気を取り戻し、その驚きのあまり叫ぶ。

「そっだよ、なんだよ、それ！？メイキュー？オレらの学校ど

こ行っちゃまったんだよ！？」

「影時間が明ければ、また元の地形に戻る」

静かに桐条先輩が答えた。

答えにもなっていない答えを。

「これ。全部、このデカイの丸ごと、シャドウの巣って……」

「気持ちはわかるがこれが現実だ」

「いや、てかオカシイっしょ!? 他は様子変わっても、こんな風になってないぜ? なんだってウチの学校だけこんな……」

その疑問には誰も応えない。

「え、先輩達にも、わからないんスか?」

「……ああ」

桐条先輩のその言葉に対し、続くのは岳羽。

どこか諦めたかのような、あっさりとした声で。

「きつと色々あるんでしょ、事情が」

また、同じ違和感。

なんだろう、これは?

真田先輩が不敵に笑みを浮かべ、塔に臨むように見上げた。

「わからないなら調べればいいだけの話だ。ここを本格的に探索するのは俺や美鶴にとっても今夜が初めてだ」

「そ、そうなんスか……」

「ワクワクするだろ? どうみたって、ここには絶対なにかある。影時間の謎を解く『なにか』がな」

それを見て、につこりと笑う夜由良。

「はりきってますねえ、肋骨先輩」

「……明彦。意気込むのは勝手だが、探索はさせないぞ」

「そうそう、身体に障りますからねえ」

「う、うるさいな。……わかってるさ！」

「安心して下さいよ、復帰する前にはその『なにか』を発見しますから」

「お前も何度も言うな！　そして、させるかつ！」

「明彦！」

ぼくは3人を無視して、塔を改めて見上げる。

これがタルタロス、何階まであるのか見当も付かない。そして、同じくどれだけの化け物が潜んでいるのかは分からないけど。

これから、ここに挑まないといけないのか。

……憂鬱だ。

\*

入ってみると、どこか儼かな雰囲気すらある広々とした空間に出た。

中央には上の階と続くのだろう、大きな階段があり時計のデザインをした門のようなものが先にある。

壁や床は大理石のような白色、同じ色の柱が高く天井を支える。

その天井からはまぶしさを伴わない光が差し込む。

神話のワンシーンのようだった。

「すげえ」と呟く、順平にぼくは無言のうちに同意した。

「ここはまだ『エントランス』だ。迷宮は、階段の上のその入り口の先だ。基本的にここは安全地帯でもある。油断は出来ないがな」

桐条先輩の言葉がこの『エントランス』に響き渡る。

真田先輩がぼくたちを見て、話し始めた。

「まずは慣れてもらおう、今日はお前たち2年だけで行け」

その言葉に反応する岳羽。

「えっ!? ほぼ新人だけですか!？」

「深入りさせるつもりはない。それに必要な情報は私が通信でナビゲートする」

桐条先輩が静かに動揺する岳羽に応じる。

「それと、現場のチームを仕切る『リーダー』を決めておく」

一同は顔を見合わせた、リーダーって言ったって……。

「あ、それって、つまり探検隊の隊長スか? ハイ、ハイハイッ!  
オレやりたいッス!」

いち早く、状況に順応する順平。いや、早すぎない?

それを見ながらも、さりげなく先輩達二人は目を合わせる。いや、もう一人……夜由良?

そして、真田先輩がぼくへ言った。

「一之瀬、お前がやれ」

ぼくはとっさに返答出来ない。同じように岳羽が驚いたように、瞬きした。

順平が不平を零す。

「なんでッスか! コイツ、隊長っぽくないしょ?」

夜由良が順平に向けて笑う。

「あのな、伊織。コイツ、確かに隊長っぽくないけど実戦経験者なんだよ」

「マジで!？」

「俺も経験者だけど、前に出て戦える能力者じゃないからな。足手まといにならない程度にサポートする、その代わりいざって言うときの傷薬とかは俺がバツクパツクに詰めて付いてくからさ」

そう言つて、夜由良は背負つたりリュックサックを指す。ベルトできちんと胴体に密着させて固定する、動きをあまり阻害しないタイプのものだ。

真田先輩が言葉を続ける。

「夜由良も戦わない訳じゃないが、火力は拳の俺より低いからな」「うるさいですね、先輩が規格外なんですよ」

「フツ、鍛錬の成果だ。……まあ、理由はもう一つ、順平。それと岳羽」

真田先輩が二人を見る。

「ペルソナの召喚、出来るか？ アイツはまがりなりにもやってみせたぞ」

「も、もちツスよ。バツチリ、決めます!」

岳羽は決意の強い目で返す。

「私も大丈夫です」

「……相手はシャドウだ、出来なきゃ話にならんぞ」

「はい、わかってます」

「よし、いいな。行ってこい。……準備はいいか、リーダー」

アレ、これで確定なの？

ぼく、いいとも悪いとも言っていないんだけど？ やりたい人がやるのが一番じゃないかなって、ぼくは……うん、わかってるよ。選択肢がないのはさ。

「……問題ありません」

「そうか、頼もしい限りだ」

頼もしい、ねえ。あまりそんなこと言われるキャラじゃないんだけどな。

ポンツと肩を叩かれる、見て見るとそれは夜由良の手。

「安心しろよ、一之瀬。さすがに全部を押しついたりしねえからさ、俺が現状、副リーダーってトコだな。出来る限り、傍でサポートしてやる」

「じゃ、いつそ君がやってよ」

「無茶言つな、純粋な数値化された戦闘力だけなら俺が最弱だぞ？」

「そうなの？」

「ああ、戦闘タイプとそうじゃないヤツの壁ってのは……」

いきなり夜由良の科白が止まる。

どうしたんだろ、なんだか遠くを見ているような感じだ。

ぼくも、その視線の先を追って……。

あれ、なんか見覚えがあるものが？

「一之瀬、見えるか」

「うん、見える」

「……扉だよな」

「扉だね」

それも夢の中で見た、あの青い扉。

イゴールのいたエレベーターのような部屋、ベルベツトルームに  
続く扉。

他のメンバーが不思議そうな顔でぼくたちを見てくる。

「どうしたの？」

岳羽の言葉に気付く、他の誰も見えてないのか？

ふと、ポケットから鍵を取り出す。

「なんだ、ソレ？」

「客人の……契約者の証らしいよ」

「ああ、あの変な契約書に付いてきたおまけな訳ね」

「ま、そんなとこ」

ぼくたちは扉に近づいていく、周囲の声を無視して。

「……どうだ？」

「鍵穴に入る、開けそうだ」

「行くか？」

「他に選択肢があるとでも？」

ぼくたちは顔を見合わせる。

すると、夜由良はどこか嫌みたらしそくに笑い言った。嫌味でも  
何でもないはずんだけど、ぼくにはそう聞こえた。

「じゃあ、せっかくだから俺はこの青い扉を『開ける』のを『選ぶ』  
ぜ」

「いや、青い扉しかないし。そもそも開けるしかないでしょ？」

「それでも、せっかくだから俺は青い扉を『選ぶ』ぜ」

「はあ……」

「いいから、ため息付いてねえでさっさと行けよ」

ぼくはなんとも言えない気持ちになりながら、扉を開けていく。  
そして。

いつか見た、どこまでも青いその部屋。

部屋の中央には群青色の、占いの小道具にありそうな落ちついた  
雰囲気テーブルクロスがかけられたテーブルと、椅子。

もちろん、腰掛けるのはこの部屋、ベルベットルームの主。

異形、イゴールだ。

「お待ちしておりましたー之瀬様。夜由良様」

その容貌に似合わず、丁寧な口調をやはり崩さない。

「いよいよ、その力を使いこなす時が訪れたようですね」

「ぼくが望んでいた訳じゃないけどね」

「それでも、その時は訪れるのですよ、お客人。望むとも望まざるとも関係なく、いつかその時というのは来るものなのです」

イゴールは口の端を持ち上げる。

そのギョロツとした大きな目も相まって、貴方が笑っても威圧感が増すだけなんですけど。とはぼくには言えない。

「今から貴方が挑まんとする『塔』は、果たしてなぜ現れ、存在しているのか。残念ながら今の貴方方ではまだその答えを導くこと



は出来ないでしょう」

「俺の方はそんななんどつでもいいんだけどな」

「ぼくだって、そんなことどつでもいいよ」

「そうおっしゃるな。例えそうでも、力は必要なのです。であるならば、進まれる前に知っておかれるが宜しい」

ぼくたちがなにを言っても、平然と応対するイゴール。

さすがに、なんか慣れてるな。今までの客人もぼくらみたいに乗り気じゃなかったんだらうか。

「……知っておくつてなにを？」

「ご自身の力の性質というものをですよ」

「ぼくの力？」

「貴方の力は他者とは異なる特別なものだ」

ぼくの力が特別？

それを聞いて、夜由良の目が興味深そうに細められる。

「そう、その力は言わば数字の『ゼロ』のようなもの……からっぽに過ぎないが、無限の可能性も宿る」

「それはどういう……」

「貴方はお一人で複数のペルソナを持ち、それらを使い分けることが出来るのです。夜由良様とは似て非なるものですな」

「夜由良と？」

ぼくは隣に立つ、夜由良を見る。

「ああ、俺は端折って言う与他人のペルソナを真似ることが出来るんだよ、能力や性質をな。ただし、それも不完全なものだけだな」

「……さつき戦闘タイプじゃないって」

「俺のペルソナ単体だと雑魚なんだよ。身体強化も低いし、他に出来ることは周囲の敵を感知したりとか、姿消したりとかだな。伊織にも言ったとおり、テレビゲームだと盗賊タイプって奴なんだろうな」

俺、ほぼゲームしないけど。とボソツと夜由良は最後に続けた。どうやら自分の能力に不満があるらしく、どこか嫌そうな顔だった。

「つか、複数のペルソナ使いとか反則だろ」

「ぼくに言われても……」

ぼくが決めた訳じゃないし。

……イゴールが再び口を開く。

「一之瀬様が敵を倒した時、見えるはずですよ。自分の得た可能性の芽が手札としてね」

「……手札」

「時にそれらは、ひどく捉えづらいこともある。しかし、恐れずつかみ取るのです。貴方の力はそれによって育っていく。心しておかれるが良いでしょう」

「相変わらず回りくどいなあ、<sup>イゴール</sup>天狗。ようするに一之瀬は敵と戦えば、強くなれるんだろ？」

「そう捉えてもかまいません、その時が来ればわかることですからな」

「いや、だから。勿体ぶんなよ」

夜由良は呆れたように言う。

「そして、夜由良様。貴方様はそのままでは強くなれますまい」

「は？」

「貴方様の力は既に完成されております、それ以上の成長はないでしょう」

「……マジで？ えっ、もう？」

夜由良はイゴールへと近づく。

言われたことがかなりの衝撃だったらしい、その動揺が目に見えて分かる。どこか泣きそうな、と言ってもいいくらいの顔だ。

「一之瀬様が数字の『ゼロ』。何にでもなりえる無限の可能性であるなら、貴方様のは既に『数え終えた数字』、いや『数えなおされた後の数字』。もう他の何にもなれぬ、確定された可能性なのです」「いや、意味わかんねえし。俺成れるじゃん、他のペルソナ使えるし……」

「絶対に他者のペルソナを使いこなせはしないこと。それはご自分がよくご理解されておるか」と

「くっ」

夜由良は完璧には真似出来ないといっていた、そういう意味だろうか？

でも、それじゃ……。

「ぼくみたいに戦っても駄目なんですか？」

「ただ戦うだけでは意味がありません、そこからなにを学ぶかです」「勿体つけんな、さっさと教え！」

「もう一度言います、ペルソナとは心の力。そして、心とは他者との『絆』で育まれるものです」

「……それは前にも聞いたぞ」

「貴方様の力は他者がいなければ使えぬ力、しかし、今のままでは強くなることなど出来はせんでしょうな」

「やっぱ、天狗。俺のこと嫌いだろ？」

さつきから、喧嘩腰だよ。夜由良。

なぜかはわかんないけど、イゴール相手だと態度でかくない？

「私の話は以上でございますな、あとはご自身で気付かれるが良いでしょう」

夜由良はそれを聞いて、「どうにかできる気がしねー」と天井を仰いだ。ついでに崩れて見せた。

いや、ここでそんなフリーダムに脱力されても困るんだけど。

「さて……私も忙しくなりますな。次からはご自分の意思で扉を開けてここに来られるといい。その時こそ、私の本当の役割についてお話ししよう」

「あ、俺は鍵もらえねえの？」

「夜由良様は鍵がなくとも、扉に触るだけで入ることも出来るですよ」

「え、なんで？」

「さて、それは私が語ることはありませんな」

「やっぱ、アンタ。俺のこと嫌いか？」

夜由良、もうやめてよ。

一緒にいるぼくが恥ずかしいじゃないか。

最後にぼくらはイゴールに挨拶を交わして、部屋を退出した。今度こそ自分から、自分の意思で。ぼくはこの部屋を出た。

\*

「ちよっと、大丈夫？」

岳羽が心配そうにそう言った。

気が付くと、岳羽と順平がぼくらの周りを囲うように立っている。

「どうしちゃったワケ、二人ともいきなりポーっとしちゃってサ？」

ぼくたちは顔を見あせる。

どうする？　と言う、夜由良の目。

ぼくは……あ、今、クチパクで却下って言われた。夜由良、ぼくがなにを言っと思っってたんだろ？

「なんでもねえよ、なあ、一之瀬」

「あ、うん」

いや、この状況からのなんでもないはキツイかと。

順平がぼくらを見ながら言う。

「まさか……寝てたとか！？」

「え……あー、似たようなものかも？」

「は？　お前らは、あれか。国会で居眠りする大物政治家か！」

まあ、言いたいことはわかるけどその例えもどうかと。

「ふう、二人ともリーダーと副リーダーなんだからさ。頼むぜ、マジで」

二人とも怪訝そうにぼくらを見ている、扉が見えていないのは間違いなさそうだ。

夜由良がぼくに小声で聞いてくる。

「どつ思つ、一之瀬」

「どつって……幻覚ではないと思つけど」

「いや、そうじゃなく。俺は今後が不安で仕方ねえ、って話」

「……言わないでよ、それは」

「これからがどつなるか、だれも保証はしてくれそうにないのだった。」

4月21日火曜日　『ありえないものと平常心』（後書き）

ようやくですね、まずは基本的には一之瀬君がメインです。夜由良君と比べると段違いで読みやすいと思います。

4月21日火曜日　『無神経だ、と言う優しさ』（前書き）

初タルタロス、前回から続いて長いですね。でも、たぶん探索描写は今後そんなに多くないかと思えます。戦闘シーン書いてるより、掛け合いのほうがおもしろいので。



4月21日火曜日　　『無神経だ、と言う優しさ』

『女教皇』

タロットカードにおける22の大アルカナのうちの一枚、ナンバ  
ーは2。

描かれている人物は伝説上の人物である女教皇ヨハンナであると  
されるが、そもそもカトリックにおいては女性が司教以上の職に就  
くことは認められていないために、ありえない存在と考えられる。

描かれることの多い小道具は知性の象徴である書物や、秘密や神  
秘性の象徴であるベール。このうち、書物は旧約聖書トラーとされ、モー  
ゼの五書、律法と呼ばれた、キリスト教において儀式司法道徳の元  
と成った重要なもの。一種の禁忌ですらある、女教皇が持つと言う  
ことの意味をどう考えるか、がこのカードの解釈のおもしろさでも  
ある。

正位置……知性と洞察力、そして優しさ

リバース逆位置……不安定と激情、そしてプライドの高さ

「宗教つてのが、この世で一番男女や階級で人々を差別するものだ」  
「同時に最もこの世に秩序をもたらしたものでもあると思うけど？」  
「……私以外の神を認めるな、と言う言葉が戦争を引き起こしたけ  
どな。まっ、人間を見下してる存在なんざ、大体傲慢なもんだ」  
「同じく人間も含めて、だけどね。人間が一番、人間を見下してる  
んだから」

二階へと続く階段にぼくら4人は向き合った。

岳羽は真剣な表情で、その階段の先にある時計を模した門を見て

いる。

背後から、桐条先輩が声をかけてくる。

「心配することはない、無理はさせないしサポートもする。安心してくれていい」

それに同意する夜由良。

「ああ、先輩のペルソナによる索敵や情報処理は信頼できるぞ？  
機材の補助を得てだが、あの分察からタルタロスの異常を察知できるくらいだからな」

「……完璧な能力ではないが、その信頼には答えてみせる。少なくとも、今回の探索で行う範囲でなら敵の奇襲を受けることはない  
断言しよう」

力強くそう言った桐条先輩のすぐ横には、真っ白なボディのバイクがあった。

こんなところにバイク？

「えーと、それはなんです？」

「これに情報誌援用の機材が積んである。多少の衝撃には耐えられるように設計してもらっているが、かなりデリケートなものだ。これで君達をサポートする」

バイク一台にそんな凄そうな機材を積載出来るなんて、桐条グループの技術はかなりのものみたいだ。

「ベタベタさわんなよ、伊織。コレ、目玉飛び出るほどのお値段だからな、たぶん」

「さっ、触わんねえよ!」

「ちなみにあんまり触ると桐条先輩本気で怒ります」  
「マジで!?!」

これから危険地帯に行くって言うのに、夜由良と順平はまったく緊張感がない。

正直、今日だけでぼくは何回ため息をついているのかわからないくらいだ。……はあ、完全に憂鬱だ。

「大丈夫だよ、一之瀬君」

ぼくの隣にいる岳羽がそう静かな声をかけてくる。

「わたしが絶対に護ってみせるから」

……ぼくは一瞬、なにを言われたのかわからずポカンとしてしま  
う。

もしかして、すごく不安そうに見えたんだろうか？

いや、まあ、不安なのは確かだけど、そういう意味ではなく  
て。

「……ありがとう」

結局説明がめんどろだったぼくは、そう答えを返した。

ほんの少し満足そうに笑う岳羽、だけどその目は未だに真剣さを  
失わない。

なぜだろう、岳羽と話していると根本的なズレを感じる。

「よっしゃ、行くぜえ! そんな、大活躍して明日からオレが探検  
隊のリーダーになってやるっ!」

「はいはい、その意気その意気」

「なっ、お前、すげーどうでもよさそうなりアクションすんじゃないよっ」

「どうでもよさそう？ そりゃ違っつて、俺は本気でどうでもいいんだってば」

「なお悪いわっ！」

「まっ、せいぜい頑張ってくれたまえ……帽子君」

「上から目線っ！？ てか、名前で言えよ！」

違った。岳羽だけじゃなくて全員、根本的なズレを感じる。本気でこのメンバーで上手くいく気がしないばくだった。

「さあ、準備はいいな」

桐条先輩がぼくらにそう告げる。

これから、戦いに赴くと言う合図を。

ぼくらは一瞬、顔を見合わせ黙ってその言葉に頷く。

居残り組の先輩達も含めてみんながと戦意と気迫を含んだ表情をする中、夜由良が口の端を僅かに緩めた。

「大丈夫です」

「……よろしく頼むぞ」

ぼくはそう答えて、一歩づつ階段を上がっていった。

みんなの足音がそれに続く……。

\*

迷路のような通路が並ぶ、廊下。

血のような液体が水たまりのようにあちこちに溜まっていた。

暗く、灯りは一切ないはずなのに近くは見える、そんな奇妙な空

間。

「いよいよ、こっから本番か……」

順平の声がどこか戦慄帯びているように感じるのは、ぼくもどにか怯えているからだろうか。

「なんか暗いし入り組んでそうだね、へたとするとすぐ迷いそう……」

続く、岳羽の声。

不安なのは理解出来る。周囲は暗く遠くまで見通すことが出来ない。どこに敵が潜んでいるのかわからないのだ。

その上、なによりも入ってきたはずの入り口が消えている。

……引き返すことは出来ない。

「全員、聞こえているか」

どこからか響く、声。……この声は？

「桐条先輩？」

「そうだ、ここからは私が声でバックアップする」

順平が首を傾げる。

「中の様子、わかるんスか？」

「ああ、私のペルソナの特性だ。だから、私がバックアップとして最適なんだ」

そこまで出来るのか、ペルソナって。

確かに具体的にどうやってバックアップする気なのかはわからない

かった、まさかテレパスに近いものだったなんて。

「君達は知らないだろうが、タルタロス内は日によって構造が変わる」

「不思議のダンジョンって訳ッスね」

「不思議の……？ 上手いことを言うものだな、伊織。確かに未だに説明の付かない奇妙な現象だ。諸説はあるが、ともかくこうしてバックアップするものがいなければ帰還も容易ではない」

「その上、暗いですしね……ますます迷いそう」

岳羽が辺りを見回しながら言う。

確かにこんな場所じゃ方向感覚も狂いそうだ。

「その中で私は君達越しに様子を把握しながら援護する、マップिंगもこちらでしょう。視覚に頼るものではないので頼りにして欲しい」

「俺達越しで、かつ、視覚に頼らない？ ……それって俺の同調に

近いものですかね」

「……かもしれないな、機械を併用してようやく使えるものではないが」

「へえ」

なんだか愉快そうな表情をつつすらと浮かべる夜由良。

なんだか、なんとも言えないような表情だ。すこし怖くすらある。

「さて、君達のいる場所は既に危険域だ。いつ敵と遭遇してもおかしくない」

その言葉を聞いた瞬間に一同に緊迫感が走る。

……いや、それも一人を除いてだ。

「」安心を、周囲に敵はいません。今のところはですけどね」

そう飄々とした態度で言う夜由良。

まさか、最初から警戒していたのか？

「フツ、頼もしいな夜由良。索敵能力は彼も持っている、みんな頼りにしている。それでも敵のレベルは低いはずだが注意はしてくれ」  
「はい」

おのおのがそう返答を返す。だが、それも空返事になってしまった。ぼくたちはみんな、夜由良に目を向けていたから。

誰よりも、リラックスした様子で辺りをさりげなく見渡す夜由良。しかし、その目線は基本としてぼくらに向いている。敵がいると聞いても、なお。

……まるで、ぼくらを観察するかのよう。

「お前ら、なんだよその顔？ 緊張すんのはわかるけどな、ちょっと気を抜け。で、注意を怠るな。ずっとそれじゃ保たんぞ？」

「そうだ、今から緊張しても仕方ない。習うより慣れるの精神でやるんだ、大丈夫、君達なら出来る」

夜由良と桐条先輩がぼくらにそう説く。

それを聞いて、順平が笑みを見せた。

「ウツス！」

続く、岳羽は神妙な面持ちで答える。

「了解です、問題ありません」

再び、岳羽の科白とぼくのため息が被った。なんかもうかなり癖になってるな、ため息。

「一之瀬はどうだ？」

「今、いい感じで気が抜けましたよ」

結構不本意だけどね、ためい『気』と一緒に抜けた感じがする。やれやれって感じで。

「……よし、あまり抜きすぎるなよ、一之瀬。君には期待している」

期待されても、面倒なだけなんだけどな……。

ぼくらのリアクションを見て、夜由良が目を細める。心なしか順平を興味深そうに見ていた様子だった。

……二人とも気が合いそうだもんな、似てるんだろうか？

「ったく……なんか勝手だなあ……」

岳羽がひっそりと小声で漏らしたその科白が耳に残った。

「いいか？ では、行動を開始してくれ。今日は実際に戦ってもら  
う」

「うおっ、マジッスか！」

「初の実戦だ、敵は強くないがケガをしないように気を付けてくれ」

いや、気を付けてって言われてもな。

とりあえず、ぼくたちは歩き始める。

先頭に行くのは、一応、リーダーであるぼくだ。その後ろに順平、岳羽と続き、最後尾を夜由良が受け持つ。



「万が一に備えて、俺は後ろに付く。前はお前らに頼んだからな？」

そう言っつて、夜由良はナイフをどこから取り出した。

順平がもつ、大きな日本刀。正確には加工（改造？）の施された頑丈な模造刀らしいが、それと見比べるとずいぶん頼りない武器だ。ぼくの小さく扱いやすい片手剣と見比べても、子供の玩具のようにはすら見える。

ちなみに、岳羽が扱うのは弓道部で練習に使っている弓だそうだが、一番、身近で扱いやすい武器なのだろう。

「お、そろそろだな」

そう呟く、夜由良。

なにが、と問う前に桐条先輩が強い口調で制止を指示した。

「気を付ける！ 前方にシャドウの反応だ」

一同は前方の暗がりを見つめるように立つ。この先に敵が？

「迅速に先手をとるんだ。攻撃を受ける前に仕掛ける」

桐条先輩が続いてそう指示を出す。

いや、言っつのは簡単だろうけど。具体的にどうしろと？  
ぼくは戦いのプロじゃない、ただの高校生なんだよ？

「ペルソナを使え、一之瀬」

最後尾から夜由良が言う。

「意外と簡単だ、やってみろ」

簡単だった？ 言ってくれるじゃないか。

これから化け物と殺し合いをするんだぞ？

「最初の一匹目は躊躇するだろうが、二匹目からはなんの躊躇もなく出来る。人間ってのはそういう風に出てくる。たいしたことじゃない」

ぼくはその語りを聞きながら、召喚器を引き抜き……そのままぼくは夜由良を睨み付けた。

「たいしたことじゃないだった？」

そりゃ、やらない訳じゃない。そうするしかないのはわかるさ、他に選択肢がないのはな！

でも、それがたいしたことじゃない？ ……どうせ好きで戦っているような人間だろう、君は。それなのにいったいなにがわかるって言うんだ？

岳羽がぼくに心配そうに言う。

「あの、一之瀬君？ 無理しなくて良いよ、どうしても駄目なら私が行くから」

「な、なに言ってたんだよ、オレだって……やるぜ？」

二人がぼくを見る。

だけど、あんなに乗り気ですらあった順平は、今はあからさまに強がってるだけの様子だし。岳羽なんか……震えてさえいた。

……ここで、二人に譲る？

「やりたくないならそう言えよ、止めねえから。嫌なら、自分で戦いたくないって言えよ」

「なにを今さら……」

「やるかどうかは自分で決めろ、他人を言い訳にすんな。迷うくらいなら、最初から流されんな。ほら、代わりに他のヤツらが矢面に立ってくれるぜ?」

ぼくは本気でコイツが憎たらしくなってきた。

「そう言われて退けるとでも?」

「さあ、それはお前が決める話だろうが」

「……っ!」

どこまでも人ごとのように話す、夜由良。

決めるだつて? 戦わずに逃げて、どうなるって言うんだ。

選ぶ? 他に選択肢なんかないじゃないか、ぼくになにを選べと。

「……ふざけるな」

「あ?」

ぼくは一步を踏み出していく。

敵のいるその闇に向かって。

「夜由良君?」

「……もうどうでもいい」

「え?」

怖いとか、面倒だとか、不安だとか、そんなのはもういい。

決める? 選ぶ? 他に道はないなら行くしかないじゃないか。

誰かを代わりに行かせるなんて、友達や女の子を身代わりにする

なんて出来る訳ないだろ！

ぼくは一切の迷いを……。

どうでもいい、とそう切り捨てた。

遅れて、後ろから続く小さな足音。

小さく、ほんの僅かに口笛のような音が聞こえた。

……次第に息を殺すように、ほぼ無音歩くようになる。同じように続くのはいつも脳天気なぼくの友達と、同じ境遇だからか気に掛けてくれる一人の女の子。そして、なにを考えているのかわからないヤツ。

ん……じゃあ、ぼくはいったいなんなんだろう？　どんな人間なんだ？

スツとその時、暗闇の向こう側に見えた。黒い蠢くなにか。

それはあの時の夜に見た、化け物とよく似ていた。

考えるよりも先に、甦るようにわき上がる恐怖と。

……なぜか明確に存在する、高揚感。圧倒的な力を振るう、全てを支配したかのようなその実感。それを思い出す。

あれ？　ぼくはあの時のことを覚えていないはずだ？

(覚えているんだよ)

誰だ？

(記憶にはなくっても、ね。君は覚えているんだよ)

子供の声がする、ぼくの中から。

(恐れることなんかない、君には出来るはずだ)

気が付けば、ぼくはその銃口を。

召喚器を頭に突きつけていた。

(大丈夫だよ、ぼくがついてるから。君は一人じゃない)

そうだ、ならもう簡単な話だ。

「あとは……」

(そう、あとは……)

「引き金を引くだけ」

(引き金を引くだけだね)

ぼくは嗤う。

その目の前の存在を。

「ペルソナ」

圧倒的に格下であるその存在を。

そう、勝負にすらなりはしない。引き金を引き絞る。

具現するのは純白、銀にも近い身体と髪。そして豎琴を持つ、冥界を魅了し尽くした吟遊詩人。

「オルフェウス」

どこかで見えた面影を持つ、彼はぼくの傍らに寄添った。

(我は汝、汝は我。さあ、我は汝と共に歩もう)

行け。

オルフェウスはぼくの意味に従った。

そのぼくの心の具現から放たれるのは火炎の弾丸。

それがアギと呼ばれる力であることを、ぼくは直感的に理解した。

その攻撃にシャドウは気付く。

だが、遅すぎる。その弾丸は確実に間違いなく、その身体を中心に撃ち灼いた。

もう動くことはない。真っ黒な霧を発しながら、散っていくシャドウ。

「すげえ……」

そんな言葉が順平からこぼれた、あるのは驚きのまなざし。岳羽も同じような様子だ。

桐条先輩の声が響く。

「よくやった、一之瀬。身体に異常はあるか？」

「……いえ、特にありません」

「よし、ではこのまま探索を続行する。異常があればすぐに言ってくれ」

「わかりました」

ぼくは召喚器を支給されたホルスターへと収納した。

「へえ、やるじゃん」

夜由良が笑顔でぼくに近づいてくる。

なんだか、それが気に入らない。

「簡単だったろ？」

ぼくはそれを無視するようにして、歩き出す。  
かまっている暇はない、さっさと次へ行かないと。

「……いや、違うか」

途端になにかを否定する夜由良。

見てみると、ぼくへ目を向けながらくつくつくと歯も見せずに笑う夜由良。その目には感情がない、つまるところ目は一切笑ってない。

その目のまま、夜由良は言った。

「愉しかったろ、女顔？」  
いちのせ

「なっ!？」

なにを言っ……。

「いやいいさ、答えなくても、な。……なんとなくわかる、し？」

ぼくの返答には興味ないと言わんばかりに言う、夜由良。

変わらず、その手には光る凶器が握られていた。いつでも、振りかざす準備が出来ているというように。

「次は伊織、岳羽。二人の番だな」

「……おう」

「わかった」

夜由良が二人にそう声を掛けていく。

ぼくはただそれを眺めていた。

\*

「おおっ！ オレにだって出来るっ、見せてやるぜえっ！」

順平が引き金を引く。

現れるのは一対の機械的な翼を持つ、軽装の甲冑を纏う騎士のようなペルソナ。

「うっおおおおっ！」

順平はそのペルソナと追走するようにして、駆け抜けた。召喚器をホルスターに収納し、大きな模造刀を両手に握り直す。

「くらええっ！」

そのままに斬りつける。その強化された腕力を使い、全力で。

—文字斬り。  
スラッシュ

その一刀をにて、シャドウはたやすく両断された。

「さすがオレ、やったぜオレっ！」

そう喜ぶ、順平にシャドウが迫る。既にその背後にペルソナの姿はない。

「言ってる場合か、どアホッ！」

突然、前触れもなくシャドウの目前に出現する夜由良。

敵対するシャドウの、黒く蠢くその異形の振るう腕をナイフで受



け止める。

……だが、いともたやすく叩き飛ばされた。

「うおっ!?!」

床を転げ回る、夜由良。

「なっ、大丈夫かよ!?!」

「いいから前向け、ハゲツ!」

「誰がハゲじゃ!」

そう言っつて、順平は太刀を振るってシャドウへと再び向かっていく。

大丈夫なのか、あんな……。

「一之瀬君っ、前!」

「一之瀬、よそ見している場合じゃないぞ!」

はっ、と気が付けば新手のシャドウが現れていた。

ぼくは対峙する一体のシャドウの、攻撃をステップで躲す……  
ことが出来たものの、その新手のシャドウの振るう腕を身体の端にかすめる。

「くっ」

……と、その時、岳羽が弓を引いた。

「当たれ!」

放たれる、一本の矢。

それはシャドウを倒すことは出来ないものの、その腕へと突き刺さり行動を阻害。動きを止めた。その隙を突いて、ぼくは片手剣で一撃。もう一体のシャドウが怯んだところで、召喚器を使う。顕現したオルフェウスが楽器を奏できるようにして、火炎を放ちシャドウを焼き払った。

残るは一体。

最後の一体となったソイツに剣を構え、待ちかまえる。

「いいぞ、二人とも。召喚にはタイムラグが伴う、上手く連携をとるんだ！」

桐条先輩の声がぼくらに伝う。

岳羽は再び、矢を放ち牽制。それは当たりはしないものの、シャドウは移動の軌道をずらしわずかな時間が生まれる。

今だ……。

「行くぞっ」

引き金を引くのと同時に召喚されたオルフェウス、それと共にぼくは相手を迎え撃つ。

火炎を放つ距離的な余裕はない、ならば……敵の攻撃をよく見る！  
薙ぐように放たれる一撃。しかし、一撃を放ちながら飛びかかる影をくぐり抜け、方向転換する。よし、攻撃はぼくにはかすめることすらない。

これで間合いは十分、近接攻撃ならねっ！  
アサルト 突撃、加速して突進する状態からの反撃。

「はああっ！」

片手剣の軽重量故に、順平ほどに派手にはいかないものの、十分

に倒せる程の深手を与えることに成功。

僅かにもがいて、完全に動きを止めるシャドウ。

「敵の殲滅を確認、よくやったな」

桐条先輩が戦闘の終了を告げる。

「ふう……」

同時に、ぼくは剣を下ろし、やや脱力した。

……結構、キツかった。

「大丈夫、一之瀬君？」

「ああ、なんとかね」

岳羽がそうねぎらってくるのに、答える。

「こつちも片付けたぜ」

「まー、アレだ。このハゲの攻撃なかなか当んねえの」

「うっせ、ちょこまか動くんだよ、アイツら。つか、当れば一撃だつたじゃねえか！」

「そうだな、その通りだな。……さっさと当てれよ、帽子<sup>ハゲ</sup>」

変わらずぎゃーぎゃーうるさい二人。

岳羽が心配そうにぼくに尋ねる。

「傷はどう？」

「そんなに深くは……」

かすめただけだし、直撃してもたいした衝撃じゃなさそうだ。

先輩の言ったとおり、たいして強くはないらしい。たぶん、群であつてもぼく一人でもなんとかなる相手だろう。  
……決して、無傷ではないだろうけど。

「ま、待っててね……」

「え？」

岳羽がなにか覚悟を決めたように、召喚器を両手で持ち額に当てる。その持ち方だと、親指で引き金を引くような要領だろう。

……え、でもなんで？ 今、戦闘中じゃ……。

「私にだって……私にだって、出来るんだから！」

引かれる引き金と共に、出現する岳羽のペルソナ。

牛の頭のような巨大な物体に乗る、金色の長い髪をなびかせた女性。黒色の肌と柔らかな桃色の色合いの服を纏った彼女は、どこか岳羽に似て見えないこともない。

どこが、ということではなく雰囲気だ。

「お願い、力を貸して……イオ」

イオ、と呼ばれたそのペルソナは淡い光を放つ。

その光はぼくへと向かい、そして包んだ。

理屈でなく、感覚的な理由でぼくはそれを危険なものだと判断しなかった。自分でも曖昧なものに従っているとは思うが、それが正しいと思えない。

そして、それは結果としても問題なかった。

ディア  
治癒。

岳羽の持つペルソナは相手の回復力を高める能力を持っていた、

厳密に言うなら、ペルソナによって高めれた身体能力の中から、回復力を限定的に高めると言うべきか。

「こんな能力のペルソナもいるんだな……」

夜由良がそう感心したような声で言った。

元々、たいした怪我じゃなかったためにすぐに痛みは引いていく。まあ、怪我って言うかちょっとした打ち身みたいなもんだしね。

「どっつ？」

「……うん、もう大丈夫だよ」

身体を動かして、確認していくも異常は見あたらない。

……全く問題なさそうだ。

安堵したようなため息が、岳羽から聞こえる。……なぜか、夜由良も軽いため息をついた。

気を取り直したかのように、夜由良が言う。

「ま、これで負傷者なし、だな」

「お前、転んでたけどな」

「誰のせいだ！」

ああ、もつづ。本当にうるさいよね、君ら！

だけど、この調子ならなんとか戦えそうだ。

……ん？

何かが、宙を舞っている。それはぼくを囲うように、手の届くような距離で飛び回る。

「なんだ、そりゃ？」

「うん……なんだろ」

夜由良がぼくに近づいてくる。

一緒にその飛んでいるなにかを見るために。それは、よく見ると……カード？

……あれ、もしかして？ そう思い、ぼくは残りの二人を見る。  
ああ、やっぱり。

「なに、どうしたんだ？」

「なんかあったの？」

不思議そうな顔をする二人。

例の如く、見えていないらしい。

「とりあえず、アレだ。一之瀬」

「え、あ、うん」

「どうする？」

「どうするってたって……」

ぼくだって、わからないってば。

飛んでいるカードは三枚、これでどうしろと？

「とりあえず取れよ」

「えー、怪しげだよ。なんか……」

「今さら、だろ。それ」

「まあ、そうだけど……」

どう見ても、得体の知れないものなんだけど。  
ん？

ふと、なにかが気になってよく目をこらす。

……なんだ、コレ。

気が付くとぼくは手を伸ばしていた、一番、よく目に付いたカードへ、と。そのカードはぼくの手へと自然と収まっていった。

「……これは」

ぼくはそのカードを裏返す。

描かれているのは、昆虫のような羽の生えた小さな女の子。妖精、ビクシーと言つ名称が頭に浮かんだ、そのカードの下には英語でラヴァーズの文字。

「ああ、それ。ペルソナじゃね？」

夜由良がどうでもよそうなトーンでそう言った。

つまりこうして、戦いを続けていれば新たなペルソナを得られるつて事なのか？

……気が付くと、なぜかジト目でぼくを見る夜由良。

「狡くね？ 俺、あんな雑魚シャドウの攻撃すら受け止められねえのに、余裕で戦える上に複数のペルソナって……」  
「だから、それをぼくに言っでどうするの？」

そんなぼくたちの会話を二人は意味不明と言った表情で見守っていた。

いや、そんないぶかしげな顔で距離とんないですよ。

\*

「よし、戻ったな」

あれから何度か戦闘をこなし、脱出地点を発見してぼくたちはエントランスへと帰還した。

タルタロスには上へ行く階段の他に、そういった脱出地点が存在するらしい。いまいち理屈はわかっているが、空間と空間をねじ曲げるように存在する同調地点がどう……いや、よくわかってないらしいものを理屈で説明されてもよくわからないままなんだけどね。

桐条先輩がぼくへと尋ねる。

「一同、たいした怪我無しか、なによりだ。……一之瀬、どうだった？」

「ぼく、ですか？」

あれから、三回目の戦いを体験する頃にはみんな陣形を組んで戦えるようになった。前衛のぼくと順平、後衛の岳羽。そして、補助の夜由良。

単体の敵にはぼくと岳羽が牽制し、動きが鈍くなったところを、威力の高い順平がフィニッシュを掛ける。それで決めれない場合は、すぐに夜由良がフォローに入った。

群の敵の場合は、前もって火炎や弓などの遠距離攻撃で敵を削り、夜由良が奇襲を掛けてから戦闘に入る。

うん、結構、悪くない流れだったように思う。最初の頃のようにバラバラの状態で、戦うことはなくなっただために、大きく負傷することもなかった。

結局、まだ新しいペルソナは使わなかったけど、そのうち機会があるだろうしいいだろう。



「そうですね、問題は無いと思いますよ。まあ、今はなによりも……」

「なによりも？」

「眠いです」

「……そうか。フフ、緊張が解けたからかな？ まあ、それもじきに慣れるさ」

順平が拳を握りしめて言う。

「すげえ……自分の力つてのを初めて実感したぜ！」

が、次の瞬間にはガクンツと肩を落とす。

「あれ……なんでだ？ ミヨーに身体がしんどいんすけど」

呆れたようにその言葉に返す、岳羽。

「それ、単なるはしやぎ過ぎじゃないの？」

「そう言うけど、ゆかりツチだつてもるバテ気味じゃん」

「いや、バテるってか。息苦しい感じが……なんだ、コレ？」

夜由良が二人を見て、にやける。

「あ、それ影時間のせいだよ」

「は？」

「いつもよりめちゃくちや動く疲れるんだよね、影時間。あとたぶん、ペルソナ使ったからじゃね？」

完全に他人事な夜由良、と言うよりは楽しんでるな、これは。順平がしんどそうにため息をつきながら言う。

「……先に言えよ、そういうのは」

「大丈夫、それもそのうち慣れるって」

「そう言う問題かっ！ って、ああ、突っ込み入れるだけで目眩が

……」

「……アホか」

ボソツと岳羽が呟く。

だが、その声にも力がない。

「夜由良は平気そうだね」

「俺はわりと最初から大丈夫だったな、なぜか。きつと弱い分、省エネなんじゃね？」

「そういうものなの？」

「さあ、わかんね。つか、そう言うお前も平気そうだな」

「これでも疲れてるよ……わりと」

目眩はしないけどね、さすがに。それでも、出来ればすぐに休みたいところだ。

ぼくらのその様子を見守っていた桐条先輩が真田先輩をからかうように言う。

「しかし、想像してたよりも行けそうじゃないか。明彦もうかうかしてられないな」

「フン、ぬかせ」

余裕そうに笑みを浮かべて真田先輩はそう返した。  
そう簡単に追いつけるものか、って言うことだろうか。

「夜由良、残り影時間は走るぞ」

「……マジですか。はあ、まあいいですけどね。……いや、やつぱり制服汗臭くなるんで無理です」

「戦闘でもう汗かいてるじゃないか？」

「悪化させてどうすんですか！」

「じゃあ明日にでもクリーニングに出せよ」

「そんな気軽に毎回毎回出せるかつ！」

「……出せないのか？」

本当に元気だな、夜由良。ぼくたちと違って、背中にバックパック背負つての戦いだつたはずなのに。

確かに積極的に戦っているって感じではなかったけど、それでもほとんど疲れた様子がないなんて……。

いや、それだけじゃない。攻撃を受け止めて転ぶ、なんてことはあつたけど完全に無傷だ。一撃も直接受けていない。岳羽は後衛だったから当然だけど、夜由良は順平と攻撃に走ることもあつたのに。

ぼくの視線に気付いたのか、夜由良がぼくを見た。

そして、明らかに作り物の笑顔でぼくに言う。

「人の顔黙って見つめんなよ、気色悪いぞ。お前」

……うん、フツーにイラツときた。いい加減、我慢の限界だ。

「うるさい、黙れ。腰巾着」

「なっ、腰巾着っ!? テメ、言うに事欠いて腰巾着だと！」

「事欠いてない、純粹な感想。と言うか評価」

本気で腰巾着と言われたのが嫌だつたらしい、過剰なまでに怒り出す夜由良。

「女顔の癖に調子のんな！ お前みたいな顔の奴に熱心に見つめられると妙な噂が立つんだよっ！」

「……熱心になんか見つめてないよっ！ 妙な噂が立つのは、自分の日ごろの行いが悪いからだろ！」

「なに言ってるんだ、俺は誰とも噂になることもなく日夜フツーに生きとるわっ」

「フツーに生きてる？ あからさまに嘘つくなよっ、エイプリルフールは過ぎてるの知らないの？ 腰巾着っ！」

「はっ、そう言うお前なんか初日から大フィーバー叩き出してるだろうが、お前のこと知らない奴なんてそうそう学校にいないぞ。有名人？ なんだ、お前。それで目立ってないつもりか？」

「ぼくは何もしてない！」

「ああ、だろうな。……みんな最初はそういうんだよっ！ 可愛い顔しやがって、裏ではゲバゲバ遊んでるくせにつ！」

「ゲバゲバ！？ 勝手に人をそんな人間に仕立てるなっ！」

「うっせ、そのうち事実になるわこのポケッ！ つか、色ポケッ！」

「だ・ま・れ、妄想中学生。ウワサを流す中心は君だろ！」

「中学生扱いつ！？ 小学生高学年から、中3までが一番嫌いな年代なのにつ！？」

「知るかそんなの！」

「……そんなぼくらの罵り合いを遠くから見つめる、目がひどく遠いものだと言うことに気付いたのは、あともう少しの時間が必要だった。」

「はあ……マジで疲れた。なんであんな元気なの？」

「ホントな。あー、オレ、なんかもう腹減っちゃったよ。マジ、だるい」

「……止めてきなさいよ、アンタ」

「無理だろ、アレ。てか、アイツあんな顔して話せるんだな」

「ああ、確かに。一之瀬君あんなキャラだとは思わなかったかも」

顔を見合わせ、岳羽と順平がなにを話しているか気にしている余裕はなく。

「随分と二人は打ち解けているようだな」

「ああ、アイツらを見ていると昔を思い出す」

「昔って言う程、年は取っていないだろ？」 明彦

「まあな、だがもうかなりの時間が経っているように思う。……色々あったからな」

「……そうだな」

どこか温かい目で見守る先輩達がなにを思うか、考えるはずもなく。

ぼくは自分でもおかしいと思う程の熱意で、久々に……と言うより、記憶にある限りほぼ初めて、人と口喧嘩というものをしたのだった。

……それも影時間の終わるぎりぎりまで。

4月21日火曜日　『無神経だ、と言う優しさ』（後書き）

色々と改変している部分は多いです、例えば、物理攻撃スキルはペルソナではなく、召喚によって能力を向上させた召喚者が行います。真田先輩も自分でソニックパンチします。他にも色々、原作を知っている方は見当たるか。

夜由良君と一之瀬君はこんな感じの関係で掛け合っていますよ。

4月20日 月曜日 く『オレの物語が始まった日』(前書き)

物語に埋もれてしまう人物たちにも背負ってきたものはあるんです。

でも、それってどういふことなのか。考える瞬間はあまりないです。ね。

今回は伊織順平君の話です。

4月20日 月曜日 く 『オレの物語が始まった日』

一人ひとりが、それぞれの歴史と秘密を大切にしていそうな顔を  
している。

こういう人間たちの間にまぎれこんでしまえば、私の凡庸な歴史  
とささやかな秘密だって、一人の「主人公」のそののように、大切  
に扱われるに違いない。

『江藤淳』

「自分自身を主人公だと勘違いするのは、別に俺達にんげんだけの特権じゃ  
ないんだが、そうするのが駄目って訳じゃないよな」

「うん。他人をその物語の主人公の引き立て役にしたがる、のはね。  
でも、よく考えて。その時、君にとってのその登場人物は人間な  
のかな。それとも、都合のいい道具にしか過ぎないのかな？」

「誰もが歴史と秘密を持っている。だが、忘れんな。誰もが簡単に  
それを踏みにじることが出来るんだ」

男には一度は思う夢がある。

いや、一度だけじゃなくて何度も思う夢だ。

それはめちゃくちゃバカバカしい、ガキみてえな夢。

でも、誰もが思うはずだ。

ヒーローになってみてえ、って。

つまんねえ授業中、今、テロリストがやって来たらどう戦うと



か。

学校来るときにモノレールがいきなりひっくり返って、化け物が来たらとか。

学校が変な魔界だとなんたのになっちまって、戦うはめになっちまったら、とか。

……自分には実は不思議な力があって、それがある日突然目覚めて、みんなの知らぬトコで日常を守るために戦うことになったら、とか。

そんなん、ぜんぶ妄想だ。現実起こるわけねえ。

誰にも話せるわけねえ、マジ、ハズカシイ夢物語。

だけど、もしも、だ。

もしも、そんなことが現実になっちまったら？

確かに日常に不満があるのかって言うたら、まったくない訳じゃない。

それでも、友達とは楽しくやれてるし、寮での生活も男同士わいわいやれて悪くなかった。

……や、成績はそりゃ、低空飛行な感じだったけどな。

もし、不満があるとすんなら、そう、アレだよ。

胸張って生きてるつか、一生懸命打ち込んでるつか……そういうものが、ないことだった。

自分の夢とかやるべきことっての？ そんなものがねえ、つまんねえ退屈な毎日ってのは感じてた。

ダチとバカやってて楽しいんだけど、なんか渴いてる部分があるような気がしちまう。

ありがち、だろ。

わかってんだ、オレはフツーだって。特別じゃないんだって。オレは物語の主人公にはなれねえってな。

だから、そんな非現実的なコトが起こる訳ねえし、起こったとしても、そんなフツーのオレが選ばれちまうようなコトはありえねえ。

そう、思ってた。

\*

とうとうつに気づく。

暖かいなにかが額を撫でる感触に。

なんかすごく懐かしい感じがする。

ガキの頃にどっかで体験した安心感……自分にめちゃくちゃ近い存在が傍にある。そんなイメージ。

……なんだ、これ？

「様子はどうだ？ 夜由良」

「異常はないですよ、先輩。眠っているだけです」

誰かの声がする。

あんま聞き覚えのない、身近じゃない声。  
年が近い、男の声が二人。

だけど、俺は警戒することもなかった。

あまりにも安心感のイメージが鮮烈すぎて。

「ここは、絶対に大丈夫。そんなイメージが強すぎて。」

「見た目にはそう見えても油断は出来んぞ。なにせ……」

「俺が眠っていると判断した以上、それは絶対です。……コイツは  
大丈夫ですよ、先輩」

なにかを断言する、心強い口調。

それはきつと、オレのことだと意味も分からずそう思った。

「……ふむ、そうか。では信用しよう。お前が断言するんだ、間違  
いないだろ」

「ええ、安心してください。じき目覚めます。」

おそらく、影時間に覚醒した衝撃で崩れかけた精神を、再構築  
しているんでしょう。さつき同調して感じたのは自らの……」

「細かい理屈はいらん。無事だと言う事実がわかれば十分だ」

「……さいですか。らしいっちゃらしいですけど……ったく。ま、  
もうすぐ目覚めますよ」

「そう願いたいな、待つのは性に合わん」

タメ息が聞こえた。

同時に額から離れるぬくもり。

全身からなにかが抜けていくような感触を伴って、より意識が  
はつきりとしてくる。

オレ、夢見てんのかな。

なんか現実感がない。

「それで、コイツにはあるのか？」

なにかを尋ねる声。

「主語は抜かないで話しましょうよ」

呆れ交じりの返答は、どこかふざけたような口調だった。

なにかを楽しむような。でも、わざとらしい、どこか作られたお調子者の声。

……俺に似てる、とか、思った。

「わざわざ言わなくても、伝わってるだろうが」

「なかつたら、今頃やつらの餌食でしょうや」

「それは推論に過ぎん。いいから結論を言え」

「せっかちな男は振られますよ、先輩。」

初力ノとの最後の思い出が失敗談で、笑えるようになるまで何年かかると思います？」

「知るかつ！」

聞こえてくる声が、ようやく意味のある会話として理解できるようになつてきた。

どういう状態かわかんねえけど、緊張感ねえな。

もっと真面目に話せよ、お前ら。

「これだから若い奴は……だから、ガツガツせつつくだけで相手の気持ちを考えないって呆れられるんですよ」

「誰にだつ！？」

「まあ、年取つた男のほうが変なプライドあつて気色悪いですけどね。」

アレですよ、女の子の方が「もっと付き合い方を考えて欲しい」って言つても、そこそこ自分には経験があると言つアホな自信があるから、機嫌悪くなるだけで聞いちゃくれないんですよね」

「俺の話聞く気ゼロかつ」

「はあ、そうやって俺の話を聞け聞け。かと思えば、疲れてるんだから後にしろ。」

じゃあ、いつこつちの話を聞いてくれるんだってのが女の子の気持ちなんですよ！ わかりますか！」

「わかるかつ！」

「ええ、でしょうね。……相手はなんら特別のことは望んじやいなのですよ、フツーに一緒にいて欲しいだけなのに、相手の気持ちとかその暖かさを感じたいってだけなのに、さっさと先に進んで終わらそうとする野郎のまあ、多いこと。」

大事なのは気持ちなんですよ、そこから自然に湧き出るものが行動であるべきなんです。その逆じゃないんですよ！」

「……わかった。もう、俺が悪かったからとりあえず質問に答えてくれ。」

「よし。最初からその態度に出てりゃあいいんです、世話やかせんなって話ですよね」

「……わかってるか、俺はお前の先輩だぞ？」

「それがどうしました？ 俺はこの厨房の支配者ですよ」

「くっ」

悔しそうに黙り込む、誰か。

誰か、なにが起きてるか教えてくれねえかな。いろんな意味で。

「まあ、余計なやり取りはこの辺にしときましよう。じゃないとすぐく長い一週間になりますからね」

「なんだ、その妙に意味深な詩的表現は」

「……ありますよ、コイツには。俺達と同じ力が」

「切り替え早すぎだろっ、いや、その前に俺の発言を無視するなっ。なにか？ 俺の発言はまず無視すると言う規則でもあるのかっ！」

「うるせえな、いい加減余計な話すんなよ。無駄な時間かかるだろ？」

「誰のせいだつ！」

必死に押し殺すような笑う声、がどこから漏れる。  
そして、続く何度も膝を叩くような音。

ため息が聞こえた、今度は違う誰かの。

「だけど、それは疲れや呆れだけじゃなねえ別の気持ちも含まれような音。」

「はあ、仕方のない奴だな」

「……それはこっちの科白ですけどね。あんまり焦らないで下さいよ、先輩がそんなんだつたら誰を俺達は頼ればいいんですか？ どつしり構えて下さいよ」

「お前にそれを言われるとはな、複雑な心境だ」

「しゃあないじゃないですか、桐条先輩はああ見えていつもぎりぎりですからね。」

我が道突っ走るのが真田先輩の仕事かもですけど、今はアイツの件やらなにやらで女子は二人ともナーバスなんですから。今は俺達が、ね？」

ほんの僅かな、考えるような沈黙。

「てか、桐条先輩と真田先輩がどうしたって？」

「……色々と考えるものだな」

「まあ、一部、追い込んでるのたぶん俺なんですけどね。俺って身近な人間ほど重圧かける人間なんで」

「ほう？ そいつは知らなかったな」

「ええ。もう一方の先輩はまったくへこたれませんがね」

「当たり前だ、俺が膝を屈したら誰が前に立つ？」

「……肋骨がなにを偉そうに」

「毒を吐くにももつすこし考えろっ！」

……真田先輩。

確か……ちよつとした事故なんかで今、ケガして部活を休んでるとかなんとか。

んで、そのケガの位置は。

「なっ！？ まさかっ！」

オレは飛び起きる。

目の前にいたのは、超有名人の真田先輩その人と。今、ちよつとした……どころじゃねえな、かなりの、話題になりつつある夜由良優だった。

\*

夜由良優は特に目立つことのない、よくいる地味な男子生徒だった。

だけど、ちよつと前からあの桐条グループのお嬢様である桐条美鶴直々に生徒会にスカウトされたらしいってウワサが広まった。

今じゃその御付をしているってのは学校中のみんなが目撃している事実だ。

そのウワサは半端なく、学校中を騒がせている。

そんなソイツはよく真田先輩ともいるらしい。

この間、一緒にランニングしてるの見たぜ？

いやいや、そもそも同じ寮に住んでるんだってよ。

へ？ ってことは桐条先輩だけじゃなく岳羽とも一緒かよ!？

なんでアイツがそんな特別扱いなんだ？ 変だろ、絶対。

ろくに友達もいない、勉強も出来るわけじゃない、たいして取り柄のないアイツが。

……なんで、アイツだけが？

「はあ、なるほどねえ。なんで俺の名前なんか知ってるかと思ったら、そんな話になってたんだねえ」

夜由良は小さく、笑い声を漏らした。

それだけなのに、なんつーのか……ゾツとした。笑みなのは間違いないのに、なにかがどうしようもないくらいに間違ってる。

……そんな感じがした。

アレ？ オレがさっきまで感じていた安心感はいずこに？

「気に入らんな」

真田先輩までオレを睨む……なぜにつ!？

オレなんかした!？

「いやあ、アレですよ先輩。実は俺気付いてますから。だって、嫌がらせとかされてますもん、各ファンクラブー同から」

「ファンクラブ?」

「あー、アレッスよ。入り口で邪魔な娘達?」



「ああ、アレか。いたな、そんなの」  
「そんな扱いなのっ!？」

オレは二人の会話に突っ込んだ。  
カワイソすぎるだろ、いくらなんでも。女の子達みんな邪魔扱い  
!?

「だって、なあ？」

「……ねえ？」

「だって、ってなにつ!？」

「それはどうでもいいとして、お前は大丈夫なのか？」

「ええ、慣れてますから。ああいう有象無象そのたの相手は」

「ならいい、なにかあるなら言え。やめさせてやる。一人残らず全  
員な」

「いやいや、先輩が下手に手を出すとひどくなるでしょう、嫉妬で」

「フン、出すのは手じゃない。拳だ。女を殴る趣味はないから、そ  
うちは注意するだけになるが」

「なるほど、アレだ。……理解してませんね？」

ため息を吐く夜由良。

ああ、真田先輩ってこんななんだ。

クールキャラかと思いきや、ちよつとアレかも知れねえな。

「と言うより前々から思っていたんだが、彼女達はなんのつもりな  
んだ。うるさくて敵わんのだが」

「そうですね、アレはフツーに障害物だと思っていいいんじゃないで  
すか」

「アンタら、確かに嫌がらせをするような娘達かもしれないけど、

そこまでひどい扱いしなくていいじゃねえかよ！」

「……あ、まだいたんだ。お前」

夜田良がそう、オレを見て呟いた。

「つて、忘れてたのかよっ!？」

「お前な、女の嫌がらせがどんだけ悪質か知らないのか？

……てか、帽子。初対面の相手に突っ込むとか失礼にもほどだぞ？ 少しは身の程をわきまえろよ、ヒゲ。

大人の魅力かもし出そうとして、失敗したことに気付かないのか。お前如きが人間様に突っ込むうなんて、マジ、恥知らずだな。せめて二本足で歩行できるようになってから言えよ」

「初対面の相手にそんな暴言吐くお前は失礼じゃないのっ!？」

「は？ これが暴言？ お前を見たら誰しもが思う感想だよ。

つか、アレだよ。コレ、お前如きにも理解できるように、レベル下げて言っちゃったんだからね？ 三葉虫程度の進化レベルの相手にも、きちんとわかるように話してあげるのに、どれだけの知能が必要かわからないの？

わからないよな、なあ、三葉虫。いいからそのアゴの触覚剃って来い。大丈夫、あつてもなくても真っ直ぐ歩けないから」

「お前そんなだから嫌がらせされんだよっ!」

オレのその発言に、心底ダメだコイツ、みたいな顔をして真田先輩を見る夜田良。

真田先輩はよくわかっていない様子だが、とりあえずって感じで力強く頷いた。

「確かに問題ないようだな」

「ええ、頭の中身以外は。あと外見と進化レベルと……違うな、問題ないのは元気があると言う一点ですね。ただ、それすらも目障り

という問題になりえますが」

「よくそんなスラスラとバトウの言葉が出てくるもんだなっ!？」

「そう褒めるなよ、お前如きに褒められても虫けらがなに調子に乗ってんの? って思うだけだから」

「なに、オレ、お前になんかしたっ!？」

オレを見て、しみじみと頷く夜由良。

突然、真面目な表情になる。

「……こいつ、素質がありますね。この状況に迅速に対応できてます」

「ふむ、期待できそうだな」

「元気だけが取り柄なんです、せいぜい頑張ってもらいましょう」

「ああ、これで戦力も整うだろうしな」

なんだ、めちゃくちゃ不穩な会話されてんぞ、オレ!？

すると夜由良は腕組を始め、どこか目が虚ろになった。遠くを見るような視線。

「状況把握、柔軟性、会話への反射速度……内容の多い早口の科白もきちんと理解して答えて見せた。頭の回転は悪くない。この状況下でも既に正気を保てるまでに回復した精神構造も驚嘆に値する……さらには」

ブツブツと呟きながら、オレを観察し始めた夜由良。

真田先輩が俺の肩を軽く叩く。

「ああ、たまにああなるんだ。最近はいつものことだから、とりあえずああいうものだと思っておけ」

「は……はあ」

「なんというのか、たまに周りが見えなくなるらしい。集中している間は自分がなに口走っているのかよくわからなくなるみたいだな。問題はない、本人は何も言っていないつもりだが。……ああ見えて頼れる奴だ、気にするな」

気にすんなって、アレなんか、もう色々ダメだろ。

学校じゃあんなそぶりゼロだったぞ？ てか、あんな毒舌吐いてるトコなんかみたことねえよ。

「とりあえず、事情を説明しておこう。どこまで覚えている？」

意味深なセリフでオレに問いかける真田先輩。

いや、まったく意味がわかんねえ……。

って言うか、ホントにこの状況。なんなんだ？

「その様子だとまるで覚えていないと言ったところか」

「あ、ええ。まあ。……あの、俺なんでこんなところにいるんですかね」

「ふむ、なるほど。そこから説明するべきか」

真田先輩は左手をあごに添えて、すこし考え込むように視線を落としました。

「お前は俺達が保護したんだ」

「保護？」

「ああ……奇妙なことを聞くが、お前は今までに自分が普通とは違う時間を過ごしたことを実感したことはないか？」

「フツーと違う時間？」

「そうだ、やはり目覚めて間もないようだな。……一日は24時間ではない。普通の人間には知覚出来ない、隠された時間というモノ

が存在する」

真剣な表情でそんなことを話す真田先輩。

「え、あの。ちよつ……それはなんかのマンガの話ツスか？」

「残念ながら、現実だよ。伊織順平」

夜由良が先輩のすぐ横に現れ、薄く笑う。

アレ？ こいつ、さっきまでそこに……。

いつのまに、移動したんだ？

「隠された一日と一日の狭間に存在する『影時間』、その時間だけに現れる人の精神を喰らう異形共。そんな物語染みたアホな世界が現実なんだよ」

「え、オレの名前をなんで？」

「きちんと生徒手帳を持ち歩くのは感心だ、ああ、悪い。必要なら家の人に連絡するべきだと思ったんだよ。」

幸い、寮暮しだったからこちらで融通が……って、黙って抜け出すのは感心しないな。それも夜中の零時まで。何かあったら大変な騒ぎだぞ？」

えっ。こいつ、こんな雰囲気だったけ？

いきなり夜由良の威圧感がハンパない感じになって戸惑う。

「それは美鶴の真似か？ 夜由良」

「ふふつ、わかります？ まあ、いいじゃないですか。たまには」

「つくづく悪ふざけが好きだな、お前は」

「なんです、今知ったんですか。……と、話を元に戻そうか。信じがたいだろうが、まずは聞いてくれ。判断はそこからでも遅くない。だろ？」

夜由良は前髪の片方を撫でるように分けた。  
ただそれだけの動作。だけど、人を惹きつける、何かがある。  
る。

目の前にいるのは本当にあの夜由良優なのか？

「そう、残念なのが真田先輩の頭の方だけなら、お前は平和な現実  
にいられた。可哀想なヤツの妄想だ、で済んだ。だが、そうじゃな  
い。残念なのは現実の方もなんだ」

「おい、ちよつと待て。夜由良」

「そう、『影時間』は実在する。俺達は毎夜、零時になるとその時  
間に強制的に引きずり込まれる。怪物の存在する恐怖すべき悪夢の  
時間に。」

……中には、狂喜乱舞する残念な頭の人間もいるようだが」

「だから、待て」

「だが、希望がない訳じゃない。俺達にはその怪物と戦える『力』  
がある。決して、無力ではないんだ。そして、それは残念なその頭  
の持ち主だけにじゃなく、同じく残念なお前にもあるんだよ、伊織  
順平」

「……シリアスにふざけるな、そろそろ真面目に話せ」

うん、オレもそろそろキレていい頃だと思う。いや、マジな話ね。  
遊ぶならもつと別の時に遊べよ。

「わかりましたよ、先輩……ちなみに最後の記憶はコンビニか？  
伊織順平」

「え……あ、そうだ！」

オレは確か、そう。なんか夜中に腹が減って。  
寮を抜け出して、コンビニに……。。

アレ？　じゃあさ、なんでこんな所にいるんだ？

「強制的に思い出させてやってもいいんだが、脳が認識を拒否したことを無理矢理改めて認識させるとどうなるか？　興味はあるがね。

……今回はやめておこう」

「悪役のセリフだぞ、それは」

冷静にツツコミを入れる、真田先輩。

だが、それを夜由良は平然と無視。お前、どんだけ度胸あんだよっ！

「だが、その様子なら次回には完全に順応するだろう。さて、説明するには見せた方が早い」

「……なにをだよ？」

そんな当然とも言えるオレの質問に。

優雅に微笑んで答える夜由良。

「いや失礼、見えないんだったな」

言葉調を崩し、雰囲気を緩めた夜由良。

その夜由良がセリフを言い終えた瞬間だった、目の前の夜由良が消えたのは。

「　　は？」

そして……。

背後から、いきなり首の後ろ側を強く掴まれた。

「え、な　っ」  
「これが俺の力だ、三葉虫。『隠者バイアグーナ』。ひそみ隠れるのはお手の物って訳だ」

オレは微動だに出来なかった。  
理解、がまるで追いつかない。それでもコイツがその気になればオレを簡単に殺せるんだろう。と言う、実感だけがはっきりとあった。

目の前の真田先輩が呆れ混じりなのか、オレの背後をチラ見し、言った。

「俺にも似たような力がある、コイツとは内容はまるで別物だがな」  
「そう。先輩は正々堂々、敵を正面からぶちのめすタイプの能力なんだよ」

「小細工など性に合わんのでな」  
「まあ、出来るアレがアレなだけだね。ただ、それでも本人は小細工という言葉自体は知っているみたいだ、言葉の意味を知っているどうかは知らないけど」

「知つとるわっ！」  
「はいはい、わかってますから、ね？」  
「そんな目で俺を見るなっ！」

……どんな目で見られたんだ、真田先輩。  
すると、ゆっくりオレの首から五本の指は離れていった。同時に命を脅かされていた、と言う圧力が消えていく。

「悪い悪い、驚かせたな。なに、こんな真似はせんよ……あまり」  
「安心させる気ゼロだろうっ！　お前っ」



オレの必死の言葉。

しかし、そんなセリフなど関係ないと言わんばかりに、夜由良は視界の外から言葉を連ねる。

どんな顔をしているのかはまったくわからない。

「とにかく、俺の話はこんなもん。知った以上はお前はこれから決断を迫られる」

声だけが伝わる、緊張感も重みもないあっけらかんとした声。

「その中でなにを考えどんな選択をするしろ、俺の言うておくべきことは一つ」

だからこそ、それが単純に重要でもなんでもなく。

冗談交じりで言う程度の当たり前のことにしか過ぎない、ことを知ったんだ。

「こちら側の世界にようこそ、伊織順平」

そう、マジであったんだ。

こんな現実が。

……当たり前のように、こんな日常が。

4月20日 月曜日 く『オレの物語が始まった日』(後書き)

低速更新、かつ、浮気多々。

我ながらどうしようもないですね……それでもおもしろいものが書きたいって気持ちはありますので見守っていただけると嬉しいです。

順平君は今回は受身でしたけど、これからどんどん動いてくれます。

彼の視点から描かれる物語、楽しみにしててください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7296q/>

---

Persona3 Ifes 『I'm just me!』 ~ Bluebays apathetic編

2011年6月2日06時38分発行